昭和49年3月20日印刷　昭和49年4月1日発行　4月号（第28巻第4号）毎月1回1日発行　昭和31年4月20日第3種郵便物認可　昭和42年4月21日国鉄大阪特別扱承認雑誌第210号

奇譚クラブ



4月号

1974

新しい風俗文献誌

奇譚クラブ

1974・4

奇譚クラブ　昭和四十九年三月二十日印刷　昭和四十九年四月一日発行　四月号（第二十八巻第四号）毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可　昭和四十二年四月二十一日国鉄大阪特別扱承認雑誌第二一〇号

THE KITAN CLUB
Published Monthly by
Akatsuki Shuppan
Osaka Japan

4

雑誌 2805－4

¥600

奇譚クラブ ‖臨時増刊

‖〈女体緊縛写真集〉‖ 定価一〇〇〇円（送50円）



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄……前田真知子
首縄横臥二態……前田真知子
典型的後手縛り……前田真知子
自由な肢のもだえ……前田真知子
麻縄と絖肌の明暗……前田真知子
厳しい縄目を味う……前田真知子
準備態勢OK……前田真知子
股間縛りの表情……前田真知子

女体緊縛の華……本誌写真部構成

金髪碧眼の美女……シーラ・ケニー
笞打ちの態勢……関谷富佐子
鞭撻の痛苦……関谷富佐子
浣腸責の序曲……長井葉津子
亀甲縛りの美態……左近麻里子
麻縄と白肌の対照……中河恵子
陽を浴びた柔肌……左近麻里子
猿ぐつわに喘ぐ……中河恵子
緊縛裸身の驕り……中河恵子
責め疲れの放心……梨花悠紀子
没我の心境……中河恵子
痛打の末の悦虐……関谷富佐子
沖縄美人の緊縛……座間明子
剥玉子の縛り……佐々木真弓
狂変する裸女……川路叢子
責めくたびれて……佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める……シーラ・ケニー
海老責の狂態……川路叢子
ボリウムに挑戦……座間明子
鞭打の下に……関谷富佐子
祭壇の人身御供……渡部好美
稚妻は縄を知りぬ……金原加奈子
開股の正面と背面……中河恵子
華麗な開股責め……中河恵子
イルリガートルを前に……長井葉津子
非情な責めの終末……長井葉津子
両手吊りの晒し……中河恵子
柱縛りの完了……川路叢子
処女縛りにとまどう……三浦純子
麻縄に身をゆだねる……中河恵子
盗視するSとMの目……佐々木真弓

緊縛女体の光と影……編集部構成

両手挙げ棒責め……川路叢子
柱宙縛りに浮く……長井葉津子
後手吊りに苦しむ……中河恵子
どこでも責めて……佐々木真弓
鞭の法悦境……関谷富佐子
ムチが痛い、許して……関谷富佐子
柱を挟んだ連縛……渡部・川路
花と蛇の静子です……中河恵子
針責めをして頂戴……渡部好美
二つ折りの女体……長井葉津子
猿ぐつわの哀歓……中河恵子
日本式縛りの白人……シーラ・ケニー
マゾの女王に咨……関谷富佐子
柱しばりに恥らう……金原奈加子
夫婦プレイの慈味……渡部好美
長襦袢の艶姿……花坂道子
豊満ボインを誇る……愛川悦子
美女今縛られる……梨花悠紀子
受入態勢充分……関谷富佐子
折檻にも汚れず……前田真知子
海老責への屈開……佐々木真弓
責めてみたい碧眼の女……シーラ・ケニー
日本式高手小手縛……シーラ・ケニー
猫の目のような女……細川文代
足吊りのある風景……中河恵子
亀甲縛りの媚態……中河恵子
M女二輪の花……渡部・川路
苛責に乱れた黒髪……中河恵子
開股縛りの幻想……中河恵子
鏡の前での放恣……前田真知子
愉悦のひととき……川路叢子
ハリツケ晒し……左近麻里子

これから、どうするの?……長井葉津子
美しき吊り……前田真知子
苦痛か悦楽か……関谷富佐子
一筋の縄の魔術……中河恵子
逆エビ縛りに入る……三浦純子
愛撫の責め……渡部好美
俯瞰撮影……前田真知子
黒縄と白肌……中河恵子
身動きできぬ境地……関谷富佐子
ボリウムを縛る……座間明子
浮上した女体……中河恵子
麗しき背面……中河恵子
汚辱の縄……金原奈加子
高手小手本縛り……佐々木真弓
責めの陶酔境……川路叢子
失神したマゾ女……関谷富佐子
前手縛り悶悦……関谷富佐子
柱の彼方の天国……中河恵子
荒縄の海老責……三浦純子
美と縛の女神……前田真知子
はずれた猿轡……梨花悠紀子
可憐な置物……長井葉津子
ながし目の天使……佐々木真弓
酒の肴になる……川路叢子
妖蛇の洗礼……関谷富佐子
翻弄されるままに……前田真知子
海老縛の妙味……川路叢子
柱につながれた女……長井葉津子
痛さをこらえる異国の女……シーラ・ケニー
責の果の諦観……前田真知子
痛打の一瞬……関谷富佐子
ホステス裸人生……佐々木真弓

カメラ・ハント楽我記……辻村隆
女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三

女性モデル求めます

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の方々の告白の投稿やモデルの応募によって数多くの貴重な作品が誌上を賑わし、風俗文献誌としての絢爛たる金字塔を、打ち樹てでまいりました。真摯で研究熱心な本誌読者の方々の期待に応えて写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか御遠慮なく勇気を出して御応募下さるよう、お待ちしております。

○本誌愛読の女性の方でしたら、国籍、未既婚の別、年齢など一切問いませんから、遠近に拘らずお申込み願います。採用させて頂いた方には、謝礼として一回につき壱万円以上拾万円まで、即金にてお払い致します。

○応募されました方々の個人的な秘密の漏洩は、本人の許しがない限り絶対致しません故、御安心の上、御応募下さい。尚、告白文をお書き下さった際は別に原稿料を、資料を提供下さった方には謝礼を併せて、お支払い致します。尚、お申込みの節、お好みの傾向などを出来るだけ詳しくお書き添え下されば幸甚に存じます。

○撮影いたしました写真は、誌上掲載を原則としておりますが、若し御都合によって発表を望まれない場合は、その旨添記下されば改めて打ち合わせしたいと思います。助手や介添えとしての出演、若しくは編集部資料作成についてのプレイ出演などの役に任じて頂きたいと思います。その際の報酬は、改めて個々に御相談に応じたいと思います。

○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体重などは必ずお書き添え願います。写真があれば同封下されば好都合ですが、お手元に適当なものがなければ結構です。

。申込先。大阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社　編集部

◇本誌三百号突破記念◇ 百萬円懸賞原稿募集

▽賞　金△

入選作品	第一席	二十萬円	1篇
入選作品	第二席	十萬円	1篇
入選作品	第三席	五萬円	3篇
入選作品	第四席	三萬円	5篇
入選作品	第五席	二萬円	10篇
佳作優秀作品		一萬円	15篇
選外佳作作品		五千円	10篇

▽内　容△

一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ奇譚クラブという題号のもとに発行を続け、ここに三百号の多きを数えるに至りました。その間、風俗雑誌のパイオニアとしての幾多の辛酸を具に嗜めながら、読者の皆様の温かき御支援によって、二十数年の厳しい星霜をよく耐えて今日に至りました。

一、本誌は異色ある風俗文献誌として生長してまいりましたが、今まで読者の方々の投稿による数多くの傑作や力作が春の花のように咲き乱れ、SM文献誌としての本誌の真価がいやが上にも高められて参りました。ここに三百号発刊を記念して、更に一層の内容の充実と清新化を計りたく、皆様の作品に期待して原稿募集を企画しました。

一、内容は本誌に発表するにふさわしいものであれば、どのような傾向のものでも結構ですが、一例を挙げれば、サディズムに関連したもの、マゾヒズムに関連したものを始めとして、各種フュテッシュ一殺、同性愛、切腹嗜好、褌美、女斗美、女相撲、変装、生首狂崇、妊婦嗜好、見世物変態風俗、奇習珍奇異色風俗、特異風俗習慣紹介、アブノーマル・テクニックなど、古今東西を問わず異色文献に属するものを取り上げて下さい。

一、形式は、小説、創作、読物などのフィクション物でも、告白、体験、手記のようなノンフィクション物でも結構ですし、見聞記、実見談やレポート、ルポルタージュも大いに歓迎致します。写真、画、参考資料などがあれば添付下されば幸いです。（資料に限り返戻の求めに応じます）更に、論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式のものでも最も得意とされるものを選んで御執筆下さい。

一、模倣とか垂流は絶対に排して下さい。あくまで野心的な新作に限ります。幾多のSM作家を叢出させて本誌の誌面を野心のある読者の方は登竜門として試みて下さい。

▽規　定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作品に限ります。原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙を御利用願います。枚数は三十枚以上三百枚迄に制限致します。

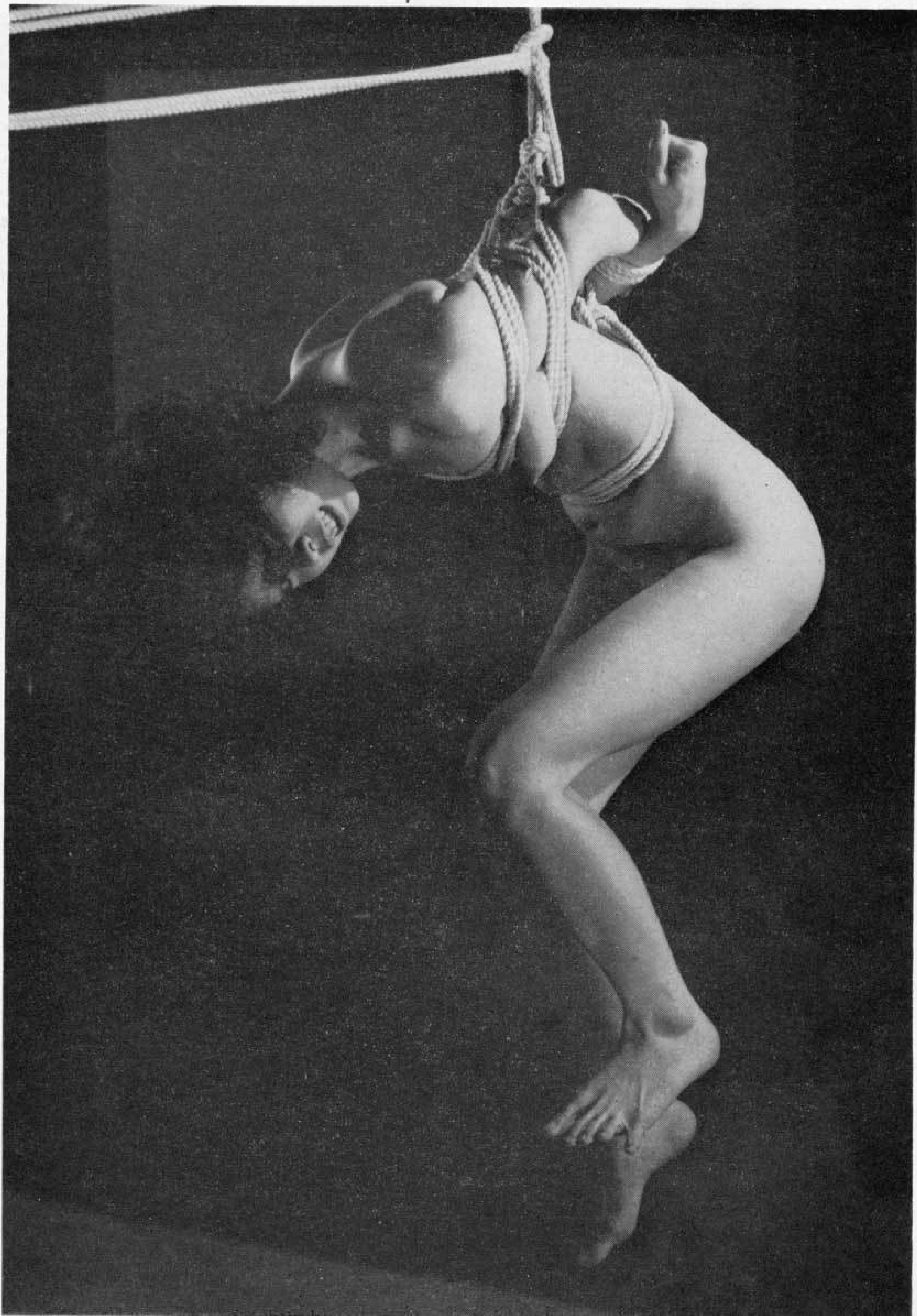
一、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載し、入選と同時に規定の賞金を贈呈致します。尚掲載の際、発表に支障ありと思われる個所を削除することもありますので予め御諒承願います。原稿は原則として返戻は申上げません故、原稿御入用の方は前もってコピーをとっておいて下さるよう願います。

一、懸賞応募作品は一般応募原稿、読者原稿と区別するため、第一頁に〈懸賞〉とお書き下さい。ペンネーム、匿名はご自由ですが、住所（又は連絡先）は必ずお書き願います。応募者の氏名を公開したり他へ洩したりなどは絶対に致しません故、御安心下さい。永続性のある奇抜な作品を発表して、貴方の力量と手腕を、どうか発揮して下さい。

一、原稿の送付先は、大阪市住吉区大領町四の六八、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種便）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断わり致します。

S研の友と吊り責め

塚本鉄三・撮影



後手縛り吊りの苦悶

＜前田真知子＞



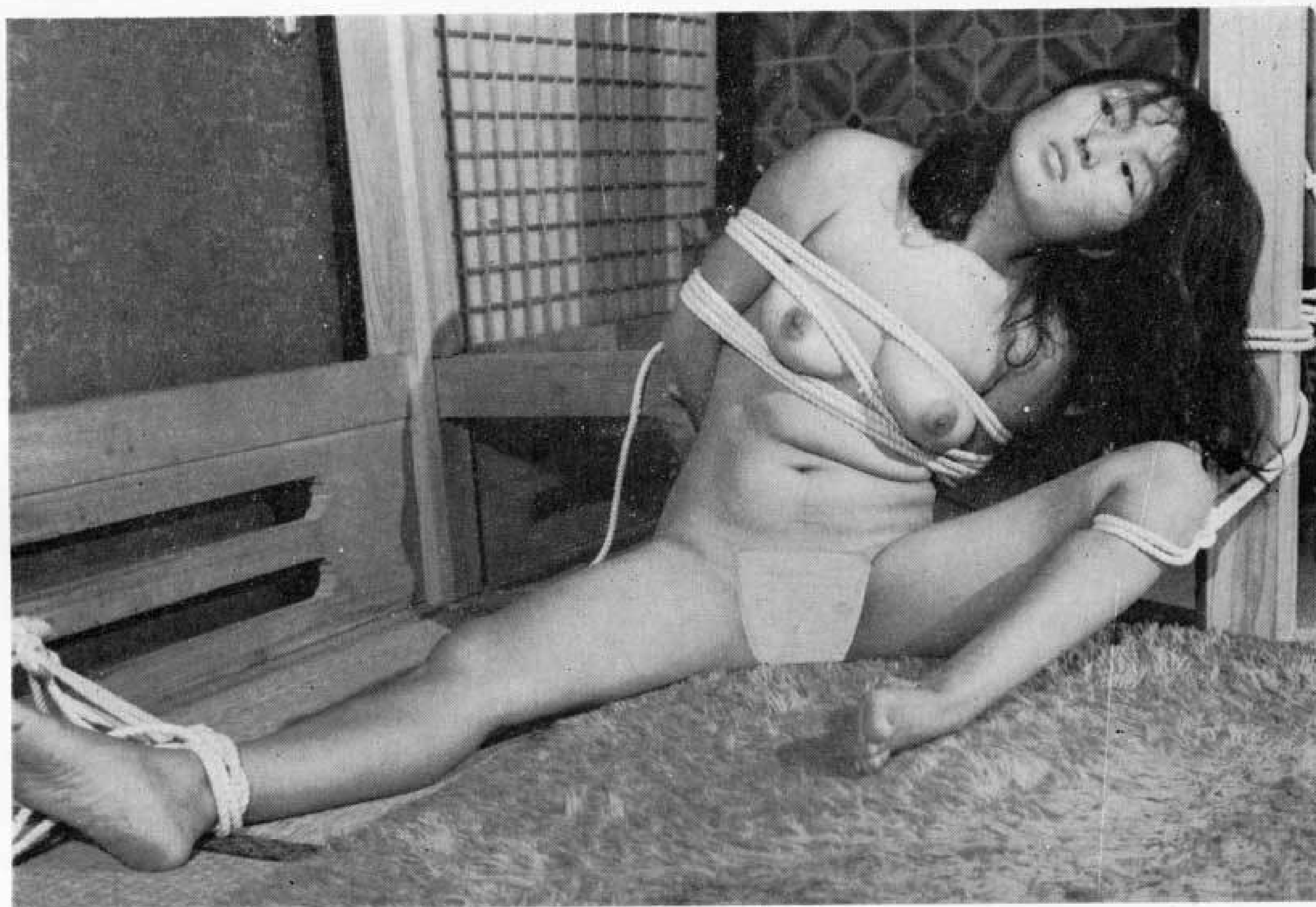
昭和四十九年　**四月号目次**　〈第二十八巻第四号 通刊第三二四号〉



ナグサミモノの生態

〈高村浩子〉





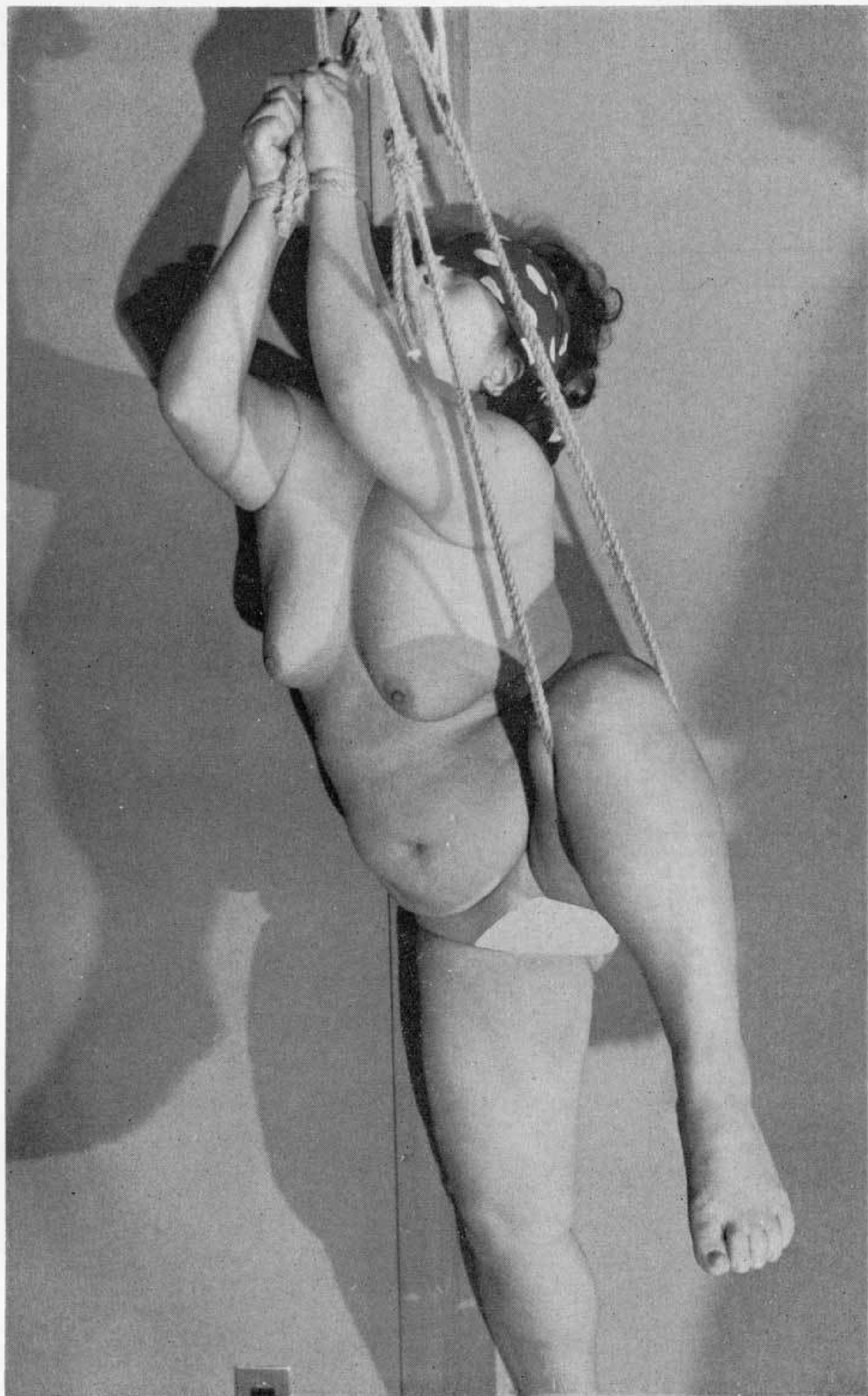


陶酔を誘う責め

＜高村浩子＞



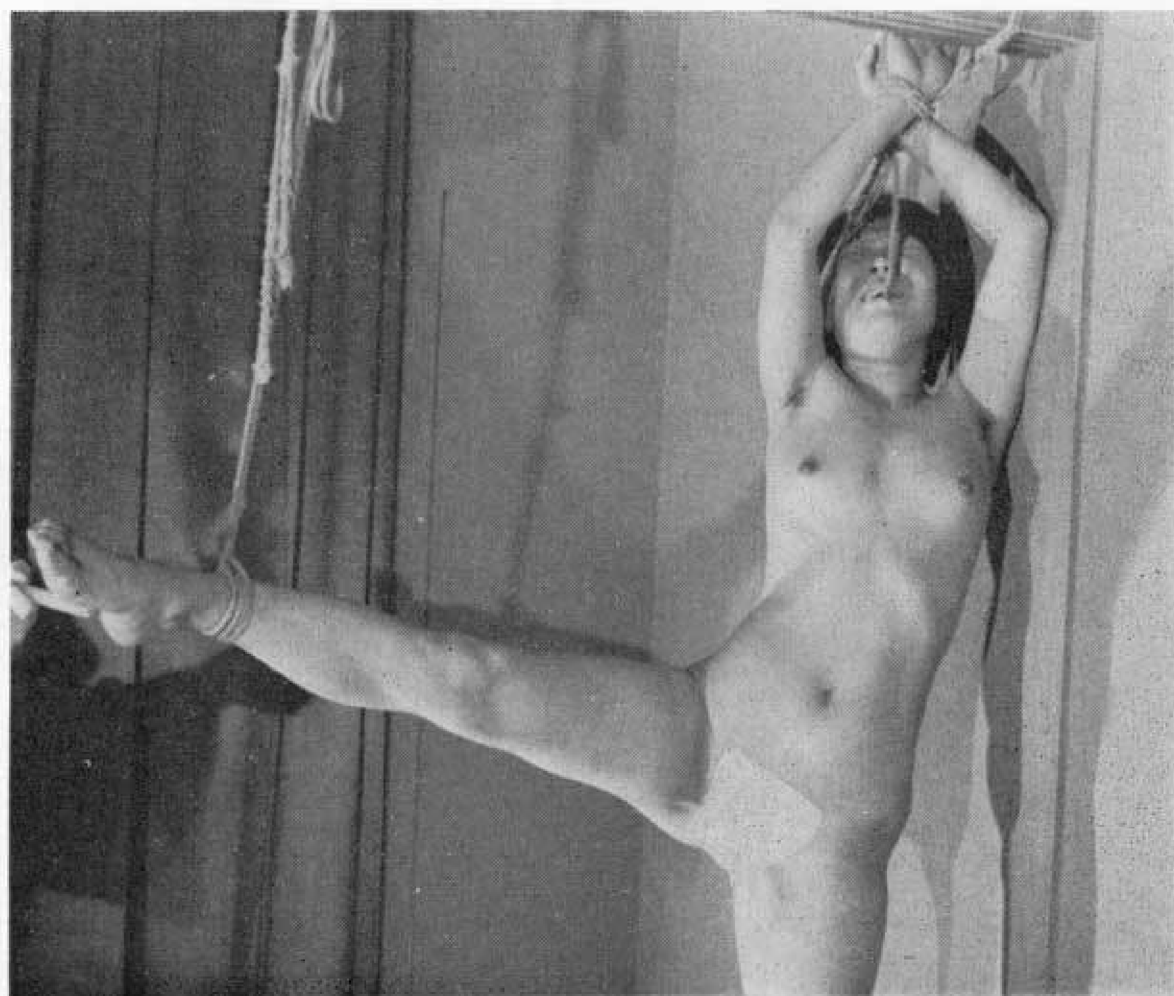
〝責め〟に狂う畜化の女



<苗木陽子>

″吊り″の愉しさ

〈前田真知子〉



足の裏の擽り

〈秋野英子〉





操りと浣腸と鞭

＜鈴木千鶴子＞

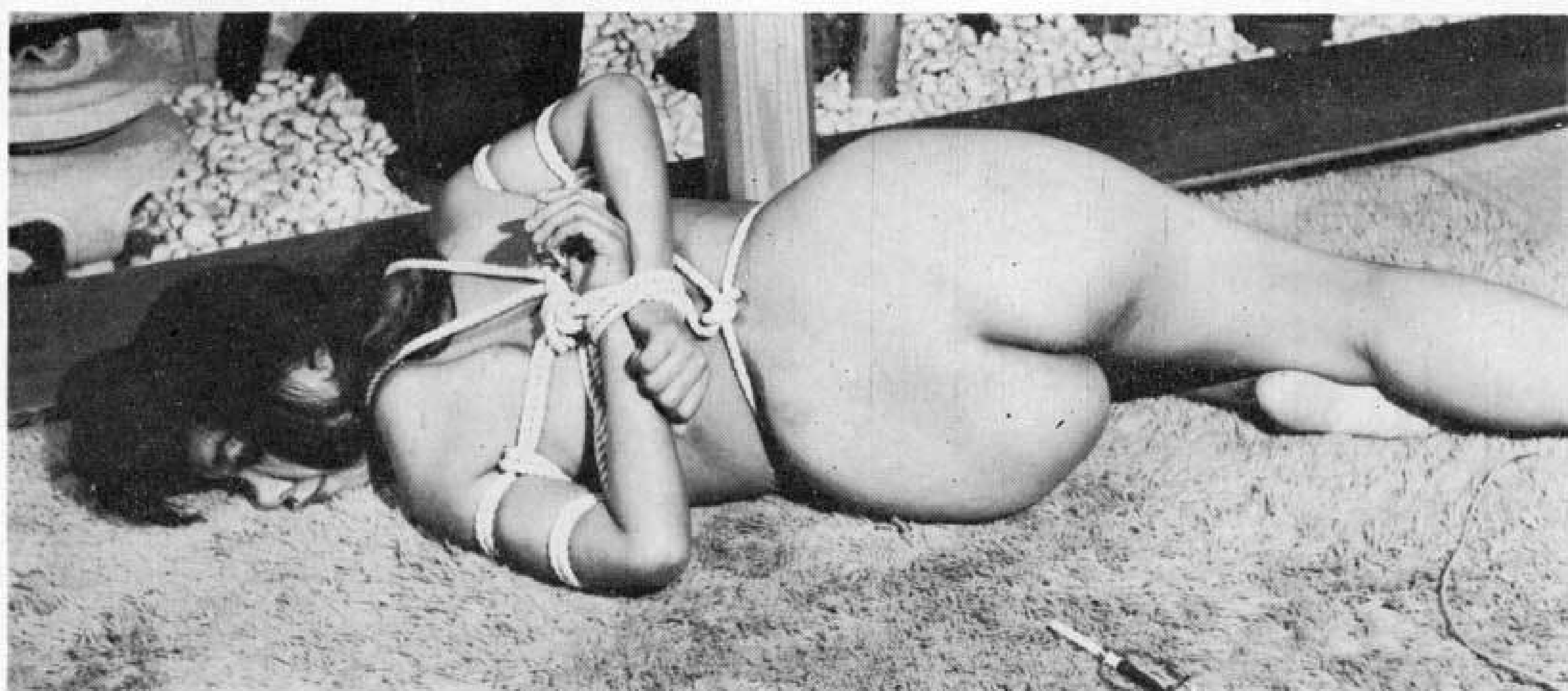


浣腸責めの宣言

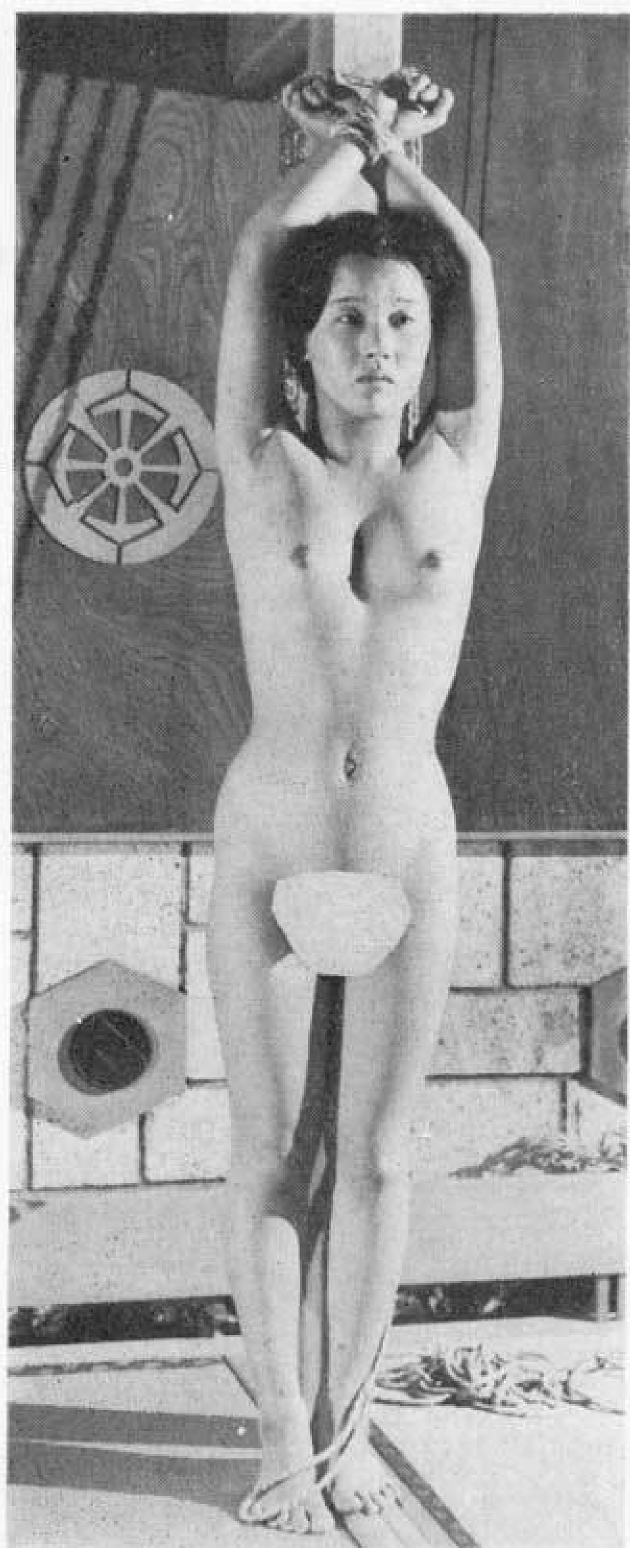
＜笠井奈保子＞

吊りの醍醐味

＜前田真知子＞

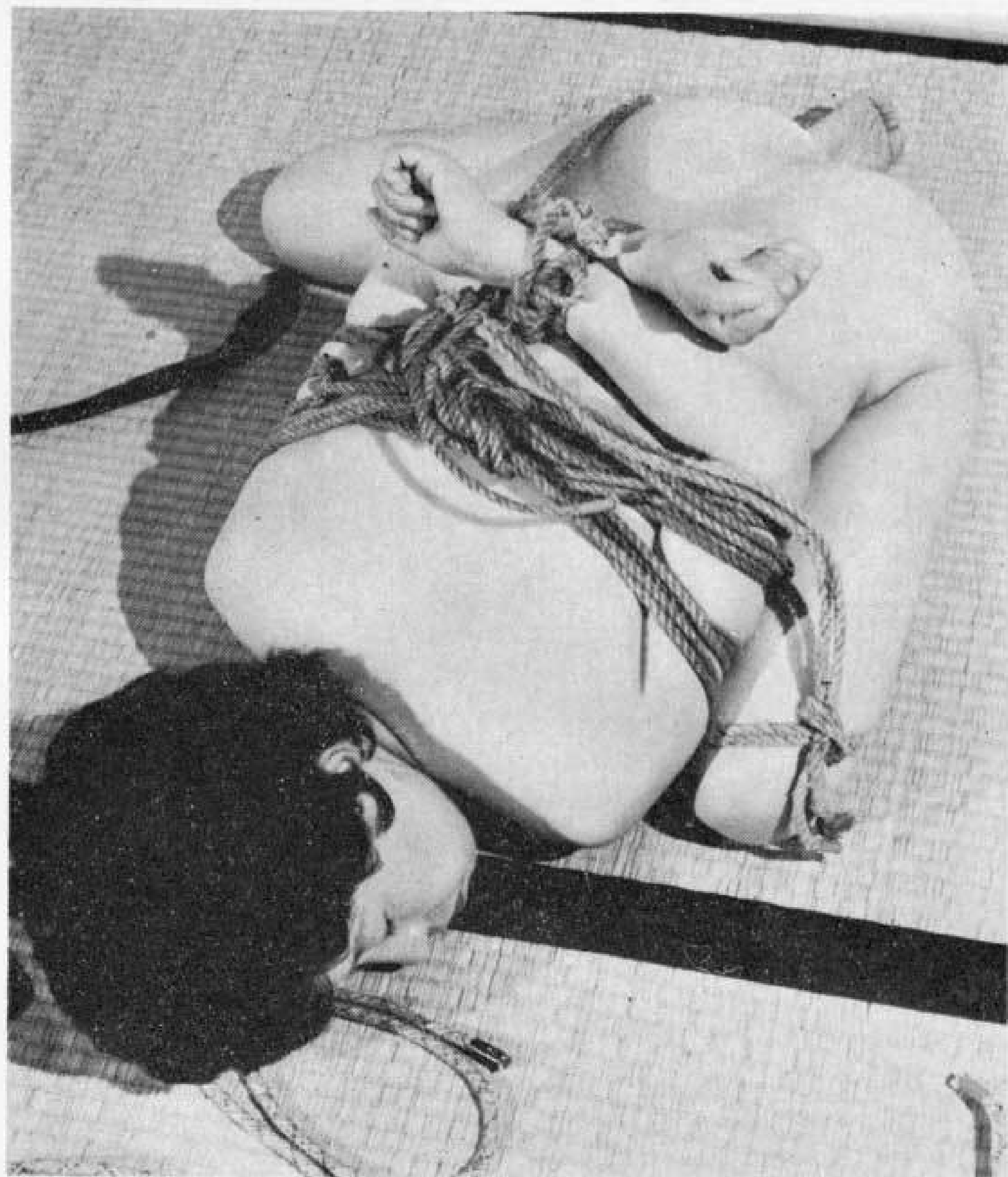


浣腸器に狙われた尻　＜福井桃子＞

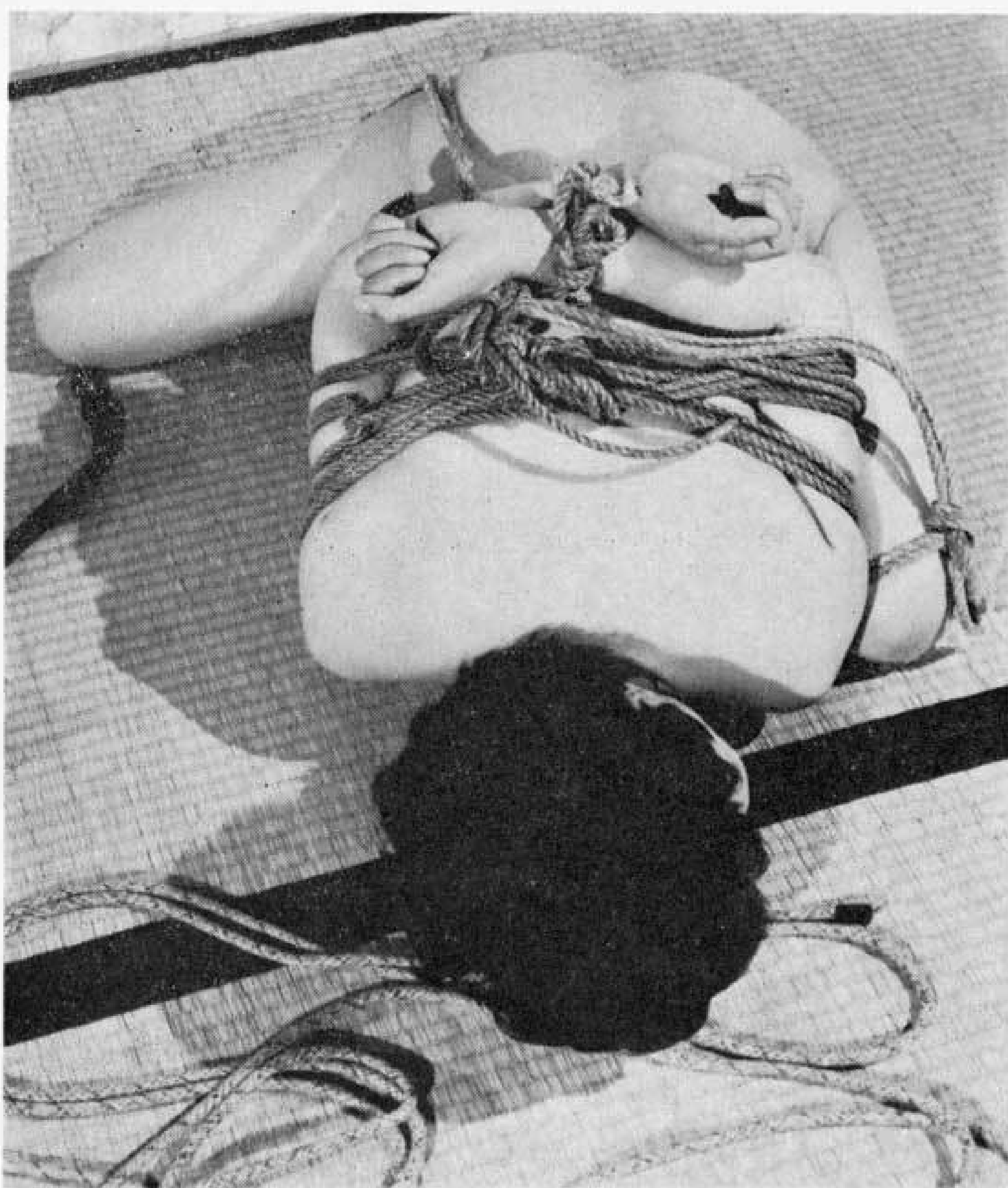


さらしものの裸身

〈長井葉津子〉



内に籠った悦虐　〈松本　たえ〉

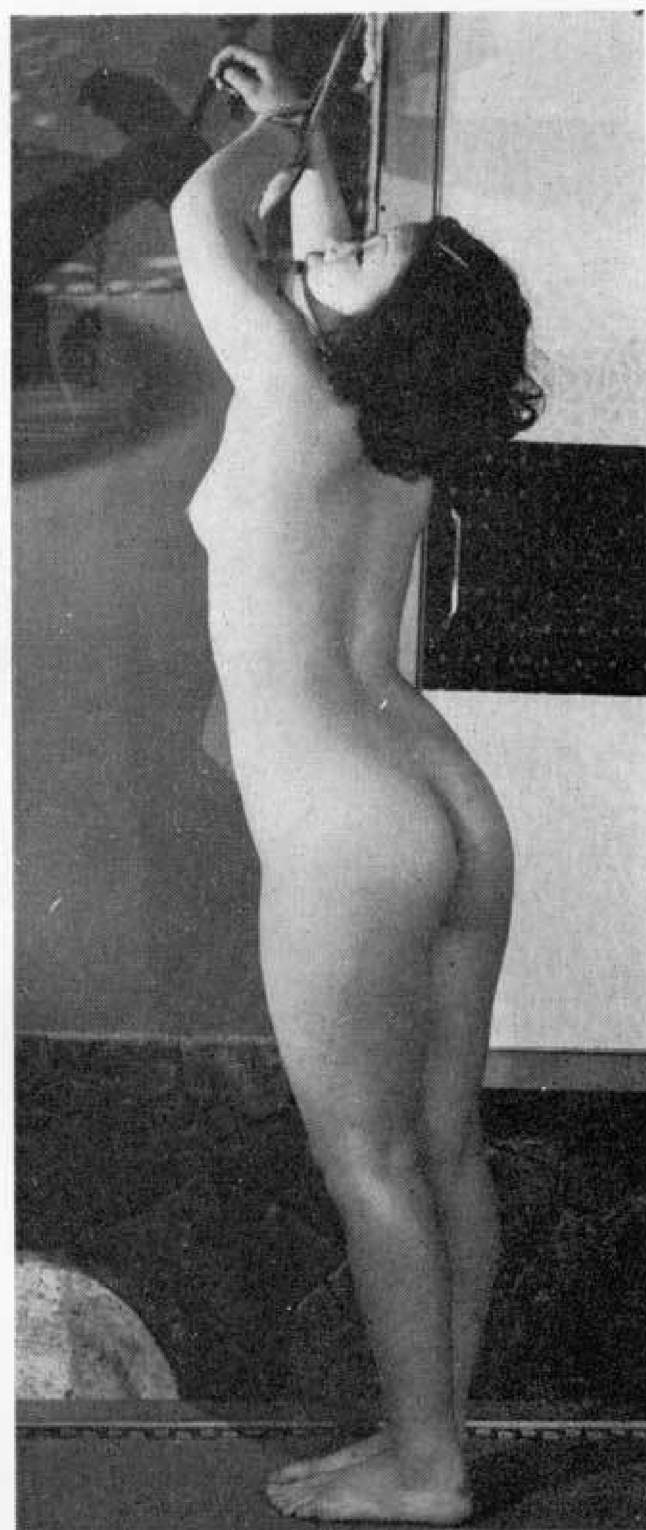


ムチを待つひととき

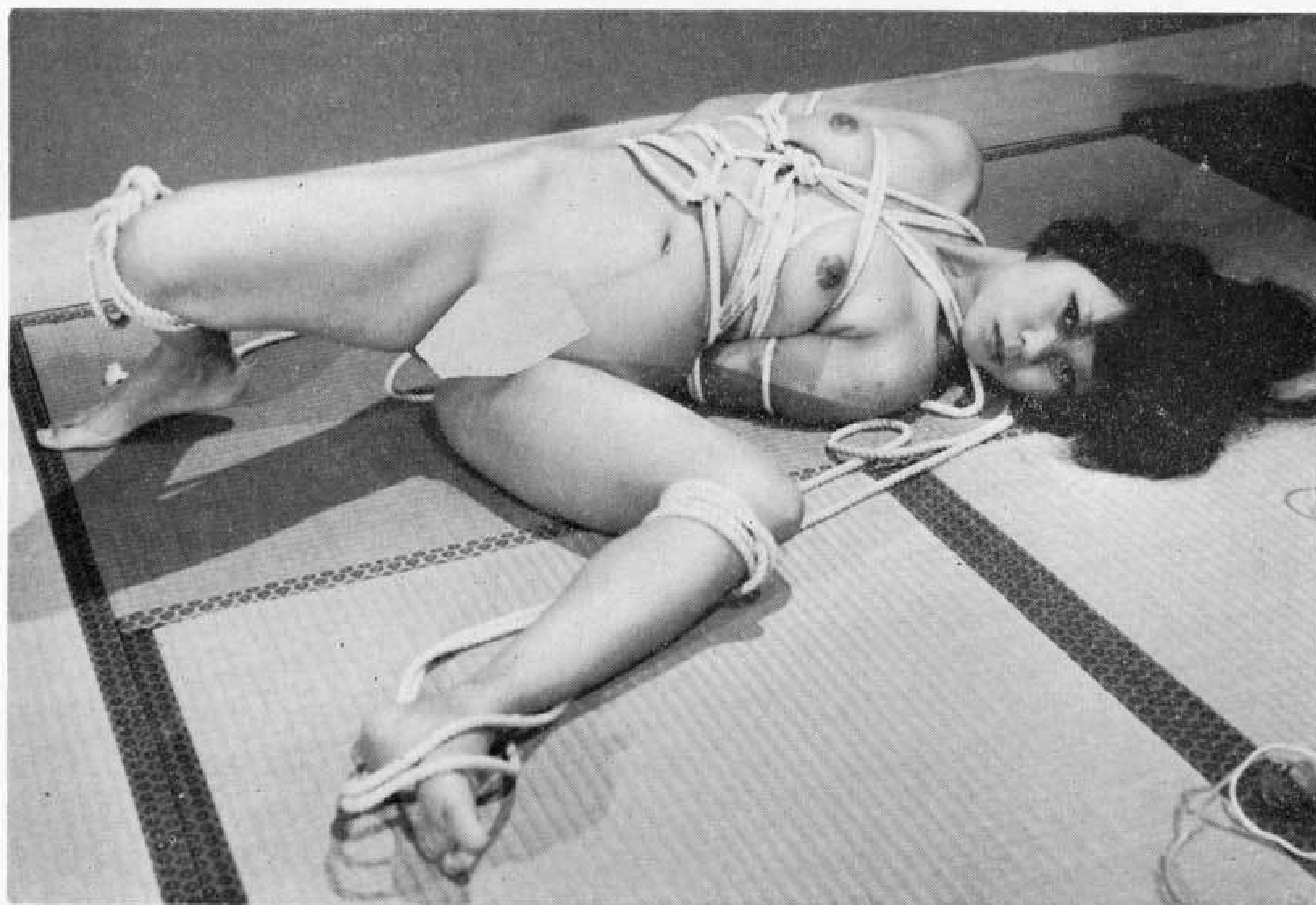


美しき惨酷　<玉木 章子>

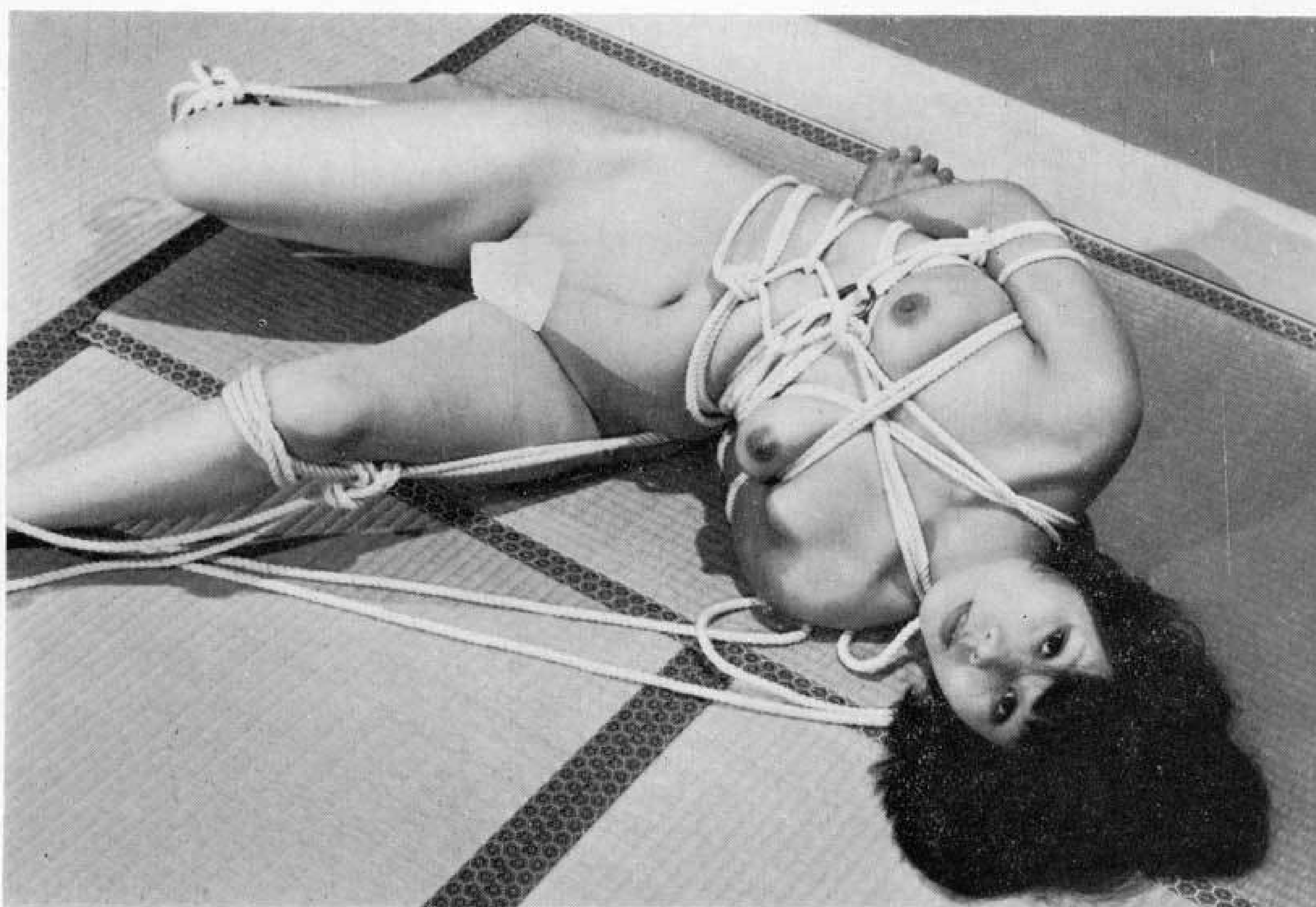




<西条 紀代>



捨 身 の ポ ー ズ　　＜深 田 菊 子＞

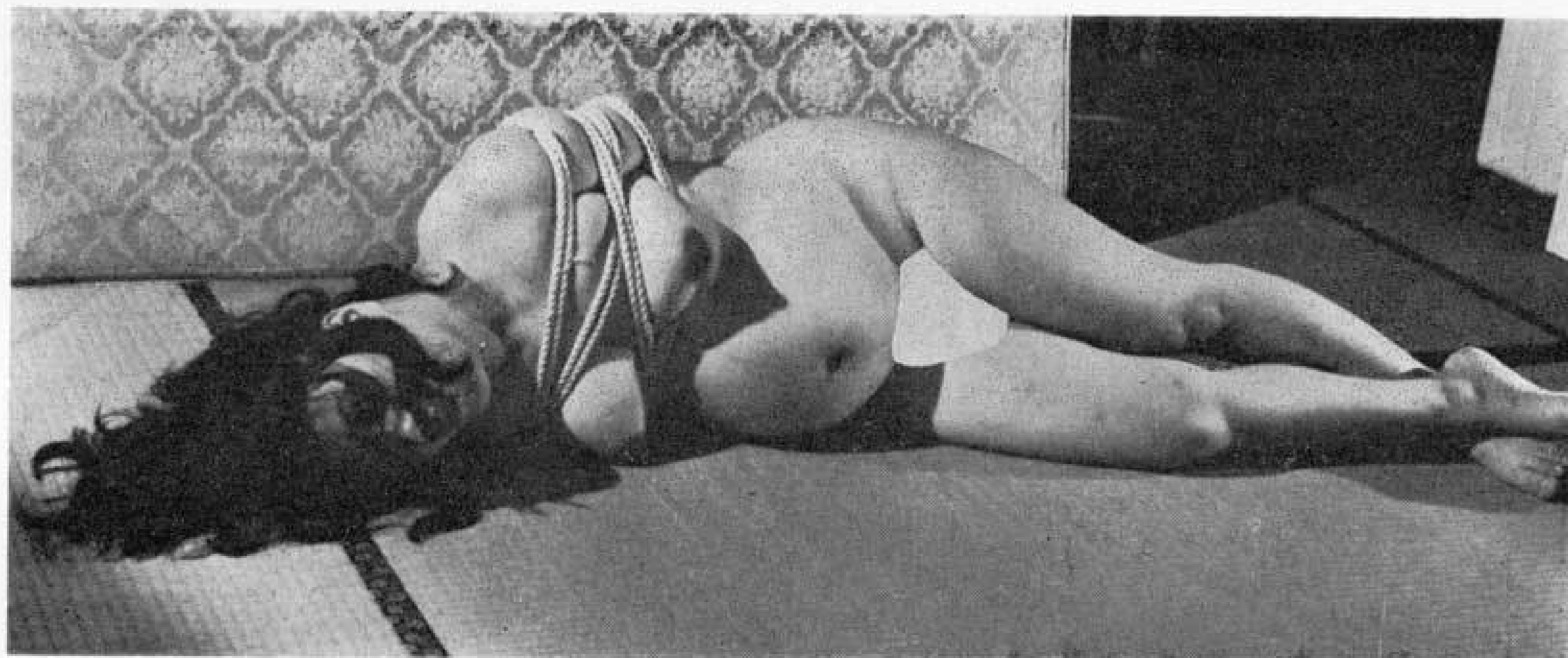




豊満をくびる縄目

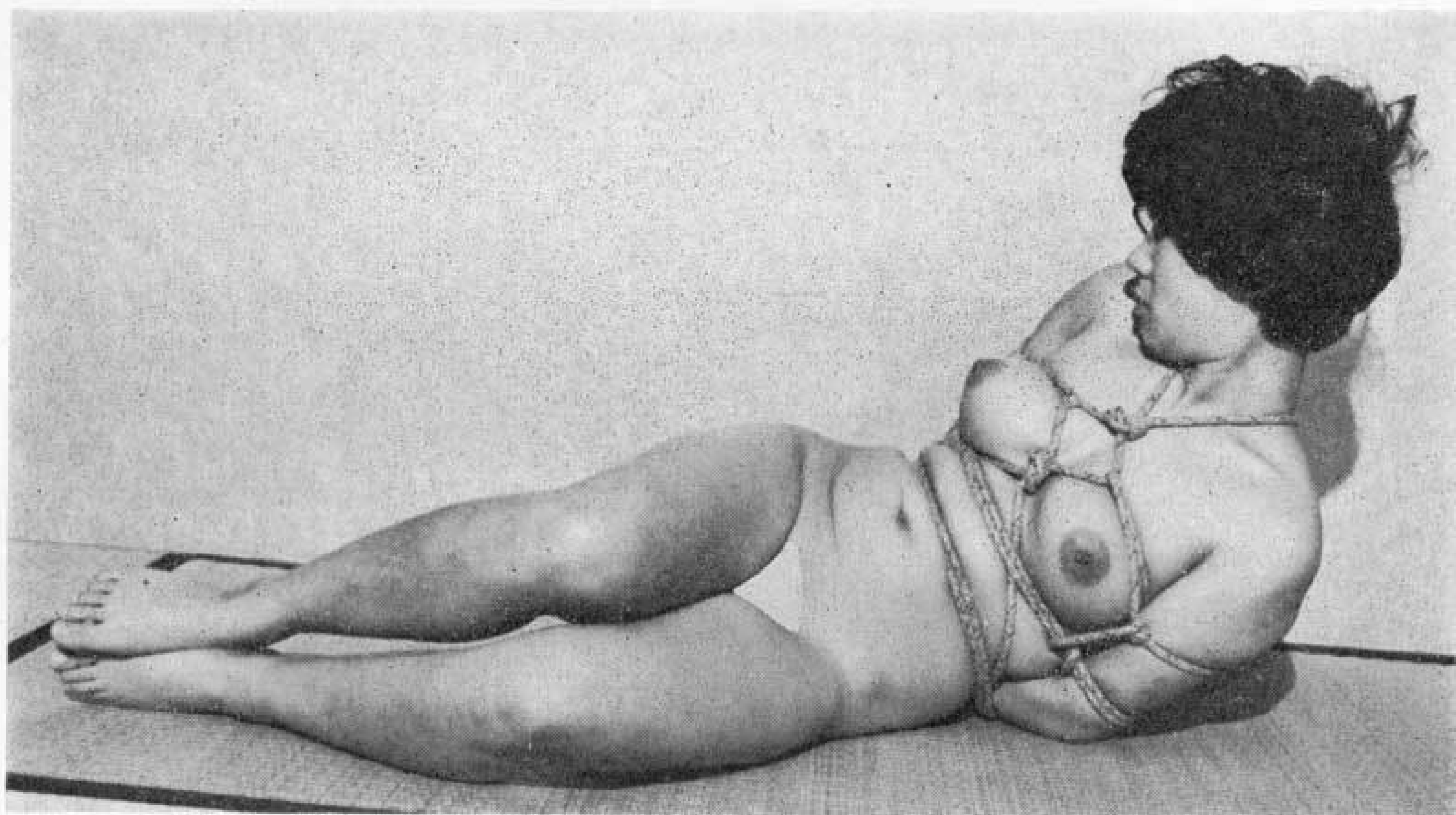
<笠井奈保子>

〈南　加津子〉



縛られる女たち

〈荒尾慶子〉



〈中河恵子〉



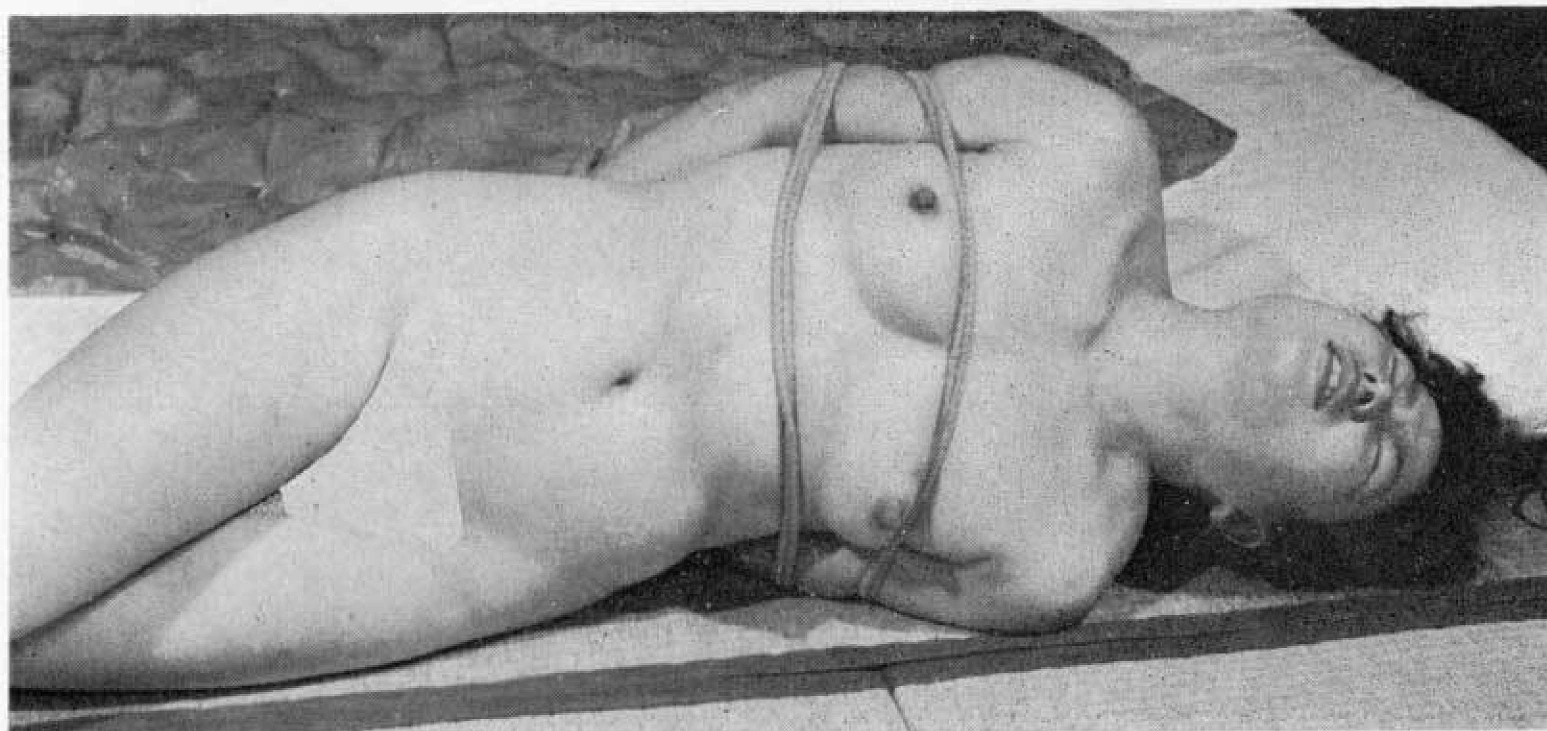
責められる女たち



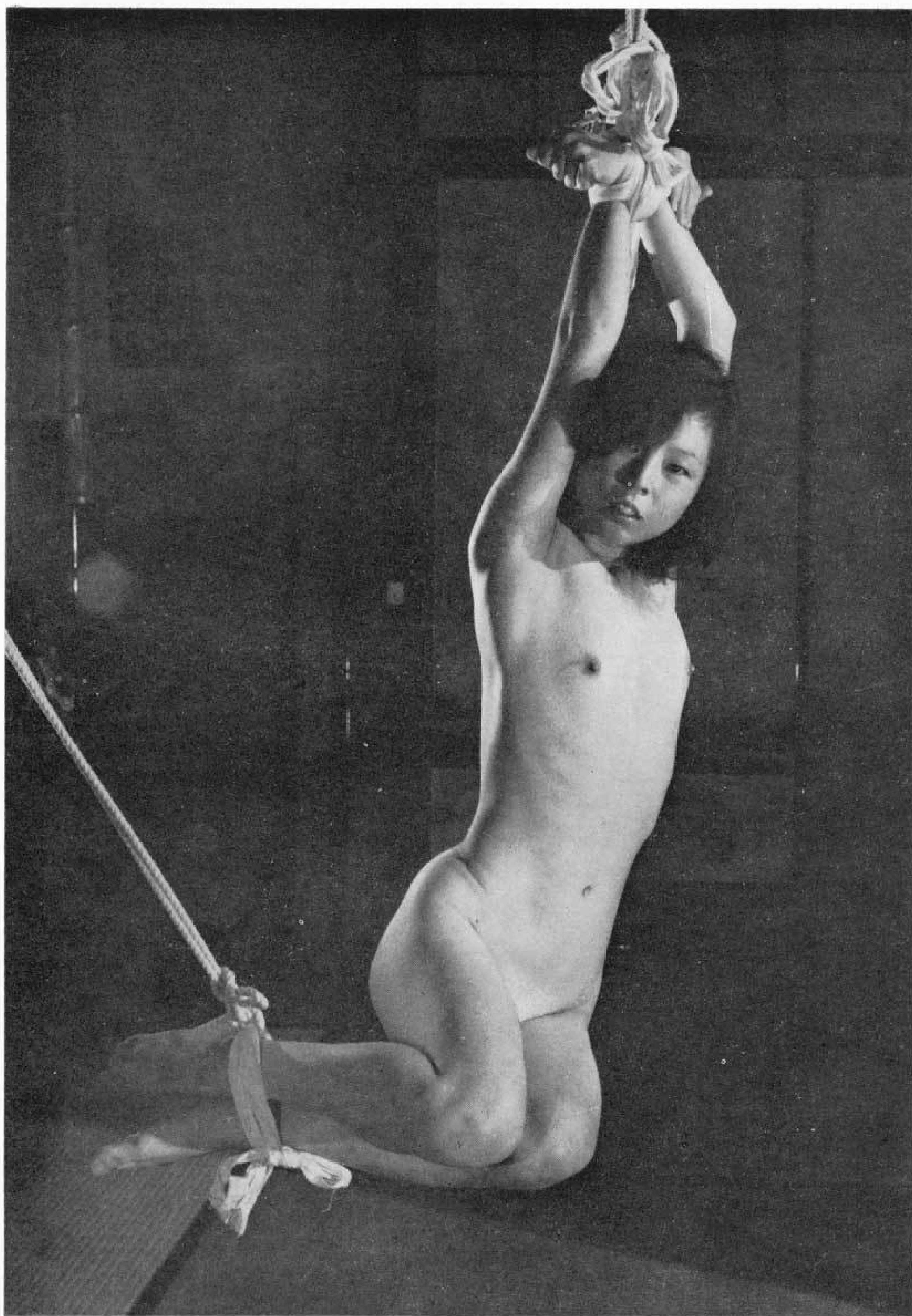
〈絹川文代〉



〈江口淑子〉



〈関谷富佐子〉



手 吊 り 足 吊 り

＜前 田 真知子＞











奇譚クラブ
1974
4月号
＜第28巻 第4号・通刊第314号＞



妖艶さの魅力を満喫

モデル……絹川文代

信頼のおけるひと（女）である。このような女性を縛ったら、ああ、俺は女を今、縛っているのだという自覚を身近に感ずることが出来るような気持がする。着物の黒襟から、のぞいている、ふくよかな白い乳房、その着物にかくされた部分が、どのように息づいているかと思うと、私の胸は、SMに対する感動で、妖しくふるえるのである。一篇のストーリーでも書けそうな、この緊縛写真に、私は惚々するような魅力を覚えながら、腰巻の裾から、むき出しになっている太腿の柔肌に視線が釘づけにされるのであった。

（石川カオル・記）

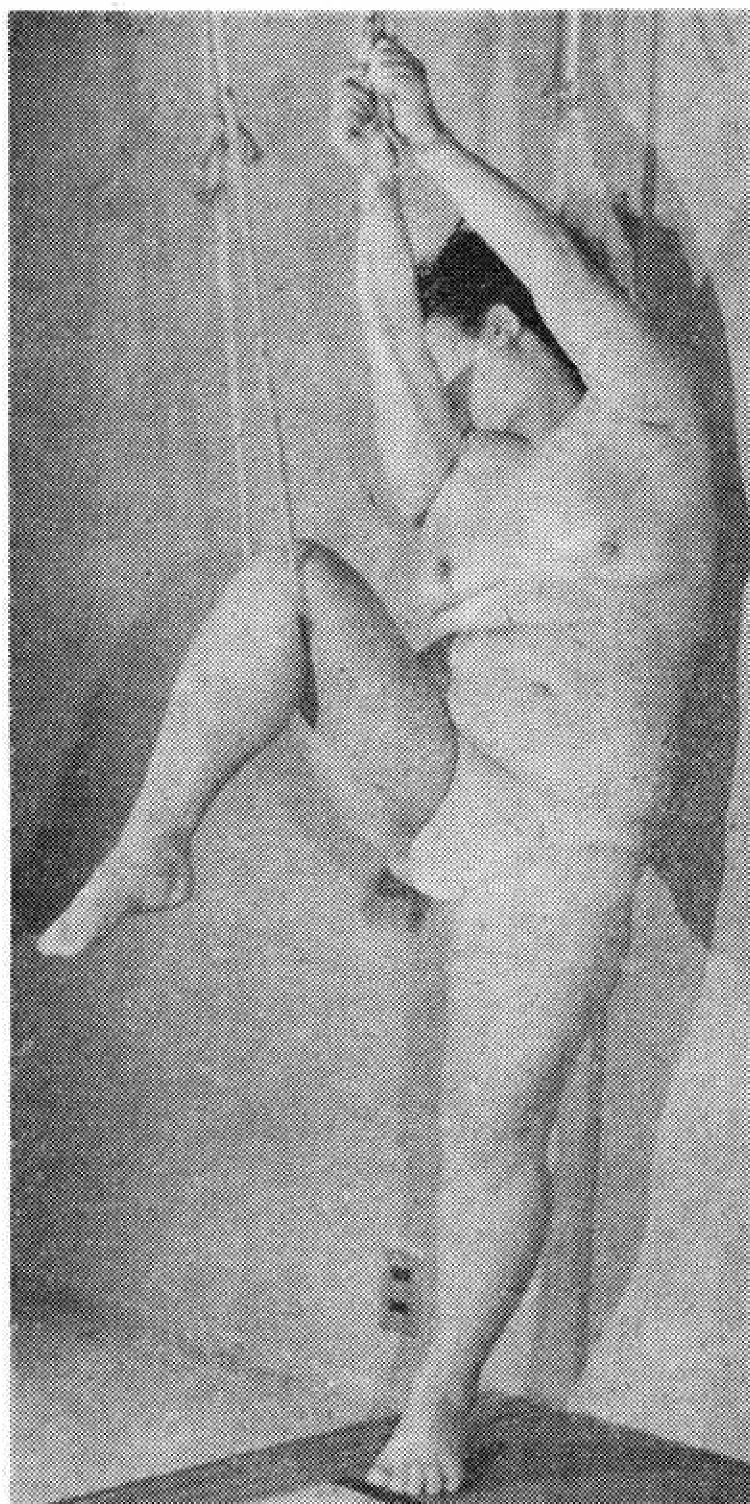
〈カメラ〉と〈ペン〉のルポルタージュ

淫（みだ）らな指（ゆび）の秘（ひ）密（みつ）

ダブルプレイ……〈苗木陽子／秋野英子〉の巻

塚（つか）本（もと）鉄（てつ）三（ぞう）

S研のメンバー坂本信三氏と二人で、M女の心と体の謎を探るべく、人身御供の苗木陽子を責めること。並びに責めの研究にうつつをぬかす余り、彼の伴ってきた秋野英子という可愛い女性をも縛ってしまうことなど。



さらす白い丘

苗木陽子を部屋へ迎え入れるなり、私は彼女の着ている豪華なお召しの着物を直ちに脱ぐように命じた。

私の目の前で、人間という虚飾（きょしょく）の衣服をかなぐりすてて、生まれたままの〈白豚〉の姿に、自らの手でさせるためだった。

相変らず、むくむくっと、よく太った張りのある白い肉体が目の前にあらわれた。

私が、その裸身に近づくと、その起伏のある女体の前面を押しつけるようにして抱きついてきた。馴染んだ女の仕草だった。唇を合

わせてキッスを求めようとするのを、私は軽く、いなした。ケモノとして、これから弄ぼうとする白豚を相手に、そんなことをする気持は、私には、さらさらない。

背中へ回してきた両手を把ると、かくし持った縄で、その両手首を素早く括り、鴨居に通して縄止めした。

両手を揃えて高々と頭上で縄止めされた棒立ちの無防備な姿勢でありながら、苗木陽子の肉体は、いささかのボリュームの衰えも見せることなく、むっちりとした二の腕、盛り上った乳房、みだらとさえ見える逞しい臀部をさらして吊られていた。

私は何もしない。

指一本触れることなく、ただ見ているだけだった。見ているだけで、とても楽しくなる奇妙な女体であった。これから、どうして責めてやろうかと、楽しい思いをさせる滋味あふれる女体であった。

私が眺めているだけで、その両手を揃えて吊られた女体は、うねうねと、全身をうねらせはじめているのだ。

私は、おもむろに卓上電話をとりあげて、隣室で待機している筈のS研の同好者坂本信三氏に電話した。

「坂本さん、いよいよ始まりますぜ。ぼちぼち、こちらへやって来ませんか。ドアの鍵はしていませんから、お好きなときに入ってきて下されぱいいですよ」

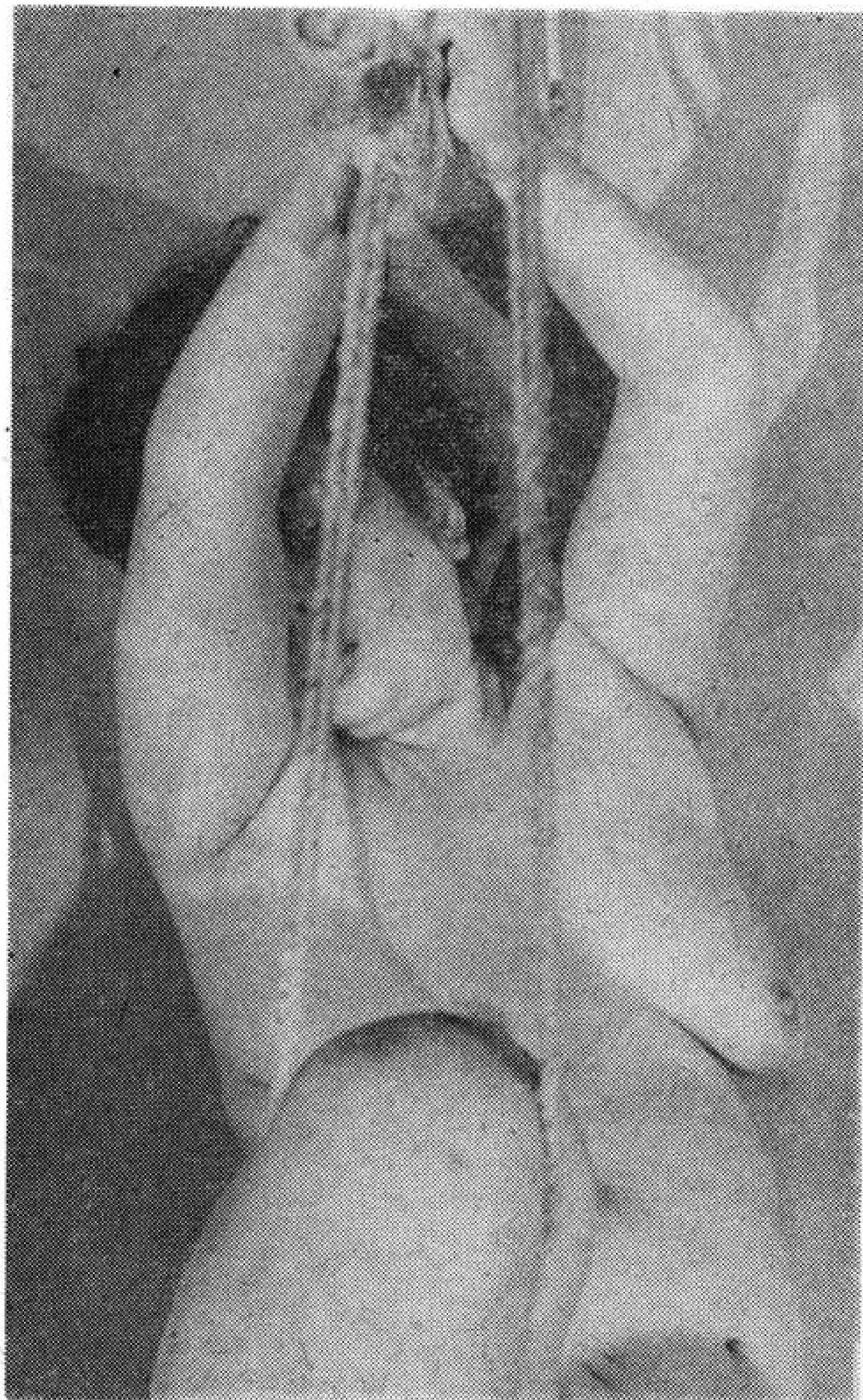
私の声は弾んでいた。

「ああ、そうですか。それじゃ、すぐ行きますから……」

打てば響くように坂本氏の言葉が返ってくる。くどくどしたことは言わなくても、以心伝心、直ちに通ずるのだ。

彼もまた、今回のプレイ行に、目下飼育中という可愛いいペットを携行してきているのだ。どのように口説いて、こちらの部屋へ入ってくるかが、私にも一寸、興味だった。

彼が単身入ってくるにしても、また、二人一緒に入ってくるにしても、相手の女性を、なんとか説得せずばなるまい。或は、すでに早々と納得させているかもしれない。



さあ、いよいよ、始めるぞ。

私は、はしゃいでいた。今日が初対面の坂本氏だとは言っても、男女二人のS研のメンバーが、わざわざ来てくれたのだ。SMプレイの楽しさが、また一段と増してくるのだ。

私は陽子の左足に縄を掛けると、それを鴨居に通して、するするっと引きあげた。陽子が自ら足を挙げて協力するので、足は難なく軽々とあがる。

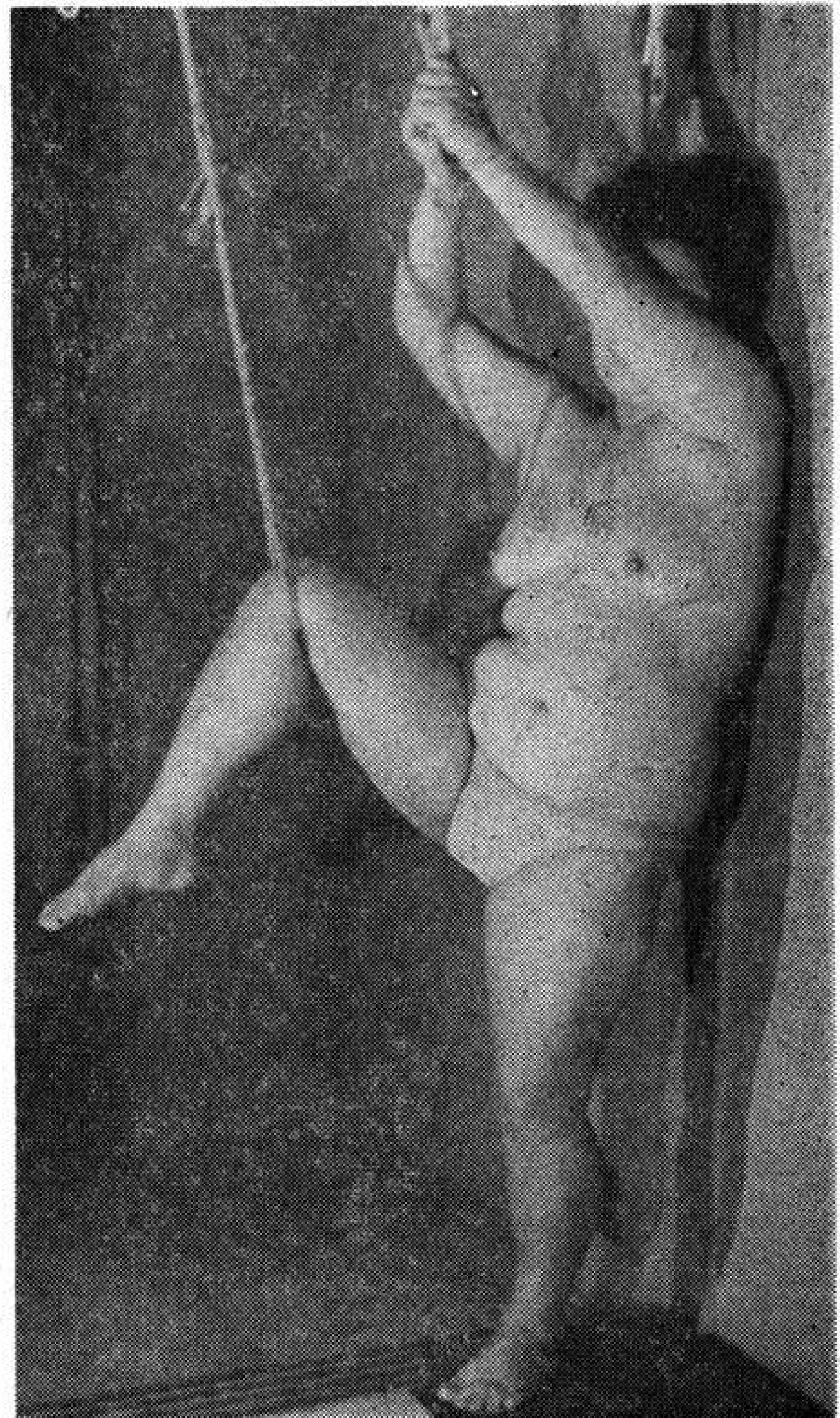
両手を吊られた一本足だ。

無防備で、そして、次には、どのような責めが待ちかまえているかわからない、あられもない格好だった。

足は、よくあがる。だが私は、一旦、高々と目の位置まで爪先をあげた足の縄をゆるめて、水平になるぐらいにまで下げてから縄止めした。陽子は私がそんな風に彼女の脚を鴨居に引きあげただけで、たちまちにして激しく燃え、そして身も世もあらず悶えだした。

顔は大きく、のけぞっている。

揃えて吊られた両手と一本足を中心にしてくるりくるりと、体の向きを変えるかと思うと、ゆらりゆらりと、上半身は揺れ、自らの意志で立っているのが、やっと——という興奮状態に陥っているのだ。

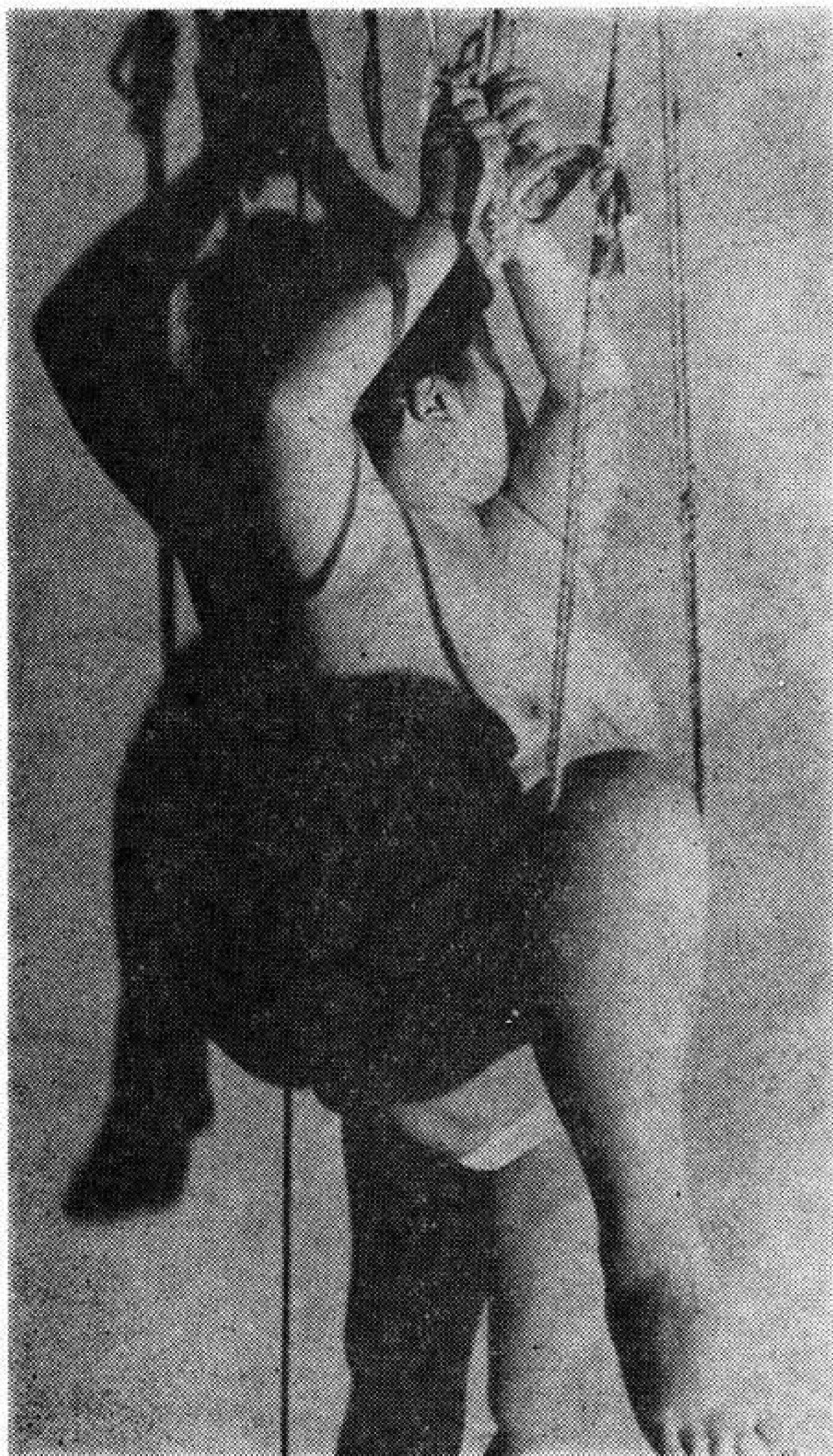


きっと私が何かするに違いない。こんな縛り方をしたのだから、何かするだろうという大きな期待が、彼女を自己催眠にかけているのだろう。だが、私は陽子の片足をあげさせただけで、あとは何もしなかった。ただ、じっと見ているだけだった。

それなのに、苗木陽子のこのもがきようはどうだろうか。一本足で辛うじて立っているのが、やっとという有様で、ぶらりぶらりと揺れながら悶えている。私は引き寄せた椅子に腰をおろして、そんな陽子の肉づきのよい肢体の微妙な動きに見惚れていた。

皎々たるライトに照らし出されて、彼女の真白い肉体は、いつもは陽にさらされることもない皮膚の隅々の襞までもあらわにして、全身が泡立つ波のように、激しく波うっているのである。

ボリュームがあるだけに、こうしたポーズをさせてみると、そのダイナミックな悶えようは、またまことに見事な眺めであった。



私が電話した隣室の坂本信三氏が、この部屋を訪れるまで、今日のこのSMプレイを行うに至ったまでのいきさつについて、簡単に述べておこう。

☆

私が十二月号誌上に於いて〈SM研究会〉についての提唱をしたところ、全国の熱心な同好者の方々から、夥しい数の通信を頂いたが、この坂本信三氏も、その一人だった。

手紙の交換から、電話での打合せ。そして今日、初対面で、すぐさま、SMプレイの研究をやろうということになったのだ。

もっとも、彼の方は、ぶっつけ本番で、初対面から、すぐにSMプレイに入るということについて、大いに危惧を持っていたらしく「初対面じゃ心もとないから、それまでに、是非一度、ゆっくり逢って、私という人物も知ってもらい、また十分にプレイについての打合せもしたい」と言っていたのだ。

それを私が、「まあ、誰でも最初は初対面だよ。プレイの打合せなんか、その場でも出来るじゃないか」と、強引に誘ってしまったのだった。

彼は最初、相手の女性から、多額の金銭を要求されるのじゃないか――とか。あるいは妻や勤務先に、言いふらされるのではないか――という不安を持っていたらしかった。

そんな危惧を抱くのは、誰でも一応もっともなことだ。そこで、私は貴方が自分で飲み食いする費用以外は一銭も出費させないということを保証すると共に、本名、住所、勤務先など一切、知らさなくてもよいということで納得させたのだった。

それで、彼との文書による連絡は、専ら彼のSMペットである秋野英子の住所を利用し電話は公衆電話で彼から私の方へ掛けさせたのであった。

苗木陽子が上阪してくる日がきまって、私は、このホテルの隣り合わせの二部屋を、私の名前で予約しておいたのだ。

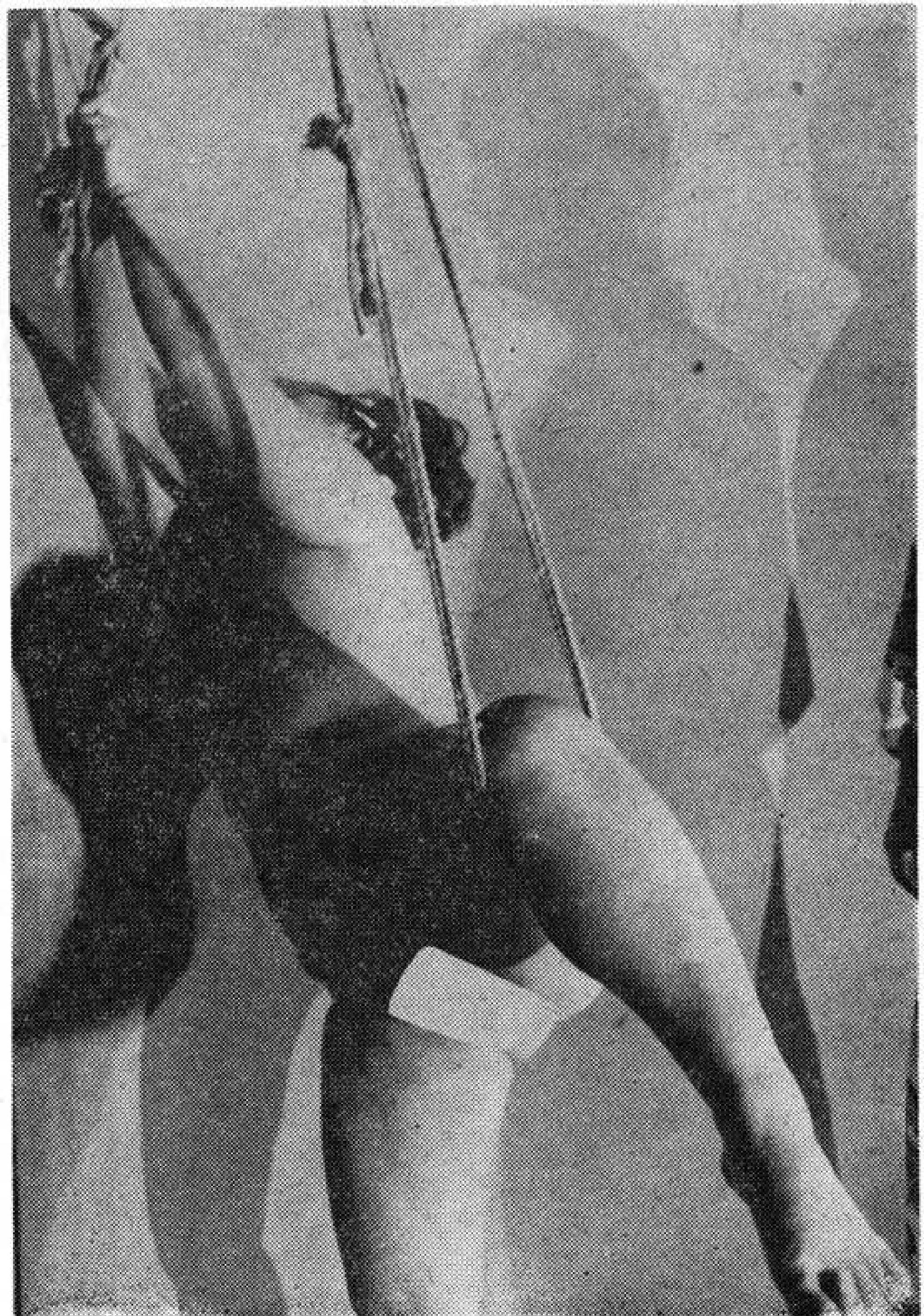
このホテルのチェックインもアウトも十二時というシステムだから、その時間帯に私の名前を言って部屋へ入れば、初対面でも、すべてOKというわけなのだ。

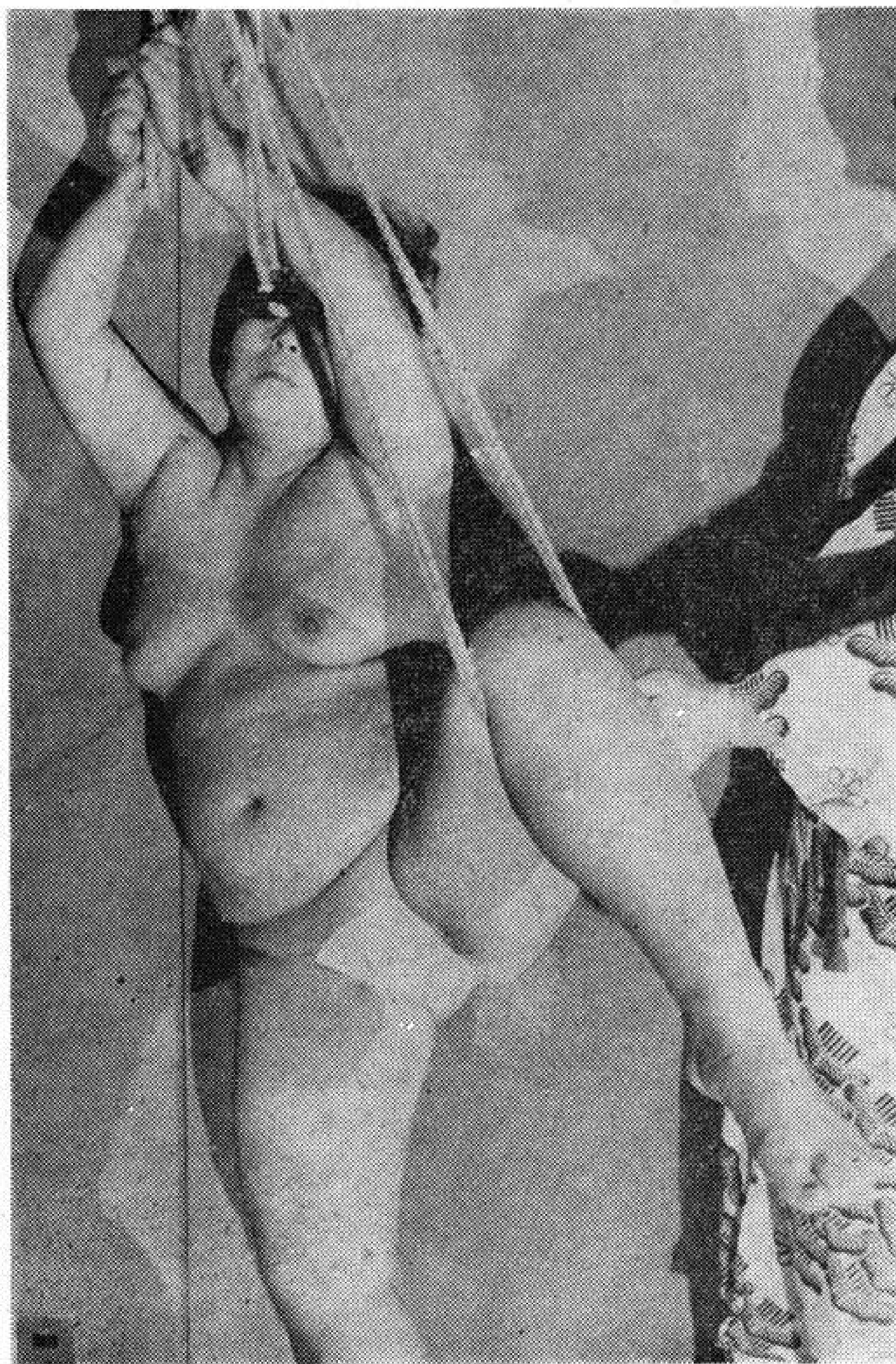
ぶっ続けで二十四時間の連続プレイも可能

だし、空腹になれば、食堂へ足を運んで自由に食事をすればいいのだ。
　こうして、私は苗木陽子と一緒に一部屋へ入り、坂本信三氏は秋野英子と、その隣室におさまったのだった。

☆

　ドアには施錠していなかったので、苗木陽子の悶える肢体を前にして、私がカメラの点検をしている時、襖が細目に開いて、坂本信三氏が控え目に顔をのぞかせた。
「入ってもいいですか?」
「さあ、どうぞ。待ちかねていたところですよ。遠慮なく、お入り下さい」
　襖を開けて、するりと体を滑り込ませた坂本氏は、目の前の鴨居に、皎々たるライトに照らしだされて全裸のあられもない肢体をさらしている苗木陽子を見て、一瞬、ハッとしたように見上げた。そして、無言のままで部屋の中央に座を占めた。
　彼の背後にうつ向き加減で小さくなっている女の手を引き寄せる。秋野英子は、その手を払いのけるようにして、いやいやをする。
　お互いに無言だが、そこはそれ、プレイを通して知り合った男女二人の、なごやかな交歓風景が、ほほ笑ましく見られた。やがて秋野英子は、部屋の隅に落ちつき、きちんと膝を揃えて正座し、視線を膝の上に置いた両手の上に落している。
「坂本さん。一寸こっちへ来て、よく見てやって下さいよ。これで丁度一カ月目になるんです。髭面というものは、一日でも剃らないと、すぐザラザラに生えてくるものですが、この尼さんは、一カ月経っても、こんなんですから、案外、短いもんですな。一つ、ゆっくりと見てやって下さいよ」
　私はライトを下向きに加減しながら、坂本氏を手招きする。
「あああ、誰か他の人が来たの? いや、いや、見ないで、見ないで……」





「何を言ってるんだ。今日は、お前の白豚の白く太った見事な身体を、とっくりと見てやろうと、この坂本さんが、わざわざ来て下さったんじゃないか。どうだ？　見てほしいんだろう。見て頂くのが、白豚の望みなんだろう？　どうなんだ？　そうなんだろう。そうだったら、はいと返事するんだ」
「あ、いやいや。貴方以外の他の人に見られるなんて、いや、いやっ」
「見られたいクセに、ええかっこするな。はいと言うまで許さんぞ」
　私は掲げた白豚の足の裏に手をやって、こちょこちょと擽る。陽子は擽りには至って弱い。ましてや、一直線に差し出して伸ばした足の裏だ。途端に、足の指が、くねくねと動いたかと思うと、上半身が勢いよく、のけぞり、激しく左右に揺れる。
「ああ、やめて、やめて。くすぐったい」
「だったら、はいと返事しないかっ」
「は、はい」
「はいだけじゃわからん」
「坂本さまに、見て頂きます」
「見て頂くだけじゃない。〝これから、坂本様に、きれいに剃って頂きます〟って、お願いしてみろ」
「は、はい。陽子は、陽子は、坂本さまに、きれいに剃っていただきます」
「うん、よしよし、その調子だ。これからも一々、して頂くことは自分で口に出して大きな声で、お願いするんだぞ。わかったな」
「はい」
「坂本さん。陽子が、こんなに、お願いしてるんです。一つ、丸坊主にしてやってくれませんか」
　私は電気カミソリを手渡す。
　苗木陽子に対するSMプレイのセレモニーそれは剃毛だ。
「フフフ、それでは、白豚の浮気封じに、剃らして貰いましょうか」
　彼もまた、私のカメラルポの愛読者のようだ。手で撫でさすり、のぞき込むようにして

しげしげと眺めていた坂本氏は、私の手渡したカミソリを手にすると、ふっと我に返ったように、着ていた浴衣を肌脱ぎになった。

と、その途端、白豚の全身が、ぐらぐらと大きく揺れたかと思うと、口から「う、ううう」と、甘美な呻き声が洩れた。

いよいよ、剃毛が始まったのだ。

私はカメラを手に、悶えている白豚の全身がファインダーいっぱいに入るところまで、ツ、ツーと引きさがる。

そして、ふと、背後を見る。

秋野英子が、部屋の隅で相変らず正座したまま、両手で耳を掩うような格好で、うつ向きながらも、目だけを上げて、じっと苗木陽子の方を見つめている。

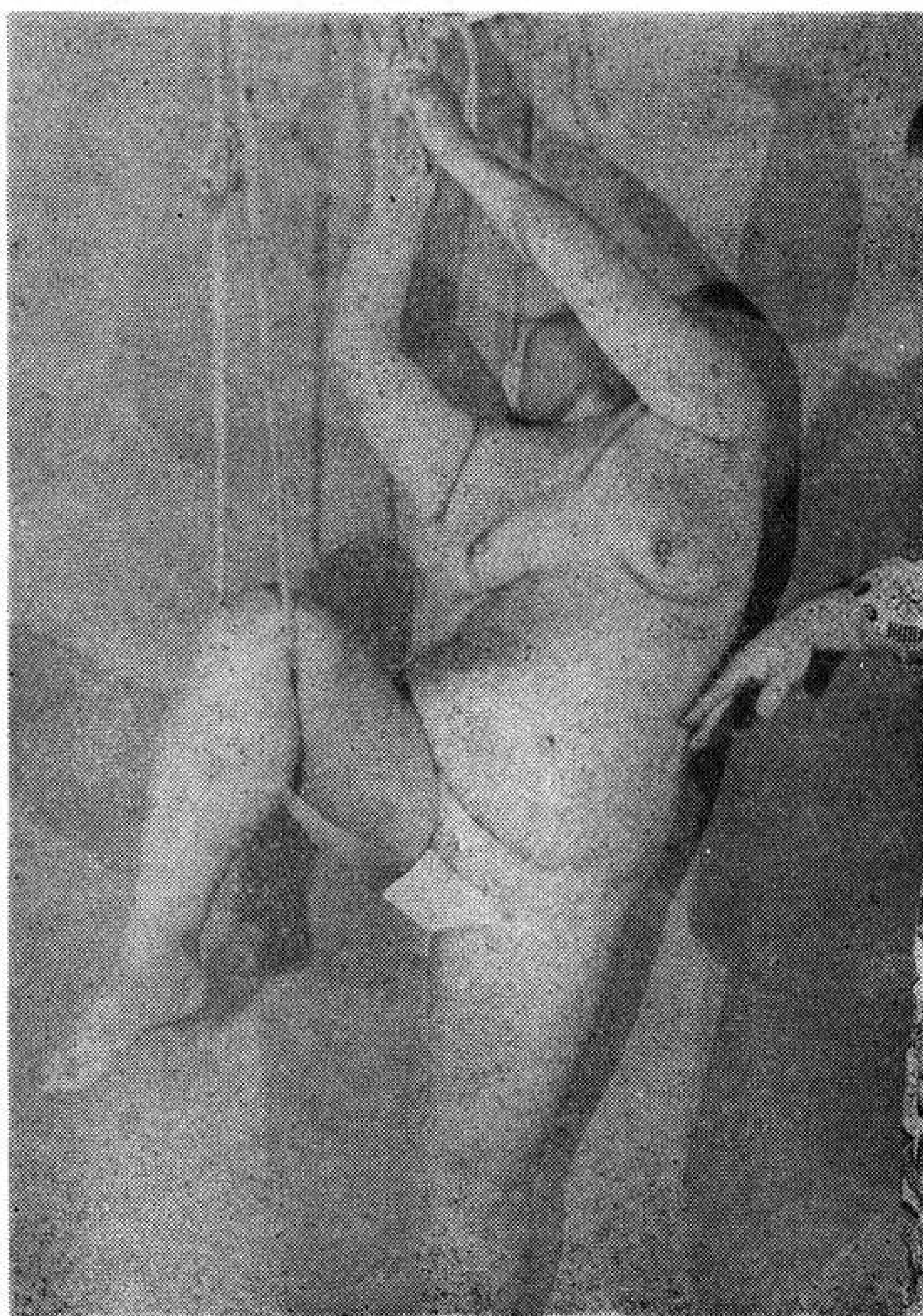
私が顧ると、あわてて視線を畳に落す。見れば、その頬は上気して真っ赤だ。私は引き返して、意地悪く、その顔を覗き込む。

彼女は無言で、うつむいたまま、いやいやをしている。私に覗き込まれて、長身の身体を殊更小さく、ちぢめている風だ。恥かしくって、いたたまれないといった風情(ふぜい)が、風に揺れる女郎花(おみなえし)のようだ。

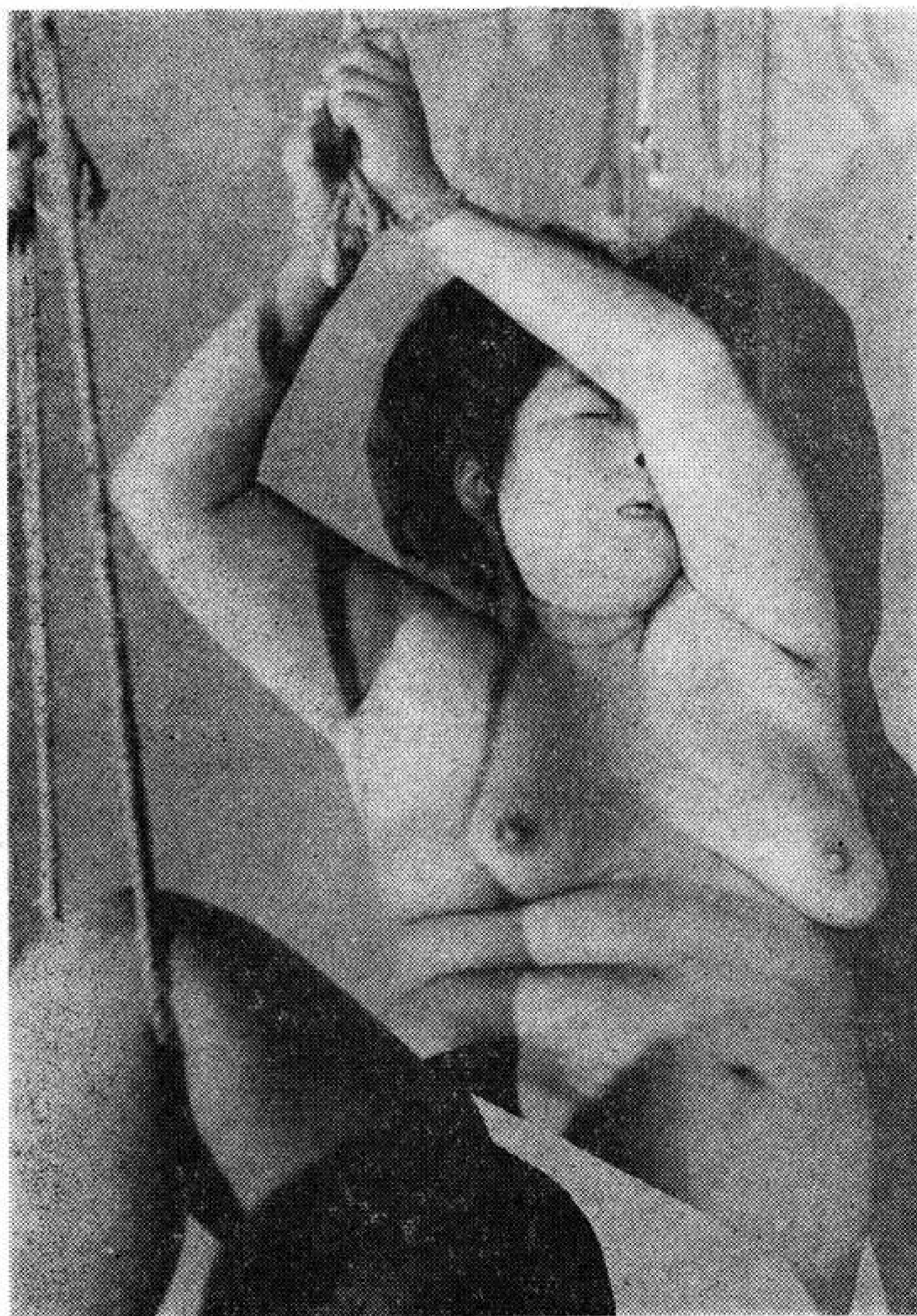
そのとき、向うで陽子の悲鳴がした。

「あああ、剃っちゃいや、剃らないで。お願い。お風呂へ行けなくなるわ。剃らないで。ねえ、お願い。ああー ぁ」

苗木陽子の太り肉(じし)の全身が、波うつように揺れている。まさに大揺れである。ただ単に全身が揺れているばかりではない。肉体の各部が、喘ぐように、うねうねと、律動を伴って蠕動しているのだ。

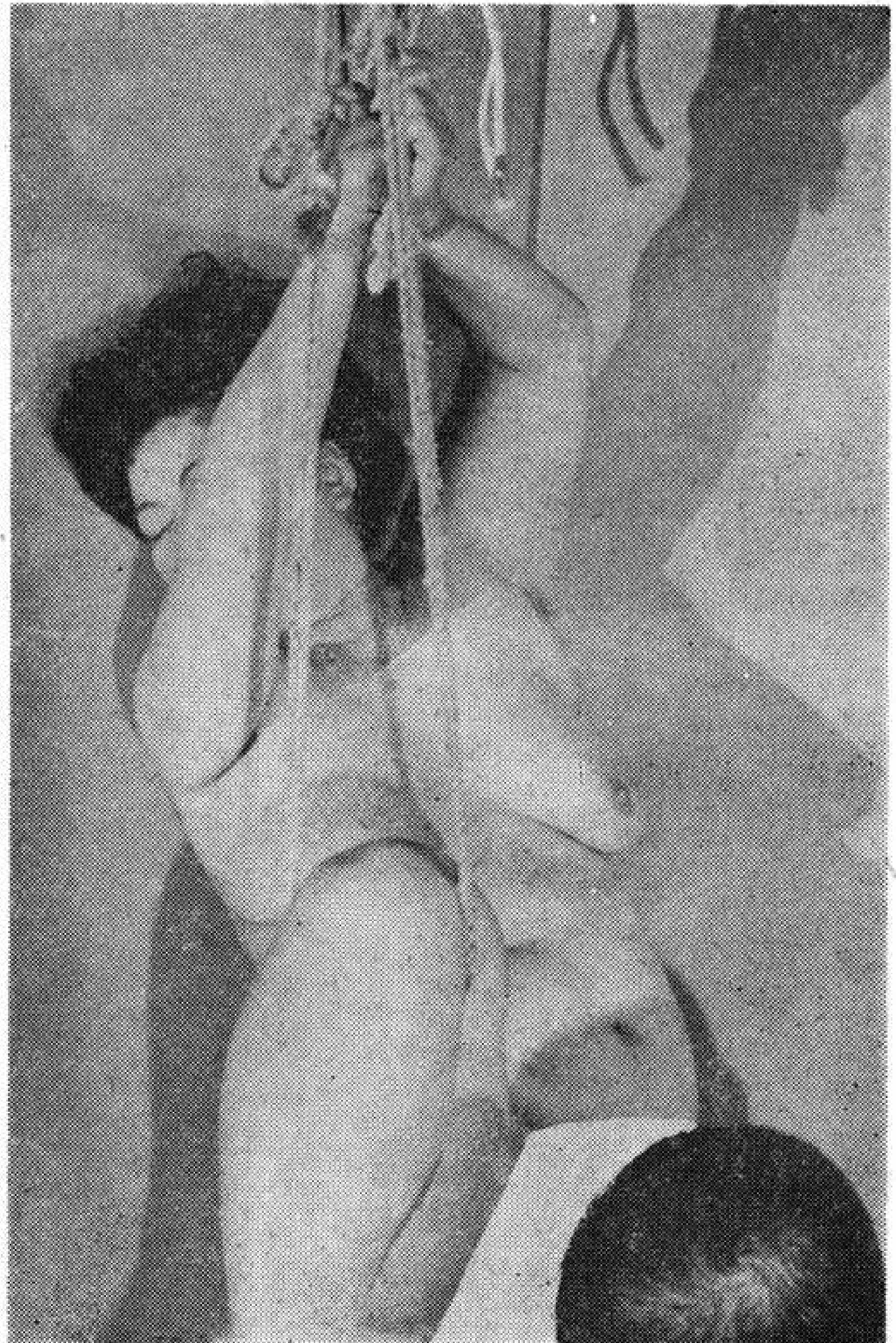


見事とも、なんとも言いようのない蛆虫のもがきようだ。私はピントを合わしてから、のけぞったところのシャッターチャンスを掴んでボタンを押した。カラーのネガとポジの各一台宛、モノクロ二台の計四台のカメラを一人で操作しなければならないから、とてもじゃないが忙しい。



私は苗木陽子に近寄った。
「陽子。今、坂本さんに、何をして貰ってるんだ。言ってみろ」
「いいい、言えないわ、そんなこと……」
「こいつ奴、言わないいな」
私は髪の毛を鷲づかみにして、咽喉へ手をさし入れて擽る。
「い、言います、言います」
「早く言えっ」
「陽子は、今、坂本さまに、剃られて、剃られて……います。ああ、あーああ」
坂本氏の軽作業は、益々佳境に入ったらしい。白豚は狂ったように、のけぞり、吊られた両手と一本足を軸にして、ゆらりゆらりと揺れている。
「ああ、陽子、坂本さまに、剃られているのねえ。剃られると、たまらないの」
白豚のこの悶えようは、どうだろう。縄はぎしぎしときしみ、のけぞった顔面は、ともすればファインダーから逃げていってしまいそうになる。
「陽子。そんなに、のけぞってしまったら、写真が撮れないじゃないか」
「だってェ、だって、とっても、気持いいんですもの。じっとしておれって、言う方が無理だわ。ああーあ」
坂本氏は剃毛だけじゃなしに、他の責めもやっているのかも知れない。いや、あるいは剃毛責めだけかな――。
私はカメラを持ち換えて秋野英子の方へ近寄る。さっきは耳を掩っていた両手で、今度は顔を掩っている。だが、その両手の指の間から目を輝かせて、怖いもの見たさの視線でじっと苗木陽子の方を見ているのだ。
「どう？　貴女も、あのようにして責めてみようか？　ここで一人いるのは退屈だろう」
「いいの、縛られると怖いから、ここで一人で見ています」
「そう、だったら、よく見ていることだな。

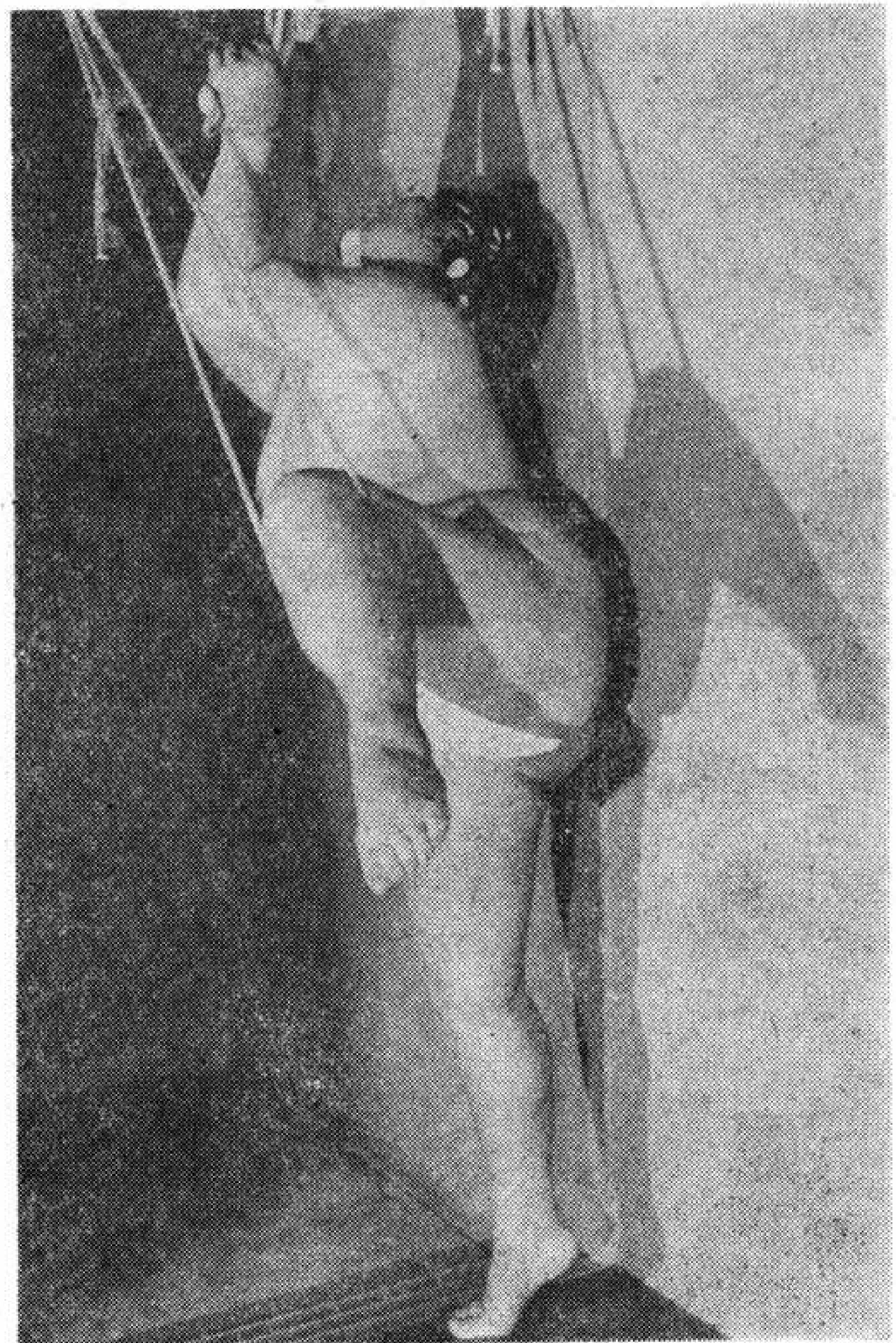
次には、交替してもらうからね」
　私は現場へ戻る。
　苗木陽子は、とろんとした目つきだ。
　人間の女性から、完全にケモノの白豚に変身してしまった目だ。も早、常人のそれではない。私は髪の毛を摑んで引き起す。無我放心の状態に陥っていて無反応だ。
　苗木陽子は、もう完全に白豚になりきってしまっている。私は摑んだ髪の毛を放した。
「おい、どうやら、参ってしまったらしい。そっちの作業の方は、どうだ?」
「それより、塚本さん、凄いですよ。ホラ、こんなに……」
「ふん、大分、念入りにやったものですな」
　私も坂本氏と一緒になって覗き込む。
　何度眺めても、白くてなめらかで、なだらかな美しい丘のスロープだ。
　他の女のそれと比較して、二人で淫らな会話を交わす。これもSM研究の一つであるかもしれない。
　ここはどうだ、あそこはどうだ——と。
　今日が初対面の二人だが、もう十年の知己のように、お互いに素っ裸のSM研究者になっていた。
　剃毛の儀式が終って、苗木陽子が完全白豚に変身してしまった今、いよいよ、本格的なSMプレイに移行せずばなるまい。
「塚本さん。私はカメラルポを読んでいて、あれはオーバーに書いているんだと思っていましたが、実際は、もっと凄いもんですね。いやはや、度肝を抜かれましたよ」
「坂本さん、まだ感心するのは早いですよ。白豚に対する責めは、これからが本番なんですからね」
　私は、白豚の頬を平手でペタペタと叩く。
「陽子。今、坂本さんに、何をして貰ったか言ってみろ。さあ、言わないか」
　とろんとした焦点の定まらない目。ともすれば陶酔に陥ってしまおうとする表情だ。
　私は彼女の唇の横を軽く抓る。
「坂本さんに、今、何をして貰った?」

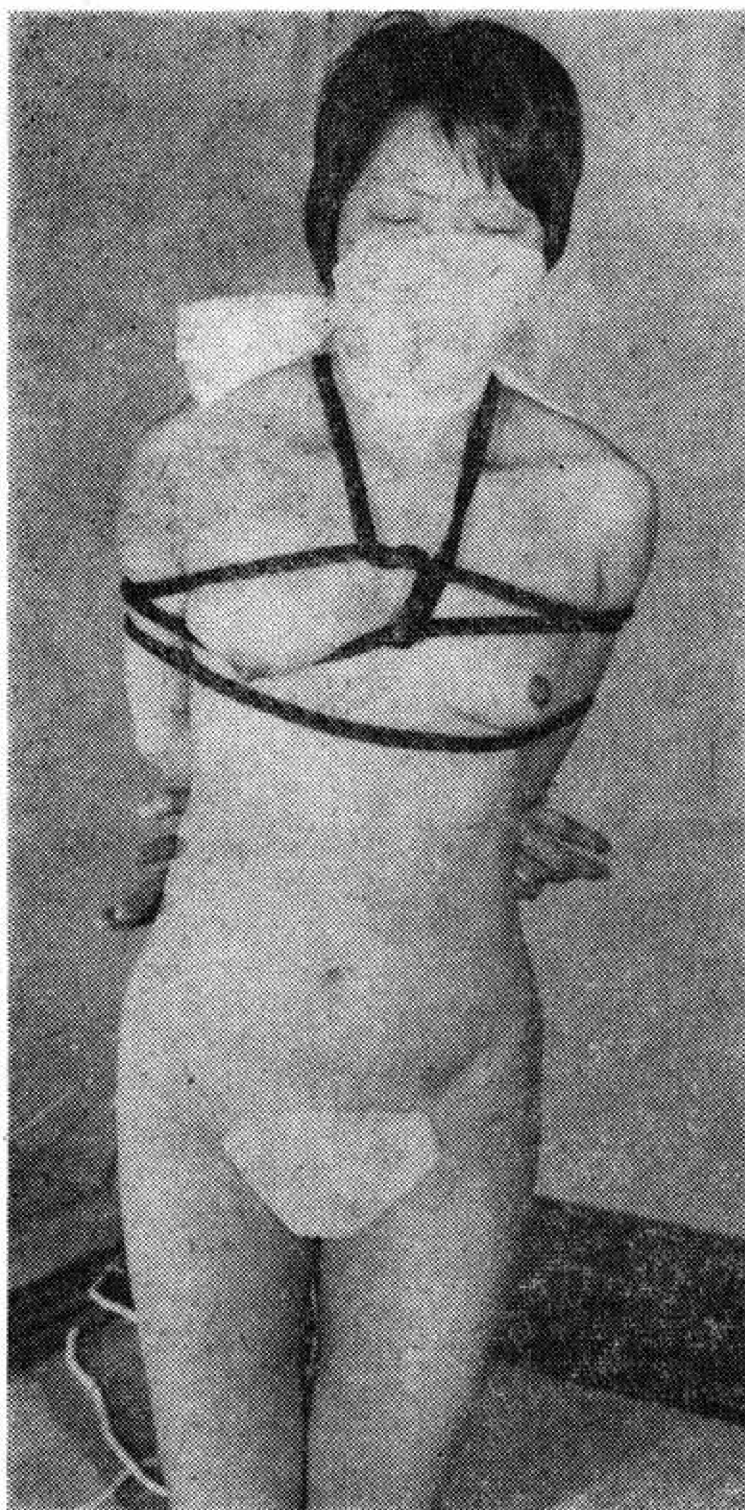




「ああ、陽子、もう、体中がとろけそう」
「馬鹿っ、そんなことを聞いてるんじゃないんだ。今、坂本さんに、何をして頂いたかを聞いているんだ」
「はい、陽子は、今、坂本さまに、剃って、剃っていただきました」
「どこなんだ? どこを剃って貰ったかを、はっきりと言ってみろ」
「は、はい。それは、そこです」
「そこじゃ、わからない。はっきり、場所の名前を言ってみろ。どこなんだ?」
「はい、そこです。そこを剃られました」
「そこだけじゃ、わからないって言ってるだろう。場所の名前を、はっきり言うんだ」
私は髪の毛を摑んで、ゆさぶる。挙げさせられて吊られた脚が、ゆらゆらっと揺れて、上半身が私の方へ、もたれかかってくる。
坂本氏もカミソリをすてて、陽子の首にしがみついて、頰を寄せて囁く。
「陽子。私に、どこの毛を剃ってもらったんだ。言ってみなさい」
ねっとりとした低音の粘っこい響きだ。
「はい、陽子は、坂本さまに、すっかり、されいに、剃っていただきました」
「それは、よくわかっている。その剃ってもらった場所をきいているんだ」
「坂本様に剃っていただいた場所は、場所はそこです。そこなんです」
「そこだけじゃわからない。はっきりと、その場所の名前を言ってごらん。塚本さんと私の前で言ってごらん」
「いやです。そんなこと、恥かしくって、私には言えません」
「言えんと言うのか」
私は、そっとムチを坂本氏に手渡す。
のけぞった陽子の顔と吊られた両腕の間から、じっとこちらの方を見つめている秋野英子の白い顔が見える。足は横坐りに投げだし両手を畳の上についている。

私達男性二人ばかりか、責められている白豚の姿は、若い女性にも見られているのだ。
「ほら、陽子。お前のこんなあられもない片足挙げた姿を、あの女の子にも見られているんだぞ。どうだ、うれしいか。うれしかったら、うれしいと言ってみろ」
途端に、秋野英子が激しく動揺して、視線を畳の上に落す。
「私、男の方にだったら、いくら見られてもいいけど、女の人にだったら、いやっ」
「何を言ってるんだ。それよりも、さっきの返事は、どうなんだ。坂本さんに、一体、どこを剃られたんだ?」
私は微笑みながら坂本氏に目くばせする。
ピシッ、
白豚の豊かな臀部にムチが飛んだ。
ピシッ、ピシッ、
鋭く、乾いた音だ。
「ううう、うーう、うう……」
ピクッと白豚の全身がふるえたかと思うと切なそうな快感の呻きが口から洩れる。
「さあ、どこを剃ってもらったのか、早く言うんだな。言わないと、お尻が真っ赤になるまでムチで打たれるぞ」
「ああ、あーあ、ぶたれると気持がいいの。もっと、ぶって、ぶって。ああ、あああ」
「言わないな。しぶとい白豚奴」
ピシッ、ピシッ、ピシッ、
坂本氏の手にしたムチは、激しい勢いで苗木陽子の臀部に炸裂する。情容赦もない坂本氏のムチの揮いようだ。
みるみる苗木陽子の臀部の皮膚が、朱く色づいてゆく。一本足で立っている右足も、ともすれば、くずれるように膝頭で折れ曲り、体重が吊られている両手にかかって、枝からぶらさがった蓑虫(みの)のようにくるりと回る。
私は、その思いきりのけぞった陽子の顔を毛髪を摑んで引き起す。
「陽子。坂本さんに、どこを、どうされたのか、言ってみろ。そして、どんな気持だったのか言ったあとで、お礼を申し上げるんだ。

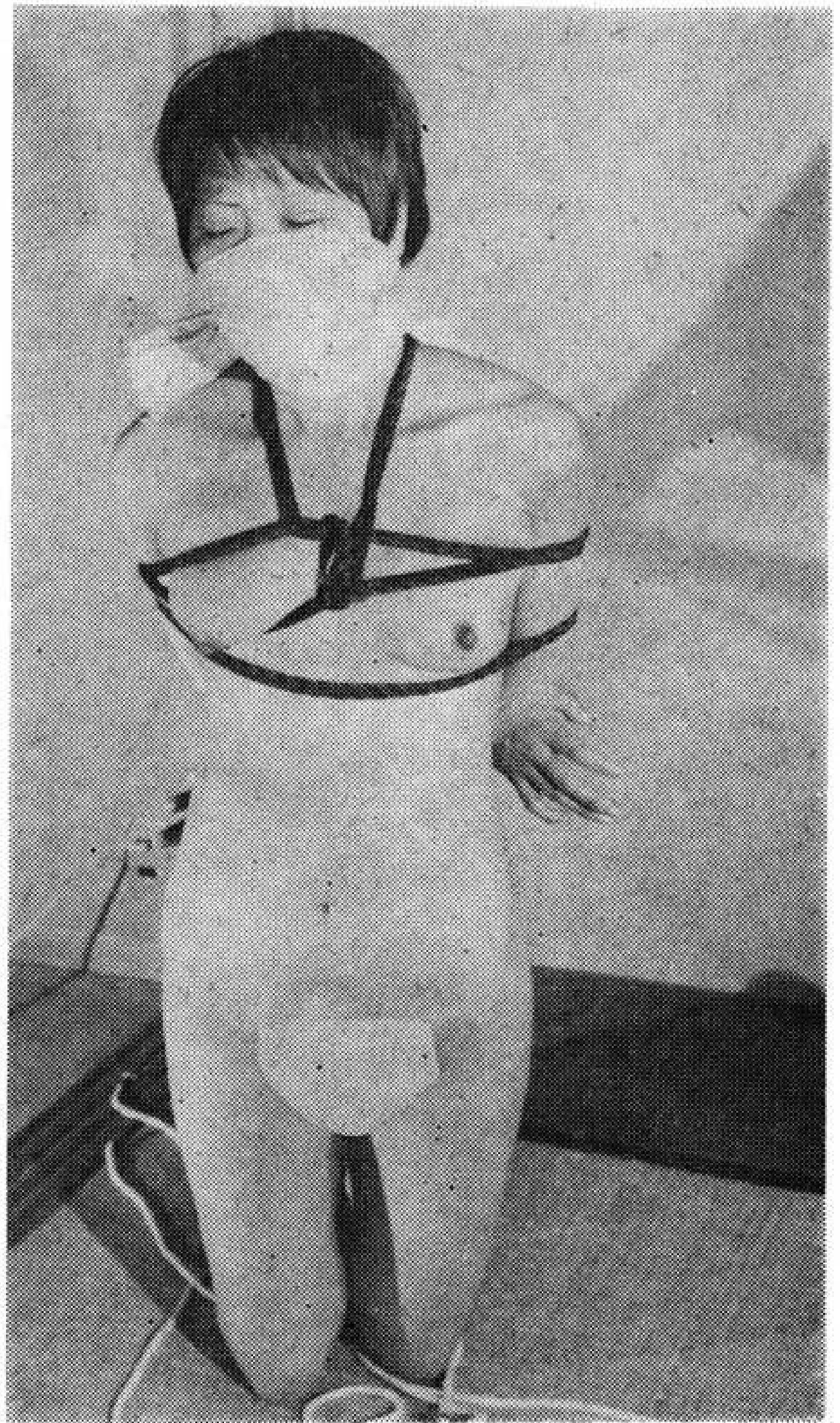




わかったな。わかったら、言ってみろ」
「はい、陽子は、陽子は、坂本さまに、そこを剃られ、大変気持がようございました」
「そこじゃ、わからない。はっきりと、その名前を言ってみろ」
「は、はい、陽子は、そこを、坂本さまに、剃っていただき、有難うございました」
「まだ言わない気だな」
　私は無防備に伸ばしている白豚の腋の下に手をやった。さっと掌を青白い腋に触れただけで、擽るまでもなく、陽子の第二回目の発作が突如として、やってきた。

「うっ、うっ、ううう……」
　一本足を軸にして、全身をぶるぶるっと、ふるわせながら一回転し、そして、首が両腕の間から、うしろへ、のけぞった。
　足も、腕も、太腿も、脇腹も、激しく痙攣している。坂本氏も陽子の余りにも凄いショックに、思わずムチ打つ手を休めて、呆然と眺めているばかりだった。
　今の今まで、部屋の隅にいた秋野英子も、いつの間にやら、部屋の真中まで、いざり寄ってきて、両手を畳の上につき、怖いもの見たさの表情で、じっと陽子の悦虐の有様を見つめている。真冬だというのに、部屋の中は生ぐさい熱気がムンムンと漂ってきた。
　私は、鴨居に引き上げていた陽子の左足の縄を解いた。両手を吊られたままの白い肉塊が、ぶらりと、ぶら下っている。
　坂本氏が、その両手の縄を解いた。
　ああ、なんということだ。
　陽子の両足に力が入らず、くにゃくにゃとその場に、くずれそうになる。私は腋の下に手を通して、膝頭で臀部を、こづく。
「こらっ、しっかりせんか。これ位の責めでのびてしまっちゃ、駄目じゃないか。まだまだ、責めは、これからだぞ」
　陽子は、うっすらと細目を開けて、恨めしそうな目なざしで私の方を見る。だが、満更でもなさそうな面持ちである。
「坂本さん、どうです？　この白豚の乱れ様は。ほら、自分で立っておれない位、骨なしの、ぐにゃぐにゃですよ。一つ、あんたに、活を入れて貰いますかナ。ふふふ」
「いや全く、驚きましたね。責めに対する感受性が強いって言うんですかね。いや、それより、塚本さんのお仕込みがいいせいでしょうな。本当に凄いですな。カメラルポを読んで想像していたより以上ですよ」

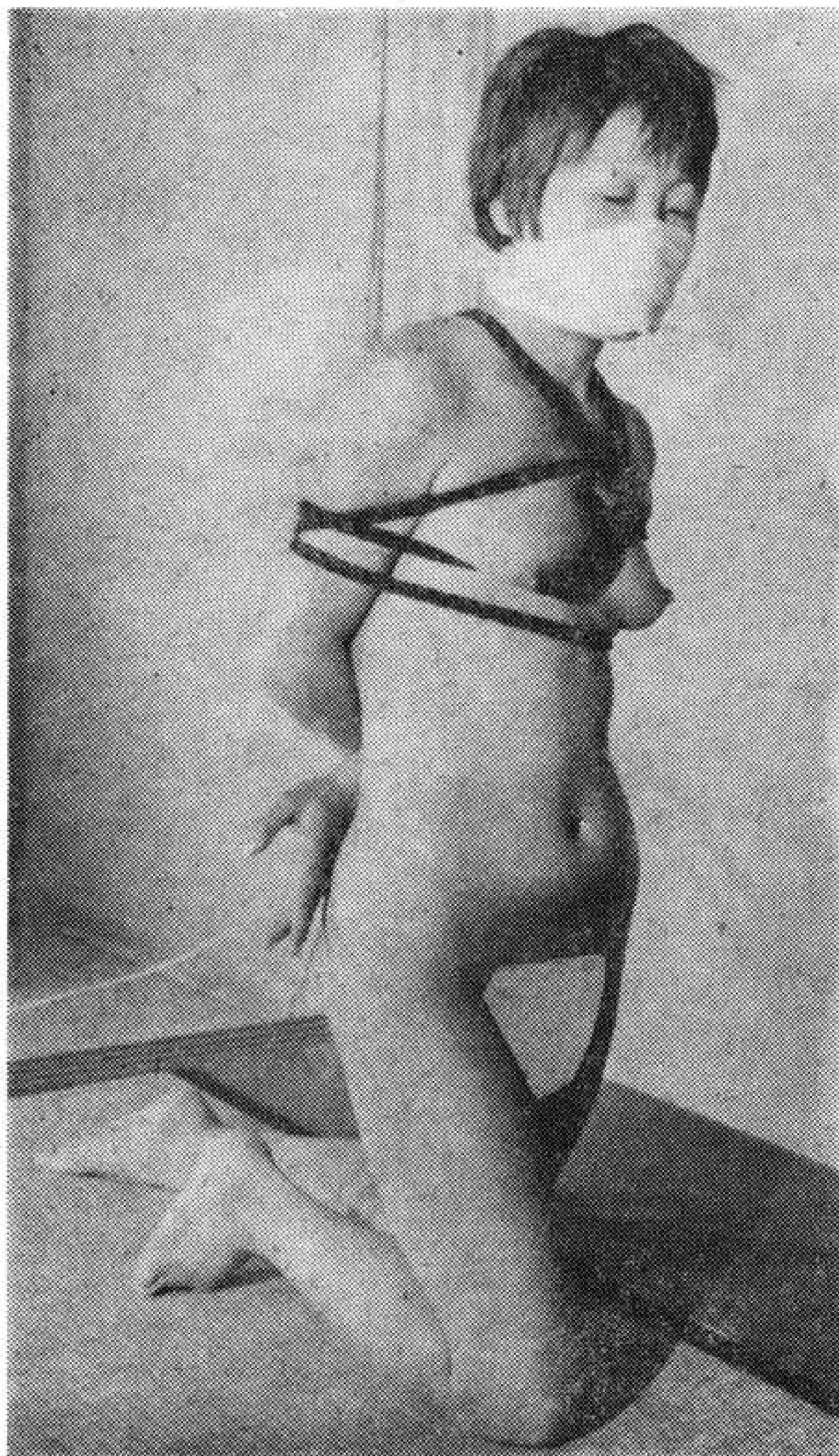
「苗木陽子に対する責めは、今日で四回目になりますかね。だから、飼育歴といったってそう長いもんじゃありません。その点、貴方の英子さんに対する飼育の方が、よっぽど、長いんじゃないですか?」
「いや、英子の方は、まだまだ責めという代物じゃないんです。今のところ、ほんの軽く縛らせるだけなんです。本当の責めの味なんて知りませんよ。陽子さんに比べたらヒヨコのようなものです。それにしても、陽子さんの燃えようは凄いもんですな。私も思わずエキサイトしてしまいましたよ。それで、ここらで一服しますか」
「まだ、今までのは、ほんの序の口です。これから本格的に責めてみますから、英子さんにも、よく見てて貰いましょう」
全身が水母（くらげ）のように、くにゃくにゃで、足元の定まらない陽子の体を、引きずりながら私は部屋の真中へ運んでくる。
改めて、高手小手にきっちり縛り上げる。
縄を掛けると、全身ふやけたようだった陽子の体も水を得た魚のようにしゃんとした。
「さっきは、坂本さんに剃って貰った場所の名前を、とうとう言わなかったな。その罰に今度は、少し手荒な責めをやるから、覚悟をしておくんだな。それとも、今、ここでお前の口から、それを言ってみるか」
「そ、そんなこと……」
「言いたくなければ、言わなくてもいいさ。その代り、覚悟をしておくんだな」
私は、にやにやと、ほくそ笑んだ。



淫らな指

苗木陽子の肥満体の胸に縄がかかると、今まで、ゆたゆたと泳ぐように揺れていた乳房が急に引きしまって、むっくりと盛りあがった。縄の威力というものが、こんなところにも現われているのだろうか。
その洋梨を逆さにしたような見事な乳房を坂本氏は、たまらなくなったように、むんずと摑んだ。
「大きな乳房だなあ。握り甲斐があるぞ」
坂本氏の掌の中の乳房が、むくむくと、うごめいて、ピンと突ったった乳首が、ぴくぴくっと、ふるえた。

「うう、うーうう」
苗木陽子の顔がのけぞって、上半身を私の膝の上へ、もたせかけてくる。両手が背後できっちりと縛りあげられているので、自由に動かせるのは、今やその両足だけだ。
その両方の足が、物凄い力で、ぐっと突っ張っている。その心持ち開き気味に一直線に伸ばされた脚の爪先が、恐ろしいほど力が入って、かすかにケイレンしている。
私は脚の上にもたれかかっている陽子の背をはずして立ちあがった。畳の上に仰向けになった彼女の二の腕に、縄が喰い込んで、縄目の間から薄肉色の肌が盛りあがっている。
「陽子。さっきは坂本さんに、何をして頂いたんだ。言ってみろっ」
私は冷ややかに見下しながら言った。
「はい、陽子は、坂本さまに、きれいに、剃って、いただきました」
「そうか、それじゃ、大きな声で、お礼を言ってみなさい。大きな声でだぞ」



「は、はい。陽子を剃って下さいまして、坂本さま、どうもありがとうございました」
「気にいらないなあ。何度も言ったろう？　その、剃って貰った、場所の名前を、はっきりと言わないか」
私は坂本氏の耳に、彼女のウィークポイントを囁く。顎の下、腋の下から脇腹、太股のつけ根、足の裏。こういった個所を操ってやると、恐ろしく鋭敏に感ずるのだ。
坂本氏の指は、きゅっと力をこめて伸ばされている陽子の足の裏に移った。
指が触れるか触れないか、見る間もなく、陽子の両脚の線が、くずれた。さらしている白丘が微妙な起伏を描いたかと思うと、秋野英子の座っている目の前に開帳したのだ。
「英子さん。貴女も一つ、坂本さんと一緒になって責めてみますか？」
私は意地悪く、英子の顔を窺き込む。
「いやです。とても、私なんか……」
あわてて、顔をそらして、再び部屋の隅へ逃げていったが、それでも、興味があるらしく、私達三人の様子を、じっと眺めている。
「素直に名前を言ったら、許してやるぞ、陽子。ここの名前を言わないか」
私は白丘に足の裏をのせて、ペタペタと叩

く。足の裏に、ねっとりと粘りつく餅肌だ。

「あああ、剃っていただきましたのは、坂本さまに、あぁーあ、剃って剃っていただきましたのは、そこです」

「そこだけじゃ、わからないじゃないか」

　私は足の拇指と第二趾とで、器用に陽子のお腹や太股の肉を抓る。坂本氏は陽子の左の足を膝の上に乗せながら、足の裏を擽る。

「ううう、うーう、ケモノにして、この私をケモノにして……」

「ケモノにしてほしいだと? 今更なにを言ってるんだ。お前は、この部屋へ入ってきて、素っ裸にされたときから白豚になっているんだぞ。人間の女ではないんだっ」

「私、ケモノになりたい。ケモノになって、二人に、犯されたい……」

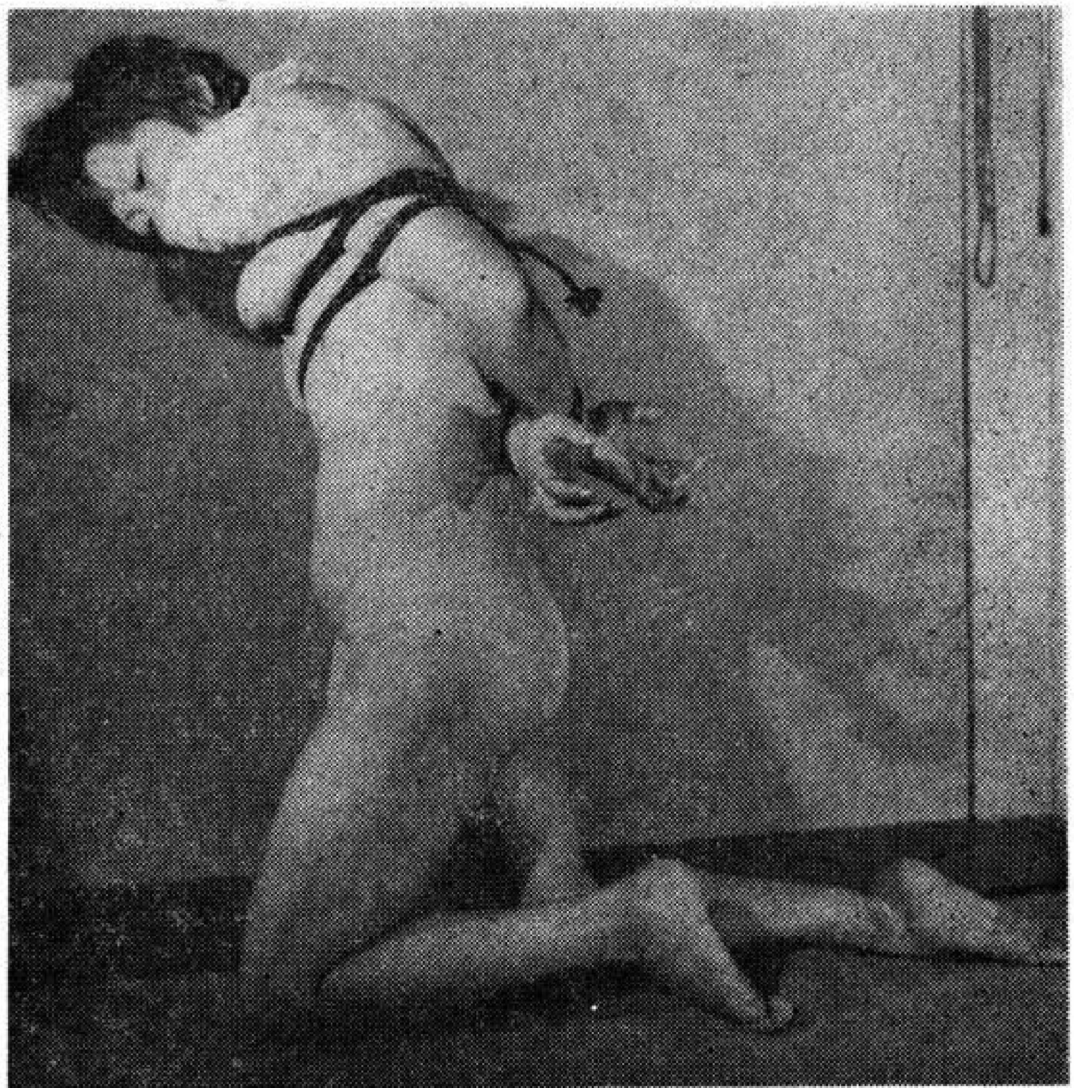
　私は、坂本氏の耳元で、そそのかす。

「ぼつぼつ、陽子の奴、本音を吐いてきましたぜ。あんた、一丁、やらかしますか」

「いや、私なんか、とても。塚本さんから、どうぞ、お先に――」

獲物を前にして、奇妙な譲り合いだ。

「ははん、英子さんの見ている前じゃ、ちょっと具合が悪いですかナ。それじゃ、こうしましょうか。英子さんを裸にして縛り、目隠しをして、部屋の隅へ、ころがしておくんですよ。これで、どうです?」



私は悪魔の囁きを坂本氏に囁く。

「ほう、それはいいですね。やりましょう」

　私たち二人は秋野英子に近づく。

「今度は、お前の番だぞ」

　前で結んでいる浴衣の紐を、ちょいと引っ張って、ほどき、さっと肩を脱がせる。

　その早いこと。うんも、すんもない。

　たちまちにして、後手高手小手に縛り上げてしまう。すでに観念していたのか、秋野英子は素直だった。ただ、白いズロースをめくるときには、「いや、いやっ」と抵抗したがそれも空しい抵抗だった。くるりと玉葱の皮をむくように剝がされてしまった。

　長身のすらりとした若々しい肢体。だが、裸にしてみると、要所要所に適当に肉がついていて見事なプロポーションだ。だが、今は気がせいているので、ゆっくり観察している暇はない。目隠しをして、部屋の隅にころがしておく。

　さて、苗木陽子の方へ戻る。

仰向けになっている陽子は、下敷きになっている後手首が痛いのか、それとも、他の意図があってのことか、白い丘を突きだすように電光にさらして、心持ち両脚を聞き気味にしている。

坂本氏は、その仰向いて目をつむっている陽子の唇に、ぴたりと口を合わせた。

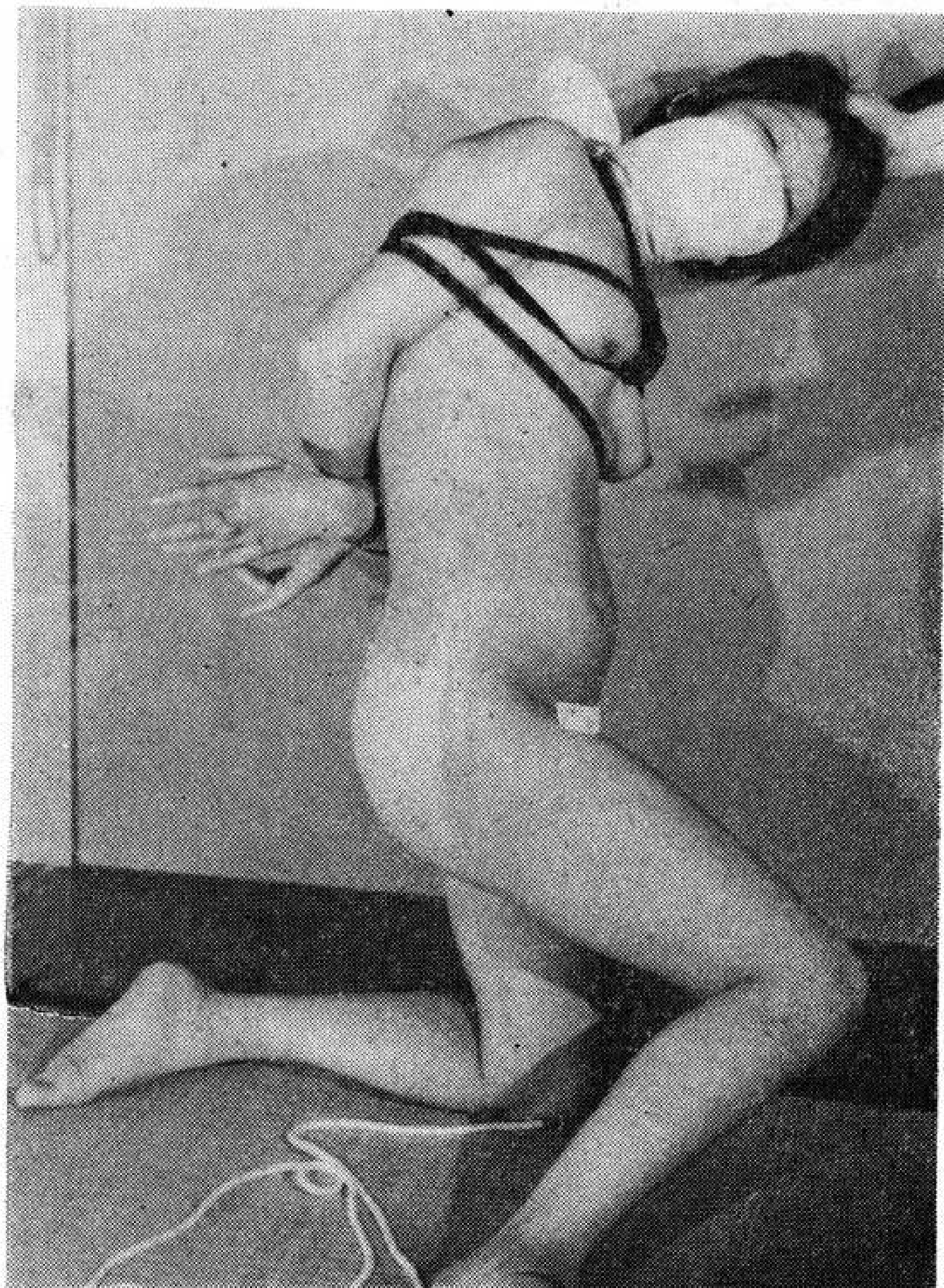
私は自然と陽子の脚の方へ位置した。浴衣を羽織っているとはいっても勿論、パンツをはいているわけでもなく、前はだけだ。

白豚は、上の口も下の口も、同時にふさがれたっていうわけだ。

☆

この部屋で、四人が合同してから、どのくらいの時間が、経っただろうか。

何一つ、打合わせらしいことをやっていなかったのに、SMプレイの研究は、とにかくスムーズに進行している。



明日の正午まで、食事をする時間を除いても、たっぷりとプレイをする時間はある。あわてることはないのだ。

ゆっくりと、そして、十二分に楽しむことだ。そうだ、嘔吐(へど)が出るほどに――。

私は、縛られてころがされている秋野英子の方へ視線をやった。

目隠しはされていても、耳は完全に聞えている筈だ。陰微な部屋の物音が、逐一、彼女の耳にも入っている筈だ。それかあらぬか、全身が、もぞもぞと動いている。

陽子に対する今日の先鞭をつけた私だ。

さっと、身を引いて、坂本氏に交替を告げる。そして、そのまま、自分自身は、陽子の上の口へと向う。

なんたるハレンチ、そして、なんたる華麗なるSMプレイであろうか。私が先鞭をつけたことで坂本氏は遠慮せずに、苗木陽子に向うことが出来たのであろうか。

だが――。

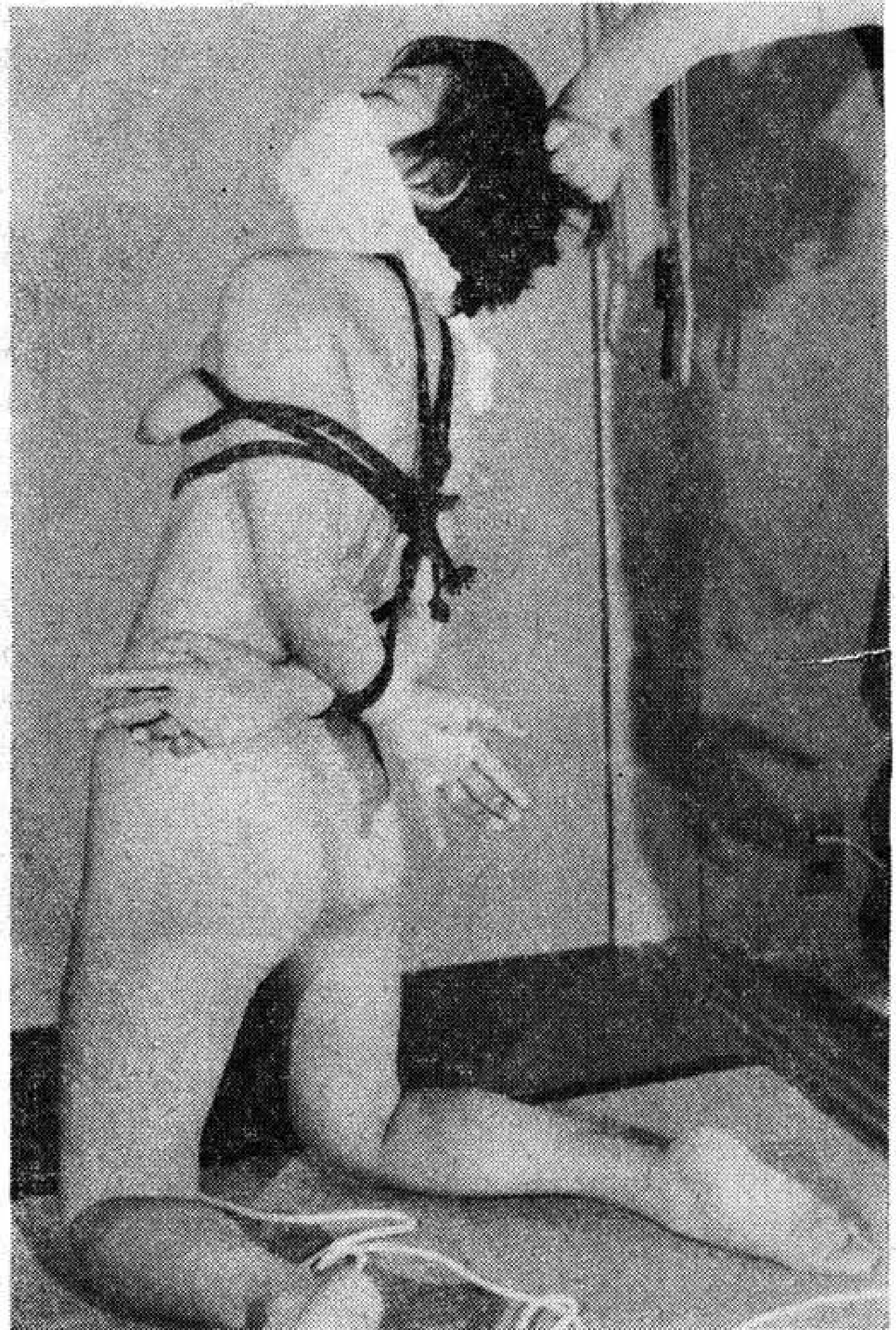
案外に彼は早かった。

さっと身をひるがえすと手を差し伸べていた。

淫らな彼の指だった。

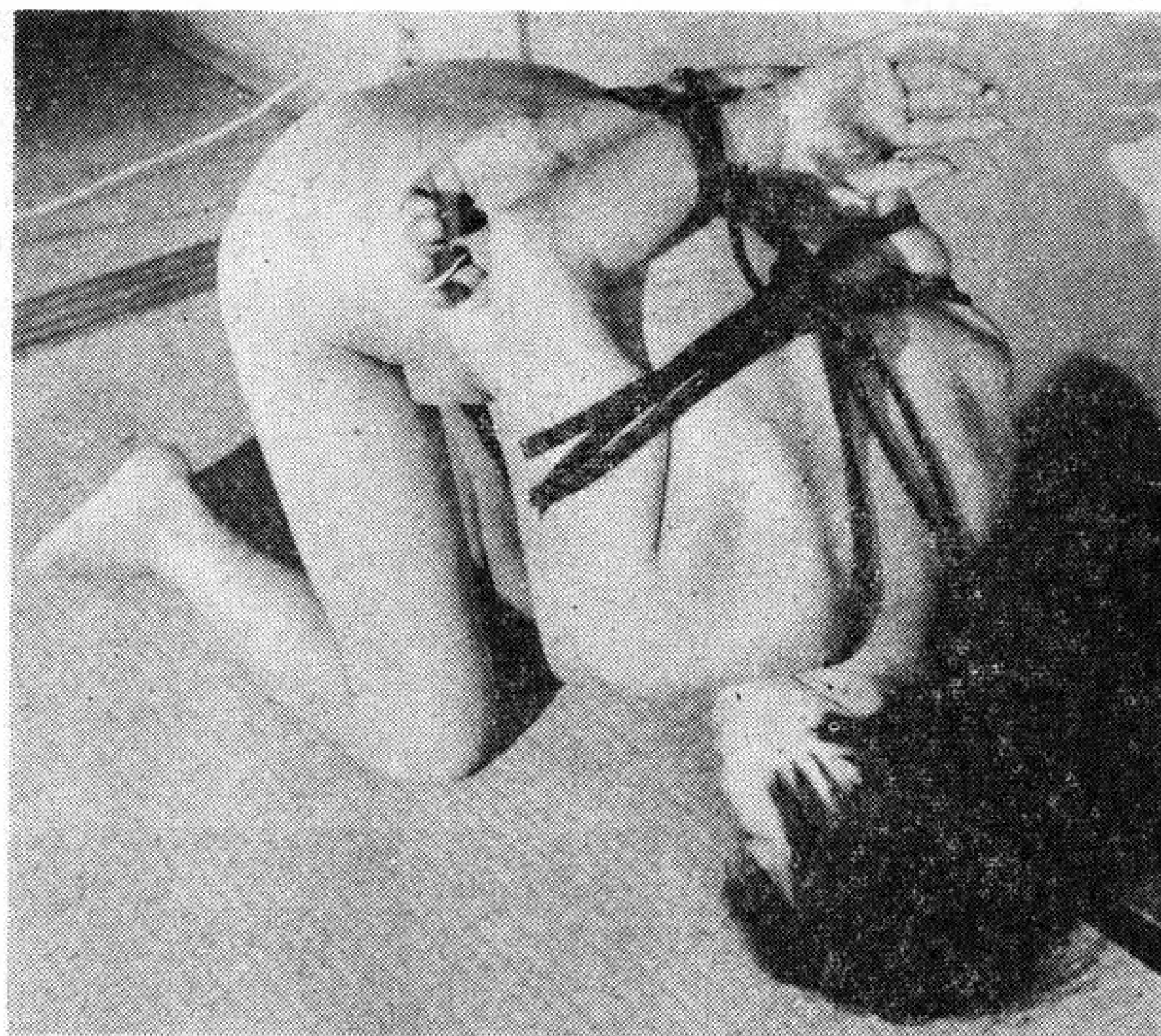
私は陽子の上の口を、指ならぬもので受け持ち彼の指は、下の二口を受

け持った。
執拗で、そして、なお執拗だった。
私は、この光景を写真に撮りたかった。
だが一面、今のポジションを離れ難かったのも事実だった。
二者択一を迫られた私は、やはり、カメラを持たざるを得なかった。
苗木陽子の、のけぞった恍惚の表情にピントを合わせてシャッターを切った。
私が腰をあげたので、陽子の上の口から、凄い叫声が洩れた。坂本氏が、どんな責めを加えているのか、彼女の乱れようは、ただならぬものがあった。
隣室（といっても、坂本氏と英子の部屋なのだが）へ聞えるほどの大きな声で、陽子の嬌声が絶え間なく洩れている。
英子の耳にも、その声は入っている。彼女は、それをなんと聞いているだろうか。
この私でさえも、身体中が、むずむずしてきて、とてもたまらないのだ。
坂本氏の指責めの、なんと巧みなことよ。
それは、全く淫ら指だ。
淫らすぎる巧みな指だった。
私は、思わず知らず、カメラを置いて、眉をひそめた陽子の顔を覗き込む。



額は、汗びっしょりだ。
きゅっとつぐんだ口。きっと、思いっきり歯を噛みしめているのだろう。
鼻からは、この強烈きわまりない責めを、必死になって耐えようとする荒い息づかいが洩れている。
身を乗りだすようにして、依然として執拗に続く坂本信三のフインガー責め——。
やがて、彼女に山がきた。
その激しいケモノのような叫喚。
全く、それは、責めにすべてを捧げて悔いないイケニエ（犠牲）だ。犠牲の文字こそ、いずれもケダモノ篇なのだ。
その乱れようの素晴しいこと。
目を瞠るばかりだ。
身体中の血という血が沸きたって、外へ向

って噴き出てしまいそうだ。
一つ。
私は数えた。
一つだな。
坂本信三も念を押した。

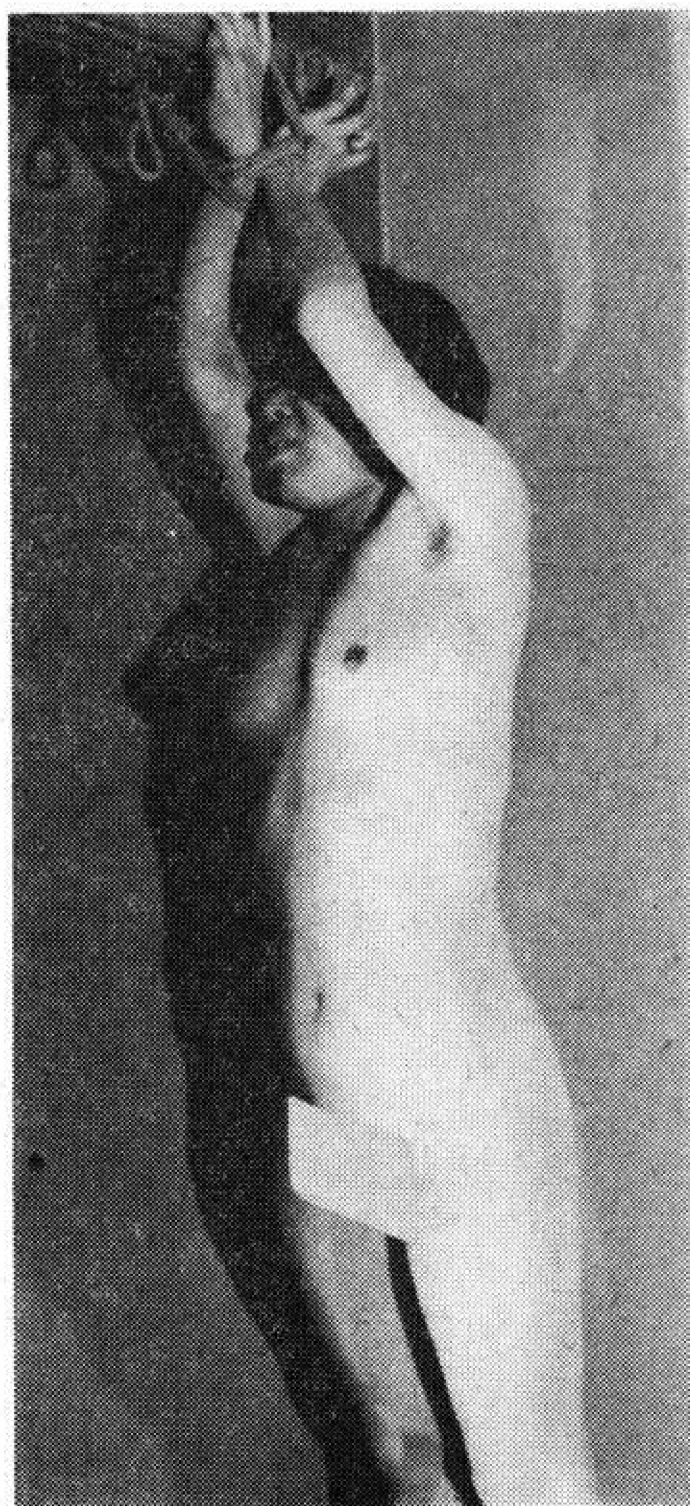


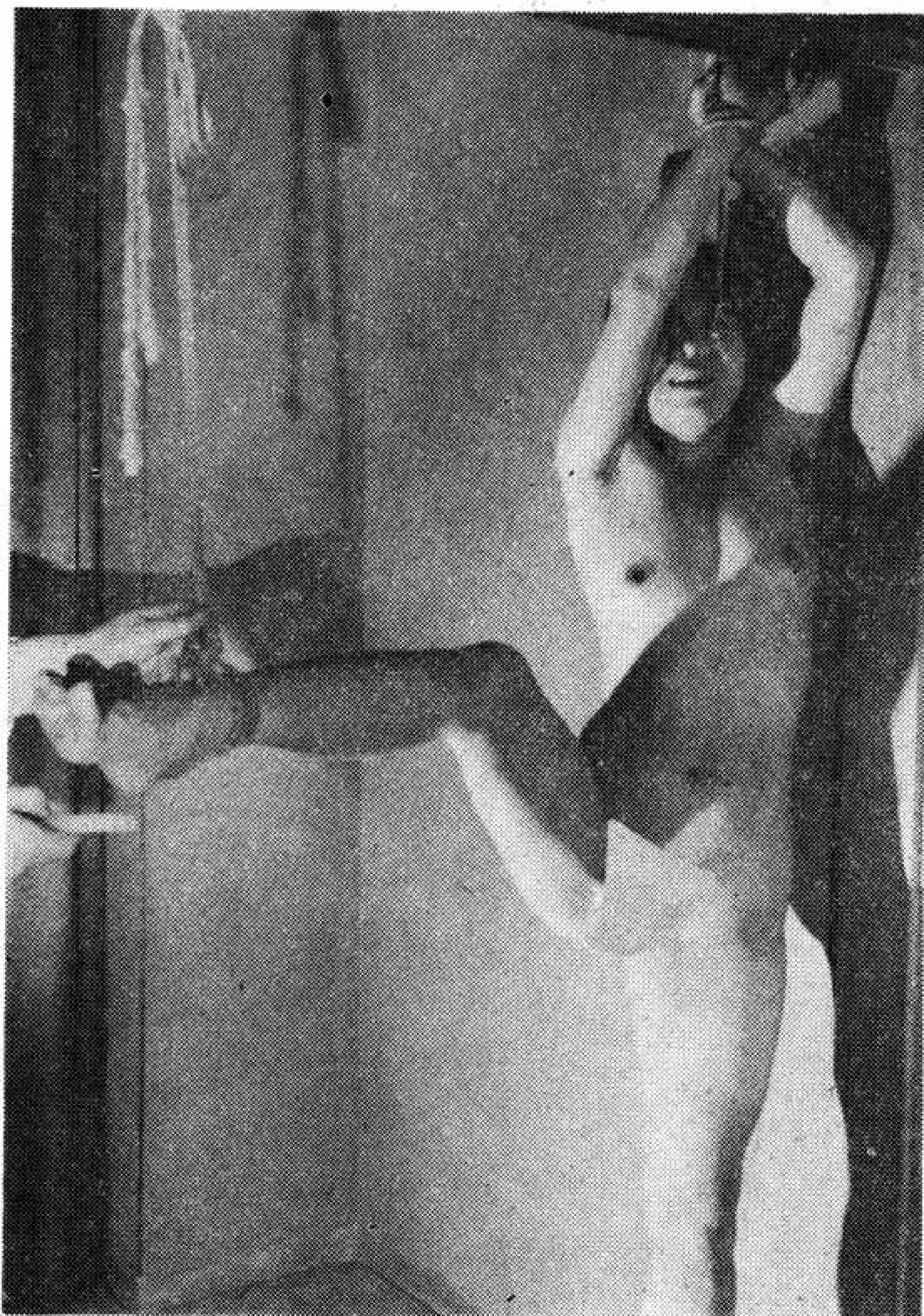
依然として、巧みで強烈な指責めは休みなく続いている。息をつくということは絶対に許さない密着した粘っこい責めだ。
第二回目の山が、やがて来た。
凄い形相が、それを示した。
二つ。
二つだな。
私はカメラを構えてシャッターを押す。
そのときの表情は、とても素晴しい。
女性の最も美しい表情は責めに悶えた恍惚の境地にある顔だ。感極まったときの女性の表情こそ、たとえようもなく美しい瞬間なのだ。
あの優雅で上品だった着物姿の苗木陽子が一皮むけば、こんなハレンチなケダモノになり下ってしまうのだ。
三つ、……四つ、……五つ。
淫らな指は、どうやら、白豚の大好きなアヌスへも……いるらしいのだ。
巧みなテクニック。
六つ、七つ、……八つ。
熱気が部屋中に、むんむんと満ち漂う。
九つ、十、十一……。
私は、たまらなくなって、苗木陽子の口を全く手を使わずに、ふさいでしまった。
陽子にとっては、まさに三所責めだ。
強靱で、あくなき耐久力。そうだ、ケダモノ並みのタフさを持つ、この女を責めるのには、こうでもしなければ参らないのだ。
私の臀の下で、もがき、呻き、必死になって最後のあがきを続ける陽子のみじめな有様が、肌を通して手にとるように分る。
意地の悪い責めだ。
窒息責めの一種だ。
猿轡によって呼吸を制限すると、マゾ女性の肉体の一部が、どのように充血するかということは研究しておいてもよいだろう。
これも、一種の猿轡といってよかった。
私は中腰のまま、縛られて畳の上にころがされている秋野英子の方を見た。
何かに耐えきれないといった風で、寝返りを打っている。私は、つと立ちあがって、秋

野英子に近寄り、その痛々しく縄目の掛かった裸身を抱き起した。じっと縛られて、ころがされていたままだというのに、胸は早鐘のような鼓動だ。
苗木陽子の身も世もあらぬ悶えと、悲鳴とは依然として続いている。
ああ、なんという凄惨な責めだろう。
私は英子の耳元で囁いた。
「ホラ、聞えるだろう？　君も、次は、あんなにして、責められるのだよ」
「いやん、いやん」
英子は私の腕の中で嫌々をする。
見れば、苗木陽子の縄目でくびれて、小山のように盛り上った胸が激しい蠕動に、波打っている。
十二、十三……そして、十四回。
苗木陽子の激しい山が、十五回を数えたとき、坂本氏は、がばっと唇を合わせていた。
熱くて、長い抱擁だった。
私もまた、秋野英子の裸身を、力いっぱい抱きしめていた。
唇に、青い木の実の匂いがした。
なんという坂本信三の巧妙なフィンガーテクニックであろうか。指だけで——、そう、淫らともいうべき指が、陽子の最大のウイークポイントであるアヌスに対して、どのようなアタックを加えたのであろうか。
これはまた、SMプレイの中のフインガープレイについての最大の課題である。
あとになって、苗木陽子が、「あんな気持のよかったことはない」と述懐していたのを見ると、坂本氏のテクニックも相当なものである。私も教えられることが多かった。

☆

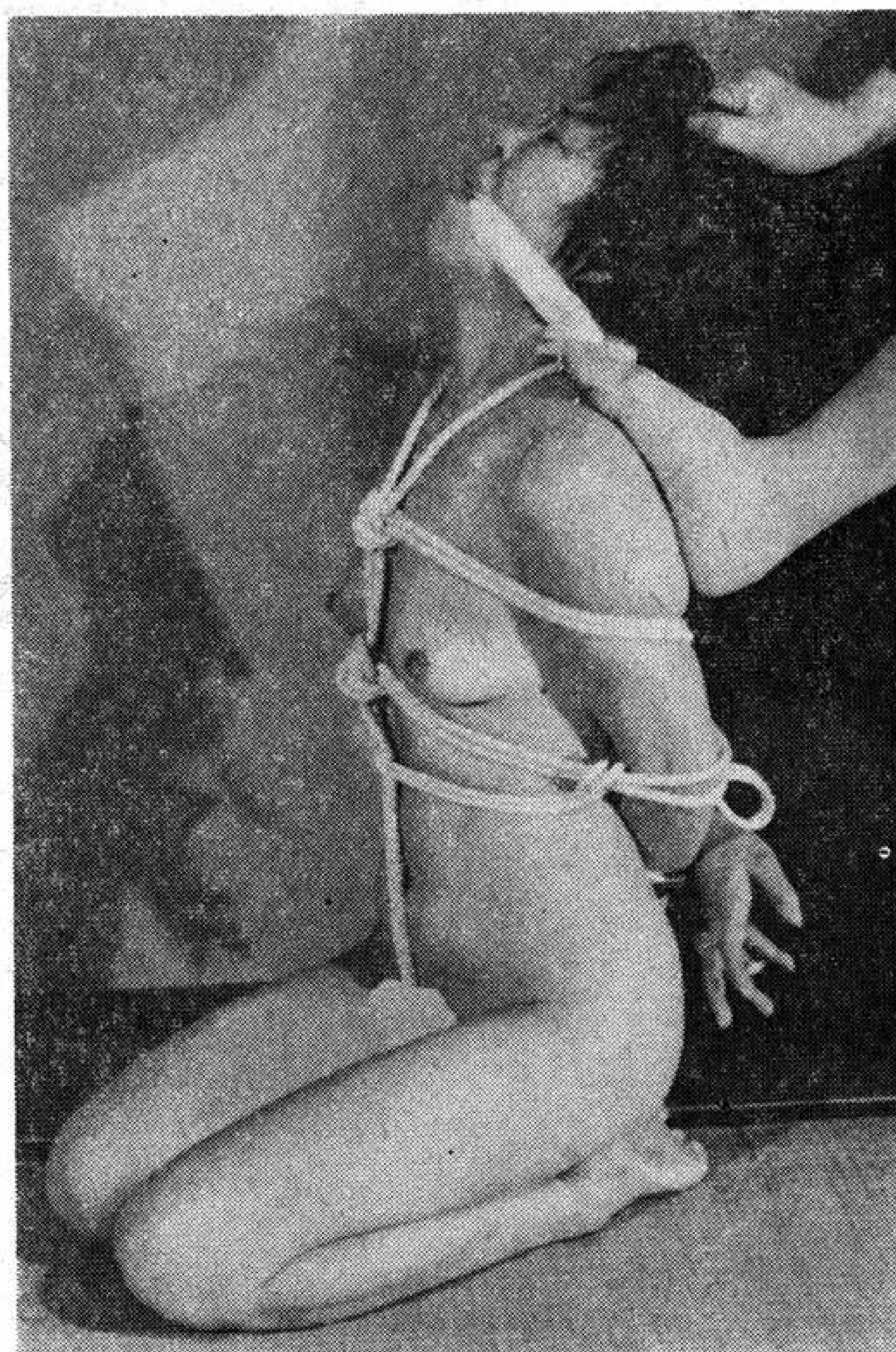
一旦セットしたライティングの位置を変更するのは、いささか臆劫だった。
今まで大活躍した苗木陽子を一先ず休ませて、次には待機している秋野英子を責めることにした。といって、陽子の縄を解いたわけではない。縛ったままで、そのまま、畳の上にころがしておいたのだ。
ついさっき、陽子が片足挙げのポーズで、脂汗を流して悶え、呻き続けていた鴨居の下へ秋野英子をつれてきて、後手縛りの縄尻を鴨居へつないだ。
すらりとした長身の全裸を晒して、英子は恥じらいの余り、両膝を合わせて必死に前をかくそうとしながら、腰をかがめている。
坂本氏は背後から英子の髪を掴んで顔を引き起し、正面を向けさせる。私は彼女の素っ裸の肢体がファインダーいっぱいに納まるよ

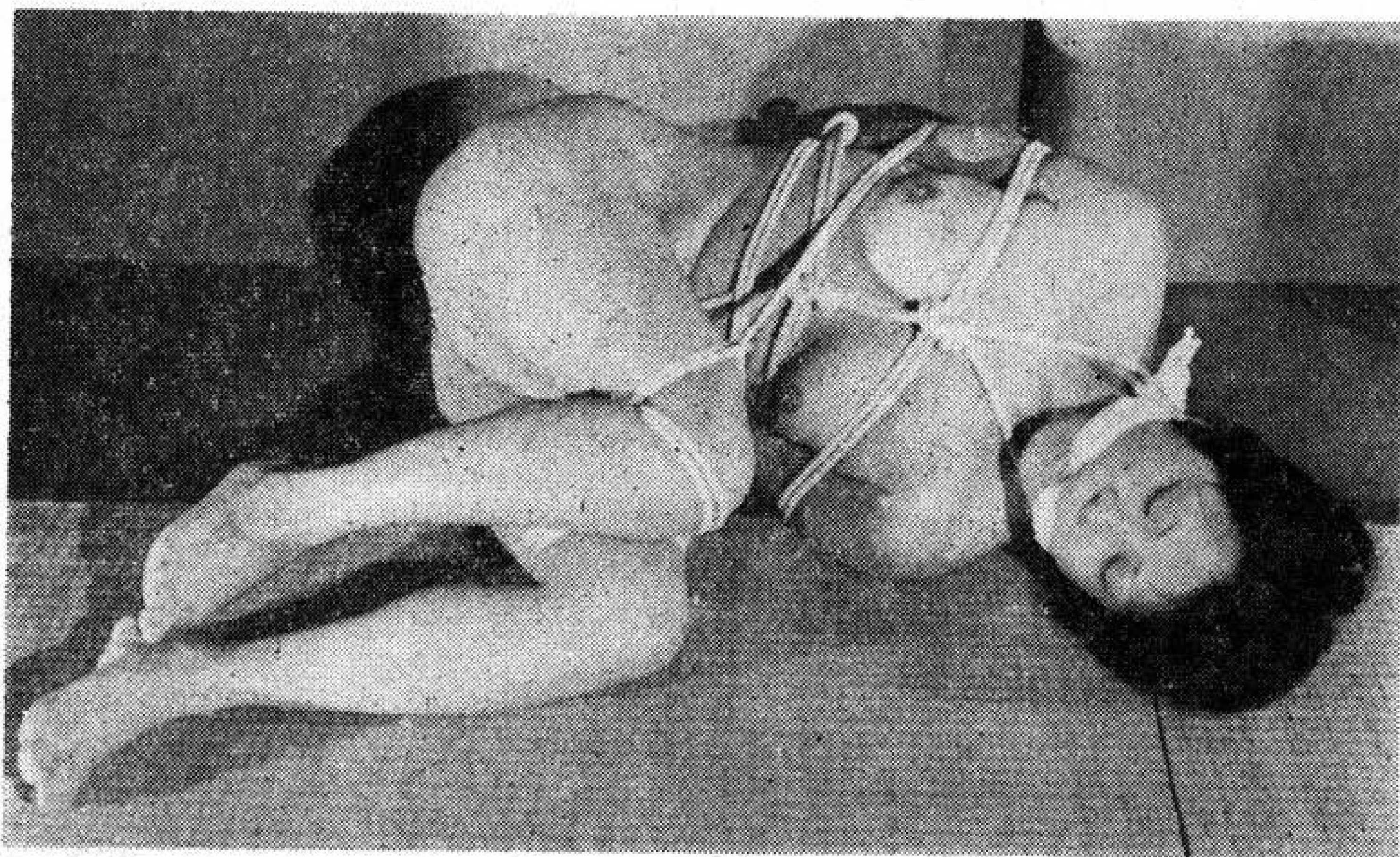




う後退しながら、蛇腹をくりだしてピントを合わせる。
ああ、なんという可憐きわまりない眺めであろうか。そこには、恥じらいに身をもむようにくねらす若い女の全裸があった。
「初めての人に見られるの、恥かしい」
「まだ、興奮してないからなあ。そのうち、我を忘れるようになるさ。見られるだけじゃなしに……」
そこまで言って、坂本氏は自分の口で、がばと英子の口をふさいだ。どうやら彼は、キッスがお好きなようだ。
長い接吻だった。
お互いに、唇を相手の唇に喰い込ませるようにして、粘膜と粘膜とが、息もつかせずにからみ合っている。
私はカメラを構えた。だが、依然として、二人の激しい接吻は続いていた。
そして、坂本氏の淫らな指が、そうだ、ほん、ついさっき、陽子の二カ所を、あくことなく責めたて泣かせた、あの片手の指が、するすると、さがって、私の目の前で妖しく動いているのだ。
私は幾度となくシャッターを切った。
英子の長い脚が、縄のように、ねじれているのが、なまめかしい。
長いキッスが、やっと終った。
見ている私さえ、ほっとした瞬間である。
坂本氏の微妙に動く指は、依然として、英子の肌を離れてはいない。
白かった英子の肌が、次第次第にピンク色に変り、汗ばみながら紅潮してくるのが、眺めている私にも、よくわかった。
「これで少しは燃えてきたようです。塚本さん、一つ、検査してやってくれますか」
「よしきた、OK」
とばかり、私は英子の片足に縄を通した。
さっき、同じ場所で、苗木陽子にやったと同じ責め方だ。ライトの位置を変えるのが面倒

だからと、不精を考えたのだから、場所が同じなのは仕方ないとしても、全く、同じ趣向の責めとは我ながら芸がなさすぎる。
そう思えるほど、そのときの私は、一刻も早く、英子の身体を調べたかった。これも、助平根性のしからしむるところだろう。
閉めきった、余り広くない部屋に、男女四人の熱気と、汗と脂の匂いが充満している。
私は英子の差し上げさせた太股の下にかがみ込んで、手を差しのべた。
「うっ、………」
一瞬、英子は、何かを叫ぼうとした。だがその口は、坂本氏の唇にて、いち早く、ぴたっと、ふさがれていた。
毛深いというのでもなく、さりとて、特別に薄いというのでもなかった。
唇の猿ぐつわを噛まされている英子は一言も、叫ぶことも呻くことも、出来ない。だがこの燃えようは、なんとしたことだ。
目の前に立っている太股の筋肉が、ピクッピクッと、かすかにケイレンしている。差し出した脚なんか、まさに大揺れだ。
何度、しげしげと眺めてみても、興味新たな色艶と、そして触感だ。
こうした、ざわめきが、縛られたままとはいえ、目も耳も口も開いたままの苗木陽子に通じない筈はない。畳の上を芋虫のように這いころがってきた。
「ねえ、私にも、見せてよ」
「そりゃ、お望みとあれば、とっくりと見せてやってもいいが、その縄は解かないよ。縄を解いたら、どんなことになるか、僕にも目信がないのでね。白豚は、縛られたままで、そこから見物してることだな」
私は指をタオルで拭いてからカメラを持って、陽子の身体の上に腰を下してピントを合わす。陽子の唇と舌とが、私の体に、つと伸びてくる。
いつの間にやら私も素っ裸になっていた。
四人の中で、浴衣らしいものを肩にひっかけているのは坂本氏一人だけだ。





陽子の舌の奉仕を受けながら、私は面白半分のように、シャッターを切っていた。

坂本氏が唇を離しても、も早や英子は何も叫ばなかった。いや、叫べなくなっていた。ただ、荒い息だけが、彼女の口と鼻から激しく洩れていた。

そんな秋野英子の肢体は、なまめかしく、たまらない魅力があった。

そこで私はカメラを捨てて鴨居に縛られている英子の方へ向い、坂本氏は畳の上に寝ころがっている陽子に近づいた。

選手交替である。

私は全裸のまま、手拭いだけを首に巻いている。手拭い一本は、この際、手近に是非必要なのだ。それにしても、女性と違って、男の裸姿というものは、我ながら余り見よいものだとは思わない。まあ、裸でつき合うという気持が、こうした体当り的なSMプレイの中に、自然と持ち込まれたといってよい。

肩から浴衣をひっかけている坂本氏にしても、紐で結んでいるわけでもなく、また、勿論、パンツもはいていない。

彼が苗木陽子に対して、再び、どのような執拗な責めを加えているのか、私の方からはわからなかった。ただ、切なさにたえきれないような陽子の嬌声だけが、ひっきりなしに私の耳に入ってきていた。

私は秋野英子の全身に、ソフトタッチの軽い操り責めを加えつつ、その部分部分によって違う反応を楽しんだ。

女の身体というものは、こうして、素っ裸にして、近々と眺めてみると、一人一人、違っているものだ。そして、こんな責めに対しての反応も、また一人一人、違うのだ。

お臍の格好一つにしたって、皆それぞれ違っているが、脇腹をツーと、指の先で触るか触らないぐらいに、操ってみたときの、お臍と、お臍の周辺の皮膚の動きといったら、みんな微妙に違っている。

皮下脂肪の余り沈潜していそうにない若い女の下腹部だ。臍窩が、その中央に、ちんまりと鎮座ましましている。

いたぶってみたいような可愛いいお臍だ。

私は、英子のあらゆる身体の部分に視線をやるばかりでなく、指をねっとりと這わして

ゆく。汗ばんで、そして女の脂で、ねとねとに、ねばった指である。

その指が、伸ばしきった英子の足の裏に達したとき、耐えに耐えていた彼女の口から、突然、びっくりするような大きな声が「あぁっ、よしてぇ」と、しぼり出された。

敏感な足の裏だ。

私の目で、全身を舐めるように眺められ、そして執拗な指の跳梁するにまかせていた彼女も、遂にたまらなくなったのだろう。

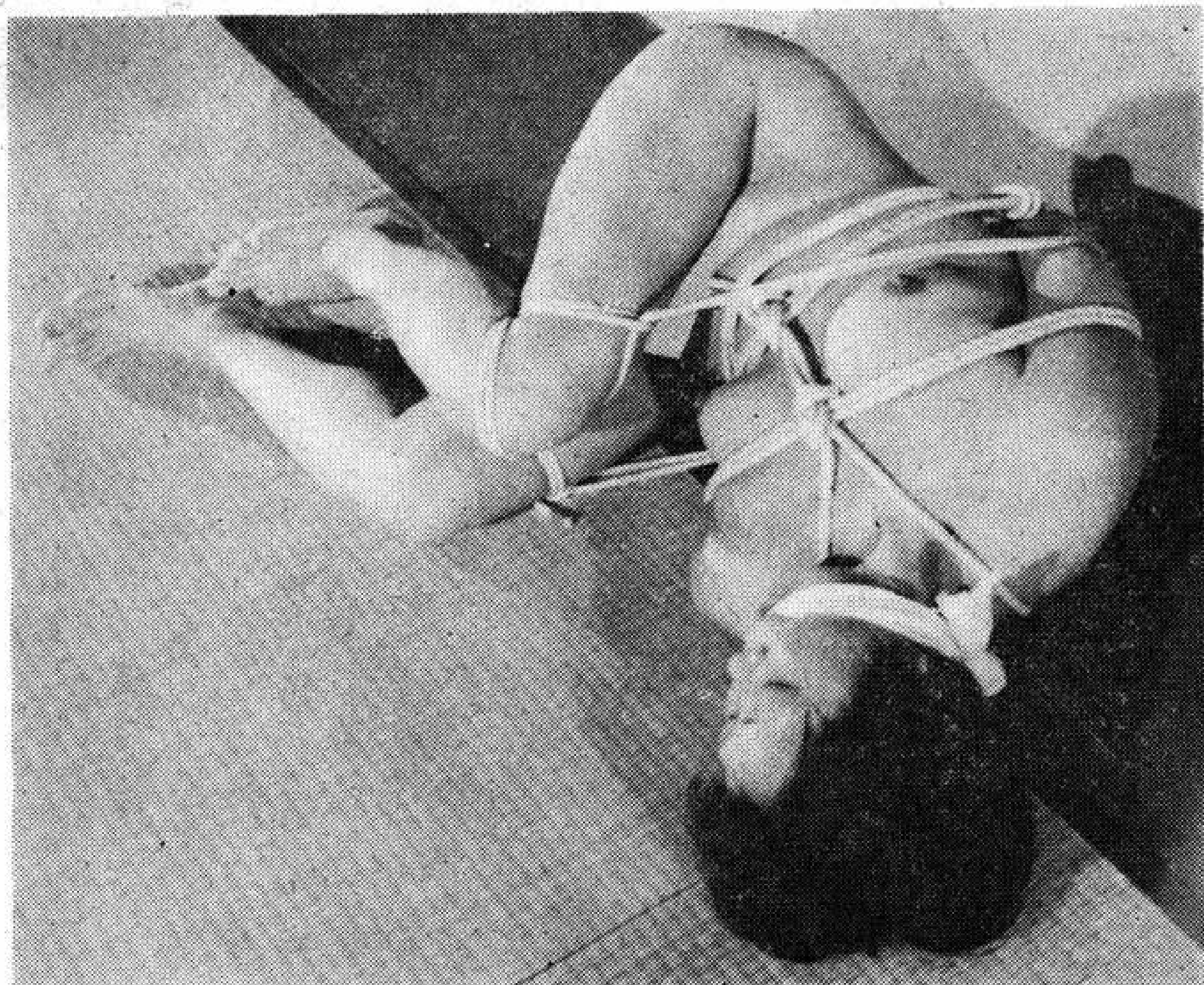
それを機会に、私は彼女の口に唇の猿ぐつわを噛まし、そして痩せ気味の裸身を力一杯、かき抱いた。

両腕と胸の中で、ビクッビクッと体をふるわすように、ふるえている英子――。

両手はきかず、一本足で立たされている彼女は、私にされるがままになっている。

縛られて身動きが出来ないということ。そして、責め手の思うがままにされているということ。それが、責められる女にとって一番、幸福なときなのだろうか。

身体のあらゆる個所が見られ、かつ思いのままに自由にされているということに、燃え上るような快感があるに違いない。



これがSMプレイというものなのか。

Sは支配することに喜びを感じ、Mは完全に支配されることに喜びを感ずる――。

私と秋野英子の二人は立ったままだ。

坂本信三氏と苗木陽子は畳の上にころがったままだ。

この奇妙な二組のカップルは、同じ部屋の中で、お互いに相手の中に没入して、忘我の境地をさまよっていた。といっても、私は英子の観察と更に目の下に眺めることの出来る一組のSとM、否。ケモノとケモノの葛藤を静かに観察できる余裕を持っていた。

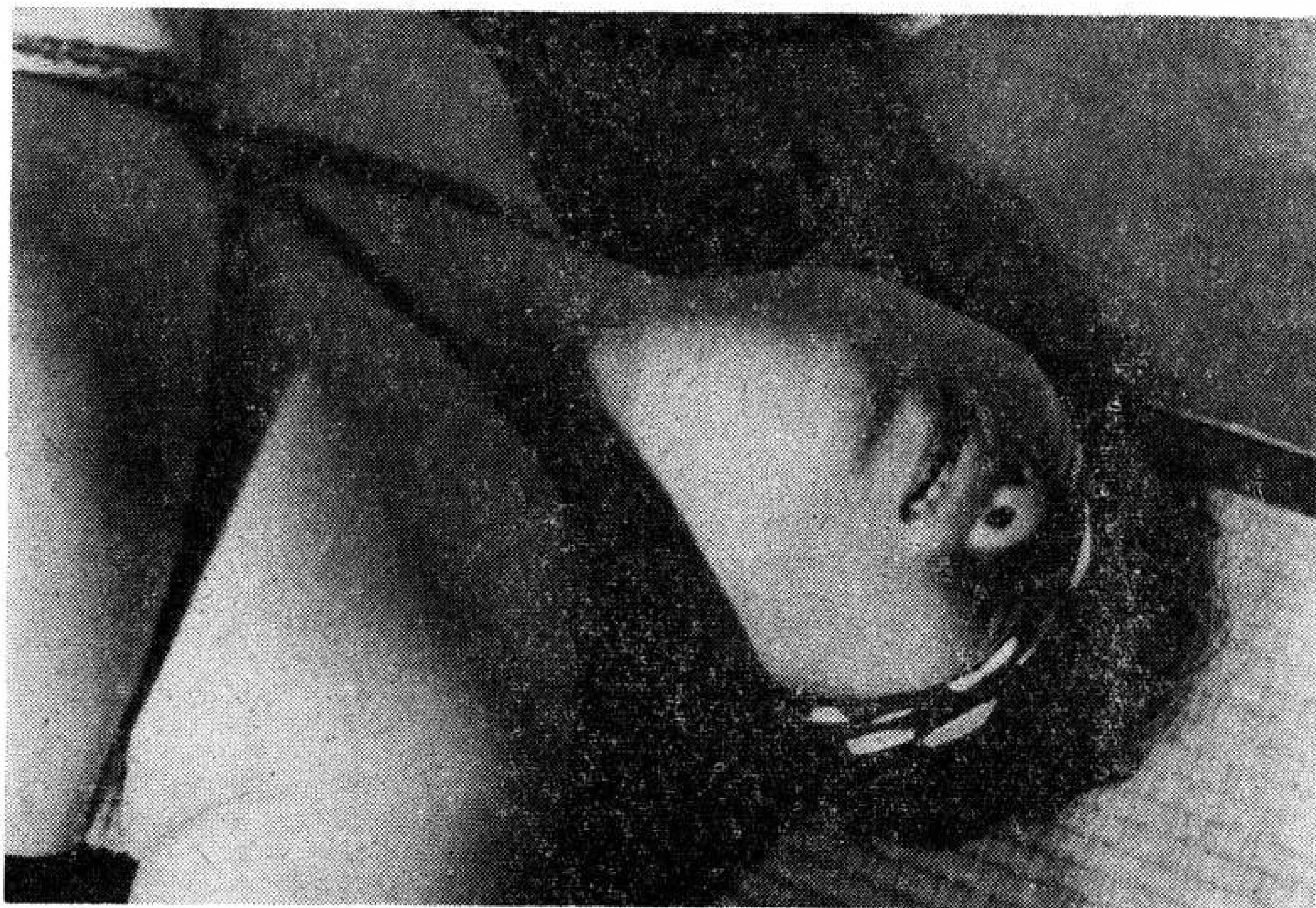
秋野英子は、自分以外の天地に、も早、何物も存在しないというくらいに、燃えに燃え上ってしまっていた。その点、苗木陽子にしても同じことだろう。とすれば、覚めているのは、ルポの文章を書く役目をおおせつかっている私だけなのか。

これは、これは、全く損な役回りになった



ものだ。
南加津子は、その投稿した文章（出産後の私のことなど〔一月号〕という通信）の中で『塚本さんは、私のことを「犯さなくては燃えない女」と、本に書いています。私は正直なところ、塚本さんは嫌いです。嫌いというよりも、こわいのです。私となにしたあとでも、ふっと気づくと、冷静な目で、じっと私を見ているのです。今笑ったあとなのに……と思うと、ゾッとすることがあります。冷たい、冷たい目。私の体ばかりか、心の奥底まで、射とおすような鋭い目。でも、そんな目や態度に、少しばかり興味はあります。』と書いている。

私は奇ク一月号で、この南加津子の投稿文を読んで、彼女じゃないが、冷水を浴びせかけられたように、それこそ、ぞっとした。
自分の一番醜い面、いやな断面を、それこそ、ずばりと白日のもとに、さらけだされたからだ。
南加津子の、まさに刃のような鋭い観察眼には、私は、そら怖ろしくなった。
私は南加津子と初対面のときの様子を、ルポで詳しく書いたが、霊感のようにビリッと自分の身に受けた彼女の波長を、私は逆に圧倒されそうな気魄で受取っていた。
それを私が誌上で文章にしてしまうと、南加津子に相当なショックを与えたのだと思うのだ。ガタガタとふるえていた彼女の全身が私には痛いように感じられた。それを忠実に文字の羅列で表現しただけであったのだが彼女にとっては、私は冷徹無惨な傍観者であったわけだ。
私は南加津子と、プレイしている間は、自分も泥まみれになって、その境地に熱中している筈だった。しかし、心と体の一部は覚めていて、常に冷静な観察者になっていたということも彼女の指摘の通りだろう。
私は、今の場合——。



自分が秋野英子とプレイしていながら一方の目で坂本信三と苗木陽子の方へ観察眼を働かしているという、いやらしさを自覚した。

私は目を、つむった。

もう見まいと思った。聞くまいと思った。

女の体というものは、まことに、抱擁力のあるものだった。体ばかりか男の心までもすっかり押し包んで放さない執念深さを持っていた。

素直で、控え目な態度なので、派手さはないのだが、山の泉が、ちょろちょろ流れでるような絶え間のない情熱がほかほか燃え上っているのが私の肌に、じんわりと伝ってくるのだ。

私は鴨居に繋いであった縄を解いた。

英子を、かき抱いたまま静かに、壁ぎわの畳の上に横になった。

我を忘れて狂ったように燃えあがらせた女体を、冷ややかに眺めている自分の姿を思うと、少し無惨な気がする。

でも、男という者は、異性をそのように狂わせておいて楽しむというところに、本質的な歓びを感ずる動物ではないのだろうか。

私もまた、秋野英子を、そうした状態にすべく、努力をした。

女性という動物もまた、一旦、そうした狂乱状態にならせてしまったら、それから後、どのような淫らなポーズや行為を命じても、易々として、本心から喜んで従うものだ。

いや、進んで、自ら、そうなりたいと懇願するくらいの態度を示すのは、まさに驚くほどのものだ。

私は、秋野英子に、いろいろなポーズをとるように命じた。そして、彼女の縛られている肉体の各部に焦点を合わして、カメラのシャッターを切った。

自分の裸身のあらゆる部分がレンズで狙われているということに、彼女は、どのような感情を抱いているのだろうか。

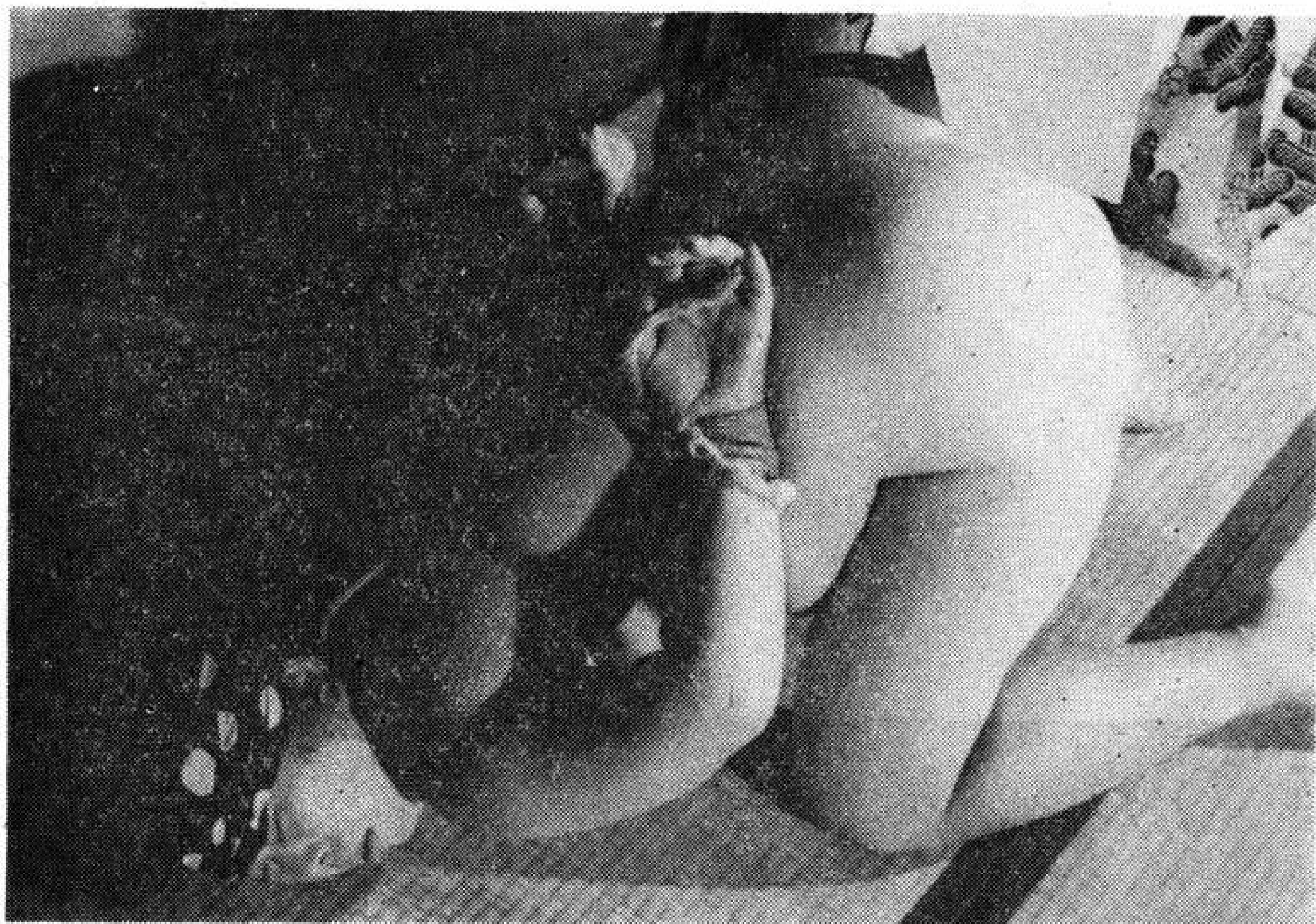
頭を畳の上に据え、お尻を高く揚げるように命じても、英子は喜々として応じた。むしろ、そうされたい風さえあった。

私は背後へ回って、引きしまった臀部を観察した。坂本氏の飼育効果を確かめるかのように、私の目は自然と、アヌスとその下の部分に釘づけとなった。
深窓の麗人だ。
本来、深く秘して、隠しておくべき個所をこのように皎々たるライトのもとに晒すということは、なんという倒錯だろうか。
呪縛——。
そうだ、妖しい縄は、彼女の心と体とを、ガンジガラメに縛って放さないのだ。
恥かしくて、恥かしくて、とても嫌なのに身動きできぬように縛られているから、仕方がないのか。
だが、英子のこのポーズは、どう見ても、自ら喜んで、あらわに示している態度だ。
とはいっても、もし彼女を縛っていなかったとしたら、たちまち、逃げ去ってしまっていることだろう。
目で見る。
そして、手で触ってみる。
その反応を楽しむのも、また男心だ。
写真を撮るのは、いやになる。
カメラを捨てると、心がなごんだ。
冷徹なルポライターの目をふさいで、ラフなSMプレイヤーに堕してしまいたい。
坂本信三は、苗木陽子の肉体を、いや、白豚の腐肉を、むさぼっている。
SとMとのお互いが、最大限に満足し合っている、それは美しい光景だった。
二組のカップルは、相互に啓発されながら楽しいひとときを過していた。

☆

それから、私達四人は、エレベーターで地下のグリルへ降りていた。
澄まし顔すりゃ、いずれも紳士と淑女だった。さっきの狂態は、どこ吹く風といった豹変ぶりは、まことに見事だった。
食事の間中、SMのことや、プレイのこと



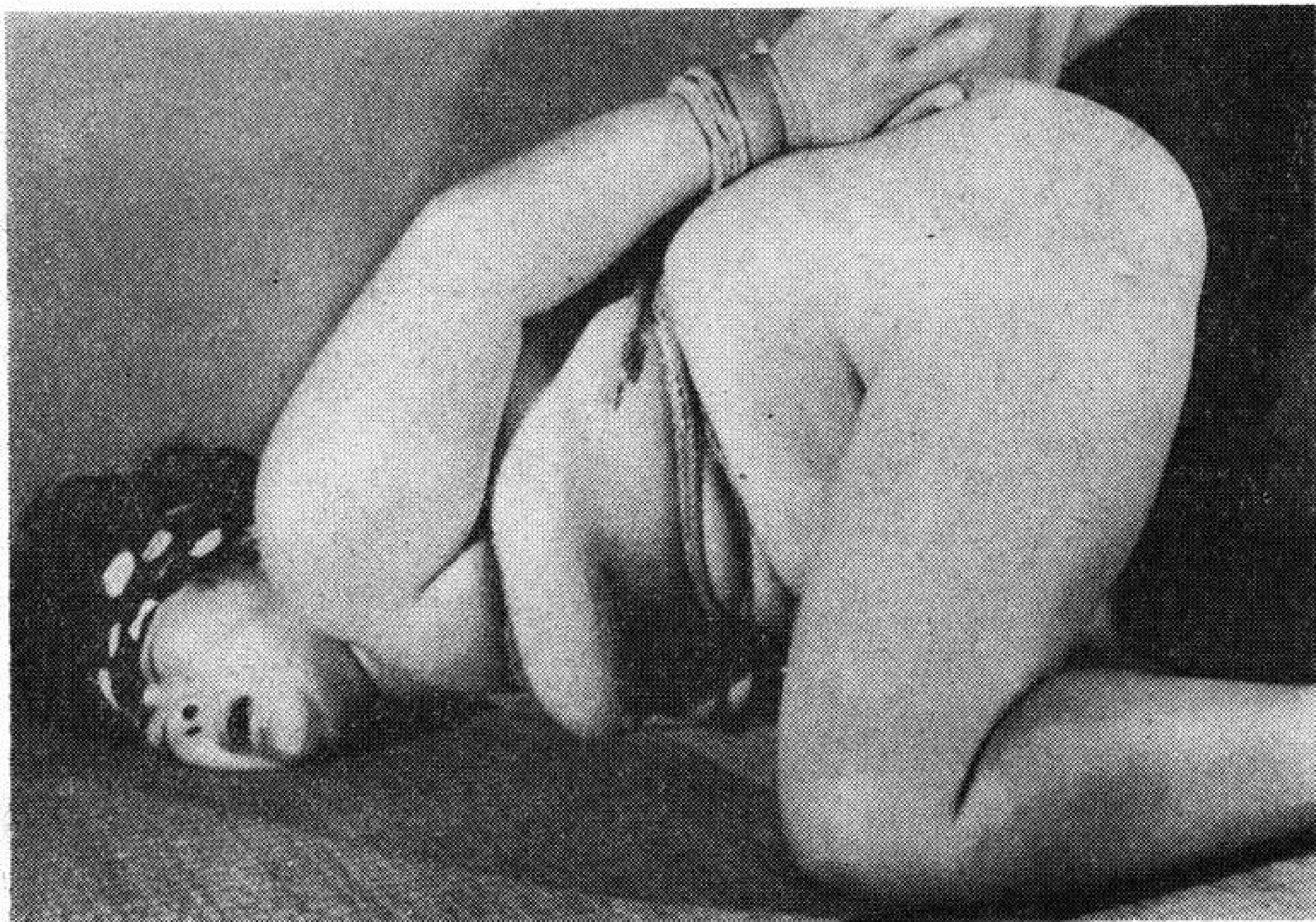


については少しも話題にならなかった。
といってプライベートなことについて話し合うことはなかった。私は坂本信三や秋野英子の私生活に関しての興味は、いささかもなかったし、聞く耳も持たなかった。
話題は専ら石油危機のこと、そして、トイレットペーや砂糖、洗剤の品不足と値上りのことに集中した。ショッピング・コーナーを一巡してから坂本氏は英子とボールへ行き、私達はバーへ行った。
部屋へ戻ると、まさに落花狼藉、足の踏み場もないくらい、縄やコードや、カメラ、ストロボ、責具なんかが散乱していた。
まだ、SMプレイの余熱がムンムンと漂っているようで、たちまち意欲が兆してきた。
打てば響くように、私の気持が苗木陽子にも通じていた。目がキラキラと輝いた。
あれだけ長時間の連続責めにあっていても、いささかも衰えを見せない彼女のスタミナ。そして、私もSMプレイに対する意欲は、ますます燃えさかりこそすれ、減退などする筈はなかった。
いや、むしろ、私にすれば、今までのプレイは、いわば徐走段階といってよかった。本番の責めは、いよいよ、これから本腰を入れてやりたいのだ。
素裸にひんむいて、ひしひしと縄を掛けるこれが苗木陽子に対する責めの準備行動である。ぴっちりと密着させて縄で裸身を縛ることによって、陽子の肉体は、たちまちにして羞恥責めが可能なまでに昂揚した。
「縄で体を縛られると、気持がよくてたまらない」と言っている苗木陽子のことである。M女性にとって、縄と縛りこそは、最大の催淫剤といってもよいのだ。これは、〝S研〟にとっても重要な研究材料である。
と、そこへ、ドアをノックする音。
坂本氏が来たのかと思って、ドアのロックをはずす。このホテルのユニホームを着た年

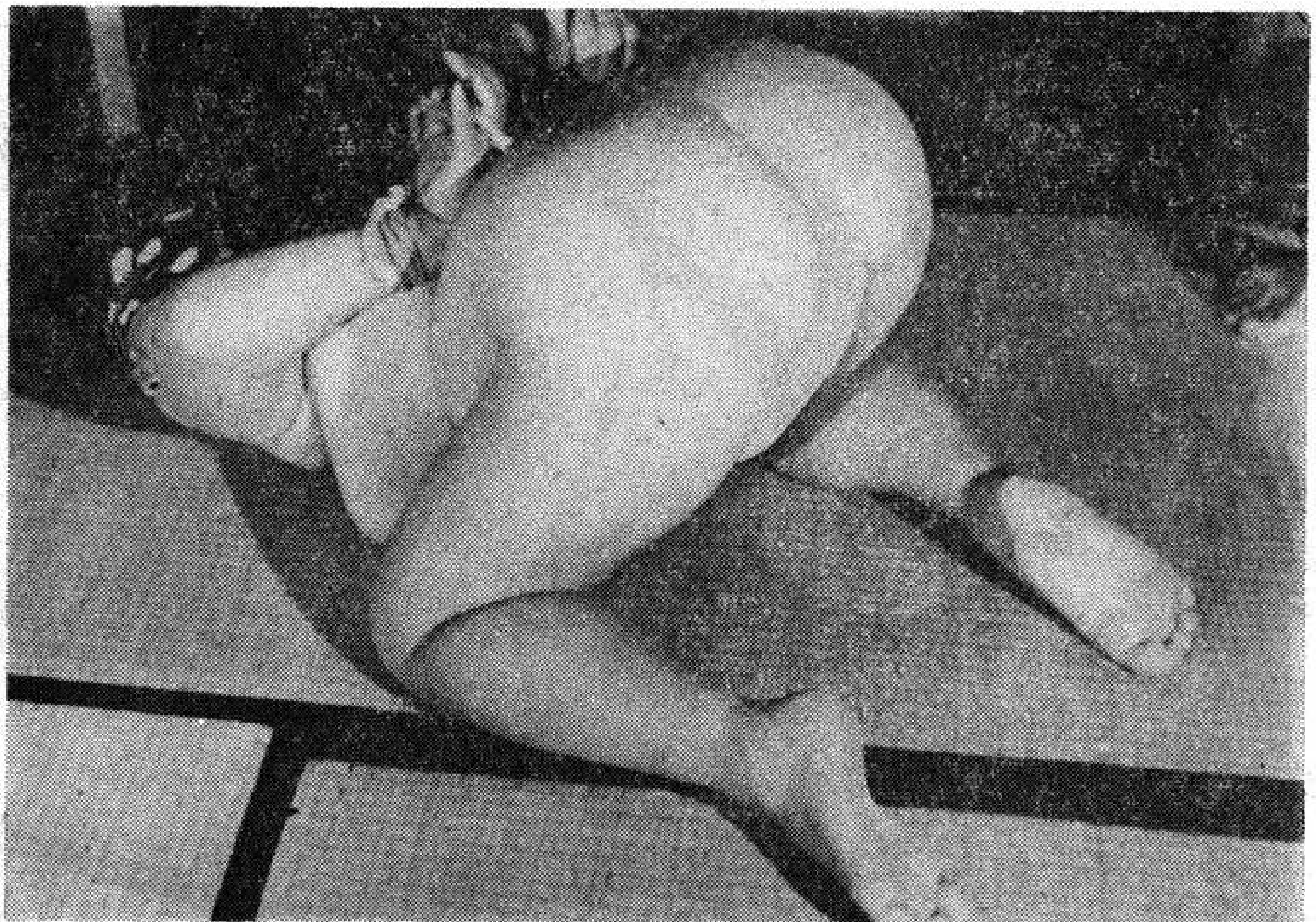
若い女中さんが、二人、顔をのぞかせた。
「お床をとらせて頂きます」
「今ちらかしているから、あとで自分たちで敷きますから結構ですよ」と、断る。
「でも、お部屋のお布団を敷くのは、私達、係の責任になっていますから……」
彼女達は、今にも入ってきそうにする。部屋の中は、ちらかしているばかりか、苗木陽子を素っ裸で縛りあげて、畳の上にころがしたままなのだ。
「自分達で敷きますから、気にしないでもいいですよ。引きとって下さい」
「そうですか、いいんですか?」
彼女達二人は、気の毒そうに引き揚げる。
ドアにロックして部屋に戻り、ベランダ側の障子を閉めた。

目から涙

シーズンオフのウィークデーなのに、この隣り合わせの和室を、やっと予約出来たくらいに、この部屋数、数百をかぞえる観光ホテルも、いたく混んでいた。
実は最初、四人定員の和洋コネクトルームを予約する筈だったのが、どうしても、その部屋がとれずに、別室になってしまったわけだ。廊下を使わずに、ベランダのドアで、お互いに自由に往来出来る部屋がほしかった。
それだと、交互に情報の交換が緊密に出来るのだが今の際、隣室の二人が部屋へ戻っているのやら、まだ帰っていないのやら、さっぱり、わからなかった。
壁を隔てた隣室は至って静かだ。
「陽子。女中さんが、布団を敷くって言ってきたぞ」
「ええ、私、ここで聞いていて、本当に、どうしようかと思いましたわ」
「流石の陽子も、びっくりしたか?」
「ええ、そりゃもう。こんな素っ裸で縛られてるんでしょ。どうすることも出来なくって、プレイの気持がいっぺんにさめてしまいましたわ」



「ふん、それで、今はどうだい?」
「知らない。責めてほしくって、うずうずしてるのに、このままで放っておく気なの?」
「放っておくものか。これから明日の昼ごろまで、こってり、と責め続けてやるぞ。一晩中、寝かさないから、覚悟しておくんだな」
「まあ、嬉しい。一晩ぐらい寝なくたって、私、平気だわ」
「よし、そうときまれば……」
部屋の隅へ自分でころがっていっていた苗木陽子を抱き起して、部屋の真中へ連れてきて、例のケモノのポーズをとらせる。
豊満な臀部を、デンと突き出して膝を立て頬を床につけた尻立ての姿勢だ。
「陽子。これから僕の訊ねることには、正直に答えるんだぞ。答えるのが晩かったりしたら、このムチが物をいうからな」
「はい、正直に、お答えしますから、なんでも、お聞き下さい」
「さっきは、二人の男に責められて、どうだった?」
「はい、とても気持が、ようございました。あんなの、私は始めて味わいました」
「その割に、派手に声は出さなかったナ」
「それは、女の方が、いらしたから……」
「同性がいると、いやなのか?」
「いやじゃございませんけど、やはり、殿方ばかりの方が、思いきって、私、燃えられますの。女の方が聞いておられるかと思うとなんだか恥かしくって……」
「その、恥かしいのが、いいのじゃないか」
「でも、男の方に責められている恥かしさと、女の人に見られている恥かしさとは、また違いますのよ。異性の方に責められている時は、真底から、我を忘れて楽しめますもの」
「だったら、坂本さんだけを、そっと呼んでこようか?」
「ええ、そうして頂けたら私、もう大感激ですわ」
「そうだろう。さっきは、坂本さんの指で責められて十五回も……続けさまに、



だからナ。あのとき、どうされたのか、今、ここで詳しく言ってみろ」
「ああ、それは……」
「詳しく言わんか。どんな責め方をされたんだ。言わないか」
「はい、それは、それは……」
「言わないナ、こいつ奴!」
私は目の前の盛り上った臀部に、力いっぱいムチを当てた。いささかも、手加減のいらない皮下脂肪の厚い逞しい尻だ。
ピチッ、ピチッ、ピチッ。
小気味のよい、胸のすく音だ。
「あ、あっあっ、あーあ」
陽子の縛られた裸身が躍動する。
そこをカメラで捉える。
「あーあ、とっても気持がよくって……」



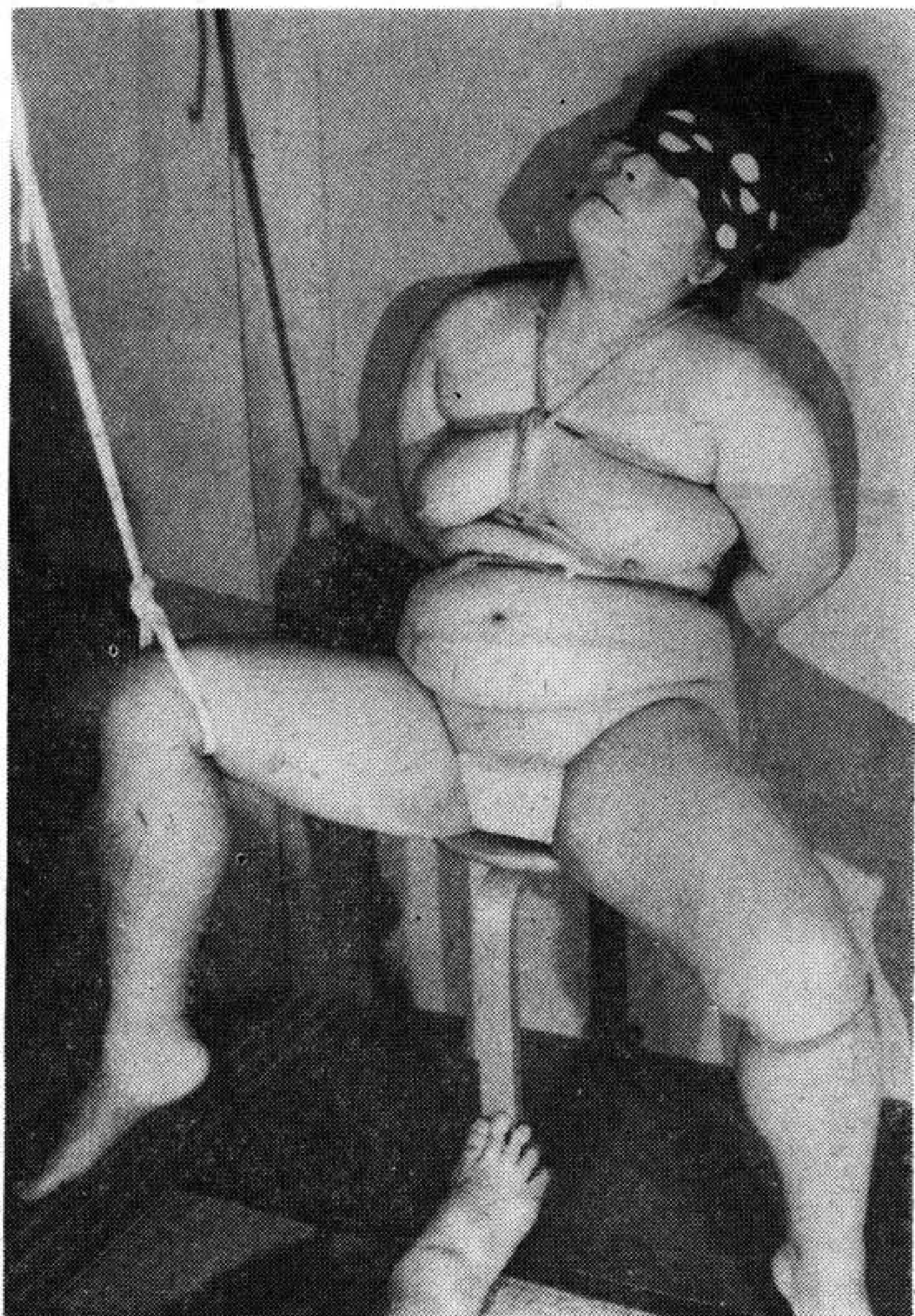
「それは今のことか、さっきのことか?」
「はーい、どちらもです」
「今日はナ、SM研究会で、プレイをやっているんだぞ。責められているときのマゾ女、いや、ケモノの心理を、詳しく喋るんだ。曖昧な答じゃ許さんゾ」
「もっと、きつくぶって! 気持がいいの。お尻が真っ赤になるまで、ぶって頂戴」
私はムチで、打って打って、打ちまくる。
まんまるい豊かな膨らみを見せた臀部の突端から太腿のつけ根へ。そして、太腿へも、しなやかなムチを、からませる。
「ああ、ムチでぶたれると、身体がとろけそう。気持がいいの。もっと、きつく、ぶって頂戴。気持がいいのよ。ああ、ぶって。きつく、ぶって。お願い!」
髪をふり乱して絶叫する陽子の声。するとどうだろう。ムチを受けながら、悶えるようにして、ジリジリと膝をにじらせて、ゆくのだ。顔を横向けに倒して畳に頬をつけ、目からは、うっすらと涙が、にじんでいる。
私は、そんなケモノのポーズをとっている苗木陽子の全裸緊縛姿態にカメラを向けながら、つと、背後へ回った。上半身の胸を畳に押しつけているので、真赤に染まった臀部だ

けが異様なまでの盛り上りを見せている。
さっき、坂本信三に執拗なまでに責め抜かれた秘められた個所が、私の眼前で、ぽっかりと口を開いていた。私はカメラとムチを置いて近づいていった。
臀部は、ほてって私の掌に熱かった。
その途端、陽子の口から絶叫が迸った。
「ああ、ケモノにして、ケモノにして頂戴」
人間の女性が、あの恥知らずなケモノになり下ってゆくときの、なりふりかまわない懇願が、彼女の口から次々と、とびだした。
「ねえ、陽子に……して。陽子をケモノのようにして、……して頂戴」
緊縛と鞭撻のSMプレイの果てが、これなのか。私は何か忘れているようなものが、あるような気がしてならなかった。だが、陽子がケモノに変身していったのに、私が人間のままでおれる筈はなかった。
ケモノとケモノの、あの生ぐさい快楽——
私は、自分の人間としての身体がなくなってしまっているのに気がついた。
遠くで、遥か遠くで、宴会で歌う野卑な俗謡のダミ声が聞えていた。

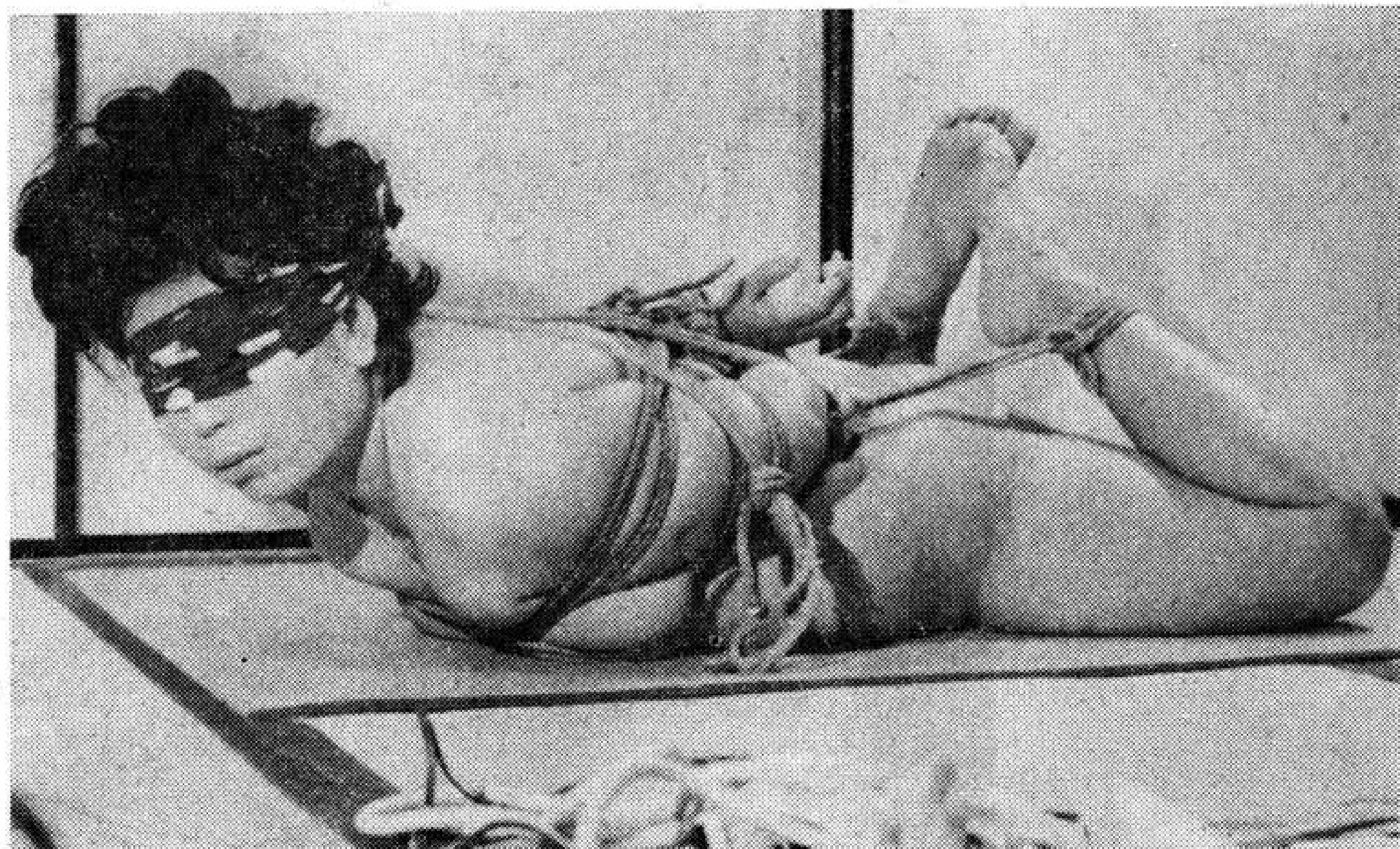
☆

私は素肌の上から浴衣を羽織って廊下へ出て隣室のドアをノックした。
「誰?」
「俺だよ。もう帰っていたのか?」
安心して坂本氏はドアを開けた。
彼は素っ裸のままだ。
「なんだ、もう始めてるのか?」
「いや、そうじゃないんだ。帰ってきたら、壁を通して、陽子さんの凄い泣き声が聞えてきたんでね。英子と二人で聞いていて、エキサイトしてしまって、この始末さ」
「いや、実は、あんたと二人で陽子を、もう一度、ケモノにしようかと思って、誘いに来たんだが、そっちでプレイが始まっているんだったら、一つ、見学してゆこうか」
襖を開けて、部屋へ足を踏み入れた。
二つ、ぴたっと並べて敷いてある、布団の一方が、小高く盛り上っている。
いやまさに、アベックの閨房だ。





私は、その掛布団をパッと、めくった。
そこには、後手に縛られた秋野英子の全裸の肢体が、羞らいに小さくなっていた。
「ふふん、いい眺めだナ」
私は彼女の肩に手を掛けて起そうとした。
「いやいや、いやっ」
それは、不意の闖入者に対する激しい抗議のゼスチュアであった。
「すまん、すまん。折角プレイを楽しんでいる真最中に邪魔して、すまなかったナ。よかったら、ここで、見学させて貰おうか」
「英子は、陽子さんと違って、まだ飼育が十分じゃないから、見てられたら、無理だと思うよ。なんだったら……」
そこまで言ってから、坂本氏は、私の耳元に口を寄せて囁いた。
「帰ったように見せかけておいて、襖の向うで見ていてくれてもいいし、なんだったら、英子が亢奮した頃を見はからって、交替して貰ってもいいよ……」
「いや、実はね、あんたが来れるようだったら、すぐ来て貰おうと思って、白豚を縛ったままで放ってきてあるんだ。だから、そちらの手がすいたら、ノックしてくれるか」
私は自分の部屋へ戻ってきた。
陽子は縛られたまま、障子の前に、ころがっていた。
私は網の目のように、ちらばっているコードや責め小道具を足で片寄せておいて、そこへ布団を敷いた。
卓の上に置いた腕時計を見ると、とっくに十一時を過ぎていた。
私は、もう完全にケモノに変身してしまっている苗木陽子を布団の上に運んできた。
これこそ、S研の貴重な資料である。
SMプレイの実験を行うのに、欠かすことの出来ない、人間の形をし、人間の言葉を喋る牝のケモノなのだ。
この頃の陽子は、私が変身術の呪文を余り



苦労してかけなくても、自己催眠で容易にケモノになりきってしまう。
野性のケモノの、あの逞しいスタミナを具備した牝獣が、今、この布団の上に横たわっているのだ。
私はそのケモノに襲いかかった。眠っていた獣性が蘇った。
飼育された家畜が、野性をとり戻して野獣に返り、その野獣が咆哮しているのにも似た苗木陽子の叫喚であった。
壁を隔てた隣室で、坂本信三と秋野英子の両人が聞いたという陽子の泣き声は、一体、どんなであったろうか。
私は、少し憚かる気持があった。しかし、陽子は、あたりかまわずに大きな声で泣き喚いた。まるで、自分の声に酔っているようだった。目には涙が浮んでいた。
深夜の女の泣き声は依然として続いた。
それは、私の特に考案したケモノ好みの責めの体位であった。
まるでケモノそっくりで、そしていつまでも疲れなかった。
私は、ふと、隣室の二人は、どのようなプレイをやっているか見たくなった。
そっと、二人にわからず見ることが出来たら、どんなに面白かろうと考えた。
そう言えば、この二部屋は、このホテルの最上階で、ベランダの硝子戸を開ければ屋上のタイル張りの広場へ出れた。そこから隣室を覗けば、部屋の中が窺えるのではなかろうか。そんなことを考えると、楽しくなった。
私は白豚を責めることに専念した。
いくら責めても、責め甲斐のある女体だった。汲めども尽きせぬ泉——というのは、こういうことを言うのであろうか。
むさぼりつくして、私は満足し、そして、まだ満足しなかった。
山と谷とが、延々と続いていた。
それは、中断ということがなかった。
私は早く、隣室の模様を、ベランダの外から眺めたくって仕方がなかった。
それでいて、現実の今の快楽は、私をしっかりと捉えて離そうとしなかった。
焦燥が、さらに私を快楽の渕へと、はまり込ませていった。
SMプレイというものの快楽（けらく）が、このよう

に凄く、激しくて、そして奥深いものであるとは私もケモノになるまでは知らなかった。

ひょっとしたら、私達人間が蔑んでいる獣に、人間である我々の知らない秘められた快楽があるのではないだろうか。

準備行動が長かっただけに、今や苗木陽子はケモノであるばかりでなく、発情期のメスそのものだった。その狂乱状態が暴走するのを防いでいるのは、僅かに、彼女を拘束している縄にすぎなかった。

私は陽子の全身の戦慄を、自分の肌にて身近に感じ、そして、山には山、谷には谷を以て、敏感に対応していった。

それは、お互いに相手を奪い合い、むさぼりつくす貪婪な快楽だった。

Sの立場にある私は、いつの場合でも、Mの立場の陽子を足下に踏みにじり、冷ややかに眺めている余裕を持っていた。

若しも、私が彼女より先に果てていたとしたら、こうした主導権は絶対に握ることは出来なかったろう。快楽の余韻を十二分に残したまま、私は夢幻の境をさまよっている苗木陽子の身体から離れた。

私はスリッパをはいて、ベランダから屋上へ出ていた。そして、隣室の硝子戸に手をかけた。カーテンが引かれてあって、その引き戸には鍵が下りていた。カーテンの合わせ目から内を覗くと、電灯がつけっ放しにしてあって障子の向うに人影が見えた。

布団の端に英子の白い足がのぞいていた。

戸がぴったりと閉まっているので物音は何一つ、聞えない。私は泥棒猫のように、カーテンのすき間からじっと内部の様子を覗いていた。

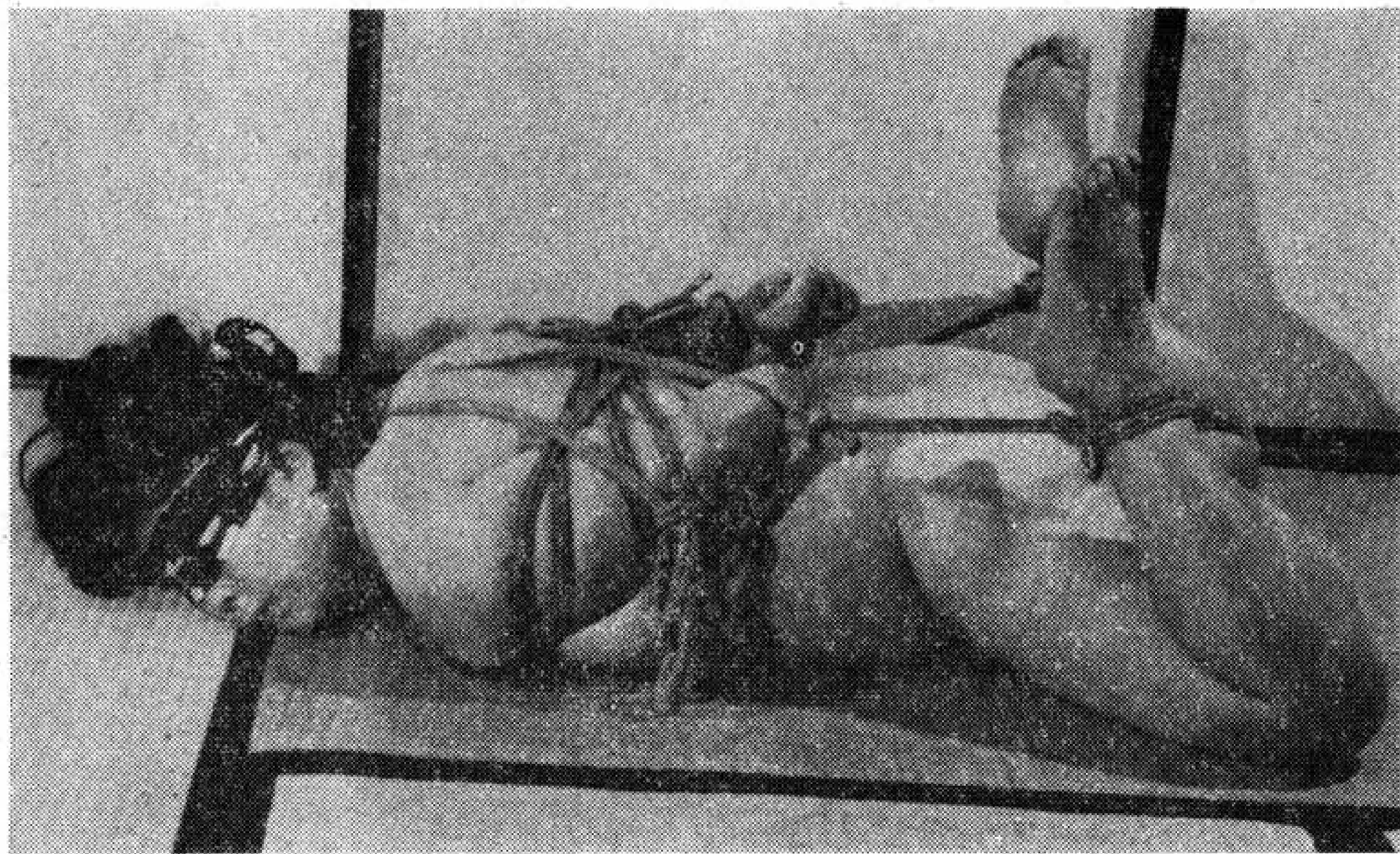
英子の足が、ひっ込むと、次には坂本氏の右腕が見え、それが見えなくなると、再び英子の脚が太股まであらわれた。

何をやっているのだろうか。もう少し障子が開いていたら、すっかり見えるのにと、残念だった。

そのうち、浴衣一枚で外に出ているのが肌寒くなってきた。この調子だったら、彼もプレイに熱中していて、中々、私の部屋へやってくる暇もなさそうだ。

私は早々に部屋へ戻る。

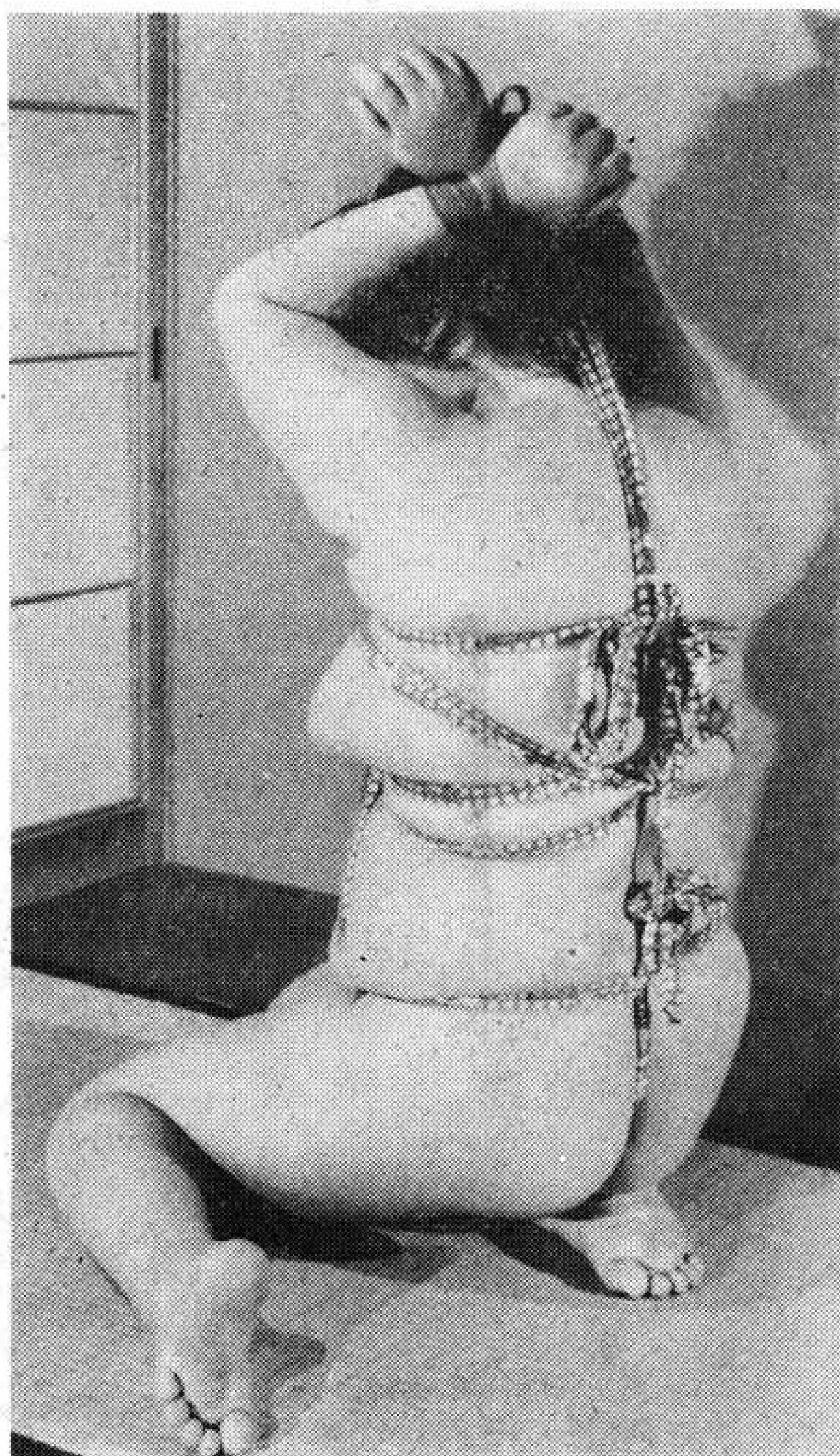
冷えきった体に、ムッとする生ぐ



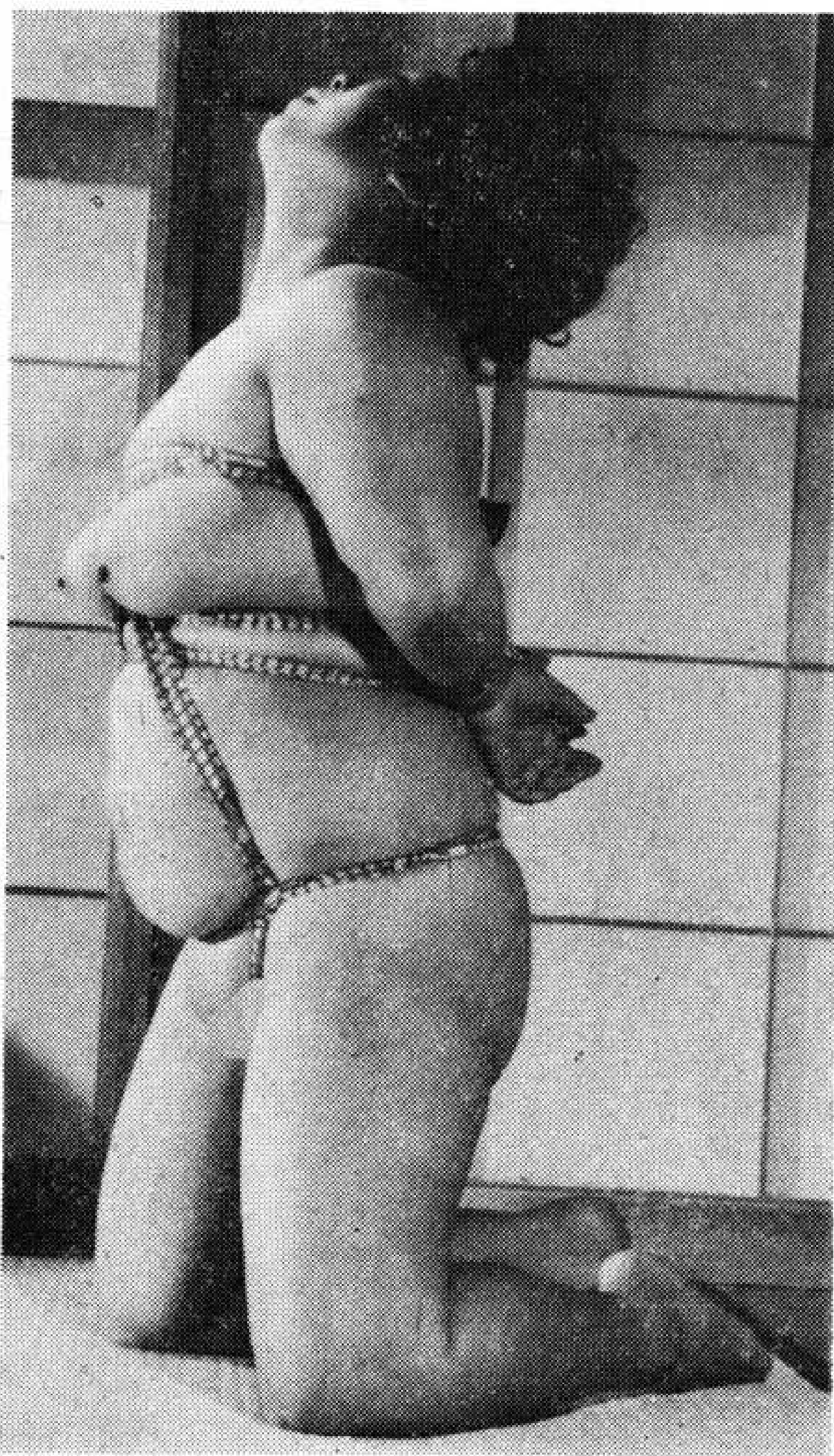
さい熱気が包み込んできて、再び淫らな想念が兆してくる。肉蒲団（田山花袋の小説の題名ではないが）で暖まるのも乙なものだ。
いや実際、責めている者も、さぞ暑かろうが、責められている者の、その時の発熱状態といったら、それは凄いもんだ。

☆

私が責めに移ると、彼女はすぐに応じた。
さっきの余韻が、まだ十二分に残っている女体の微妙な醗酵状態だった。
あるいは、今まで私がベランダから屋上へ出ていったのも、彼女は知らないのかもしれない。こんなときに、第三者のS好みの男性がきたら、面白いのに——。
一人でもいい。二人でも三人でも、場合によっては、輪姦されるということが、彼女にとって最高の願望であるのかも知れない。いや、きっと、そうだろうと、私は思う。
ここで、私は一つの収穫を得た。
それは、今の今まで、あれほど責めても、自分の口から、剃毛された部分の名前を言わなかったのに、とうとう、それを、はっきりと口に出して言ったのである。
目から涙を流し、声が嗄れるまでに泣き叫んだ挙句、夢遊状態に陥った苗木陽子は、私の問いに対して、はっきりと返事したのだ。
「それは、陽子の………です」
その部分の俗称は、彼女の地方で呼びならしている名前であった。一旦、自分の口からその名前を言ってしまうと、あとは、自虐的に何度も口にするのだった。あたかも、それを喋ることが楽しいかのように——。
「陽子。ここは、なんと呼ぶんだ?」
「はい、……です。陽子の……です」
はっきりと答えるのだった。



私も面白がって、喘がせては、何度、その言葉を口にさせたことか。言い淀めば、柔肌を抓ったり、擽ったりするだけで、恥かしい言葉を口に出した。
そのうち、部分の名前だけではなしに、行為の俗称を口にさせた。
「はい、陽子は、今………をしています」
と、はっきり答えるのだった。
そんなことを無理矢理、口にさせることで私は燃え、そして、口にさせられることで、



陽子は狂いまわって泣き喚いた。

あまりにも声が大きすぎるので、私は隣室への聞えを慮って、靴下の片方を口の中に押し込んだ。突然、なにが入ってきたのかと、途惑った風だったが、やはり奇クを愛読しているだけあって、すぐに、それと分り、自分から、くわえ込むようにした。

口いっぱいに押し込んでおいてから、日本手拭いで、しっかりと猿ぐつわをした。

「ム、ムムム、ムウ」

もう、絶対に声を出すことは出来ない。鼻の二つの穴から、荒い息ができるだけだ。

そのすぐあとで、私は霊顕あらたかな猿ぐつわの効果を、たちまちにして知った。

裸身を縄で、きっちりと密着させて全裸を縛りあげることで、勿論、全身の緊張とマゾ精神の昂揚を計ることが出来た。だが、猿ぐつわには、その効用を併せ持っている外、息苦しくさせることで、その部分に対する充血と収縮を招いた。

上の口に対する猿ぐつわは、下の口に対して密接にシンクロナイズしていることを、今更のように思い知ったのだ。

人間の体には、沢山のツボというものがある。そのツボとツボとは、連動していると言われるが、SMプレイにおいても、こうした責めの連動は研究せねばならない課題だ。

鼻の穴からの荒い息。

眉が釣り上って苦痛に耐えている。

私は、準備してきた露飴を、とりだした。

江戸時代の四つ目屋では、リンの玉のいうのを、粋人は、その閨房で、よく用いたという。差し当り、今でいうパチンコの玉のようなものだろうが、リンリンと涼しい音色の鈴の音を出すよう仕掛けられていたらしい。

その異色感と、律動感とが、たまらない刺戟を男女双方に与えたものだと思う。

私の実験に用いた〝露飴〟は、形や硬さは、リンの玉に似かよっていたが、違っているのは、溶解性と、そのあとの粘着性だ。

そして、もし仮に、クリちゃんプレイをやる人があったとしたら、相当に甘いんじゃないかと思う。この意味、おわかりでしょう。

縄と猿ぐつわの呪縛——。

それは、M女苗木陽子を限りなく拘束し、

束縛しつづけた。さらにその上、露飴の粘着性が、精神的にも肉体的にも、クモの巣のように女体をガンジガラメにした。

肉体に対する責めは、精神を昂揚させ、精神に対する辱かしめは、肉体をボロ屑のように頽廃させた。肉体の頽廃化こそは、たとえようもない快楽と悦楽につながった。

猿ぐつわというものが、これほどまでに良いものであったのか。私は身を以て、その好さを知ることが出来た。M女性の側からも、その点について、何分の告白を洩らして頂ければ、これに越した幸せはない。

さて、飴責めについてであるが、私は、あの肌と肌とが粘りつく絶妙きわまりない快感について、今、この文章を書きながら思い出しても、ぞくぞくっと身ぶるいするほどの戦慄を覚えるのである。

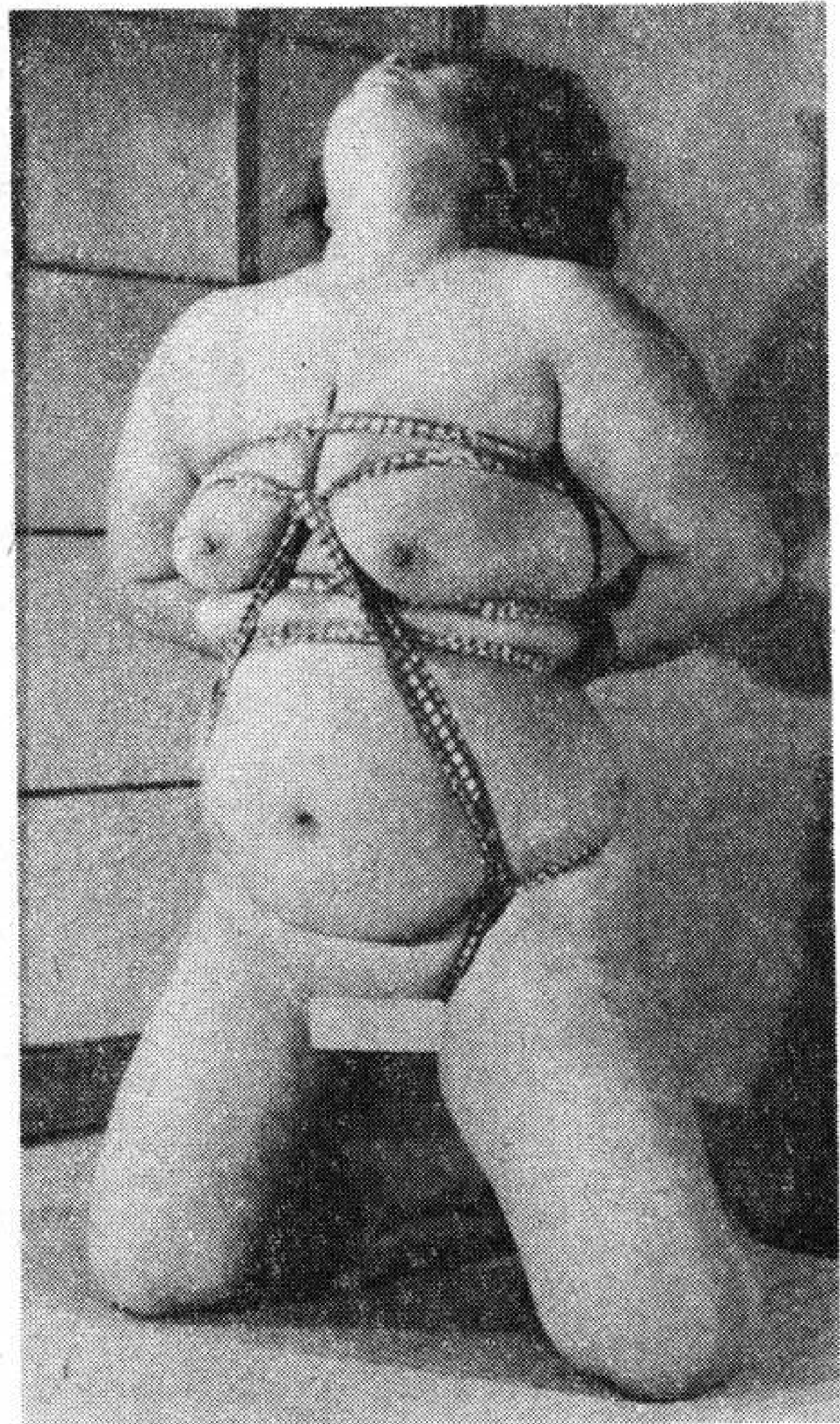
子供の頃、粘土をこねまわして遊ぶことに一種の快感を覚えたことを経験した人も、決して少なくないと思うのだが、人間は本質的にそうした粘性のものに性的興味を抱くのではないだろうか。泥の中に全身を浸して愉悦を覚えるマゾ男の告白も、それに関連しているように思う。

その粘性の快感は、極めて永続性があり、そして段階的に強さを増していった。えてして、男性の快感は衝動的であって永続性がなく、その快感量の絶対的数値は、決して多くないのが常だった。

私は、尽きることのない、その粘着きわまりない魔性(ましょう)に、ぐるりっと取り囲まれて、身動きが出来なかった。肌と肌との接触なのにまるで粘膜と粘膜の密着のようだった。

それは、なんとも言えない感触だった。

苗木陽子の方も、きっと、そうだと思う。



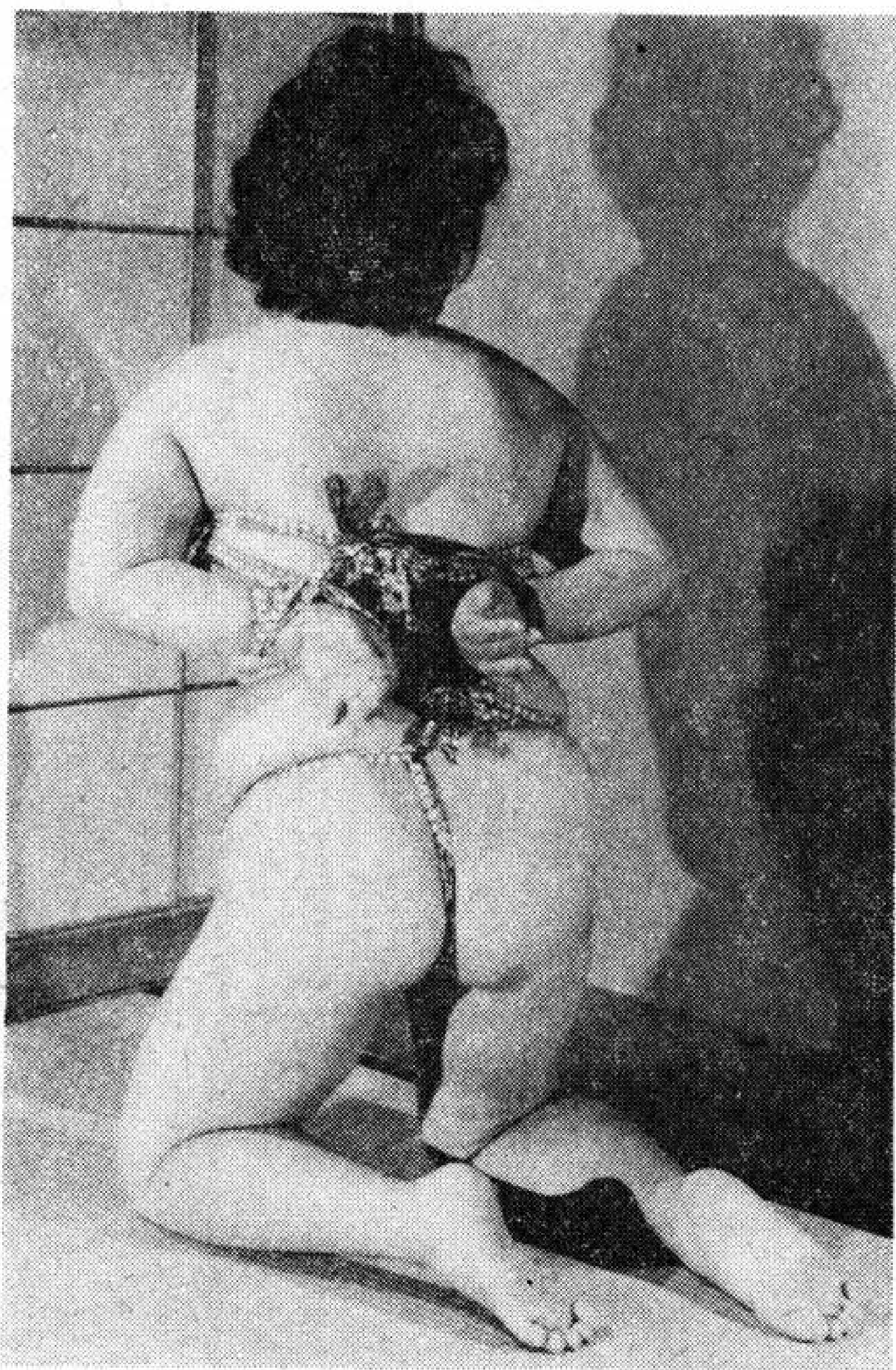
私は夢心地の域を、さまよっていた。

両手にも、顔にも、その粘っこい半流動体の液が、まつわりついた。

ネバネバとして放れず、こねまわすと、さらに粘度と嵩を増して私にまつわりついた。

やがて、足にも、その飴の粘性がまつわりついて逃げようとしても逃げきれなかった。

私は、その粘性の魔性の虜となって、全身で溺れていった。全身で溺れきってしまうと凄い快感だけがあった。粘性に溺れ、そして



完全に快感に溺れてしまっていた。

猿ぐつわは苗木陽子の発声を封じ、緊縛は両手の自由を奪っていたが、それだけに、彼女の体の他の部分の動きは至って活発で、疲れを知らぬ蠢動を、悶絶寸前のきわをきわめつつ、繰り返していた。

私は自らのアヌスを中心とした臀部に、べトベトした粘着性の耐えきれない快感を初めて経験していた。私の考案したケモノとしての体位が、それを可能にしていた。

☆

私は一人で温泉に浸っていた。

湯は含有物が多くて粘度が高かった。まるで、泥の中に浸っているようだった。

熱くもなく、そして、ぬるくもなかった。

そこへ、若い女が入って来ようとして、私が湯壺に浸っているのに気づいて、はっと立ちどまった。美しくて白い肌の持主だった。

私は、「どうぞ」と言った。女は、「男の人とたった二人きりで、狭い湯壺に入るのは恥かしい」と言って、ためらっていたが、もう素っ裸になってきているので、仕方なしに私の傍に、すべり込んできた。

足とお尻だけを粘性の湯に浸けていた私はもう、小さな手拭いだけでは、かくしきれなくなっていた。そうしたら、どうだろう。その女が私に「頼もしい」と言って近寄ってきたのだ。私は、たまらない快感に襲われた。

身体中がしびれて動けないのに、大脳だけは活発に活動していた。

そのとき、人声がした。湯壺のまわりに、数人の男たちが現われ、私達二人のことを盛んに揶揄した。あわてて、湯の中に潜り込もうとしたが、今まで泥のようだった温泉の湯が、いつの間にやら飴のように粘りつき、べタベタして潜ることすら出来ない。

私達二人は、見物人の嘲笑や罵倒を浴びせかけられながら、どうすることも出来なかった。そして、結局、そうした行為を、皆の見ている前で演ずることで、その呪縛から解いて貰えることを約束した。

私にとっては、それは甘美で、そして物悲しいまでの快感の連続だった。

☆

私は目が覚めた。

夢なのか——と思った。

現実にも、甘美な余韻は残っていた。

そのままの姿勢で、障子を細目に開けるとカーテンいっぱいに朝日が、さしていた。

私が身体を起すと、苗木陽子も、それにつれて身体を起した。

「起きていたのか?」

私は言葉をかけた。

「いいえ、今、起きたところです」

陽子の元気な声だ。

開けた障子の向うから入ってくる空気は、素っ裸のままで寝ていた肌に冷たい。

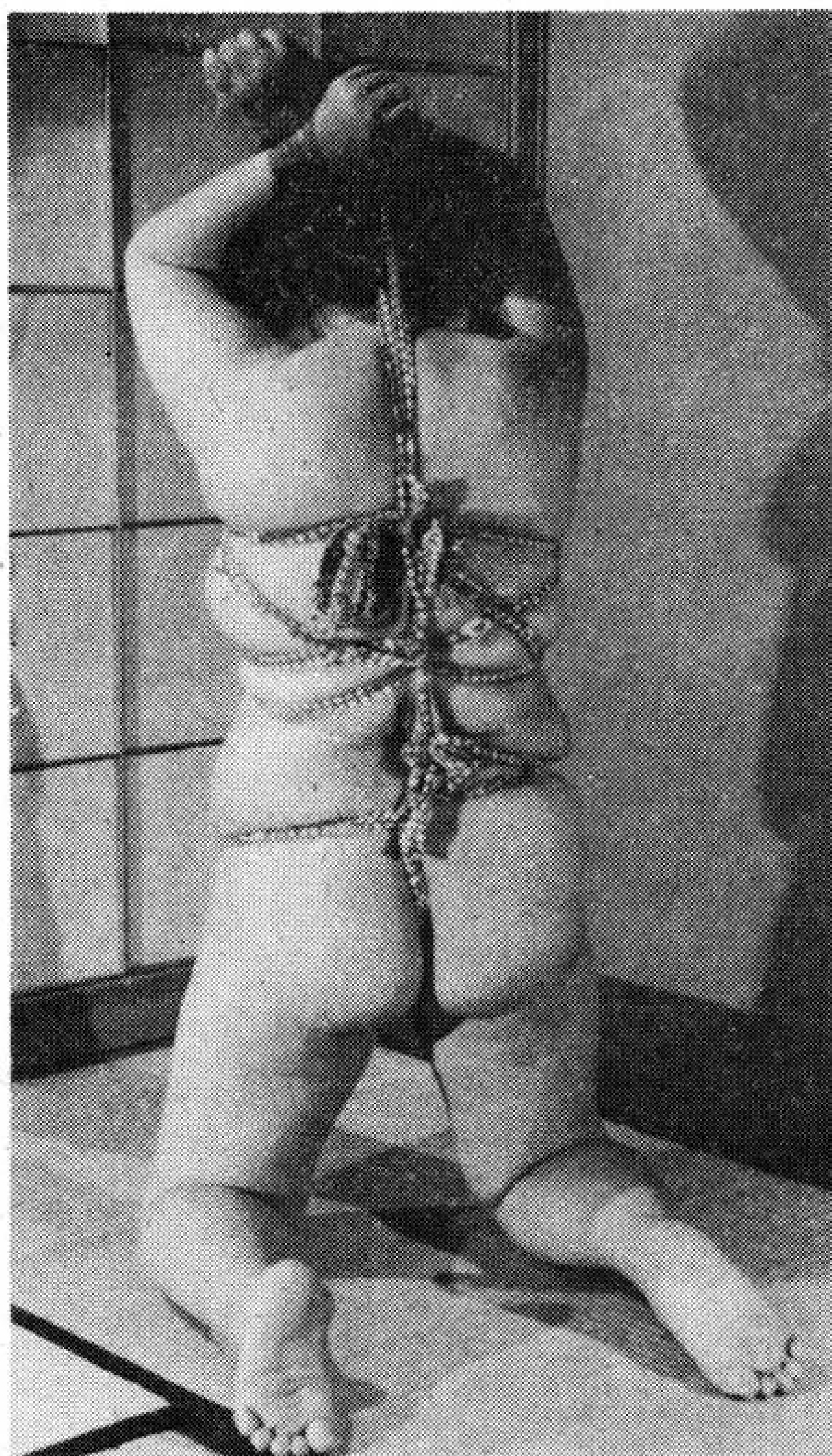
〃いつの間に眠ってしまったのだろうか〃

尿意もなく、疲れもなく、いや、自分の身体、そのものがなかった。

頭だけが青空のように冴えていた。

見れば、陽子は、口から私の靴下を吐きだし、猿ぐつわにかましていた日本手拭いを、顎の下に、ずり下げていた。

私が身体を動かすと、彼女も、すぐ、それに応じた。



朝の元気さというものは、また格別に素晴しい。

断片的に残っている甘酸っぱい夢と、今の苗木陽子との現実とが、ごっちゃになって、私を混乱させた。

快楽の時間は短く、そして徒らに時間の経つのが早かった。

今頃、秋野英子と坂本信三とは、どうしているだろうかと、ふと思った。

夜中に、ベランダのカーテンの隙き間から覗いたとき、彼等は起きてプレイしていた風なのに、朝まで、こちらの部屋を訪ねてくることをしなかった。

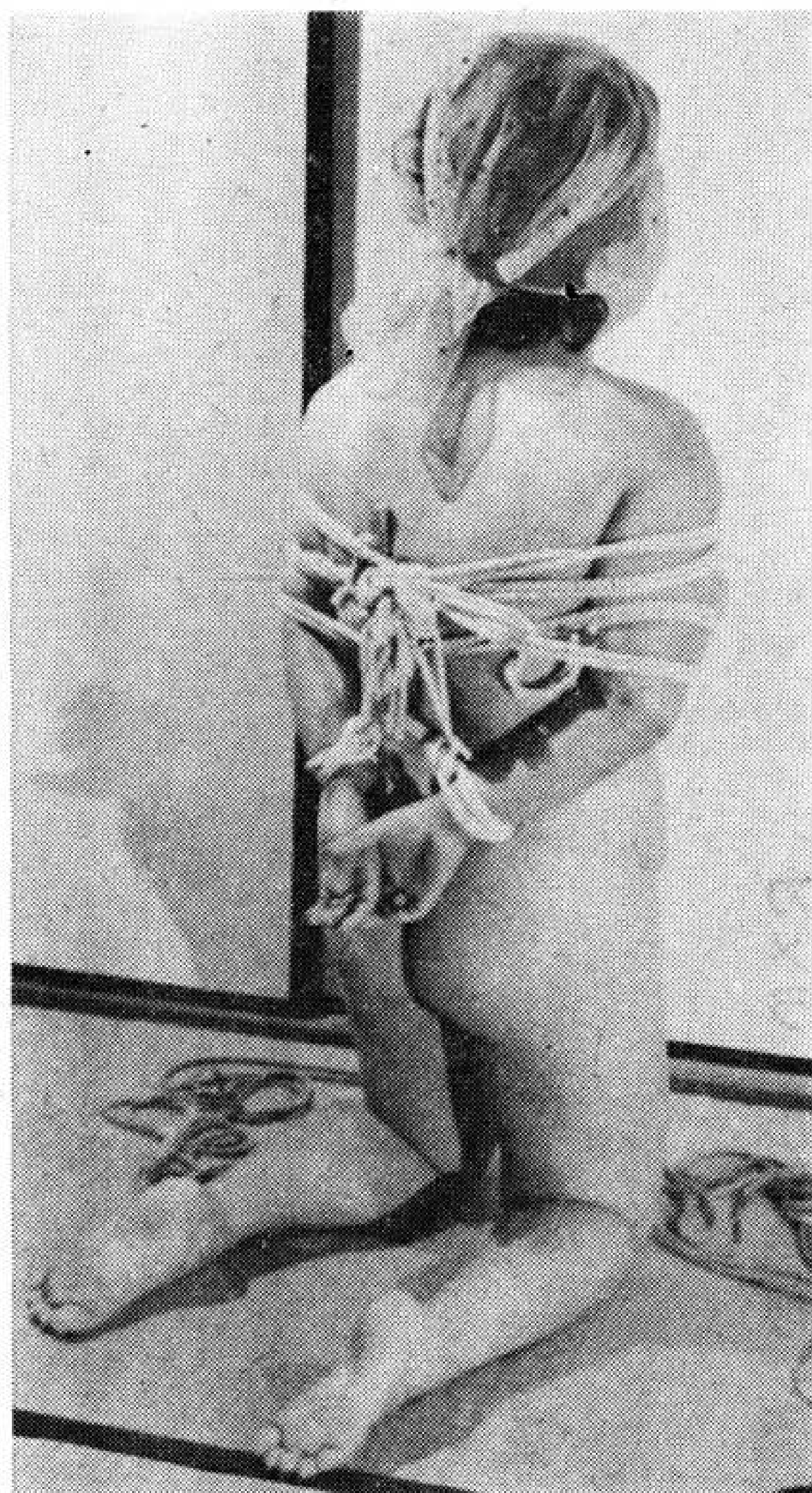
そのとき、電話のベルが突然、鳴った。

モーニング・コールだ。

朝食は七時半から九時半迄に、すませて下さい——と言うことだった。

あわてて時計を見ると、すでに八時を少しすぎていた。

快楽は尽きず、そして、元気さは依然とし



て余力を残していたが、朝食を摂らねばならないので、やむを得ず、苗木陽子の縄を解いておいて、洗面をかねて浴室へ、とび込む。烏の行水で、顔と身体とを洗うと、ベランダのカーテンを開けて屋上へ出た。

晴れていて、気持のよい爽々しい朝だ。

私は浴衣で跣足のまま、屋上を歩いて、隣の部屋を覗いてみた。

坂本信三と秋野英子とは、ちゃんと背広とツーピースを着て、ベランダの椅子に腰をおろしていた。

「おい、もう洋服を着たのか」

私は声を掛けた。

「うん、朝食に行くのに、浴衣のままじゃ、まずいと思ってね」

やはり二人は紳士と淑女である。

「それもそうだが、朝食が終ってから、もうワンプレイをやろうと思っているので、困ったな。それはそうと、昨夜は晩くまでやっていたようだな」

私は夜中にベランダのカーテンのかげから秘かに覗いたことは言わなかった。

「それより、そちらの声が壁越しに筒抜けに聞えてきて弱ったぞ」

彼は私に近寄ってきて耳打ちした。

結局、私と苗木陽子は浴衣の上にドテラを着て食堂へ出た。

☆

朝食を済ませて部屋へ戻ってくると、苗木陽子は、完全に人間の女性に戻っていた。

畜化したときのケモノじみた奔放さは、ひとかけらもなかった代りに、人間の女性としての淑かさがあった。

布団は昨夜からの敷かれたままだった。

私はドテラと浴衣を脱いでから、苗木陽子のも脱がした。

このホテルを出るまでには、まだ二時間ばかりの余裕がある。二人は、いつの間にやら最後の仕上げにとりかかるために、どちらからともなく、身を寄せ合っていた。

この前、神戸の海の見えるホテルでSMプレイに耽ったとき、別れぎわに演じた、あのフィナーレを思い浮べていた。

と、そのとき、ドアをノックする音。私は浴衣をひっかけて扉を開けた。

「あの、お床を上げさせて頂きます」

細面のほっそりした身体つきの女の子だ。

あら？　昨夜の夢の中で見た、私と一緒に温泉の湯壺に一緒に入った女性の顔だ。

私は、まごまごした。

「ちょっと、待って下さいね。今、すこし、具合が悪いので、入って来られると……」

中断された苗木陽子の不満そうな顔。しかし、仕方がないので、ちらばっているカメラや小道具を鞄の中へ押し込む。

そして、女の子をドアの外側へ待たしておいて、やるだけのことは、やらねばならなかった。なんという、あわただしいひとときであったろうか。

フロントの会計で宿泊料の支払いを済ませて喫茶室でコーヒーを口にしながら顔を見合わせた四人は、昼前の明るい陽ざしが、なんとなく面映かった。

延々二十四時間にわたるSMプレイが、まるで見終った映画の画面のように、思えて仕方がなかった。お互いに、何処の誰とも、その本名すら知ることもなく、今、これから別れようとしているのである。

もう二度と逢うことがないかも知れない四人だった。私のミゾオチのあたりの心から糸が出て、他の三人の心に、ぴったりとつながっているような、別れたくない気持だった。

目の前に座っている秋野英子の顔が、夢の中の温泉で一緒に湯壺へ入った若い女の子のように思えた。あれは、布団を上げに来たホテルの女の子の顔ではなかったのか――。

私は改めて秋野英子の顔を見、そして苗木陽子の方へ視線を走らせた。坂本信三は、ゆっくりと煙草をくゆらせて落着いている。

「さあ、もう帰ろうか」

私が声をかけるまで、誰も腰を上げる者はなかった。

師走とはいえ、空は青く晴れていた。

――（おわり）――

＜カメラ・ルポ特報＞

果してルポ可能か？

局留の謎の女

〔果して、ルポできるか、どうか。落着いた物腰の和服の女性。住所も名前もわからないけれど、彼女は私と行動を共にしてくれた〕

☆

ゆくりなくも私は、昨年の十二月十九日、西条紀代と一緒に大阪国際空港へ行ったことを思い出していた。

あれから丁度一年目。やはり師走のあわただしい一日、クリスマスの宵、一人の女と私は逢っていた。

そう、この女性と知り合うきっかけとなったのは、九月の中旬のことだった。編集部気付、塚本鉄三で、神戸市葺合郵便局留、藤田明子という差出人の手紙が届いた。

消印は神戸中央、9・12の8―12となっている。その手紙の内容というのは、次の通りだった。

☆

塚本鉄三様。私は奇譚クラブという雑誌を愛読しております一女性でございます。

いつも誌上で、貴方様のお書きになりますカメラルポを愛読いたしております。

毎月、すばらしいルポの記事を拝見しておりまして、今年の春ごろから数カ月、いろいろと思い悩んだ末、とうとう決心をして、このペンをとりました。私も、あのルポの記事のように、責められてみたいのです。

それで、お願いなのですが、塚本様、あのようにして、この私を責めていただけないでしょうか。私はカメラルポの記事を読みますたびに、いつも、そのことばかりを考えておりました。

でも、私には、夫と一人の子供がございますので、絶対に私のことが、主人にわからないように出来ないでしょうか。主人にわかると困るのです。と申しますのは、彼も時々、この本を読んでいるからです。彼が寝床の枕の下にかくしていた本を、私が見つけてから私も愛読するようになったからです。

今までにも、彼から簡単な縛りやセメをされたのですが、それ以上の事には、一向進展していません。そんなわけで彼の目にとまっても絶対に私であることがわからなければ、誌上公開されてもかまいません。

時間的には、夫は毎月きまって一週間ほどの出張がありますし、一人の子供は、祖母の家がつい近くですので預ってもらえますので貴男様の御都合で、一泊ぐらいなら、私の方は、さしつかえございません。

それから大事なことは、私の容姿ですが、貴男様の御希望にそえるかどうか、いささか心配です。身長一、五五メートル、体重四八キロ、B九一センチ、W六四センチ、H九二センチ、顔は十人並以上だと自分では思っていますが、子供を一人生んでいますし、年令も決して若くはございません。

ただ、シバリとか責めには、イス、ローソク、カンチョーなど、道具を使った事などには、無性に喜びを感じるのです。羞恥責めには、とてもたまらない程に興奮します。ですから、体にきずあとさえ出来なければ、どんな責めでも喜んでお受けします。

その他、いろいろ、くわしい事は直接お電話でお話したいと存じますので、お差支えなければ貴男様の電話番号お知らせ願えれば幸せに存じます。

なにかと、身勝手な事ばかり申しまして、本当に申しわけありません。

この夢、果せないものでしたら、どうか笑って、おわすれになって下さいませ。

はずかしい事ばかりの文面、ついつい乱筆になってしまいました。

どうか、お許し下さいませ。

まずは、お願いまで　かしこ

九月十日　藤田明子

塚本鉄三様

☆

私は早速、返事を書いた。

電話番号を添記したのは言うまでもない。

だが、返事は一向になかった。

十日以上経っても、局留で出した手紙が戻って来ないところをみると、受取っているのだろうが、梨の礫だった。

十月、十一月と過ぎ、私は、そんな手紙のことは忘れていた。

それが、十二月も押し迫ったクリスマスの日の昼、藤田明子なる女性から、突然、私のところに電話が掛かってきた。

夫は長期出張で留守、一人の子供も冬休みで祖母の家へ泊りがけで行っているので、今日だったら、出かけられると言うのだった。

今、どこから電話しているかと尋ねたら、神戸からだと言う。それだったら、阪急で梅田まで出て、その近くの公衆電話をしてくれたら、私は五分以内に迎えに行くと答えた。

それから一時間半ほどして、私達は阪急三番街の、とある喫茶店で向い合っていた。

年令は彼女が言わないのでわからない。

雑誌の中で、私は彼女の抱く危惧について一々、明快に答えていった。

そして、ドライブが何よりも好きだという彼女を車に乗せて中国縦貫道路を走って宝塚へ出た。この藤田明子と名乗る初対面の女性を、素っ裸にひんむいて縄を掛けたいという気持が起ったが、生憎くと今日はカメラも責めの小道具も持参していない。先日、坂本信

三氏ら四人でSMプレイをやったまま、未整理で、そのまま、鞄は家へ置いてあったからだ。

宝塚から有馬街道へ入ると、両側の斜面は真白に雪で掩われていて、路面も解けた雪で雨後のように濡れている。彼女がトイレへ行きたいと言い出したが、山の中で適当なドライブインも見当らない。足を伸ばして有馬温泉の街へ入り、中之坊グランドホテルの前の駐車場に車を停める。

クリスマスというのにホテルの中は至って静かである。グリルもドアを閉じたままである。正月を目の前にして、一休みといったところであろう。

開いていたパーラーでコーヒーを飲む。三人ほどの子供がゲームコーナーで遊んでいるだけだった。

外へ出ると風は冷たく、背後の山は雪に夕陽が当って明るかった。同じ道を引き返すよりも、知らない道を走りたいと言うので、神戸電鉄線に沿って神戸へ向う。神戸は彼女の住所でもあるのだから、丁度送ってゆくことにもなるのだ。

やはり家庭の主婦なのだからか洗剤がどうしても手に入らないという話をする。ほんの一月程前、松坂屋へ歳暮の注文に行ったときは洗剤は山のように積んであったのにと思う。

そう言えばSMのことについては、彼女は余り話していない。専ら私が説明役になってしまった格好である。

神戸市内へ入ると、陽はすっかり暮れてしまった。瀟洒なレストランがあったので、そこで食事をする。一階に駐車して三階まで上るとテーブルに座ったままで海が見えた。

部屋全体が商船のような造りになっていて調度なんかも、なんとなくエキゾチックなのは港町のせいだろうか。私達二人も、まるでエトランゼのような気持になってしまう。

クリスマスツリーを、きらびやかに飾ってあるのが一層、心をなごませてくれる。

一時間近く時間をかけて、ゆっくり夕食を摂っている間に、藤田明子の心は、SMプレイの方へ傾いてきていることが私には、よくわかった。

最初のうちは、頑に、写真を撮られることを拒んでいた彼女だったが「それなら、私、一度やってみようかしら」というところまで話は進展していった。

再び車上の人となった。

「今日は余り突然だったので、私はなんの準備もしていませんし、それに今日中に徹夜でも仕上げなければならない仕事がありますから、これで、お別れしましょうか。最寄りの駅を言って下されば、お送りしますが」

私は明日の朝、手渡さなければいけない仕事を抱えていた。本当なら、今日の午後に仕上げておくべき予定だったのだが、急に、こうして、出かけてしまったから、段取りが、すっかり狂ってしまったのだ。

「これから、大阪まで、お帰りになるんでしょ。それだったら、私も一緒に乗せていって下さい。私、夜の街を車で走るの大好き。神戸に住んでいながら、神戸の街を車で走るなんて初めてなんです。大阪からは、電車で帰りますから……」

「そうですか、それじゃ御一緒に参りましょう。私も急ぎの仕事がなければ、もっと方々を、走り回ってもいいんですが、年内最後の仕事なものですから、放っておけなくて、どうしても仕上げなくちゃいけないんです」

「御迷惑でなければ乗せていって下さい」

電力節減に協力しているためか、クリスマスの夜だというのに、街全体の華やかさは余りにも少なく、暗く沈んでいるようだ。

摩耶（まや）のランプウェーから阪神高速道路へ入

る。高架だから見晴しがよい。といっても、夜のことだから、走る光の渦だけのことだ。

「あの、私、本当は、今日は泊ってもよいと思って家を出てきましたのよ。帰りましても主人も子供もおりませんもの……」

大阪が近づいてくると藤田明子は、遠慮勝ちに、ぽつりと言った。

「それじゃ、これからホテルへ、しけ込んでもいいと、おっしゃるんですか?」

「ええ、貴男様さえ、およろしければ……。でも、お仕事が、おありなんでしょう」

「そうですね、二時間か、三時間ぐらいだったら、構いませんが……」

「私、そんなホテルなんて、まだ一度も行ったことがないんです。ですから、昼間だったら、とても、そんな勇気が湧かないんですけど、今は夜ですし、それに、神戸市内を離れていますから……」

「神戸だと、お嫌ですか?」

「ええ、やはり、子供のときから、ずっと住んでいますものですから……」

私は責めの小道具は何一つ持っていなかったが、この謎の女の裸を具に鑑賞するのも万更、悪くはないと思った。

洗場の一部が一段と高くなって、スポンジ様のマットが敷いてあり、その上に多段式のシャワー二つが備えてある。これだけの広さがあったら、写真撮影も十分に可能だなあ、と考えたりする。

藤田明子の、さっきのまごつきよう、ホテルへ入ってきたときの恥かしがりようから考えて、とても私と一緒に風呂へ入ることなどは、しないだろうと諦めていたが、一応、声をかけてみた。

すると、どうだろう。浴室の前の化粧室から、「はい」と明るい返事が聞えて、待っていたように、全裸の藤田明子がドアを排して浴室へ入ってきた。

バストとヒップが、むっくり肉がつき、お臍のあたりでウエストが、きゅっと、くびれるように細くなっていた。背は余り高くないのに均斉のとれた見事なプロポーションだ。

この肉体だったら、縄を掛けたら、どんなに素晴しいだろうと思った。

「私、夫以外の男性と、こんなことするの、生まれて初めてなんです」

彼女は、ベッドの上で私の傍に身を横たえて、そんなことを呟いた。真偽のほどはわからなかったけれど、それは、私にとっては、怖ろしい殺し文句であった。

私は浴衣の紐二本をつなぎ合わして、彼女を後手に括った。円形のベッドの三方の壁も天井も鏡張りだった。

仰向けに寝かしてから、電灯を全部つけたが彼女は消せとは言わなかった。私はカメラを準備して来なかったのを悔んだ。

☆

別れ際に彼女は言った。

「年内に、もう一度、お逢いしたいと思っても、無理でしょうね?」

年内といっても、あと一週間もないのだ。彼女には、今が外出の絶好のチャンスなのだろうが、私は、最後の追い込みの仕事で手が離せないのだ。

「だったら、こうしましょう。年が明けたら貴女の御都合のよい日の二、三日前に、電話して下さい。そうしたら、一泊でも結構ですから、お伴しましょう」

藤田明子という名も仮名だと、彼女は言っていた。年が明けて、果して、彼女が電話連絡してくるか、どうか。

もし、うまくルポできたら、次回の「〔カメラ〕と〔ペン〕のルポルタージュ」の記事に出来るのだが、それは相手次第だから、保証のかぎりではない。

（了）

カット・マエダヒオミ



いたんのしらべ

――我が〈がらくた日記〉の告白――

村雨灯花

私が奇譚クラブの特異な世界を知ったのは確か昭和二十六、七年頃と記憶しています。
今から数えて二十年以上も前のことです。
現在のように、小説や映画、テレビなどにSMが鳴り物入りで競いあっている時代と違って、まだ雑誌にヌードグラビアが挿入されているのが目だたない頃で、その折りも、ヌード写真のある雑誌を見たいが為に、あれこれと探していた本の中に、緊縛で芋虫のようになった女性のヌーディな姿をみつけ、異常なショックをうけたのです。
その頃は、四馬孝先生のさし絵が、ふんだんに載せられており、今思い出しても、胸のうずきを覚えるすばらしい内容でした。また伊吹真佐子さんのムーディなフォトが私をひきつけました。
それからは、グラビアに新人のモデルが百花繚乱と咲き乱れ、私の目を楽しませてくれました。とくに梨花悠紀子さんの、ああ艶やかで、しなやかな肢体、大塚啓子さんのボリュームのある肢体が、目に残りました。
柔肌の全身を縄で埋めつくす緊縛姿態の美しさが、私を幻想と倒錯の世界へ没入させてくれると共に、絹川文代さんのアブチックな艶姿に、のめり込むような感動を覚えたものです。そして、私の倒錯した虚像崇拝は、いつしか、緊縛からエネマへと移行していきました。

○

現在、市場にはSM誌が沢山出ていますがその殆どは、風俗奇譚を除いて、ここ、一、二年の間に発刊されたものです。
その当時、奇譚クラブが敢然と世間の白眼視と非難に立ち向って刊行していた勇気と努力には、只々頭が下る思いです。奇譚クラブの勇気ある行動力には、今のSM誌は足下にも及ばないと思います。
思春期にして自覚した私のSMへの目ざめでしたが、その私も、すでに四十近い齢とな

ってしまいました。

十年前、今の妻と見合結婚するまでは、大阪、和歌山、福岡、広島と、転々と住居も職業も変えてきましたが、女性に至っては、きわめて平凡で、考えることといったらSMのことばかりで、ほんとうの意味でのアブチック・ラブにまで進むことは、私の体の中の何かが拒んで実行できませんでした。

それですから、妻との新婚当初、今日こそは、今夜こそは――と、妻をSMの世界へ誘い込もうと焦りました。

誰に気がねする事なく、妻をマゾ女に飼育することが出来るのだと勇みました。

そして、始めて握った縄というものに対して示した妻の態度は、変態という嫌悪感をふくんだ激しい拒否と抵抗でした。

私が長年、胸底深くためてきたSMへの甘美な世界は、完全なまでの屈辱となって、はねかえり、空中の楼閣のようにくずれ去ったのです。すっかり理性を失った二人の間には冷たい隙間風が吹きすさび、家庭生活の破滅をも意味するのではないだろうかと、思えるほどでした。

その結果、一時的にSMから逃避する破目となりましたが、つい店頭で奇譚クラブの姿を見ると買ってしまい、妻にかくれて愛読していました。今では妻もあきらめたのか、何も文句を言いませんが、SMに関しては、頑として妥協は見せません。

○

最近、誌上で大活躍を続けておられる塚本鉄三氏の〈カメラ・ルポ〉は、私の最も愛読するところのものです。

48年12月号で、ルポの「畜化願望の女」を読んだ時には、身ぶるいするような感激をおぼえたものです。自分の妻と比較して、この苗木陽子さんのマゾぶりのなんと素晴しいことよ。私は思わず溜息をつきました。

いやはや、このルポの一篇だけで、十分に満足させられました。妻には求めて求めることの出来なかったすべてのものが、私の欲するすべてのものが、このルポの中に有るような気がしました。これだけでも奇譚クラブ一冊を買った甲斐がありました。

この苗木陽子さんのような女性を妻にしていたら、どんなに幸せだろうかと、不用意に見合結婚した自分が悔まれてなりませんでした。それとも、私が、塚本鉄三氏のような飼育能力を持っていないために、自分の妻さえマゾに出来なかったのでしょうか。

49年1月号で、苗木陽子さんが、「動物に変身してしまった私」という編集長へのレポートを寄せられているのを読んで、私は再びショックを受けました。

と言いますのは、塚本鉄三氏と初対面の日に、あれほど激しいSMプレイを展開して、マゾの限りをつくして畜化した陽子さんも、亡き御主人との間ではSMプレイは一回もされなかったということです。

『主人が私のこんなマゾの性格を見抜いてくれていたら、もっと素晴しい夫婦生活が過せたのにと今から思うと残念でなりません』

と、彼女自身の口から言っているのです。

すると、私も妻に対する教育が悪かったのではないかと反省させられるのです。

それにしても苗木陽子さんて、素晴しいM女ですね。49年2月号を手にして、先ず、トップのカメラルポ「ああ、M女狂えり」に目をやり、徹底した禿山作戦を読んで、再び、吐息をつきました。益々エスカレートした陽子さんのマゾぶりと、塚本氏のカメラとペンの冴えは、私をぞくぞくさせました。

次には塚本氏が苗木さんを、どのようにして責めるのか、私は多大の興味をもって、次号の発売を待っています。

○

48年11月号で「私達夫婦のプレイ旅行」を書かれた早坂郁子さん。夫婦の情愛が文面ににじみ出てくるようで、本当に羨ましく思いました。私も一度でいいから、こうしたSMプレイの旅行をしたいものだと願わずにはいられませんが、私にとっては、所詮、それは夢でしかありません。

それなのに、貴方たち御夫婦は、奇譚クラ

イメージギャラリー

『サウナ美容法』

須坂旭



ブ誌上に堂々と発表されるような素晴しい夫婦プレイを楽しんでいらっしゃるのです。限られた人生の中で、なんという幸福なことでしょうか。美しい奥様の美しい緊縛姿態、第一頁の正面向いて縛られた写真の乳房のまるまるしたこと、それに見事な乳首の張り具合など、見ている私はたまらなくなりました。

こんなに美しくて理解のある郁子さんを、奥様に持って、思いのままに責めることの出来る御主人は、なんと幸せな方でしょうか。

貴女は、「私の心の奥に潜んでいたマゾ性を根こそぎ引き出し、苛められ、羞かしめられて、始めて、激しい肉体の歓びを覚えることのできる、今日のマゾ女郁子に成長させられた自分を、ときどき、ふと恐ろしく思うこともありますが、決して後悔したり、悲しく思ったりしたことはありません」と言っておられますが、私には只々貴方がた御夫婦が羨ましくてなりません。

次には、御主人の念願である夫婦交換プレイを実現されて、その結果を誌上に発表されることを望んでやみません。

○

49年2月号で、三浦敬一氏が久々に夫婦のSMプレイのレポート「妻の純子を久々に縛りて」を寄せられているのを読ませてもらいまして、早坂氏御夫妻とは、また変った感興を受けました。

読者と共にある奇譚クラブの良さというものを、そのまま代表したような三浦氏の真面目な文章は、極めて好感の持てるものです。

撮影された純子さんの緊縛写真も、平凡な中にも滋味の深い、如何にも夫婦プレイヤーらしい写真で私も好きです。

三浦純子さんは淑かで、典型的な夫唱婦随の日本女性のように、お見受けします。そして、私のようなS傾向の男性にとっては、それが、たまらない魅力なのです。

こんな女性を妻にしていると、どのように心がなごむだろうかと、思わずにはおれません。もし、塚本鉄三氏のカメラルポに、純子さんが登場するようなことがありましたら、私にとって、こんなに嬉しいことはありません。どうか、万難を排してでも、奥様を提供なさって下さい。

お淑かな純子夫人が、超ベテランの塚本鉄

三氏の手にかかって、どのように変身し、呻き、悶えるか、私たちは多大の興味を以て待っております。

三浦敬一氏よ。どうか、純子さんに、その機会を与えてあげて下さい。お願いします。

○

以前の奇譚クラブには、記憶に残る数々の名作が沢山ありますが、最近の本誌にも、これはと思う小説や読物、告白などが少なくありません。48年9月号から、シリーズ式に連載されている鈴鹿晶子さんの「敗戦悲話北満哀歌」など、身につまされる中々の好読物だと思います。SM的に見ても面白いし、コクのある文章で楽しいです。

私の住んでいる家の近くに、北満から命からがら引き揚げてきた人があって、その人から、終戦後のソ連軍のことをいろいろ話に聞いていましたので、一層関心が持てました。

その人は、当時まだ少年だったそうで召集も受けず、日本が負けてからは、ソ連人宿舎のボーイをしていたそうで、そこで見聞きした日本女性の悲惨な凌辱の実際は、想像以上だったらしいです。

48年9月号から49年2月号まで、半年に亘って連載されてきた鈴鹿晶子さんの作品は、まさに、その極く一部を描いているに過ぎません。が、それにしても、私たち同じ日本人として、日本のか弱き女性が異国のむくつけき男性に、これほどまでに弄ばれ、凌辱されつくすとは、SMの血が沸きたたずにはおれません。

実に妙な気持なのです。一方では、もっともっと虐められてほしいという気持と、他方では、悲憤慷慨せずにはおれないのです。そうした心の中の葛藤とジレンマが、私をしてまた奇妙な快感に浸らせるのです。

こうした複雑な気持を味わうのは、私だけでしょうか。例えば、美少女をなぐさみものにするチンピラの所業を憎みながらも、また反面、その美女嗜虐の行為に羨望を禁じ得ない気持にも似ています。

○

奇譚クラブを読んでいて、私はいつも思うのです。この雑誌の編集者は、私たち読者の心持を、心憎いまでに知っていて、このように全篇、胸をゆさぶられるような編集をするのだろうかと。

ケバケバしさや、毒々しさは、いささかもない編集なのに、新刊を手にするたびに、私たちマニアの胸をドキッとさせる魅力を、いぶし銀のように内蔵しているのです。

49年2月号で〈奇クサロン〉が増頁になりましたが、先日も、私が熱心にその個所を読んでいると、それを覗き込んだ妻が、「貴方も浮気の相手を見つけたら……」と、私にはそんなことの出来る甲斐性のないのを、見すかしているように言うのです。それは、さておき、そんな冗談を喋るくらい妻の方も奇譚クラブを理解してきたということが言えるかもしれません。

さて、〈奇クサロン〉の賑やかな読者の広場の高級サルーンの味は素晴しいです。私もその仲間に加えてもらって、ダベっているような、なごやかな気持にさせられます。

最も身近な妻にさえ、SMの面では見放されている私ですから、せめて、こうした同好者のサロンでなりと、くつろがせてほしいものだと、ひとときの夢を味わうのです。

2月号で荒尾慶子さんの便り、胸を打たれました。文章に、いつものことながら詩情があって、天性のあらわれのような麗質がにじみ出ています。世間からはアブと言われる性癖の持主にして、このような優れた素質を持っておられることに私は意を強くしました。

「SM研究会のことなど」塚本氏の意欲的な活動には敬意を払います。引っ込み思案では何も出来ないということを痛感しつつも、やはり私は、自分の殻の中に、とじ篭り、引っ込み思案にならざるを得ないのです。

所詮、私は〝本の虫〟で終る運命にあるもののようです。



第六十六回

前号まで＝秘密裸女王国の独裁主、**有明**は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその機質に応じて、五段七階級に分類され、巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。貴妃となるべき絶世の美女、**山本百合子**の特訓のためG号作戦を発動した有明は、日本を振り出しに香港経由ヨーロッパに来た有明としてではなく、彼のもう一つの顔**蔡樹理**に変装していた。従う百合子もジャンヌも中国人という触れ込みだった。ヨーロッパでの誘拐作戦は続く。

娼婦ジーナ

狂信的といっていいくらいコチコチのカトリック信者だった両親に反逆を企てて、シチリアの家をとび出したジーナだったが、世の中は彼女が想像したようなバラ色ではなかった。なまじ美しいのが、いけなかった。——というのは、ファウストの中でグレートヘンが言った悲痛な述懐だったが、特にイタリアでは一人暮しの美しい娘をホッておく環境が全くといってよい程、ない。

ミラノのフィアット工場で働いているうちに、アッという間に男を知り、そして棄てられた。それやこれやで、勤め先にも居づらくなってブラブラしていた矢先、ふと知り合ったスイス紳士に熱烈な恋をしてしまった。チューリッヒの実業家だとジーナは、だまされていたのだけれど、本当はヨーロッパ全域に根を張るヤクザ組織の手下で、いわゆる「スケコマシ」常習犯だったから、たまらない。

ひそかに、チューリッヒに「輸出」され、高級コールガール向きの上玉として取引されることになった。

こうなっては、か弱い娘一人では、どうにもならない。ガンジガラメのまま、自ら招い

た運命を、まっしぐらに転落して行くほかはなかったのである。
だが、荒廃した性のひさぎにもかかわらずジーナは不思議なくらい、丸みを増し、美しさに磨きがかかってきた。高価な女を買う男達の社会的地位も高く、彼らと交わることによって次第に社交性を身につけ、教養を増して行った故もあるかもしれない。

二、三カ月もたつと、ジーナを田舎者扱いする人は誰もいなくなった。組織も次第に看視の眼をゆるめるようになる。彼女がドイツ語のレッスンを受けようというと、むしろ歓迎してくれさえした。商品価値を高めるような企てに反対する理由はない。
彼女が軟禁されているマンションは、チューリッヒの中心街から北へ、飛行場の方へ行く山の手の静かな住宅街にあった。そこから十番の電車に乗って、ダウンタウンに出る。一人で行くことが許されたからといって、往復の切符以上の現金は全く渡して貰えなかった。勝手な行動を封じるためであろう。その上、中央駅の近くにあるボスの一人が経営する葉巻屋に立寄ることが義務づけられているので道草は出来ない。そこからランゲージ・スクールまで、歩いて五分位の道のりにすぎぬ。レッスンが終ると、又、葉巻屋に寄って申告してから市電に乗るのである。
すべてが、このように限定された自由なのだが、以前のように部屋に閉じこもっているよりはズッと、ましだった。

ジーナ自身は売春に、それ程、罪悪感を持たなかったし、現在の彼女のような高級コールガールになると訪ねてくるのも決まった数名の、それも飛切り金持の紳士ばかりだったから、衣食住ともに結構、贅沢なのが気に入って、まあまあ、それに甘んじているような傾向になりはじめていた。
そのころ、彼女の運命を、もう一度、大転換させる黒雲が起りつつあった。
はじめ、チューリッヒの町角で擦れ違った有明が一目で気に入ってしまったのである。一旦、こうと目をつけた女をメッタなことで逃す有明ではなかった。
例によって、徹底的な調査が開始されて、数日を出ないうちに、有明は彼女の一切を知ってしまった。金で買える女なら、話は簡単だと思うかも知れない。実際、有明の権力や財力をもってすれば、むしろヤクザどもが驚く位の札束をたたきつけて秘かに囲ってしまうことの方が容易いのである。しかし、有明には奇妙な癖があって、売春婦や麻薬中毒者などをモノにすることを好まなかった。第一ヤクザ組織などと対等に交渉するなど彼の自尊心が許すはずもない。
奪ったものなら、奪い返したっていい——
これが彼の結論だった。

数百年の伝統を誇るシティホールの界隈は狭い街路が入り組んでいて、建物が道の境界までセリ出しているのが特徴だった。歩道はその内側にあった。太いアーチ型の柱が並んで、その奥まった一階を暗くしていた。
電車を降りてチェックポイントである葉巻屋に向う間、ジーナは、いつも、ここを通ることにしている。あまり人通りもない静かさが好ましかったからである。
今日も、そこを通りすぎようとしていた彼女が、何番目かの柱のかげから、突然、伸びてきた腕で、アッという間に、その柱の間に引き込まれてしまった。道側にはサイドスライドの扉を開け放ったトラックバンが柱にピッタリと寄りそうように駐車していた。ジーナは声を立てる暇もないうちに、その中に放

り込まれてしまったのである。
中に待ちかまえていたもう一人が、彼女を羽交い締めにしたかと思うと、ツーンとした麻酔薬の匂いがして、忽ち彼女は気を喪ってしまった。
扉を閉めたバンは何事もなかったように、スルスルと柱の側を離れて行った。

一時間と経たないうちに、ジーナが逃亡したらしいということが組織に報告された。直ちに非常線が、しかれた。警察のそれと同じように、彼等には彼等なりの監視方法が整備されていたのである。駅、空港、国際ハイウエーなどには、それとなく一味の者が目を光らせて、文字通り蟻の出る隙もない。怪しいと思う荷物は、警察官に変装した男たちが立会って中味をチェックするという徹底ぶりであった。
小型トレーラーを引張った蔡樹理の一行も、フランス国境近くの山間で待ちかまえていたパトカーに停止を命ぜられた。
脱獄犯を追っているので、済まないが車を調べさせて欲しい——というのが彼等の言い分だった。蔡樹理は快く、それに応じた。トランク一ぱいに詰め込んである鞄類は到底、人一人を入れる大きさではない。
「トレーラーの中味は何ですか」
「ゴリラですよ、ホラ」



後へ回った蔡樹理が鍵を廻した。覗き込んだヤクザたちが、忽ちタジタジとなった。
トレーラーの中には一メートル四方位の頑丈な鉄檻が入れてあって、その中に、太い首輪をはめたゴリラが、うずくまっていたからである。
読者には直ちに理解できる筈であるが、アムステルダムで日本華族の令嬢、朝小路久子の裸身から噴き出した屈辱の膏汗を吸ったゴリラの毛皮が、ここで又、ジーナの特別な隠れ蓑となり、二度目のオットメをしていたのである。
警察官に化けたヤクザたちの一人が、物知り顔に言い出した。
「そうそう、新聞で見たっけ。ゴリラをペットにしてヨーロッパ中を旅行している中国人が、いるってね。ヘエー。それが、お前さんたちだったんですかい」
「おい、言葉が悪いぞ」
もう一人の年かさの男が、あわてて丁寧に蔡樹理こと、有明に敬礼した。
「この者の失礼な発言をお許し下さ

い。根は良い男なのですが、言葉が一寸ばかりヤクザっぽいものでして……。ですが、もう結構です。どうか、お通り下さい。ボン・ボワヤイジニ」

「メルシー・ボークウ。ご苦労さま」

中国人秘書、許雪玉になりすましたジャンヌが、ニッコリ微笑しながらフランス語で言った。後の座席に坐っていた蔡端麗こと、山本百合子も黙ったまま妖艶な微笑を向ける。二人の美女に見つめられたチンピラヤクザたちは、忽ちトロトロになって棒立ちになったまま、スルスルと国境の方に離れて行くベンツを見送っていた。

かくして、ジーナ誘拐作戦は完成した。やっきとなったヤクザ組織の追求にも拘らず、その後、ジーナの情報は杳として不明のままであった。ただ、数日後、パリからの小包でジーナが失踪の時、着ていた衣服が、ブラジャーからパンティまで、そっくり葉巻屋に送られて来たことだけが唯一つの手掛かりといえば手掛かりらしいものであった。しかし、これとても、彼らを、いたずらにジラし、怒らせるだけだったのである。

その頃、ジーナを運ぶベンツは、もうロッテルダムに、いた。

突然、襲いかかった災難は、わずか一晩だったというのに、ジーナを徹底的に打ちノメしてしまった。

ゴリラの毛皮は、いわば拘束着のようなものだったし、第一、全裸の肌にジカに当る、しめった裏皮の感触も、たまらなかった。むれて流れ出した汗が、その不快感を余計、つのらせるのだった。しかも、最も隠したい部分だけが赤くペイントされて、ベッタリと床に直接、あたっている。狭い鉄檻の中だ。位置を変えるだけでも容易ではない。そこで起る排泄の苦しみ。こらえるだけは、こらえたとしても、それには限度があった。まして、下腹の方から冷えて、下痢気味になっていたとすれば、それこそ彼女の困難は最大級であったといっていい。

それにしてもスペースがない。鉄格子がなければ尻を突き出して外にやることも出来たであろうが、それも駄目となると、どうしても坐っているところで、するしかなかった。

「こりゃ臭いですね」

トレーラーの扉があいて、何人かの顔が覗き込んだ。

「おやおや、ヤッちゃってますねえ。それで臭いんですね。とにかく、こんな動物をお連れになっているんじゃあ、餌はともかく、汚物処理が大変ですね。まあ、結構でしょう。もう検査は終りです」

早口の英語で、こういった男は、税関吏だった。

蔡樹理一行は、たまたま（?）廻航してきた有明のヨットに便乗してロンドンへ行くことになっていた。そこで、積荷などを税関吏が調べに来たのである。

有明のヨットと、その乗組員は、外交官特権で厚く保護されていたし、蔡樹理も、本名の有明を名乗れば、何も検査を受ける必要がないのだけれども、これは秘中の秘だから、まず、中国人、蔡樹理として必要な出国手続きをしなければならなかったのである。第一替え玉の有明がガボンで活躍している以上、有明は二人いるわけにゆかないから、ここでヴェールをとるためには、ガボンの替え玉を呼び寄せてバトンタッチをする必要がある。

とに角、手荷物の検査はゴリラを含めて無事に済んだ。

蔡樹理一行を乗せたヨットは静かにロッテルダム港を辷り出て行った。

海底ドーム

有明が地中海周遊用に建造した美しい中型ヨット「エミコ」号は、先年、不幸にしてマニラ沖に不時着して消息を断った自分の秘書星恵美子の冥福を祈って命名された新鋭船である。と、いってもエミー司令は健在で、今度も、原潜「ネプチューン」号の司令としてこの海域に来ているのだけれど、彼女は、その実名では、二度と地上に戻れなくなったというのにすぎない。本当のところ、有明自身が、ともすれば星エミーが「死んだ」という「事実」を忘れそうになるので、あたらしいヨットに星の名前をつけることにしたのである。

この船は船体と主装備を日本で造り、キャビンその他の仕上げをガボンで行なった贅沢船で、船内中央部にハッチがあって、そこからスキューバで船外に出られるような装置が加えられた。つまり、この方法で出入りすれば、船中、船外から見とがめられずに海中から往復することが出来るわけである。もっとも、これには有明のレジャー用という理窟がつけられていたけれども、その実は明らかに秘密の用途があったのである。そのほか、船底には乗組み員にさえわからないような隠し部屋が、いくつか設けてあって、これも隠密な女囚の監禁用に使用する筈になっている。

「ナニユエノ　テイセンナリヤ。エンジョヲモトメルヤ」

近づいて来たオランダ海軍の警備艇が、発光信号を点滅させた。

洋上に、ひっそりと仮泊する「エミコ」号を怪しんで近づいてきたのである。

すぐに答が返ってきた。

「カンシャス。シュキ（主機）コショウセシガ、スデニシュウリカンリョウセリ。ジリキコウコウ（自力航行）カノウナリ」

警備艇が再びパチパチとさせた。

「オーケーアンゼンナルコウカイヲイノル」

グーッと急旋回した警備艇は、夜目にも白い水尾を曳いて、その灯火が見る見る小さくなって行った。

ブリッジで双眼鏡に見入っていた船長が、ホッとしたように肩を落とした。長身のガボン人である。彼とても有明の本当の顔を知らない。ただ、ガボン建国の恩人として、また実力者として有明を畏れ敬っている。だから有明の行動を疑ったこともないし、若し、不自然な命令があっても、それは国家の機密と考えて盲従しているのであった。このことは他のガボン人乗組員も同様であった。その愚直なまでの信頼を愛して、有明は日本人はおろか、他国籍の人間を乗組ませなかったのである。

警備艇が去って行ったという報告を、有明は海底で聞いた。超音波通信だった。

「エミコ」号は、正しく例の海底ドームの直上に浮かんでいたのである。

「エミコ」号の船底から数名の女囚たちが後手に縛られたまま、水中マスクをかぶせられて一直線に沈んでくる。右足輪に錘りをつけられているから、どんなにもがいても浮かび上れないのだ。

当直のアマゾン女兵が、スキューバをつけて、海底でもがいている女囚たちをドームの中に引きずり込む。

ジーナも、その中の一人だった。

「エミコ」号に積まれたゴリラの檻は、船艙に安置された。乗組員を遠ざけて、有明とジャンヌがジーナを檻から出し、隣の秘密室に押し込んだ。

ここで、毛皮を引き剝がして、生れたままの姿にされる。そして、先客たちと、ひとまとめに繋がれて、慄えながら一時間ばかりを過していた。そして水中へ、このドームへ、たどりついたという次第。

高貴な朝小路家のお姫さまの久子は、気も狂ってしまいそうな屈辱に耐え、このドームの中で、もう一週間を過してきた。

ガッチリと歯に喰い込んだH型のインプレッション・トレイは完全な口枷となって、口を密封してしまっている。もし、これがなかったら、気の強い久子は舌を噛み切っていたかも知れない。それ程、ここでの数日は恥辱そのものであった。

中でも、看守であるアマゾン女兵が日本人ばかりであるのに、囚れの女たちの中で日本人は彼女一人だけだったということである。

彼女の心理は複雑だった。こんな酷いことをする人間が、この世にいたこと。しかも、それが日本人であることが腹立たしかったということも確かである。しかし、それよりも女兵たちが持っている自由、権力が、たまらなく、うらやましかった。同じ日本人なのに何故、自分だけが白人女に混じってこのような凌辱に晒されなければならないのか。

一方で反撥し、一方で羨望した。そして、一日一日と経過するにつれて、後者の方が次第に勢力を増して行ったのである。

空気は、夜間はシュノーケルを使って海面からとるけれども、日中は貯えた高圧空気を徐々に放出するしかない。

ムッとする人いきれと、ジメジメした湿気が窒息しそうに息苦しい。

海水は、いっぱいあっても、身体を洗うわけに行かないから、次第に垢がたまって、家畜のような体臭が漂いはじめる。それすら臭いと感じなくなって行く嗅覚の鈍麻が、おそろしい。

食事というより、餌つけといった方が適当かも知れない。一カ所にドッカと腰かけたアマゾン女兵の前に、鎖の順番に行って跪いて唇を突き出す。その口の中にアマゾン女兵が持ったノズルが突込まれる。丁度、ガソリンの給油装置を、もっと小型にしたようなものであった。アマゾン女兵が引き金をひくと、一定量のドロドロした液体が口中に、ひろがってくる。こぼしたら、それこそ、酷い目に遭うから、誰もかも目を白黒させて呑み込むのである。宇宙食のような成分で、排泄を出来るだけ、尠くするように工夫されてはいても、風味などは全く無視されているから、とても咽へ通るようなシロモノではなかった。

それすら、一日一回、この他は水も飲めないとなれば、ひそかな待ち遠しさが、空腹感をもって迫ってくる。

久子の場合は、もっと苦しかった。口に蓋をされているのだから、ノズルを押し込むわけにはゆかない。そのたび毎に、鼻からカテーテルを挿入して貰わなくてはならないのである。重病人ならいざ知らず、健康な彼女にとって、痛さも痛さだったけれども、屈辱感の方が、もっと切なかった。勝手に鼻をつまれて、きたならしいカテーテルを鼻腔の中に押し込まれるなんて、彼女は口惜し涙をポロポロと落しながら、この地獄のような餌つけを受けるのであった。

しかし、これがどのように辛いものであったとしても、彼女が耐えなければならない、もう一つの苦しみに比べたら、まだまだマシだったといえるであろう。

どんなに入念に製造された宇宙食であっても、百パーセント摂取出来るものはない。幾

許かは小便になり、幾許かは大便となって排出されなければならない。

　勿論、このドームには人に隠れて用の足せるような場所はない。それどころか、食事の時と同じように順番に台の上にあがって、アマゾン女兵の見ている前で、台の下の透明容器に落とすのである。

　アマゾン女兵は、その量、質（柔らかいか固いか？　色は？　等々）をメモしてから流す。

　従って許された時、一日一回だけしか、用を足す機会はない。これは、有明王国の規則に一日も早く馴れさせるための調教でもあったが、何よりもアマゾン女兵の手間を省くためのものであった。

　だから、出ない者には、ドシドシ浣腸が行われ、尿道にはカテーテルを押し込むのである。大抵の女囚たちは、これが辛いので、むしろ、進んでやるようになる。



女の宿命というか、もう一つ、辛いことがあるのを書かなければならない。

　環境の激変は、大概の女囚たちのサイクルを狂わせてしまう。狂っても来なくなった者は稍々ホッと出来るけれども、予定より早く来た久子は、胆をつぶさんばかりに慌てた。

　ツーと太腿を、つたう赤い線は、目立つから、すぐにアマゾン女兵の発見するところとなった。

「まあ、はしたない。あんた、日本人でしょう。はやく申し上げるのよ」

　ピシャリと平手で臀をたたかれて、よろよろと前のめりになる。心がズタズタに破れるような想いだった。

　水が使えないので紙だけである。タンポンが乱暴に装填される。すべて自分の手では出来ないのが悲しい。

　さすがに気の勝った久子もこのときばかりは、オイオイと泣いた。声は出せないけれど、滝のような泪が顔をグシャグシャに濡らした。それとても、自らの手で拭うことも出来ない哀れな女囚だった。

　丁度、そんなときだったのである。

　まんなかの開水面を割って有明とジャンヌが出現した。

　今まで横柄に威張っていたアマゾン女兵たちが、一斉に開股跪坐の敬礼をする。

　ポタポタを水を垂らしなが

ら、うずくまっている久子に近よった有明は眼鏡をはずして言った。

「大分、くさくなってきたな。もう暫くの辛抱だ。あと二、三日すればネプチューンが来るから」

と、誰にともなく言った。白人女たちには日本語が、わからなかったけれど、アマゾン女兵とジャンヌと、そして久子にはハッキリと聞えた。しかし、久子にはネプチューンが原子力潜水艦の名前だということが、わからなかった。ただ、何か、もっと怖ろしいことが起るということだけは朧気ながら予測出来たのであろう、嗚咽に揺れる肩の慄えが一層はげしくなった。

有明の命令で、酸素ボンベをつけたアマゾン女兵が、次々と開水面に、とび込んで行った。水底で苦しまぎれの水中ダンスを踊っている、新入り女囚たちを引きあげるためである。

彼女等は、水中マスクをつけただけで、酸素を背負わせてなかったから、それこそ、窒息寸前の状態だった。といって、錘りをくくりつけられていては浮上することが出来ぬ。

溺死寸前でジーナは引揚げられた。

ヘトヘトに疲れきった彼女には、もう自分が全裸であることを恥じる余裕さえ、残っていない。ズルズルと床を牽かれて、片足をレールから伸びた鎖に留められても、抵抗することすら、しなかった。

だが、無情なベルの音が鳴る。

女囚たちは、そのベルに従って一コマずつ移動しなければならない。

まだ用便のタイムが終っていなかったからである。

台の上の女囚の一人が大小便を済ませた。尻に赤いチョークで×点をつけられる。昨日は白だった。明日になると黄色いチョークが素肌を、よごすであろう。裸身を洗うことがないから、毎日ちがった色で用便を済ませたシルシをつけるのである。これと反対にエサづけを終ったマークは胸乳の上に画く。どちらも一回しか許されないから、済ませたのをマークしておくのである。

一人が台を降りると、次の一人が台の上にあがる。

アマゾン女兵が片ことながら、ドイツ女に対しては、

「シュネール！」

オランダ女には、

「ハースト！」

などと叱汰すると、今はもう恥も外聞もなく美囚は、しゃがみ込んで懸命に、いきみはじめる。

「ギャアッ」

突然、ジーナが、ありったけの声をはりあげて転げ回った。

はじめて電気鞭の洗礼を受けたのである。移動する番が来たのに、グッタリと床に伸びきったまま動かなかったから、忽ち鞭が、とんだのだ。

髪を摑んで無理矢理に立上がらせながら、アマゾン女兵の一人が叫んだ。

「アレグロ（早く）」

苦痛にあえぎながら、よろよろと鎖をひきずって進むジーナの全身を、有明の鋭い目が刺すように見廻していた。

「なかなか、いいじゃないか。肌も、キメが細かい。これは赤札扱いにしておけ」

鶴の一声である。娼婦が、他の貴女、賢女を追い抜いて一等囚扱いとされるのは、正に前代未聞であろう。

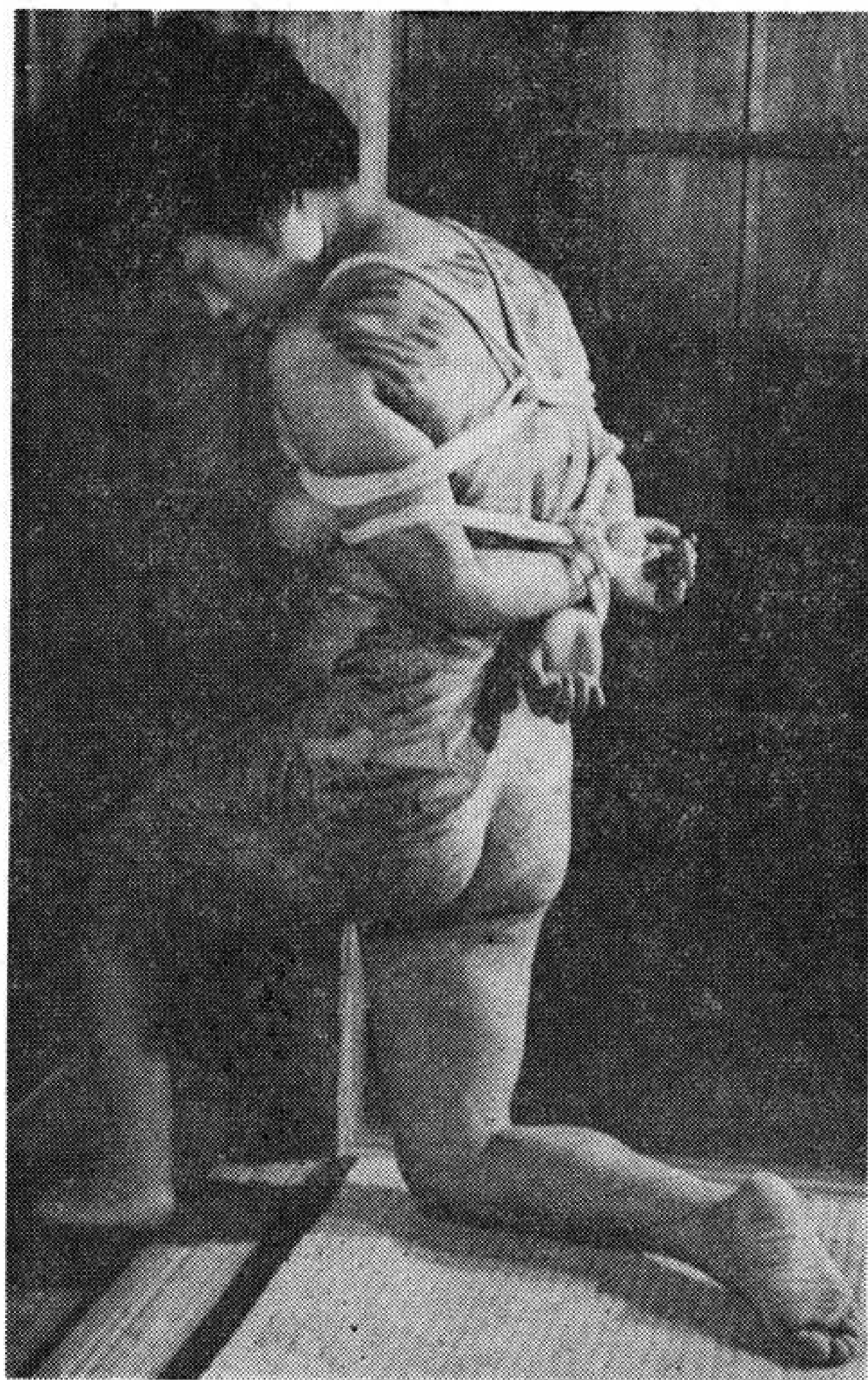
ジー、とベルが鳴った。裸女の群れは、再び横に動いて行く。

――（未完）――

ある刺青女性の告白

私は刺青が大好き

藤川苑子



――（フォト・山原京子）――

私は、どういうわけか刺青が大好きな女なのです。それは高校一年の頃でした。

高木彬光原作の『刺青殺人事件』の映画スチール写真を映画館のウインドーで見た時、身体中が、ぞくぞくするような妙な気分におそわれたのです。

私も、あのように奇麗な刺青をしたいなあと憑かれたように思い、何時までも、その場に立ちつくして見ていました。

何故なのか、自分でも、はっきりとはわかりませんが、私の身体の中に、刺青に魅せられる妖しい血のようなものが流れているのでしょうか。

それからというものは、私の頭から、何時も刺青のことが離れないようになってしまいました。昔から女でも刺青をしている人が、かなり沢山あると、『文身百姿』に書かれているのを読んで意を強くしました。

高橋お伝や、雷お新、人穴お糸など、どれもこれも、みな悪婦や妖婦ばかりかと言いますと、そうではないらしく、外国では一般に素人の女性も刺青をするそうです。

自分の身体の中に、妖婦の血が流れているのかと一時心配しましたが、そうでもないらしいので少し安心しました。

お風呂に漬って、じっと自分の肌に見入っていますと、そこに見事な刺青が彫られている有様が想像されてきて、あたかも自分の全

身が刺青に埋まっているかのような錯覚に陥るのでした。

私は眠られぬ夜など、そういう気分に浸りながら、ついオナニーの快楽に身をゆだねてしまうのでした。私はそんなとき、何時も刺青のことを頭に思い浮べるのでした。

私の近くに行きつけの『幸湯』という大衆浴場があります。そこは花隈という花柳界に近いことから、イキな姐さんが時たま入ってくることがあります。

ある日のこと、私は思わず、ハッとしました。五人ばかりの浴客の中に、何時もと違った女の人を見たからです。

真白い裸ばかりに混じって、全身、青黒く彩ったように、見事な刺青をした女の人が混じっていたからです。

その女の人は、惜しげもなく、刺青のした背中を私のすぐ目の前にさらして、浴槽から小桶で湯をすくって、肩から身体へかけているところでした。

抜けるように色白な顔や、首すじの皮膚にくらべて、朱や藍に濃く彫り込まれた異様な紋様に、私は見とれました。

ふっくりとした豊かな肌に全身彫りの素晴しい図柄の刺青は、なんともいえない妖しい濃艶さを、あたりいっぱいに漂わせているではありませんか。

私ばかりではなく、あたりの人たちも一様に、その女の人の背中を見ていました。

その女の人は、事もなげに美しい顔を、ほんのりと上気させて浴槽の中へ足を踏み入れました。その時、微妙な動きを見せた背中の刺青の素晴しさに、私は思わず、ほっと溜息をついてしまいました。

なんという妖しい美しさなのでしょうか。

首から下、手首から足のくるぶしまで、股のつけ根の処まで、びっしりと刺青をした女の身体を、じかに見たのは、私にはこれが始めてでした。私は、その妖しい美しさに、すっかり魅せられてしまいました。

私はその女の人が身体を拭き終って浴室を出てゆくまで、目を放そうとしても放すことが出来ませんでした。私もなんとかして、この女の人のように全身に刺青をしたいと思いました。私はその女の人を追うようにして浴室を出ました。

入浴によって上気してピンク色に染まった肌に対して、刺青の色は一段と色鮮かになって、惚々とするほどの美しさです。皆一様に物珍しそうに眺めている中で、その刺青の女の人は誇らしげに、男湯の脱衣場との仕切りになっている壁の大鏡に裸身を映して、髪の手入れをしていました。

その刺青の図柄は、両腕には桜と蛇、背中からお臀にかけては二匹の竜、胸と脇腹にかけては菊模様、太腿と脚には牡丹と唐獅子に波をあしらったという、まことに派手なものでした。やがて女の人は緋色の湯文字で腰から覆うと、見事な上半身の刺青も着物の中にかくれてしまいました。

私は、ほっとしたような気分と、もう一度着物を脱いで刺青を見せてほしいと思う気持とで、帰ってゆく女の人の後姿を目で追っていました。

私の刺青に対する憧れと執念といった感情は、このことがあってから一層、激しく燃え上り、日夜、刺青することを考え、夢にまで見るほどでした。しかし、まだ高校在学中の身ですので、どこに刺青したって、かくすことも出来ません。

幸いなことに、私は一人娘ですので、夜は誰に気兼ねすることもなく、夜は六畳の部屋で寝ることになっていましたから、父や母にかくれては、筆や墨汁を枕元に用意しておいて、姿見の前で素裸になり、浴場で見た刺青女の図柄を真似て、刺青模様を自分の肌に描いて楽しみました。

手の届くかぎりの自分の素肌に墨で刺青模様を描いては姿見に映してみる私。それは、到底、本当の刺青には及ぶべくもありませんでしたが、幾分の魅力が、私の切ない欲望を慰める足しになったのでした。

やがて、私は高校を卒業して就職することになりました。父母は私が銀行か大会社へ就

職することを望んでいましたが、私は両親の強い反対を押しきって盛り場の喫茶店のウェイトレスになったのです。

私はどちらかというと大柄で肉づきもよくてグラマーなので、誰にでも年令よりは、ふけて見えるらしく「喫茶ガールにしておくのは惜しい。ホステスになったら、月に三十万や五十万は稼ぐことが出来るだろう」なんていうお客もありました。

私は暇があれば、ボーリング場やダンスホール通いをしてはボーイフレンド探しをやりました。そこで私は今の彼と知り合ったのです。彼はバーテンの見習いで住込みでした。

彼は片田舎の出で、次男坊なので都会へ出て自立するためにバーテンの見習いになったのだそうです。私は、いつか彼と肉体関係を結んでしまったので、二人で間借りして同棲するようになり、両親とも喧嘩して、とうとう、家を出てしまいました。

彼と同棲するようになってからでも、私の刺青に対するうずくような憧れは変りませんでした。若い肉体の有り余る性欲は、刺青のことを思うと堰を切ったように、溢れきってしまうのでした。しかし、どうして、この変った私の欲望を彼に打ちあけたらいいか、私は、ちょっと悩みました。

しかし、私は勇気を出して思いきって彼に告白することにしました。そのきっかけにしたのは、私が秘密に蒐めていた刺青女性の写真アルバムや本を、夜、ベッドの上で見ることでした。いつものように、彼がおそい時間に帰ってくるのを、ベッドの上でアルバムを見ながら待っていたのです。

彼はベッドの中へもぐり込んでくると、何時ものように、私がすがりついてキッスをしてくるものと思っていたようでした。しかし私は刺青の写真アルバムに夢中になって、見入っていました。

全裸の刺青の女体の写真が、幾枚も貼ってある私の秘密のアルバムを見たら、彼は何と



イメージギャラリー……『柔肌不動』……マエダ・ヒオミ

言うだろうかと、小さなスリルと期待に私の胸は妖しく、ざわめいていました。
「そんな変な写真、一体、何処から借りてきたんだい？」
案の定、彼は尋ねました。
「私が前から蒐めていたのよ」
私は用意していた答をしました。
「苑子は、そんな刺青が好きかい？」
彼は私の顔を、じっと見つめました。
「好きよ。私、刺青が大好きなの。ねえ、私の身体に、こんなの彫ってくれない。私、ずうっと前から、こんな刺青をしたい、したいって思っていたの」
私は、そう言ってしまって、ほっとしました。彼が賛成しようと反対しようと、是が非でも刺青を彫るんだと、腹の中で思っていたのでした。
「お前の肌は色が白くて、ぽちゃぽちゃっとしているから、刺青を彫ったら、さぞ綺麗だろうなあ。見事な彫り物になるだろうな」
案外、彼は素直に賛成するので、私はしめしめと思い、すかさず
「ええ、きっと素晴しいと思うわ。貴方にあげた身体ですもの、お好きなように、私の肌に刺青を彫ってよ。ねえ、お願い」
「そりゃ、彫ってもいいが、刺青というものは一度、彫ったら死ぬまでとれないいんだよ。だから、今、流行のボデイ・ペインティングというのがあるだろう。あれをやろうよ。あれだったら、とれるからな」
このようにして、彼と私のペインティングのプレイは、その翌日から始まりました。
ベッドの上に全裸でうつ伏せになった私の上に彼はパンツ一つの裸で馬乗りになって、絵筆で刺青の図柄をつけはじめます。もし、この有様を他の人が見たら、全く何という異様な光景だろうと私は思いました。
十九才の若い肉体ですもの、そうした刺青プレイをやったあとの猛烈なセックスプレイは楽しいものでした。
首から下、足の裏に至るまで、凄いと云おうか、何と云おうか、セクシーな刺青で、私の肌は埋めつくされるのです。一体、図柄は何かといって聞かれても、それは答えるわけには参りません。絶対に人には見せられないみだらな図柄なのです。只、想像におまかせするしか、ありません。ですから、勿論、人様の前にさらすなんてことは到底、出来ない図柄なのです。
そのうち、私は、このボデイペインティングの刺青を鏡にうつして眺めているだけでは飽き足りなくなりました。実際に刺青を彫られる時に味わう苦痛のことを想像すると、私の性感は、いやが上にも昂まるのです。
それは早坂さんご夫妻や渡部さんご夫妻が試みておられた〈針責め〉です。
彼に縫針で、刺青の部分を実際に突き刺してもらうことによって、私は刺青を施されている気分を味わうことが出来ました。
殊に性感覚の強い乳頭の周囲や肛門のふちを彫ったりする時の痛さや快感は特別なもので、殊にヴィーナスの丘や、その下に刺青を彫った時の感覚は忘れることが出来ません。
奇ク誌上でよく見かける剃毛を経験したのも、こんな刺青を彫られた時でした。そんな時、私は何度も何度もオルガスムスに達しては、一時、刺青を中止させるまでに至りました。刺青の本当の醍醐味がわかるのは、私のようなマニアでなければ味わえないのだと私は思います。
脂ぎった私の肌に、ぷつぷつと、針の束を刺し貫く快味、血のにじんだ皮膚の痛み。それは、なんともいえないSMの味です。
私の洋服の下にかくされた肌に、見るもグロテスクな刺青の図柄が描かれているなどとは誰も思っていないでしょう。これは彼と私と二人だけの秘密なのです。
私は今、本当に刺青を自分の肌に彫られてみたいと切に考えています。
彼に身体のどこへ針の先を当てられても、身ぶるいするような快感に呻き声さえ洩らす私ですから、もし、実際に刺青を彫られたらどんなことになるでしょうかしら。

連載・時代S小説

紫蘭の門

（32）

風流極道軒

クレオパトラは大きく開き…、キューリ夫人は淑かに……、ジャンヌダルクは無理強いで、シバの女王は如何ようぞ……？



オランダの美女

井原西鶴の「好色一代男」に、地黄丸、女喜丹、りんの玉、なまこ輪、水牛の姿、おらんだ糸、錫、革紐、ふんどし、丁子油、さんしょ薬、枕絵、えのこづちの根、綿貫、水銀、牛膠、荒縄、唐がらしの粉などが〃床の責め道具〃として列挙されているところをみると、いまも昔も男が女を哭かせるためには人智の限りをつくして楽しい苦労をするものらしい。

「まだ来ぬかの、元禄屋は。珍客も、ほどなく見えるというのに」

小石川の中屋敷で、老中の領田下野は珍しく落ちつきを失って廊下を行ったりきたりしていた。

領田さまの中屋敷と云えば、嵯峨菊の名所として江戸中にきこえた名所であるが、桜の花も、また美しい。

広い邸内に何百株もあろう八重、一重、染井、吉野と各種の桜が爛漫とした花を咲き匂わせているのだが――。

さて、いつの代にも花よりも美しいもの、それは女たち。

中庭に敷かれた緋毛氈の上に、ずらりと並んでいるのは侍女、腰元たちであろう。黄八丈あり、桐生銘仙あり、結城紬あり、模様も矢がすりを筆頭に亀甲、鶴丸、臥蝶と、まさしく百花繚乱の研を競っていた。

やがて、

「元禄屋さまがお見えになりました」

という声とともに建仁寺垣に姿を見せた元禄屋は、居並ぶ女たちに虚をつかれたような

顔をしたが、敷石づたいに歩んでくると

「これはまた、たいそうなお出迎えで恐れ入ります」

「フッフッフッ、おぬしのためと思うたか」

　ふたたび虚をつかれたものの、元禄屋は、

「これはお人が悪い。私のためではのうて誰か珍しいお客人がおいでなさいますので」

「ぜひとも引き合わせたいと思うての。異人じゃ」

「異人……すると南蛮人で」

「いかにも。名をヘンドリック・ファン・メルデルフォールトと申してな」

「舌を噛むような名でござりまするな。やはり和蘭人でござりまするか」

「長崎出島の商館長が出府するのに従って江戸にきたのじゃが、国王の特別任務をうけておっての」

前号まで――**徳夜叉**の隠れ家がわかれば戌夜のロザリオを手に入れることができると**元禄屋**は、**鞭兵衛**たちに穴沢流の秘術をつくして**お景**を責めさせてやっと白状させることができた。直ちに隠れ家の襲撃を命じて出発させたが、一方では**領田下野**の招待をうけてその中屋敷へと赴いていった。

「してそれは」

「例の、それ、あの女の件よ」

「あの女…………モニカのことでござりまするか」

　モニカ――正式にはモニカ・ファン・インダイクという。昨年暮、男装して和蘭商船の船員になりすまして密入国、邪宗門禁制の日本でキリスト教を伝導しようとしたところを発見されて江戸送りとなり、小石川の切支丹屋敷に閉じこめられているということを元禄屋は噂話として聞き知っていた。

「モニカを釈放せよと云ってきてな。ハッハッハッハ、たかが女一人のことで国王が使者を派遣するとは、和蘭という国は奇妙な国柄じゃて」

「お許しになりましたので」

「無論じゃ。日本に留めておいても何の役にもたたぬゆえ、帰してやることにした」

　領田が声高に笑ったときであった。庭先で、突如、女の悲鳴があがり、つづいて押しころすような男の声――

　見ると緋毛氈の上に居並んでいた女たちのなかほどで、二人の男が暴れていた。

　何事か――という元禄屋の視線をうけた領田下野は、

「はやくも始めおったわ。美女衛門のやつ、待ちかねたらしいの」

　女たちのなかから友鶴散らしの江戸小紋を着たひときわ美しい女をひきずり出して、いましもその帯に手をかけているのは、元禄屋にも見覚えのある逆剥の美女衛門と、その子分の美男の槍助に相違ない。

「美和じゃ。覚えておろうが、元禄屋」

「はい、たしかに」

「余の家臣、いや、家臣であった御弓組百五十石衣笠内記の妻の美和じゃ。どうじゃ、少しも、おとろえを見せてはおるまい」

　得意気に領田の云った意味はすぐ察しがついた。豊太閤五夜のロザリオのうち乙夜のロザリオを隠し持っていた罪で捕えられ、夫妻ともども激しい拷問をうけてのち、この中屋敷で幽閉生活をおくっている女であった。その美和の容色が、いささかも衰えを見せていないのを、領田は自慢したかったのである。

「むしろ前よりも頬のあたりに肉がついて、いっそう色っぽくなったようで」

「そうじゃろうとも。よい食事を与え適度の散歩もさせてある。なんといっても武家の妻じゃ。命令に背くと内記を縛り首にいたすと脅してやると、フッフッフッ、なんでも素直

に従いおるわ」

鈴木春信の錦絵のなかから抜け出してきたような女だと元禄屋は思ったことがある。その初々しい美しさに溢れている美和が、悍馬の生皮を逆剝にしたと云われる美女衛門の毛むくじゃらの腕でもてあそばれて、次々ときものを剝がれている光景は、春の午後に相応しい妖艶さと云えた。

つづれ織りの名古屋帯が大蛇のように躍ると、伊達巻や帯締めが小蛇のように這い、うすい絹の帯揚げが、紅い蝶のように桜の下枝に舞っていく。

「ところで、なぜ、そのヘンドリック・ファンなんとか申す異人を、この屋敷に招かれますので」

美和から眼を離さず元禄屋が尋ねると、

「物好きな男での。日本の拷問が見たいといってな。どうやらモニカが切支丹屋敷でうけた拷問についてしゃべったらしいが、後学のために是非とも拝見したいと申すので」

「おひきうけなされましたのか」

大きくうなずいた領田は、

「和蘭で裁判官をつとめておるという。真実を白状いたさぬ犯人を責めるには、いかなる方法があるか、はるばる日本にまでやってきたついでに学んで帰りたいとよ」

「それはまた殊勝なことで」

元禄屋はニヤリッとした。ただ、拷問を見せるだけなら伝馬町の拷問蔵にいけばよい。それをこの屋敷に招いたところ、領田もどうやら一緒に楽しみたいらしい。さいわい即席の犯人には、ことかかぬ。

「ア、アレーッ。お、お許しを！　許して、アレーッ」

すでに腰紐をとられ、淡紅色の長襦袢もはぎとられて純白の半襦袢と緋色の湯文字姿にされてしまった美和の唇から、もの悲しい叫びがあがる。それにしても、どうして女は、こうも自分自身を縛りつける紐類をたくさん身につけているのであろう。

落花狼藉——あちらこちらに散らばっている小物類をかきわけて腰紐を数条、拾いあげた槍助は、胸のあたりをおおって蹲ってしまった美和にちかよると、

「拷問のまえに裸吟味とまいりやしょう。万にひとつ、蚊やのみにでも噛まれた痕があったんじゃあお屋敷の名折れ、ひいては日本の女の恥でござんすからねえ」

右手をつかみあげ左手をそれにそえると、ひとつにして括りあげ、

「立ちませえ」

眠けを誘うような春の大気を、槍助の鋭い声が裂いた。

美和は、観念しているはずであった。夫を救うために、総ゆる辱かしめに耐えてきたここ数カ月の暮しであった。屋敷のなかを一糸もまとわぬ身で縛りあげられて引き廻される目にもあったし、安房東条十万石随一と謳われる美しい顔を足蹴にされる屈辱もうけた。

女郎屋に売りとばされた女が、まず最初に裸にされ、男たちによって盥廻しにされ、いためつけられると、あとはもうどうにもならないと観念してしまうように、美和も観念しているはずであった。

が、いま、春のうららかな日差しのもとにひき出され、列座の男や女が皆きらびやかに着飾っているなかで、ひとり裸同然にされるとなると、どうしようもなく新しい羞恥がこみあげてきて、

「お許しを……お願いでございまする」

せつない訴えをつづけるのであった。

それを無視して槍助が、両手を括った腰紐の一端を桜の下枝にほうりあげると、「よいしょ、よいしょ」と懸声もろとも、美和を吊りあげていく。

「ア、アッ……アッ……」

喘ぎとも呻きともつかぬ叫びのなかで、緋毛氈の上の白足袋が爪先立ちとなり、微風が湯文字の裾を吹き過ぎていった。

ハラ、ハラ……と桜の花びらが、結いあげたばかりの勝山髷に降りかかる艶めいた光景を眺めながら、領田が、

「ときに、元禄屋。雲取山にも、いなかったそうじゃの」

元禄屋の顔に苦笑が、うかんだ。

「皮肉でございまするか、領田様」

「ハッハッハッ、何条もって皮肉などを申そう。むしろ同情しておるのよ」

五夜のロザリオのうち残るひとつ「戌夜」を持っている怪盗・徳夜叉の隠れ家を、その情婦・小紫のお景を穴沢流中高舟の拷問にかけ、白状させることに成功した元禄屋は、直ちに羅卒の鞭兵衛を始め、北町奉行所の与力・工頭監物まで参加させて、青梅街道を西に三田、古里と過ぎて氷川宿、ここから日原川沿いに隠れ家のあるという雲取山に向わせたのであったが、数百人を動員して探索四旬、山狩りまで行なったのであるが、見つかったのは樵夫の小屋が一軒、徳夜叉はおろか子分の姿ひとつ見出すことはできなかったのである。

「して、あとは、いかが致したな」

「お景を責め抜いてみましたれど……」

「白状せなんだと申すか」

「なにひとつ、雲取山と云ったのは口から出まかせ、誰がまことのことを云うものかと」

「けなげな女よのう。当節の旗本など足もとにも及ばぬ立派な振舞い。ほめてとらせてはいかがじゃな」

たしかにお景という女、敵ながら天っ晴れなもの——元禄屋は領田の言葉に、ふたたび苦笑するほかはなかった。

「冗談は別にして、その女。どうじゃ、ヘンドリックに責めさせてみては。南蛮の拷問が案外、効果を発揮するやも知れぬ」

「考えてみましょう」

元禄屋が答えたときであった。

「ヘンドリック様、ご到着」

樺山の声がひびいて、敷石づたいに大男が入ってきた。

元禄屋の第一印象は、南蛮屏風でよくみる異人の姿とは、大変な違いがあるということであった。それもそのはず、天保四年と云えば十九世紀も半ばに近い。いつまでも十六・七世紀のポルトガル人のように、プールポアン（上衣）に馬毛や羊毛を入れてふくらませたり、肩にエポーレットをつけたりしているはずがない。エンパイア・スタイルというのであろうか、上衣は燕尾形のフラック（のちのフロックコート）に、薄い鼠色のパンタロン。手にした帽子を胸もとにあてて軽く会釈をすると、

「コンニチハ、ミナサン」

流暢な日本語であった。

元禄屋の第二の印象は、美しい——ということであった。もちろんヘンドリックのことではない。その後につづいているモニカ・ファン・インダイクを一目見ての所感である。聞くところによると〝ファン〟というのは貴族にのみ許された称号であるということだが午後の日を浴びて輝く髪の毛は、黄金を鏤めたように思われたし、乳房のふくらみまでのぞかせた胸の白さと豊かさは、異様なばかりの肉感をもって迫ってきた。そして、

「ミナサマ、コンニチハ」これまた美事な日本語でいって恭々しく頭を下げたが、廊下の上にいる元禄屋には、剝き出しの背中がまるみえで、三度その大胆さに息をのまなければならなかった。

モニカのつけているのは、ロマンチック・

スタイルとよばれる当時の流行で、細いウエストと、まるで落下傘を開いたときのように大きな絢爛としたスカートで特色づけられる衣裳であったが、なかでも背面が、両肩からウエストあたりまでV字形に裂けて、日本では湯上りの女が化粧するときでも、こんなに肌を露出させることは、まず考えられない事であった。

「南蛮紅毛の女の風習じゃそうな。国柄とは云え恥知らずのことよのう」

　元禄屋に低く耳打ちしたものの領田、ニヤッと笑って見せたところ満更でもないらしく

「ようこそ御来駕召されたの、モニカ殿」

　と庭へおりていくと、モニカの右手をとってその甲に軽く口をつけてみせた。

　これまた南蛮の風習らしい。

　老中ともあろうものが――と思わぬでもなかったが、数日前まで、切支丹屋敷で、さんざん責めたてたお詫びの意味もあるのだろうと元禄屋は見過すことにした。

　領田の口添えでひととおりの紹介が終るとさてヘンドリックが、待ちかまえたように、

「拷問、見セテイタダキタイ」

　と、さっそく要望した。

「いかにも。そのためにおいでになったのでござるからの」

　領田の視線の行方を追ったヘンドリックはそこに美和を認めると、

「オオ！」と大袈裟な声をあげて、和蘭語でなにかモニカと二言、三言、話し合った。意味はわからないが、大股に近寄って、もの珍しそうに眺め始めたことから、異様な興味を抱いていることがわかる。

「日本では、拷問のまえに、まず裸吟味にかけまする」

　と云ったのは、そばに控えていた下村六平であった。「馬竿筒」を献上することによって、軽輩からいっきょ衣笠内記に代って百五十石取りに栄進し、今日も拷問方差配を命じられている男である。

「ハダカギンミ……ソレナンデスカ」

　ヘンドリックの問いに、かたわらのモニカの顔が赤くそまった。

　切支丹屋敷で彼女が何度も聞かされ、そしてやられた屈辱を想い出したのであろう。

「裸体にいたしまして、すみからすみまで調べることでございまする」

「ホオウ、ソレ面白イコトネ。オランダデハヤリマセーン。効果アリマスカ」

　下林は、かしこまった口調で、

「日本の女は肌を他人に見られることを極度に、いやがります。ことに武士の妻ともなりますと、裸吟味にかけるといっただけで、もう身も世もなくなって、包みかくさず、いっさいを白状するものでござります」

「和蘭ノ女モ同ジデス。ネ、モニカ」

　モニカの顔が、いっそう赤くなるのをみて元禄屋は女の羞恥というのは洋の東西を問わず同じものなのだと知った。それなら、なぜこんなに普段、肌を露わに見せつけるのか。

　元禄屋の眼のまえで、モニカの白いうなじが春の陽に照り映え、産毛が淡い光を、はなっていた。

「始メテ下サイ」ヘンドリックの声に、

「いや」と下林は、さえぎって「ヘンドリック様とモニカ様のお二人に、やって頂きとう存じます」

「オオ！　ワタシタチニデスーカ！」

「ハ、ハダカギンミヲコノワタシニ！」

　二人が同時に叫ぶのを領田が、うけた。

「いかにも、お二人にやって貰いたいのですじゃ。せめてもの罪滅ぼしに」

「罪ホロボシ……ワカリマセーン！」

　といったもののヘンドリックの手は、早くも美和の半襦袢の襟にかかっていた。

この南蛮人の目にも美和の美しさは理解できるのであろう。
「美シイヒト……江戸ニ来テカラ始メテミマス」お世辞ともなんともつかぬことを云うと
「オ殿サマノオ許シデマシタ。アナタ、ハダカニシーマス」
　長くて太い腕であった。褐色の毛が指々の股にまで生えていた。襟にかかったその手が躍ったかと見ると、
　――シュ、シュッ――

イメージギャラリー　『嬲り責め開始』――岡　たかし



薄い布は苦もなく縦に裂け、つづいて横に破れ、小さな塊りとなって宙にとんだ。
「ア、アッ……」
　桜の下枝に両手吊りにされた美和が激しく顔を左右に振る。生れて始めてみる異人のために裸にされる！　という恐怖が五体を突っ走って、目のまえが、まっ暗になった。
「スバラシイ女……」
　採ったばかりの水蜜桃のような乳房をジロリと眺めたヘンドリックは、美和のむき出しになった脇腹に手をあて、ゆっくりと揉みあげていったが、頭上に高く伸びている腕の付根の蒼白い腋窩に生え揃った腋毛に興味をおぼえたらしく、
「……黒……ソシテ白……何トモイエナイ、美シサネ」
　といいながら、ペロリッと舌を出すと、腋に顔をあてがって舐めた。
　その不意打ちに、美和の唇から悲鳴が、あがった。
「ヨイ味デース。和蘭ノ女性ヨリモ、高貴ナ匂イシマス」
　高貴な匂いというのが何を意味するのか。今日に備えて、ここ数日間、使わせている伽羅の香りをさすのか。それとも、南蛮の女よ

りも体臭の少ないと云われる日本女性の淡白な香りをさすのか。領田にもわからないままに、右腋、左腋と味わったヘンドリックは、
「ツギハ、コノスカートデスネ」
といい、（君、ドウカネ、脱ガセテハ）とでもいうふうに、モニカに向かって指を鳴らした。
下林たちが驚いたのは、その時であった。
顔をあからめさせていたモニカが、指が鳴ると同時にニッコリと笑い、
「ワタシ、ヤリマース」と進みでたではないか。そして、なんのためらいを見せるでもなく美和の湯文字の紐に手をかけ、
「コレ、スカートデハアリマセン。ユモジトイイマス。ワタシ、知ッテイマース」
怒ったような調子でいい、乱暴な手つきで紐を解いていく。
日本の女なら――とてもこんな真似はできない。やはり南蛮紅毛の女は恥知らずなのか――一同は、鼻白む思いになった。が、その疑念は、すぐに消えた。モニカの指から抛りあげられた湯文字が、春風にのって十数間かなたの石燈篭にかかるのを見送ったモニカは視線を羞恥に悶える美和に返すと、
「女ノヒト、コレヲトラレル。死ヌホド恥カシイ。ワタシ、何度モ抗議シマシタ。牢役人許シテクレマセンデシータ」
「ア……アッ……」
右膝を「く」の字にまげて、いくらかでも隠そうとする美和の絶望的行為を凝視するその青い瞳の奥には、日本でうけた非道な仕うちに対する憎悪が、ギラギラ燃えているように思われた。
いまさら詫びるのも気がひけるのだろう、苦笑して聞いている領田の顔を振り仰いだ下林が、
「裸吟味はこれでよろしゅうございますか」
と訊ねる。
「マダデス。日本の牢役人、コレクライデハ許シテクレマセンデシタ」
モニカの白い指先が、美和の乳房にのびたかとみると、
「ヘンドリック！」と、あとは和蘭語になったが、どうやら一緒に撫でようという意味らしく、ヘンドリックの右手が、「く」の字に曲げられた美和の右膝にかかった。
「見セナサーイ！　スベテミセロ！」
「ア、アレッ！　お許しを……」
美和の喘ぎが、悲しげに空気をふるわす。
「許して……許して下さいまし！」
「ダメ、許サナイ。ワタシ、コウサレタ！」
夏ぐみのような乳房を摑んでいたモニカの指がスウーッと下って情容赦もなく匂う柔肌を這い始める。
「ヒ、ヒャアアッ……」
毛虫の這うようなその感触に、美和が悲鳴をあげて、のけぞる。と、ヘンドリックの腕が咽喉にのびて、がっちりと右側から抱きこみ、淫らな笑い声とともに、自分の顔を押しつけていく。
「いや、いや！」
二言、鋭く叫んだが、あとは、ム、ム、ムウ……という呻きにかわったのは、唇を激しく吸われ始めたせいであった。
接吻――この言葉は比較的新しい言葉で、安政二年（一八五五年）刊行の「和蘭語彙」に「クス」の訳語として登場するのが日本歴史で最初だという。が、もちろんそれ以前になかったわけではなく、「口吸う」という言葉で鎌倉時代の諸書に散見している。平安時代には、親嘴・鳴接・呂など中国語がそのまま用いられていたらしい。「呂」という言葉はまさしく、ぴったりの表現で面白いが「口を吸う」と云えば、豊太閤が朝鮮出兵に際して肥前名護屋まで本営をすすめたとき、大阪

城の淀君に「そもじさまの口吸いたく候」という手紙をおくっていることは、あまりにも有名で、恐らく日本人でキッスのことを、ありのままに手紙に書いた最初の人物ではなかろうかと思う。が、これは先駆的特例で、この時代に男と女が人前で堂々と接吻することは、まったくありえないことで、ヘンドリックの行為に庭中が、どよめいた。

なかでも、見たくはあるし見れば、はしたないと後指をさされそうで、もじもじしながら、それでも上目づかいに、ちらちらと美和の裸吟味を盗見していた腰元たちの間から、異様な、ざわめきがおこった。女というものは由来、人目にたちたがるもので、身代りになるかと云われれば怖気づくくせに、一人、多くの男たちの視線をあつめている美和に、嫉妬めいた感情を抱いていたのである。

その眼前で、自分たちが、まだ経験したことのない行為を美和がうけているのだから、破廉恥な女！　といくら心で誇っても、熟れた肉体は小刻みに震えていた。

モニカが躰中を撫で廻し、ヘンドリックが思う存分にキッスするのに、どれだけの時間がかかったであろう。

桜の花びらが、ひらひらと緋毛氈の上に舞い散り、用人の樺山たちが運び出してきた拷問道具に、日差しが無心に降り注いでいた。

異国人のまえで

裸吟味の終った美和は、あらたに用意された荒筵の上に正座して坐らされた。

肌に喰いこむ縄も北町奉行所制式の五尋の白縄なら、縄掛けも竹内流乳房縄——素ッ裸であることを除けば、伝馬町牢屋敷の女囚と異なるところはなかった。

「ではまず、笞打をとり行ないます」

下林の声がひびくと床几からたちあがったヘンドリックが三脚のついた黒い箱にちかづいた。この箱が、タルボ・タイプの写真機であることとは、昨年夏、菊亭貴子を撮影したことのある領田や元禄屋は知っていた。と、

——バシッ！

と、こきみよい響きが駘蕩とした空気を裂いたかと思うと

「ム、ムッ！」美和が呻いた。

つづいて、バシッ！　バシッ！　バシッ！

紫の元結は、すでにきれて、崩れた髷が頬にかかり、きちんと揃えた両膝が、ややもすれば割れようとする。

笞打ちは別に縛敲とも云う。長さ一尺九寸の割竹を二つに合わせて麻苧でつつみ、その上を紙こよりで厳しく巻いた箒尻（ほうきじり）で背、または尻を敲くのである。何回、打つかは、きまっていない。女囚が白状するまで打ちすえるのであり、この際、後手に縛った両手を肩近くまであげさせておかないと背骨を直接、打つことになり、女囚は失神することがあるという。

いま、彼らには、美和に白状させる、なにものもない。ただ、和蘭人へ「参考」として見せるだけなのだ。

早くも赤いみみず脹れが背から尻へと走り領田が、傷つけるには惜しい肌と気をつかったとき、ヘンドリックの撮影がすんだ。

「次は、石抱きの刑！」

下林が叫んだ。ただちに美女衛門と槍助が算盤台を持ち出してくる。例の麟の木か赤松材でつくられたギザギザのある責め具であるが、これはすさまじい拷問で、二尺二寸に七寸の十貫もある伊豆石を膝に乗せられては、莫連女ならいざ知らず、美和では、ひとたまりもなく膝が折れてしまうであろう。

チラッと下林が窺いみると、領田も不安な表情をうかべた。

藩中随一の美女――これからも、しばしば酒席、その他で、嬲りものにして楽しまねばならない。座蒲団でも膝の上に敷いてやれと口を開きかけたとき、モニカが、

「ソレ、カマワナイ。牢役人、ワタシニモ許シテクレタ。ソノカワリエビ責メ。コレ、何度モヤラレマシタ」

と助け舟を出してくれた。が、ヘンドリックが、それではおさまらない。誰か坐るだけでもと強引に要求し、腰元の一人が、長襦袢姿で算盤台に坐り、一枚だけではあったが伊豆石を乗せられて気を失う破目に陥ったのであった。

その騒ぎで半刻ばかりが過ぎた。陽は、西に傾いて、海老責めにとりかかろうとする美女衛門たちの影が、石燈篭にかかったままの美和の湯文字に色濃く伸びていた。

「コノ縄ヲココニ掛ケルノデスネ。コノ縄ハドウシマスカ。オウ、ソウデスカ。コノ足首ニ結ビツケルノデスネ」

ヨーロッパでは縄を用いての拷問が少ないせいであろうか、それとも、日本の女の美しい肌に少しでも多く触りたいせいであろうかヘンドリックは、歯を喰いしばって耐えている美和の脇腹にさわり、肩を撫で、弾力のある太腿を揉みあげる。

美和は、もう必死で耐えるだけであった。夫の内記の生命がかかってさえいなければ、とっくに舌を噛んでいたはずであった。

（死んだつもりで……私はもう、死んでしまっているのよ、美和！）

いくら心に云いきかせても、目をひらけば領田たちが見え、鼻孔を南蛮人の強い体臭が刺戟する。

「アッ！　アアア……」もう、許して下さいとは云わなかった。云っても到底、役にはたたない。いまは、黙って耐え忍ぶほかはないのだ。

（あ、あなたさま……）瞼のうらに、ガンジガラメに縛りあげられて逆さ吊りにされている夫の惨めな姿がうかび、思わず、

「ア、アッ……アアア……」

嗚咽が、こみあげてきた。

「面白イデス。タイヘン参考ニナリマス。日本ノ拷問、帰国シテ、サッソク応用シマス」

高手小手に縛られたうえに、上半身を前にかがめ、顔がいまにも足首に、くっつくかと思われるほど縄でひきよせられた美和の姿に感じいったヘンドリックは、さっそく前後左右からシャッターを、きるのであった。

「この海老責めは、なんでもないように見えますが、実は大変な苦痛を女囚に与えます。女として、ほれこのように」

と下林は、弓の折れで、惨めにひらかれている内股を指して、

「あぐら縛りにされているという恥かしさもありますが、小半刻もたたないうちに油汗をにじませて苦しみはじめます」

「ソレタシカデス。私、十五分クライデ降参シマシタ」

血のように赤いワインの入ったギヤマンの盃を干しながらモニカが云う。

「降参……オオ、モニカ、神ノ教エ捨テタノデスカ」

「チガイマース！　ナゼ日本ニキタノカヲ話シタダケ、ソレニ、オランダノ国ノ事情、問ワレルママ、シャベリマシタ」

同じようにワインをのみながら元禄屋は、このモニカという貴族の血をひくといわれる女が、切支丹屋敷でむくつけき牢役人たちに責められる場面を想像してみた。

人間ばなれした？　大きさだけに、なにか動物を責めているようでもあり、目の色の違いをのぞけば鼻もあり口もあり、ましてや巨大な乳房の持主だけに、壮絶な責め場のよう



イメージギャラリー……『拷　問』……市原 幸三郎

にも考えられて、
「牢役人たちは、さぞかし喜んだことでござりましょうな」●

と領田に、ふと耳打ちをしたが、それが聞えたのか、モニカが、
「喜ビマシタトモ！　三日ニ一度ハ私、ヒキ出サレマシタ。ソシテ、ハダカニサレテ、縛ラレマシタ。皆サーン、アチラコチラニ触ッテ、笑イマシタ。コ、ココモデース」
突如、たち上ったモニカは、美和のそばにかがみこむと、グイッと右腕を伸ばした。
「ア、アッ……」
「私、コンナニサレマシタ。役人タチ、ココヘ、指、入レマシタ。何人モ何人モ！」
語尾に力がこもったのは、動作がともなっているせいであった。
美和の悲鳴がほとばしり、下林と槍助が左右から、がっちりと肩を押える。
「コンナニ！　コンナニ、サレマシタ！　モット、ヒドイコトモ！」
「モットヒドイコトダッテ？」
ヘンドリックが驚いて尋ねると、さすがに頬を染めたが、モニカは、激情のおもむくままに、「コウシテ！」と大声を出すと下林たちを押しのけて美和の双臀を蹴った。が、どうやら予期したとおりにはいかなかったらしく、あらためて前に回り、「コ、コウシテ、サカサニサレマシータ！」
スカートがひるがえったかとみると、美和の裸身は、海老縛りのままで後に倒れた。
「ム、ムムムム……」
烈しい呻きが、ほとばしった。
あぐらをかいて坐っている女を押し倒す、しかも海老縛りの厳重な縄目のままである。背骨の痛み、首がいまにも折れるかと思われる激痛。それに太腿を突っ走る激痛の苦しみ——美和は、骨から肉が削ぎとられるのではないかと錯覚した。
が、武家の妻としての自意識が、よみがえった刹那、「ヒ、ヒヒイ……」
名状しがたい絶叫をあげていた。
彼女は、あぐら縛りにされていたのだ。それをそのまま押し倒されれば——。

「コウサレマシタ、私。コノヨウニ、ソシテコンナ棒デ、責メラレマシタ」

思いがけない目の保養とばかり覗きこんでいる槍助の手から六尺棒を奪いとったモニカは、自分に加えられた汚辱を、復讐するとばかりに、それを繰り出していくのであった。

姫貝と赤い箸

そのあまりの所業に、領田が顔をしかめたとき、

「モニカ、モウ止メナサイ。傷ツケルコトヨクナイ。アナタ、ナントモナカッタジャアナイカ」

ヘンドリックが声をかけた。

傷つけるとはどこを傷つけることなのか。また、アナタ、ナントモナイ――とは、この二人、さては――と元禄屋は考えながら、ヘンドリックの好意に、ホッとしたものであった。が、それもつかの間のこと、

「フッフッフッフッ……」

ヘンドリックのうすい唇が歪んで、かたわらの筐のなかからとり出したのは、大きなギヤマンの鏡であった。

鏡といっても裏のない透明のままの――つまりいまでいう虫メガネ――拡大鏡であったが、ひとめ見た美女衛門が叫んだ。

「女谷流光輪責め！　それにしても、なんと立派な鏡を！」

「親分！　こいつは一本、やられました！」

同じようにスットン狂な声をあげた槍助がアタフタと傍の信玄袋のなかから探し出したのは、たしかに虫メガネには違いなかったがヘンドリックのそれに較べて、いかにも見すぼらしく小さなものであった。

「和蘭ノ男モ日本ノ方々モ、同ジコト、考エルモノデスネ」

「私共は、これを光輪鏡（こうりんかがみ）と名付けており、これを光輪鏡（こうりんかがみ）と名付けており、春や秋では効果が、あまりありません」

「オオ、ソノハズデス。ソノ光輪鏡ハ小サスギマス。ソレニ濁ッテマス、凸面モナイ」

自分の拡大鏡を、春の日に高くかざしたヘンドリックは、

「光輪責メト言イマスカ。ソレ面白イ名称デース。ヤッテゴランナサイ」

「無駄でしょう、この西陽では」

残念そうに云ったが美女衛門は、このままひきさがるのも女谷流の名にかかわると思ったか、肩から双臂を荒筵につけ、顔をうかせ下肢を宙に泳がせている美和のそば近くにすみよると、径二寸ほどの光輪鏡で光線の束を集めようとしたが、春、しかも西に傾いた陽は、白斑点をつくるのが、せいいっぱいで裸身には、なんの変化も起こらない。

「オオ、ソレ不便デスネ。コレ、ミテゴランナサーイ」

美女衛門にとって代ったヘンドリックが、拡大鏡をかざし、褐色の髪をかきあげたかと思うと、

「老中サマ、御覧ナサイ。フッフッフッフ」

誘われるまでもなく領田が、ギヤマンの鏡を覗きみて、「ウ……ム……」と唸った。

「いかがなされました、殿」

用人の樺山が訊ねたが、返事がない。

ヘンドリックから渡された象牙の柄を握って、少しずつ動かしながら、なにもかも忘れ果てたように眺めている。

「殿。な、なにがございまするか！」

「樺山。しばらく黙っておれ！」

「されど、案じられまして」

白髪頭をふりたてて樺山が、領田の肩ごしに覗きこんだが、とたんに、「殿！　こ、これは、いったい！」と年甲斐もなく頓狂な声をあげてしまった。

「いったい……な、なんだと思うかの」

なおも鏡から眼を離さず、老人をからかうように云った領田は、

「箸をもて！　箸が所望じゃ！」

「ハ、ハイ……」

緋毛氈に並べられてある料理を盛った大皿小皿の上から赤い箸をとった樺山が、目八分に捧げる。

「元禄屋。見てみるがよい。フッフッフッ」

箸を右手に象牙の柄を左手にもった領田のすすめるまま、径八寸ほどのギヤマンのなかを覗いた元禄屋も、「ウム……」と低い呻きを洩らした。

「素晴しい鏡でござりまするなあ」

「まことじゃ。日本にはこれほどのものはあるまいの」

と嘆賞した領田が、

「よく見ておれよ」

と元禄屋を見返ったかと思うと、すいっと赤い箸が繰り出され、

「ウ、ウウッ……」美和が喘いだ。

「凄いばかりじゃのう。以前に、海女が採取したばかりの姫貝を、すぐさま開かせたことがあるが、まことに、まことに……」

象牙の柄がうごくにつれて、美和の唇から喘ぎとも苦悶ともわからぬ声が、つぎつぎに湧きおこった。彼女には、領田たちが何をしているのか、よくは判らない。よくはわからないが、判断はつく。

「……お、お許しを……ア、アウ！　も、もう、これ以上……は、アアア……妾を、お、お責めになりませぬよう……ア、アッ」

二人の視線にうつる光景は、妖しい極みのものと云えた。

それは、ひとめ覗いた樺山が、これは、てっきり南蛮紅毛の魔法にちがいないと思ったほどのものであった。

粋人とか通人とか云われる人々のなかには女の前に鏡をおいて、見ることを強制して共に楽しんだり、光輪鏡と大差のない稚拙な虫メガネで、眺めいって鑑賞する——などの経験を持つものは、いたであろう。が、径八寸厚さ七、八分（二、三センチ）もある性能のよい凸面鏡で、かくまで入念に眺めたものはおるまい。

「イカガデスカ、老中サマ」

ヘンドリックが得意そうに云う。

「恐れ入った！　まったく立派なもの……」

「立派ナモノ……トハ、拡大鏡ノコトデショウカ、ソレトモ、クツセノコトデスカ」

「クツセ……」領田が鸚鵡返しに云った。

「ソウデス、デンマークデソウイイマス。スエーデン語デハフィッタトイイマス。コノ二ツノ国、オランダノ近クデス、ソレニ医学スコブル発達シテイマス。ダカラ、オランダ人ミナ、デンマークノ言葉ツカイマス。日本デハ何トイイマスカ」

居並ぶ腰元たちは、拡大鏡のなかを見ることは、とうてい出来ないが、会話だけは片言隻語も、これまで聞き洩らしてはいない。女は男よりも遥かに遥かに好奇心の強い、いきものなのだ。だから御主君が、ヘンドリックの質問に、どうお答えになるだろうと想像するだけでもう、膝が小刻みに震えてくる。

が、領田は、腰元たちの期待をみごとに裏切った。

「さて何と申すかのう。日本は言葉の豊かな国じゃによって百も二百もあるであろうて」

「百モ二百モ……ソレ、スバラシイコト。私ゼヒ研究シテ帰リマス」

「よかろう、今宵はそこの美女衛門や下林にたずねてみるがよかろう。明日にでも昌平坂学問所の林文学頭有文を紹介して仕わそう」

まげていた腰が、痛くなったのか、やっとたち上った領田が、あたりを見回して、腰元

たちの顔が、みな、いちように、ほてっているのを認めると、
「ワッハッハッ……そちたちも裸吟味をうけたいような面つきじゃの」
と哄笑したが、なお、赤い箸をつかっている元禄屋を見下すと、
「おぬしの好きそうな言葉が浮んだぞ」
と、樺山に色紙をもたせて何事か筆を走らせると元禄屋に見せた。
それには、
姫貝には赤い箸がよく似合う
と書かれてあり、
「いかにも、いかにも。御老中さまといたしましては、ちとご立派過ぎるかと」
「なにが立派すぎるじゃ。こやつめ……」
元禄屋と二人、高々と笑い合った。

凸レンズの焦点

その元禄屋の手から拡大鏡をとったのはモニカであった。
「ヘンドリック！　拷問、早ク始メナイト、太陽、傾イテシマイマス」
八つをすぎて八つ半刻であろうか。まるくなっている美和を小気味よさそうに見おろしたモニカが呼びかけた。
「左様。早く見せて頂きたい。光輪責めにそのギヤマンが使えるものかどうか」
と美女衛門が催促するように云った。どうやらものを拡大する性能においては威力を発揮するものらしいことは領田たちの態度から窺われたものの、はたして光線の束を集めることができるものかどうか、それを一刻も早く、この目で見たい。
「フッフッフッ……デハ、始メマショウ」
ゆったりと云ったヘンドリックは、モニカにタルボ・タイプの写真機での撮影を云いつけると、拡大鏡を右手に、太陽を見上げた。
そして自信ありげに、
「美女衛門サン。ヨク御覧ナサーイ」
とニヤッと笑うと、象牙の柄を軍扇のように下段に構えた。
淡い光の輪が、美和の双腿から下腹へかけて、たゆたう。
「ア、アッ……」
曲げられた両膝の間で、美しい顔が苦悶と羞恥に歪む。
その顔を照し、乳房に移動し、さらに脇腹に反映していた大きな光の輪は、ヘンドリックが身を屈めるにつれて次第次第に小さくなり、濃さを加えていく。
最初、二尺もあった直径が一尺となり五寸となり、やがて二寸くらいになったときにはその光の輪を見つめるのが眩いくらいに感じられて美女衛門が目をそらす。
「ア、アウ……アッ……」
海老責めのまま突き倒された姿の美和の肉体は、すでに、なかば痺れてはいたが、熱いものを肌にうけると、せつなそうに喘ぎを洩らして、少しでもそれを避けようとする。
どんなにか両足を閉ざしたいことであろうか。両足首を揃えて縛られてさえいなければすぐピッタリと閉ざしたであろうに、いや、せめて片手だけでも自由であれば、ただちにその手で防いだことであろうに——身動きひとつできないまま、美和は心のなかで夫の名を念じつづけるのであった。
と、熱いものが、突如、消えた。
いや、消えたと思ったのは錯覚であり、次の刹那、美和は、われ知らず絶叫を、ほとばしらせていた。
「ヒ、ヒイイイイッ！」
まるで錐を揉みこまれるような衝撃に、肉体がキューッと縮み、縄が鳴った。
歯が、がっちりと噛みあわされ、白足袋、

ただひとつ、まだ身についていた――が虚空を蹴り、乱れた黒髪がバサッと肩を打つ。

「ヒ、ヒイイッ！　ア、アッ、アッ、アッツツ。ア、熱ッ！」

象牙の柄が、右に動いた。

つづいて左へ！

絶叫が、たえまなくあがり、富士額には脂汗が、にじみ、成熟した女の甘ったるい香りが伽羅の匂いにまじって、ヘンドリックの高い鼻をピクピクと、うごめかせる。

「トテモヨイ香リデス。ソレニ肌ノキメノコマヤカナコト!!　ヨーロッパノ女ニハアリマセン、トテモトテモスバラシイデース」

写真機と取り組んでいるモニカの顔に、あきらかに不快の表情がうかんだ。が、それに気付こうはずもなくヘンドリックは、

「白イ肌ニハ黒イ色ガヨク似合ウ……ドウデス、名文句デショウ」

チラッと振り返られて、領田も元禄屋も苦笑するほかはなかった。と、領田が、

「南蛮女は、何色か存じておるかの」低い声で訊ねたが、こればかりは元禄屋も知ろうはずもなかった。

「フッフッフッ……」視線をモニカに注いだ領田は「牢役人の申すところでは……」

と耳打ちされて、

「アマ色……と申しますと、あの亜麻色」

「さよう。長崎通詞として有名な西川如見などの書いたものによると、頭髪よりは、いくらか、うすいとのこと。従って頭髪が金色ならば亜麻色、亜麻色の髪の女であれば、麻に近い色と思って間違いないそうじゃ」

では褐色の髪の女であれば土色、黒髪の女

ならば黒色か――まてよ、南蛮に黒髪の女がはたして、いるのか。ニヤッと笑ったもののの元禄屋は、領田の言葉を、そのまま信ずる気にはなれなかった。が、好奇心は湧く。ひょっとすると、領田が今日、わざわざ自分を招いたのは、あの南蛮の女の裸を見せてやろうという配慮からかも知れない。

まだ、少しも裸になる気配を見せず、美和の姿を撮影しつづけているモニカのむき出しの背中に目をやって元禄屋は、なにやら今日は、もっと面白くなりそうだという予感を、おぼえるのであった。

「次ハオチチ。タップリト灼イテアゲマショウネ。フッフッフッ」

太腿に押しつぶされそうになっている右の乳房を、むんずと、つまみ出したヘンドリックは、夏ぐみの実のように可憐な乳首に拡大鏡の焦点をあわせた。

「アツ、アツ。お、お許しを！　ア、アツウもう、もう……ヒ、ヒャアッ！　ダメ、ダメ許して！」

「許シマセーン。日本ノ女、責メレバ責メルホド美シクナリマース。ソレニ、匂イ、イヨイヨ、佳クナリマス。日本ノ女、拷問サレルヨウニデキテイルノデースネ」

ツーンと針をさしこまれるような衝撃に美和が五体をひきつらせた。

「フッフッフッ、……長イ間ハイケマセン。ホンノ少シ、ホレ、焙ルダケ……今度ハ、左ネ。下林サン、左ノ乳首、ダシテ下サイ」

背後に廻った下林が、膝を荒筵と美和の背の間に入れて下半身をおこし、肩ごしに左乳房をつかみ出す。

「ア、アウ……ユ、ユルシテ……」

凸レンズの焦点が、左の乳首にぴったりと合い、歯の根をガチガチ鳴らして美和が泣き叫ぶ。

「すごい責めじゃの。蝋燭責めよりも遥かに苦しみは激しいようじゃ」

脇腹も太腿も汗で濡れそぼった女体を見下ろして領田が云う。

女谷流光輪責めに似てはいるが、比較にならぬほど効果的な拷問を目のあたりにした美女衛門と槍助は一語も発しない。

「西鶴も考え及ばぬ責めでござりまするな」

黒髪を海藻のように振り乱して悶えつづける美和の姿に、あとどのくらい、もつであろうな、この女は――と考えながら元禄屋は、ふと、「好色一代男」の〝床の責め道具〟の数々を思い出していた。

そのなかにもこのような責めはなかった。と、象牙の柄がキラリと閃いて、

「ヨーロッパノ拷問ハ、マダコレクライデハアリマセーン。モット、タクサンアリマス」

ヘンドリックは、焦点を乳房から下へおろすと、柳の葉をたてにしたようなへそのあたりを、ゆっくりとヤいてから、焦点を更に移動させた。

「ア、アツ、アツ……」

絶叫する気力もないのであろう、弱々しい悲鳴があがり、ものの二呼吸、三呼吸もたったとき、なにやら、焦げる匂いがして、

「ヒ、ヒヒヒイイイ……」

美和の唇から断末魔をおもわせる叫びが洩れた。

領田を始めとする数人の男、それにモニカや居並ぶ腰元たちの視線を、もろに浴びてももう羞恥を感じる余裕もないのであろう。美和は、あぐら縛りの太股をくねらせて、少しでも拡大鏡の焦点をはずそうと最後の努力を試みるのであった。

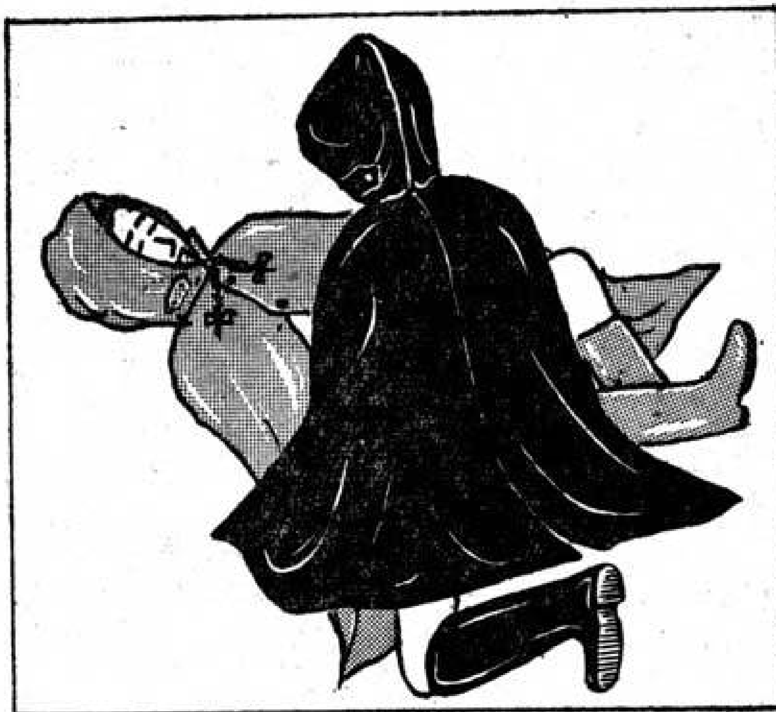
その裸身に、いまを盛りと咲き匂う桜の花びらが、ひらひらと、静心なく散りかかっていった。

――（つづく）――

〈私の履歴書〉〈青春期〉

『ゴムマント』への憧れ

鶴崎好夫（カットも）



悲しみの年月
（ゴムマントを失う悲しみの記）

私より三、四才、年上で二十九才だという工場の事務所に勤める、少しモダンな女性が私にアプローチして来たのは、田舎で療養中だった彼女が死んでから一年以上、過ぎた頃でした。

その新しい彼女の、しつこいぐらいのデート申し込みに、初めは同意しなかった私も、秋になって黒い靴下に高い白のハイヒールを履いた彼女にセックス・アッピールを感じたためか、デートに応じました。それでも、コーヒーを飲みに行ったり、散歩をしたり、時には映画に行く程度でした。そして、デートの帰りなど、彼女から求めて腕をからませてくる態度に、年上の女性の積極性にタジタジの私でした。

やがて春になって彼女のセーターに胸のふくらみを感じ、あるデートの帰り道、彼女を公園の茂みにつれて行き、彼女を抱きしめキスをしました。女として完成された体に成長していた彼女は、はげしい反応を示し、ふるえながらキスをされただけで失心状態になりました。私は彼女が、このまま死んでしまうのではないかと心配し、立つことも歩くこともできぬ彼女を抱きかかえるようにして帰路につきました。

そんなことがあってから、二人は急速に親しくなって行きました。もう充分、私の考えに同意してくれると思った私は、あるデートの時、ゴムマントを手に持って彼女に逢いました。彼女は、それを見ると「今時、そんなみっともない合羽を着るの？」と不満な顔をしたので私は困り、「友達のものを預っているだけだ」と答えていました。通常の状態では、彼女とのゴムマントプレーが不可能と考えた私は、彼女を完全なる失心状態にしてゴムマントを着せる以外にないと思いました。私が彼女の体を求めると彼女は待っていたかのように応じました。年令的にも、あせっていた彼女は、そうすることによって私との結婚が決定的になると考えていたのでしょう。

その日は、ベッドルームで私に着ているものを脱がされてゆく彼女は、それだけで、ほんとうに、はげしい反応を示していました。ベッドに寝かされた彼女は、ふるえ、あえぎ

もだえ、うめき、もう身も世もないほどの興奮状態でした。ゴムマントを着ていない私はそんな彼女の様子を見ても大変、冷静で、死んだ前の彼女が私に抱かれても余り反応を示さなかったことを思い、女性にも色々な種類があるものだ、と感心していました。ゴムマントを彼女に着せるため、彼女を抱きかかえようとすると、彼女ははげしくうめき、体をのけぞらせました。私は頃はよしと、彼女に話しかけました。「シーツを汚すと困るからゴムマントを着なさい」と言えなかった私は、そう言いました。何のことかわからなかった彼女は、私がバッグから出して来た黒いゴムマントを見ると拒否反応を示し、今までの興奮がさめたような顔で嫌がりました。困った私は、やむなくゴムマントを自分で着ました。それを見た彼女は、いっそう嫌な顔をして「そんなもの、脱いで」と繰り返しました。マントを脱いだ私が彼女を抱きしめると、再び彼女は激しい興奮状態になりました。しかし、私が今度こそは大丈夫と思って彼女にゴムマントを着せようとすると、また彼女は拒否反応を示し、脱ぎ捨ててしまいました。そんなことを五、六回も繰り返しました。ゴムマントを彼女に着せれば、私は興奮してきますが、彼女は感じなく、ゴムマントを彼女が脱げば私は冷静になってしまいます。すっかり嫌気のさした私は、まだ最終的に結びつきが終わらないまま、彼女を残して一人でホテルをとび出してしまいました。

その日、私は自分の体の状態を再確認したような感じでした。ふるえもだえる彼女を目の前にしても、全然、興奮を感じない私は、やはりどうしてもゴムマントが必要でした。ゴムマントがあって、それを着ることによって、身も心も興奮を感じ、そして愛情の交わりを望む私。ゴムマントのない愛情交換などとても考えられないし、また出来ないのだという事が自分自身にも、よく分かりました。

そのことがあって以後も、私に尚も求め近寄ってくる彼女から逃げる意味もあって、間もなく私は職場を変えました。

新しい職場を得た私は、あの日以来、女性不信となったのか、女友達を求める気もなく一人で同じような毎日を過していました。それでも雨の日など、職場のロッカーからゴムマントを出して着ると、いつまでも歩きつづけながらゴムマントの快感をたのしんでいました。

しばらくして、私は複雑な家庭の事情から親の指示した女性と結婚することになりました。

「女は誰でも同じ」と、あまり女性に対して望みを持たなくなっていた私は、それほど抵抗を感じませんでした。四泊五日の予定で出かけた新婚旅行に、それでもかすかに期待をつないだ私は、バッグの中にゴムマントを入れておきました。昼の間は、つい言い出すチャンスもなく、夜になって床に入ってから、私は思いきって私の希望をのべました。妻は私の言う意味がわからず理解できなかったようでしたが、私がバッグを開け、黒いゴムマントを取り出すのを見ると、はげしく拒みました。しかし自分の妻だから多少、無理をしても、どうしてもゴムマントを着せようとする私。はげしい争いが続きました。力づくでも思い通りにしようとする私に、妻は根限り抵抗しました。すっかり幻滅を感じた私は、妻をそこに残して、外へとび出しました。

次の日も旅先で同じような争いが行われました。

夫婦としての結びつきのできなかった私達は、三日目には予定を変更して、帰宅してしまいました。

甘いはずの新婚生活も、毎日々々が争いの繰り返しでした。

夜になると私が持ち出してくるゴムマントを見た妻は「魚屋！　気違い！　変態！」とありとあらゆる悪口を言いながら、私がゴムマントを着ることも許しませんでした。そんな状況もあって、夫婦の結びつきは全然、ありませんでした。

二カ月ほどして、ある日、私が例によって

イメージギャラリー『まだ脱いじゃ駄目！』原由貴子



ゴムマントを出そうと探しましたが見あたらぬので、妻に問いつめました。「あんなゴム臭い気違いの道具なんか、くず屋に売り払ってしまったワ」と、妻のそっけない返事でした。

自分の命より大切に思っていたゴムマントを失ったことを知った私は自分でも訳のわからぬほど怒り狂い泣きわめきながら妻を殴りつけていました。

私は、結婚しても夫婦の結びつきの出来ない妻を時々可哀そうに思うときもありましたが、妻を抱いて一生けんめい努力しても、ゴムマントのない私自身は、どうしても燃えることが出来ず、結びつくことが不可能でした。それを知った妻は「インポ、性的不能者」などと、なじり、私は一そう、その気を失してしまいました。ゴムマントを着れば充分その能力のあることを知っている私は妻の悪口に耐えられぬ思いと、私の生活にかかせない命以上に大切だったゴムマントを処分された落胆で、妻が鬼のように思えてなりませんでした。

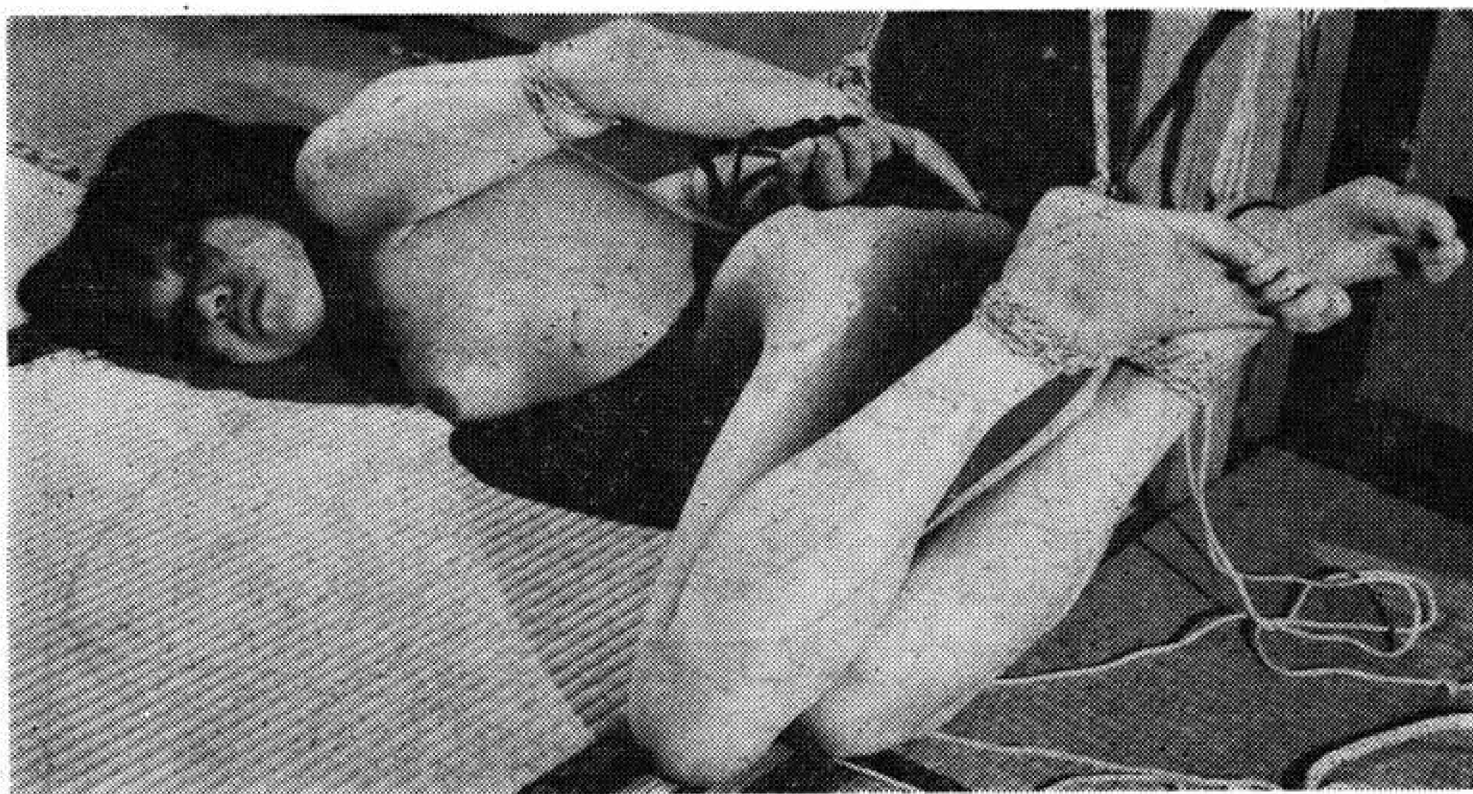
それでも半年ほどの間に数回、まねごとのような夫婦の結びつきがあったような気がしますが、それ以後は全然、妻との関係はなく同居人同様の生活が続きました。それでも、複雑な家庭事情のある私達は離婚することも出来ず、三年ほど生活を共にしました。

その頃、体の変調を感じた私は、医者に診てもらったところ「結核、要療養」と診断され、妻と離れる意味もあって私は入院しました。

私の性癖を本当に理解し、そしてゴムマントを愛好してくれ、私を満足させてくれる女性がいないことや、大切にしていたゴムマントを失った悲しみから、私は早く死にたいとさえ、思いつめるようになりました。そしてあの、しびれるようなゴムマントプレーを感じさせてくれた死んだ彼女との生活を想い出し、あの世とやらで彼女と逢いたいものだと考えるのでした。

しかし、医薬事情がすっかり進歩した入院生活を過した私は、私の望みに反して日一日と元気になり、一年目には、すっかり元の体になっていました。

退院した私は、あのいまわしい夫婦生活を送ることに耐えられず、ついに妻と別居することになりました。



＜S＆Mの考察＞

塚本鉄三論──点描

──SMルポライター第一人者としての塚本鉄三氏をカメラ・ルポに登場したM女性の面から、気まぐれな読者として考察してみる──

前河恵一郎

私は奇クの新刊雑誌を手にすると、なにをおいても塚本氏の〔カメラ・ルポ〕に先ず目をやる。今月号は、どんなルポが載っているかなあ、と思って期待を持って読んでゆくのが、まことに楽しみだ。

二月号では、トップに、ルポ＜ああ、M女狂えり＞が載っていて、私の眼は、その記事の文章と写真とに吸い寄せられていった。

＜深田菊子の巻＞

塚本氏が手がけていられるルポ登場のM女たちを見ていて、私はいつも思うのだが、プロ的要素の皆無に近い女性ばかりを、次から次へと、よくもまあ、これだけ揃えたものだなあと感心するのである。

それが塚本ルポの特徴でもあり、従って奇クの特色というか、ノンプロタレントを標榜される奇クのカラーともなっているのだ。そして、この二月号でも取材している苗木陽子という女性が、如何にも素人らしい、素人じみたところが好感が持てるのだ。

日と時間の経過を追って、ドラマチックな筋の運びで、SMプレイの進行を淡々として描いている塚本氏のペンによって、私達読者は、自らが、その場にあるように錯覚するく

らい、差し迫った臨場感を持つのである。

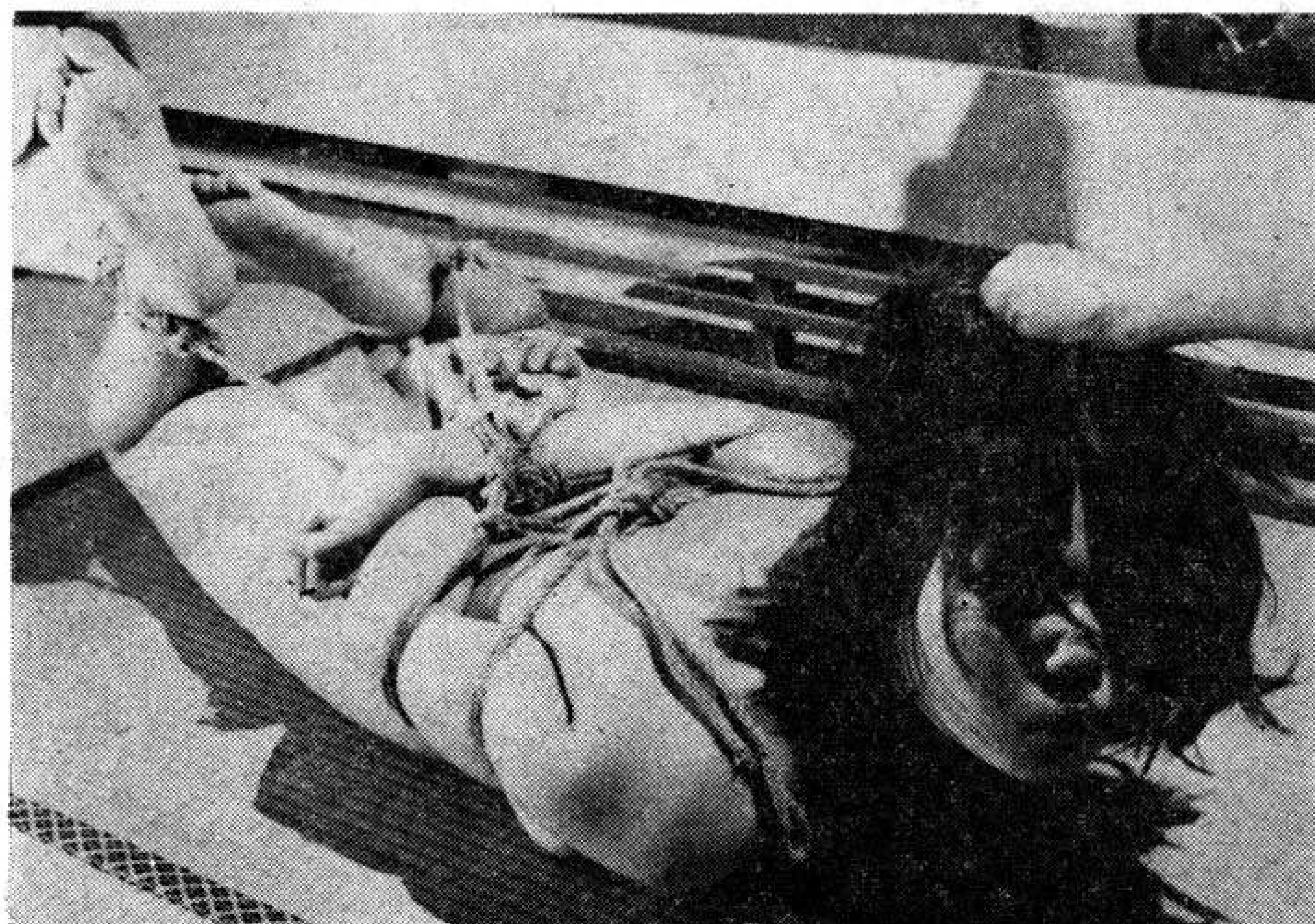
だが、この種読者というものは、貪欲なばかりの期待を、次々と抱くものなのである。私もまた、その例に洩れない、気まぐれで浮気な一読者である。そうした読者の気持を、心憎いまでに摑んだ塚本氏は、パッと場面を転換させて、苗木陽子とは全く対照的な深田菊子を登場させている。

二月号では、洋服姿とビキニ姿の素顔の深田菊子の写真二枚を挿入して、今回のプレイ行の序の段を構成しているが、彼女こそは、幾度ルポに登場しても、見る者を飽きさせない不思議な魅力を持っている女性である。

それというのも、塚本氏一流の巧妙なテクニックによって、彼女の側面を、いつも変った角度からのみ捉えているからだと思う。

たしかに、今回のルポの深田菊子は、今まで誌上に顔を出していた彼女とは、フィーリングが大いに違っている。いかにも新鮮なのだ。塚本氏のM女に対する観察眼の鋭さが、いつも新しい発見を、M女の上に求めているからだろうか。

私の見る所、塚本鉄三というSMルポライターは、M女性を馴致飼育することに関して卓抜した手腕を持っている。それは天性の霊感的な魅力によって、対象の女性を温かく抱擁し、縄と鞭とを駆使して、自家薬篭中のものにしてしまうということもあるだろうが、なんといっても、その豊富な経験に裏づけされた自信が、そうした好結果を生んでいるのであると考える。



この深田菊子にしても、うら若き身をかくまでSMに溺れ込ませたということは、氏の並々ならぬ努力があったろうと思われる。

ダイナミックなペンの運びだけで弄文したところで、一回や二回は読者を誤魔化せても、このように長い間、カメラ・ルポのプレイ行を続けていると、やはり体験と努力の裏づけがないことには、化けの皮が直ぐに、はげてしまうものだ。

それが、斯くまで私達読者を毎月わくわくさせて期待通りの満足感に酔わせてくれるということは、並々ならぬ努力があってのことだと思う。SMの場面描写を想像や空想で書いている人は極めて多い。それは又、それなりに楽しいと思うが、昨今は余りにも、そういったエセSM大家が多いように思う。

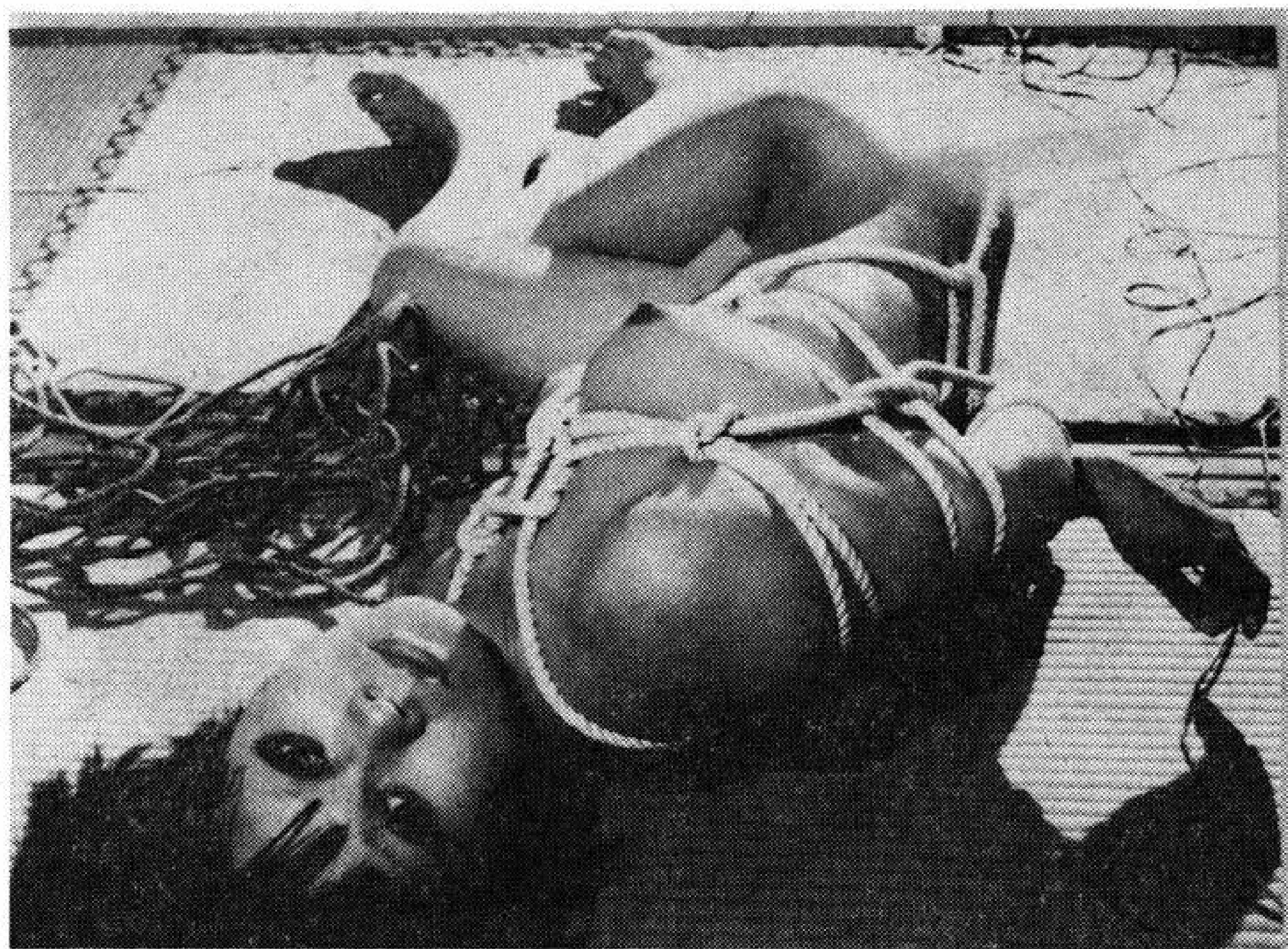
その点、塚本鉄三氏こそは、真に体当り的なSM体験によってのみ、迫力のあるルポ記事を書いてくれている貴重なライターだ。

49年2月号で塚本氏が深田菊子さんに、オシメの中へ排尿させる場面を、私は息もつかせずに読んだ。簡潔で無駄がなく、それでいて、必要なことだけは十二分に描写した文章は私をしてその場に立ち会って見学しているようにさえ錯覚させるのだ。

氏が触、視、嗅、味、聴の五官のすべてを駆使して、この愛すべきM女深田菊子の裸身の全貌を私達の前にさらけだしてくれているのは嬉しい。今まで、数度の登場によって、私は、この女性の隅々までも知り得ていたと錯覚していた。それが、この2月号によって新しい彼女を発見したのである。

アヌスによる検温。これは、なんとロマンチックで、甘美なSMであろうか。それに続いて、タイルの上への排尿責め。次から次へと繰りだされる羞恥責めに、私は完全に酔ってしまった。

どうやら、彼女の言によれば、SM研究会に出席してもいいような口ぶりである。私もそのメンバーに加えて貰って、じかに深田菊子嬢の羞恥責めに悶える姿態を心ゆくまで眺めてみたいものである。



例えば2月号の目次の上に載った彼女の写真など、私達Sマニアにとっては、思わず、ぞくぞくとする程の迫力のあるものだ。紐によって、左右に無理矢理ひろげさせられた足首のなんといきいきした表情。それにもまして、畳にうつ伏せになりながら、顔を起して、カメラの方へ哀愁を帯びた視線を向ける彼女の表情は全く素晴しい。

彼女の目次上の写真としては、48年6月号に載った横臥の緊縛写真も見事である。黒ずんだ麻縄が、ぎりぎりと柔肌に喰い込んで、いかにも白そうな深田菊子さんの膚が痛々しく感じられる。そして、黒髪をざんばらに畳の上に乱しながら、流し目を、こちらへ向けている視線といったら、本当にたまらない。

この48年6月号のルポでは、『足の裏の温かい女』という題で深田菊子さんが羞恥責めの狙上にあがっている。口絵ページの第四頁に載った両手を柱に吊り縛りにされて右足を高々と頭の位置まで挙

げさせられた写真を含めて、文中の三十枚の緊縛写真すべてに塚本氏の深田菊子さんに対する愛情が、にじみ出ているように思った。

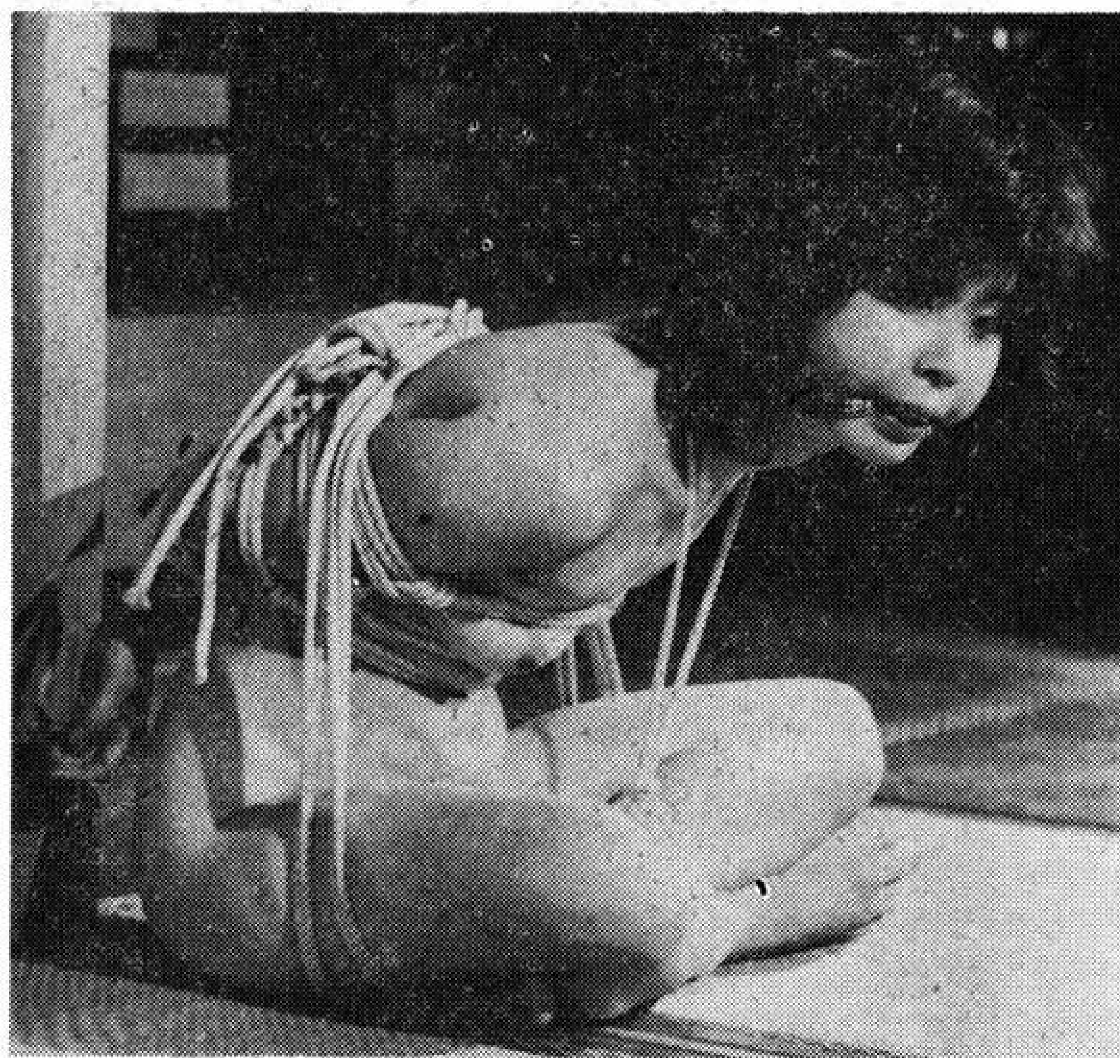
憎いから責めるのじゃなくて、可愛いいから責めるといった感じが、文中からも写真からも匂っていて、それが氏に対して、大いに好感が持てるのである。SMプレイというものは本来、そうあるべきものなのだ。

「私は〈プレイ〉という虚構の世界のなかに没入して、現実の煩しさを忘れていた」（48年6月号118頁）と氏は書いている。

現実の繁雑な煩しさを忘れさせるSMプレイというものは、やはり、そこにプレイする者の間に、〔愛情の交流〕という階(きざはし)が必要なのではなかろうか。

塚本氏が転んで、右肩を壁にしたたかに打ちつけてしまったとき深田菊子が、縛られた自分の身のことは忘れて、「どうしたの、大丈夫?」と、仰向けの二つ折りの姿勢から横倒しになりながら、いたわりの篭った声で氏に尋ねている。（同号、同頁）

そんな所に、塚本氏と深田菊子さんの深い心のつながりと愛情とを感ずる私なのだ。



〈前田真知子〉

毎号、奇クの口絵を美しく飾っている前田真知子嬢のことについては、何を措いても言及しなければいけない程、彼女のファンが大勢、いることだと思う。

女子大生の時に、初めて塚本鉄三氏のカメラの前に、その緊縛裸身をさらした前田真知子嬢は、流麗な文章で、告白の記事を、その都度、投稿しつつ、しかも学校を卒業して、社会人として巣立ってゆく環境の変化を、また緊縛裸身にも、見せていた。

最初の頃の生硬さは、次第次第に影をひそめて、回を追う毎に、円熟さを増していったことは、塚本鉄三氏のカメラによって明らかである。そして、48年7月号のカメラルポ「澄んだ眸の奥にあるもの」にて、氏は、一応ここで前田真知子嬢の全貌を暴いている。

氏の言う如く、〈清純なる女(ひと)〉こそ、この前田真知子その人であると言ってよい。ストリッパーとかピンク女優、ヌードモデルには絶対にない気品が彼女には具(そな)わっている。

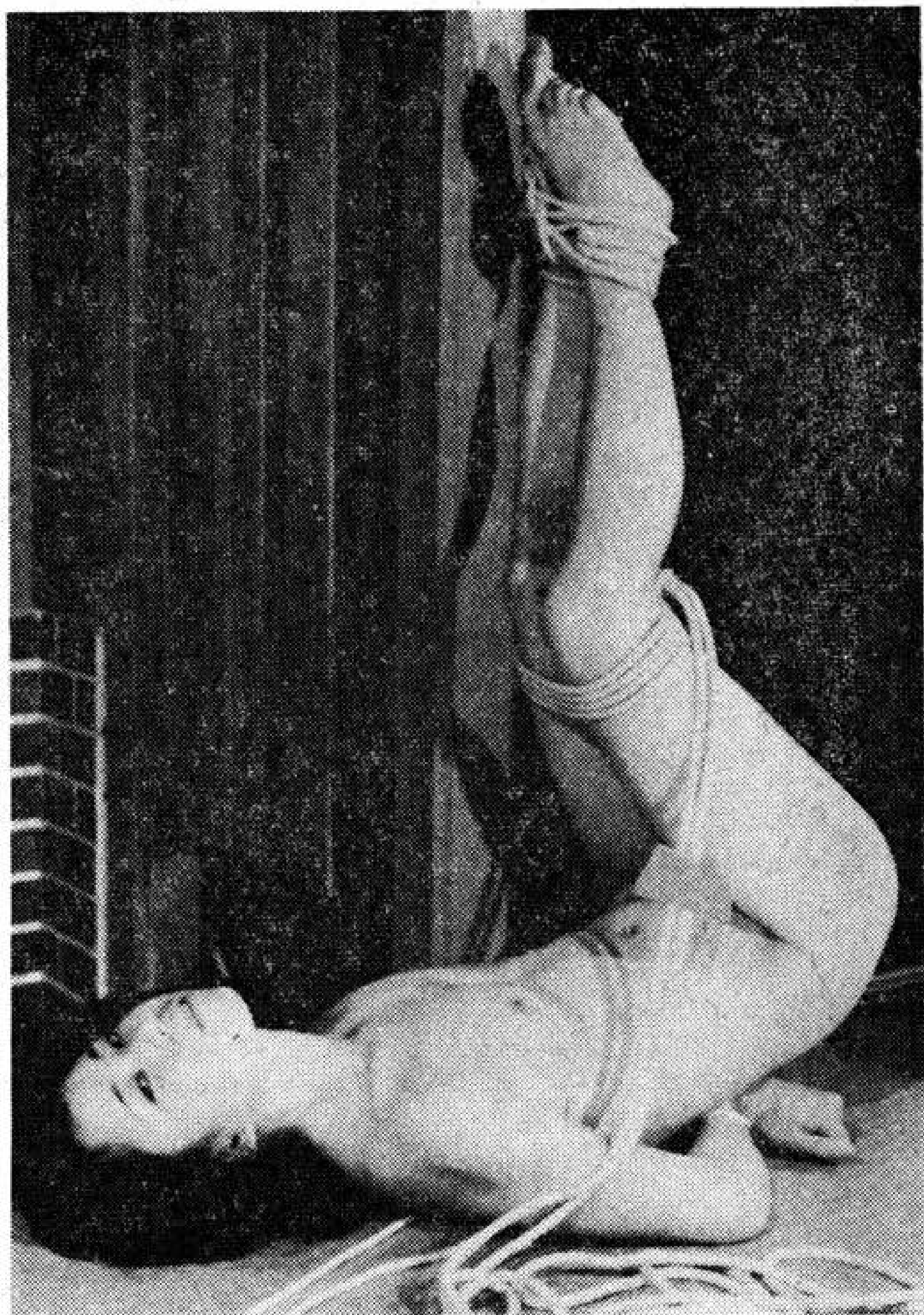
一見して、彼女がマゾなどとは、氏ならずとも、私でさえ、思えなかった。

〃これ物でも扱うよう気持で、慎重に縄を掛けていった〃氏の気持も判るよう

な気がする。

東京と大阪、という風に距離があるので、プレイの機会は至って限られていたろうが、それでも、回を追う毎に、M的に目ざましく成長してゆく彼女の変身ぶりは、目を瞠るものがあった。

私は、前田真知子嬢の好きな写真として挙げるならば、48年7月号口絵のトップ「柱の宙縛り」と48年9月号の同じく口絵のトップ「美への憧れ」というアグラ縛りを選びたいと思う。いつの場合でも、彼女のなごやかな美しい視線が、カメラの方へぴったりと向けられているのが、私にしては、ぞくぞくする程の魅力なのである。



あくなき塚本氏の＜緊縛美への追究＞の情熱は、前田真知子という好対象を得て、ここに爆発的な衝動が氏の手腕を一層ダイナミックに発揮させたのだろう。私は氏撮影の彼女の緊縛写真に、Sの心を、いやが上にも燃え立たせられるのであった。

例えば、48年8月号の口絵の最後のページで、後手首を背中で高々と縛られながら、頬を手で起された。このあどけない表情は全くのところ、氏の言う＜天使の如き＞美しい顔容である。きっちりと縛られた二の腕、胸、それに首縄。縄の間から可愛いく飛びだした乳首は、まさに処女のそれである。

48年3月号口絵のトップ「吊られゆく美少女」の逆さ吊りポーズは、豊かで清純な彼女の裸身の美しさを、あますところなく、氏のカメラが捉えている。顔面が逆さになりながらも、こちらに、じっと視線を向けているその表情は、まさにマゾのものだ。

それと、48年11月号の目次上の写真。この後手に縛られた両手の指をパッと開いた苦悶の表情はどうだろう。撮影・構成者の塚本氏の指示によるものか、或は前田真知子嬢の自己の意志から発したものなのか。ぐっと、額を押し上げられている所からみると、この絶妙のタイミングを狙って、氏がシャッターチャンスを摑んだと見るべきだろう。

総じて、前田真知子嬢が責められている時の手と足の表情が、極めて豊かなのだ。

例えば、48年7月号口絵トップの「柱の宙

縛り」の足の爪先を見給え。拇指をはじめ、五本の足の指が、きゅっと力いっぱい、下を向いている。これだけ見ても、如何に彼女が責められているかということがわかる。

同じ号の「澄んだ眸の麗人」の逆エビ責めに会った際の足の指の表情の豊かさ、「排泄責めのあとで」の後手首の交差して縛られた完璧なまでの緊縛感。（後手首は、こうして深く交叉して縛られてこそ値打ちがある）

次に48年5月号の口絵トップ「縄に陶酔するひととき」で海老責めに会っている彼女の後手は、まるで左右に振り分けられた荷物のように躍っているし、また足首で縛られた右足の表情が、また何とも云えない。拇指が外側に反りかえり、他の四本の指は内側に向って曲げられている。

責めに責められて、真白い前田真知子の裸身が悶え抜いているさまが、この手と足とに如実に現われているのだ。



こうした豊かな表情を持つマゾ女性、前田真知子嬢について、塚本氏は次のようにルポ記事の中で述べている。（48年7月号140頁）

――『昭和四十七年八月号の口絵写真のトップに、＜美しき縛しめ＞と題して前田真知子の緊縛フォトを発表しているが、これは私としてもシャッター・チャンスを適確に摑まえることが出来た会心の作品だと思っている。（中略）長身の彼女の臀部以下の下半身が頭の上よりも遥かに高く二つ折れに曲がっているあたりは、彼女の美しさと被虐味を最高度に発揮していると思う。――

この口絵写真は、氏の言うように、全く素晴しい惚々とするような作品である。ポーカーフェイスといわれる（48年7月号136頁の氏の言）彼女の真に迫った被虐味の溢れた表情であるし、それに、この足の美しさ、脚線の見事さといったら絶品という他はない。

塚本氏にとって、前田真知子嬢は、貴重な愛玩物といった感じが強い。流石の氏も、彼女に対しては、そう悪どい羞恥責めはやらないようだ。48年7月号160頁の挿入写真で、左足を前に伸ばして股間縛りになっている彼女の写真が載っているが勿論、ピントが顔から胸

に合っているので、大きく前に投げ出された彼女の足の裏はピントがはずれて、ぼけてしまっている。だがぼけていながらも足の指の表情は抜群である。

同号の次頁の写真で股間縛りのまま前屈みにされた時の両方に開いた彼女の足の指先にも注意されたい。浴室に於いて、SMプレイを仕掛けてゆく氏の描写も刻明で、成熟した女の匂いが、ムンムンと私達の鼻にも匂ってくるような錯覚を感ずる位だ。

とにもかくにも、まだまだ、これから、そのマゾ女性としての魅力を発揮する余地を、十分に持っている方なので機会があれば更に一層、高度のテクニックを用いて、塚本氏に飼育してほしいものだと思う彼女である。

＜笠井奈保子＞

塚本鉄三氏が、その超繁忙の中の寸暇をさいてハントし、ルポしたM女の中で、やはり如何にも素人じみた女性として、笠井奈保子嬢を挙げなければならない。

ルポの文章を読んでいる範囲では、いささか、氏から冷遇？ されている感さえある笠井奈保子嬢なのであるが、48年1月号巻頭口絵の塚本氏撮影の写真を見ると、この豊満な女体に対して、並々ならぬ意欲を以て、氏が立ち向っていることが窺えるのである。



街を歩いていると、何処にでも見かけるOL風のこの若き女性が洋服を脱がされて縛られると、このようなボリュームのある肉体になろうとは、これは全く驚きである。

そして、この若き女性が、同性の緊縛写真を見るのが大好きな女性であるとは、これも又、私にとっては驚きであった。

笠井奈保子嬢が塚本氏に初めて同性の緊縛写真を見せられた時の驚愕の有様が、47年6月号のカメラ・ルポ『春宵一刻値千金』の巻頭に氏一流のたたみかけるようなテンポの早い文章で巧みに描写されている。

〝白い頬が忽ち赤く染まり、額から耳たぶまでひろがってゆく〟といった笠井奈保子嬢がやがて、塚本氏の手に依って、自らの身も全裸にされて縛られてゆくのである。

そのいきさつは、ルポに詳しいので読んで貰えばいいのだが、私がいたく興味を持ったのは、やはり初対面の若い女性を、氏が緊縛



プレイへと誘導してゆく所にあった。
　いわば、縄に対しては関心は持っていても全く無垢の女性である。そこで、氏は彼女に対して、次のように言わしている。

「裸にならなきゃ、いけないんですの。だったら、私をくくりはる前に、裸の写真を撮って。お願い。私、くくられるの、始めてだから、怖いの」

　この前後の二人の会話で生まれて初めて裸にされて縛られる若い女の期待と危惧が、読む者をして、胸が痛くなるようになる迄の迫力をもって、やりとりされている。
　写真で見る限り、笠井奈保子の裸身は、若い女特有の豊かな瑞々しい肉体をしている。彼女が自分でブスだと言っている言葉に反して、おかっぱを振り乱した容姿は、なかなか、どうして、万更、捨てたものでもない。それに塚本氏の飼育調教がよろしきを得たとしてもこの日の第一回目の縛られ方は、及第点をあげてもよい出来ばえである。
　48年1月号の目次の上の写真なんか、歯と歯との間に豆絞りの猿ぐつわを噛まされて、陶酔の域にさえある。47年8月号の口絵「羞らいも忘れて」の黒髪を顔の上に振り乱した、この被虐に恍惚とした表情は素晴しい。きっと、塚本氏も、この笠井嬢の捨身のMに徹した態度には満足していたのではなかろうか。
　私の断然、気に入った笠井奈保嬢のポーズを次に列挙してみよう。そこに、私は、塚本氏のたゆまない努力と、責めに対する鋭い観察眼とを見る思いがするのである。
　例えば47年9月号の「羞恥に耐える乙女の表情」と、「菱縄縛りと猿ぐつわ」という見開きの口絵写真に於いて、猿ぐつわをされない表情と猿ぐつわを噛まされた表情とを、対照的に4枚の緊縛写真によって、私達に何物かを訴えている。この顔の、ふるいつきたいような美しさは、とりも直さず、塚本氏のSMに対する〈読み〉の深さを示している。
　そうした彼女の口絵写真は、47年10月号の「菱縄と柔肌と猿轡」それに、47年11月号の「苦痛と羞恥の表情」に如実に表現されているのである。
　私は塚本氏のSM眼に対して、今後も多大の興味を持って注視してゆきたい。

Mグループ〔空想創作集団〕作品〈ある湯治客の話より〉

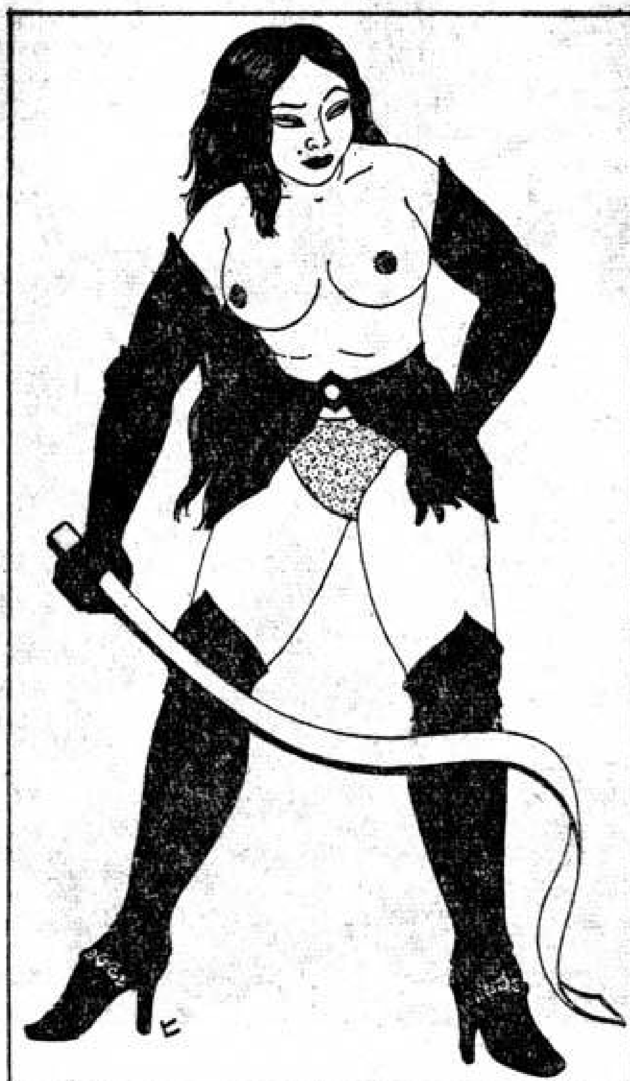
《連載》

女の虜囚

(2)

佐治麻造

カット・マエダヒオミ



雨模様の夕が暮れて寮庭は暗くなり、窓々に灯がともった頃、良枝がやって来た。罰を受け終えて房から出された中村が、嬉しそうに庭を横切って寮内に消えて行った。褌一本の体を小雨に濡らしながら走り去る彼の姿を嫉みをこめて見つめていた謙二の前に良枝が立って、冷たく見下ろした。

ガチャガチャと鉄格子扉が開かれる。

「さあ、出るのよ」

身を動かすと溢れそうになるのを、必死の思いでこらえて彼は膝で、いざり出た。

「立てないの？　さっさと、お行き」

良枝は、彼の頭を邪慳に小突いて急き立てる。房の前のコンクリートの通路の端にあるむき出しの便器のそばで彼は全身を震わせて悲鳴に近い呻きを洩らした。庇の下の電灯が薄暗い。

「お立ち！　しゃがんでちゃ、錠を外せないじゃないの」

良枝は意地悪く、ゆっくりと腰の後ろの錠を外すのだった。喰い込んでいた革バンドがゆるんで、両足の間に垂れた。

「まだよ。フフフ、これを、くわえて」

革バンドの先端を口に、くわえさせられた彼は、ほとばしる解放感に喘いで、落ちそうになった革バンドを、あわてて、くわえ直した。

「フフフ。落さなくて、よかったわね。手が使えなくて情けないかい？」

彼の口から革バンドを、もぎ取った良枝は平然と締め上げた。後手錠の彼の両手が思わず動く。

「手を、のけるのよ！　何するのさ。手向いする気？」
「い、いえ、そんな……。あんまり辛いのでつい……。ヒーッ！　そんなに、きつく締めないでくれよ、お願いだから。ヒーッ！」
「手が邪魔じゃないの！　いくら嫌がったって駄目よ」
ズックと革バンドが再び容赦なく喰い込みそして身もだえを続ける彼の耳に、腰の後ろでカチリと鳴る錠の音が冷たく聞えた。
追われて帰った房の前で手錠が漸く外され弁当箱と小さなヤカンが与えられた。
「中に入って、チャンと坐ってお喰べ」
鋼鉄の環に痛めつけられた両手首を撫でながら、彼は房内に正座し、足首の苦痛に顔を歪めた。房の外のスイッチで房内の灯が、ともった。
「早くお喰べ。私は忙しいのよ」
眼前に立って見下ろす良枝と、見上げる彼の視線が、かち合う。彼女の指先につまれていた手錠の鍵がポケットにしまわれるのを見て彼は、みじめな思いで目を伏せた。良枝が手に持った手錠を、わざと彼の頭上でカチャカチャ鳴らす音を聞くと、食事が咽喉につまる思いだった。良枝の命じるまま、便器のそばの水道で弁当箱とヤカンを綺麗に洗い、鉄格子の外においた彼は、彼女が手錠を持ち直すのを見やって腕で目を、こすった。
「そ、それだけは、もう勘忍して……」
「何云ってるの！　さあ、あっち向いて」
彼女は嘲笑を浴せながら顎を、しゃくる。
左手が摑まれて背後へ引かれ、手首に鋼鉄が冷たく触れた。思わず手を引っ込めようとした彼の尻に、平手打ちが激しく鳴り、鋼鉄の環がガッチリと嵌まった。
「そっちもよ」
未練たらしくズックの前袋の縁のあたりの具合を直していた彼の右手が、のろのろと自ら背後に回り、金属音と共に、左手と短い鎖で繋ぎ合わされた。
「さあ、入って」
房内に追い込まれた彼の背後で、大きな音を立てて鉄格子が閉まり、抜き取った大きな鍵をポケットに納めた良枝はスイッチを消して後をも見ずに立ち去った。
暗い監禁室に独り残された彼は、しとしとと降る雨に煙る窓々の灯を、鉄格子越しに見上げて、みじめな劣等感を身に泌みて味わうのだった。時々吹き込む風は雨を含んで肌寒かった。堪まらない淋しさと悲しさ、そして正座の足の痛さに、彼は時々立ち上って房内を歩き回った。足を動かすたびにジャラジャラ鳴る鎖の音の屈辱感に涙が頬を伝った。壁に頬をすりつけて涙を拭い、再び坐ると、新しい涙が、とめどなく流れた。
永い時間が過ぎて消灯の予鈴が微かに聞えそして良枝が小走りにやって来た。
「立って、うしろ向いて。もっと格子に背を寄せて」
良枝がポケットから小さな鍵を取り出すのを見て彼は、いそいそと立ち上った。手錠を外して貰えるのだ。
「こっち向いて、両手を揃えてお出し！」
ずきずき痛む手首を撫でるいとまもなく、再び両手首に手錠が嵌められてしまった。
「ところで、お前、ちゃんと正座してなかったね。誤魔化そうたって駄目よ。フフフ。きちんと坐ってたのなら、あんなに勢いよく立ち上がれる筈がないわ。どうお？」
云い返すことも出来ず、彼はうなだれた。
「どうしても規則が守れないのね。お仕置きしとくわ。足を格子の間から外へ出してごらん。両足共よ。もっともっと、腿を出して」
鉄格子にしがみついた彼は、鉄棒一本を挟んで両足を房の外へ出し、少し膝を曲げた。

途端に良枝の右手に振り上げられる革鞭を見て彼は悲鳴を挙げ、足を引っ込めた。良枝の眉が淡い灯に照らされてキリリと上がる。
「何故、引っ込めるの！　私に服従しないのなら、どんな目に遭うか教えて欲しいのかい」
「か、かんにんしておくれよ、鞭だけは。とっても痛いんだから」
「何云ってるのさ。明日から朝夕、六つ宛の鞭なのよ。泣いたって喚いたって、一日一ダースが最低よ。愚図々々してないで足を格子の外へお出し。扉を開けて引っ張り出させる気なの？」
　良枝の手で与えられるお仕置を逃れる術はないことを悟った彼は、恐怖に震える両足を再び鉄格子の外へ出して、しゃくり上げた。
「泣いてるのかい？　哀れな男ね。意気地なしったら……さあ、行くわよ」
　手頃な高さと角度で鞭を待つ腿の上に痛撃が加わった。
「ヒーッ……」
「もう一つ……」
　鉄格子にしがみついた手がゆるんで、彼はずるずると尻を落とす。
「ちゃんと、お立ち。未だ済んでないわよ」
「も、もう、もう勘忍して。お願いです」
　矢庭に手を格子越しに差し入れた良枝は、舌打ちしながら彼の腰バンドを掴んで引き上げ、靴先で彼の踵を蹴って足を揃えさせた。両内股に触れる鉄棒が冷たく、鞭を受けたばかりの腿は火がついたように熱い。
　泣声を挙げて哀願する彼の哀れな声に耳もかさず、彼女の鞭が両腿に鳴り、彼は脆くも再び崩折れて全身をのたうたせて、ヒーヒー呻いた。
「規則を守らないから、こんな痛い目に遭うのよ。分った？」
「ヒ、ヒー、ヒー」
「分ったかと訊ねてるのよ。未だ分らないんなら、後ろ向いて膝をついて足をお出しよ。今度は、ふくらはぎに鞭を呉れて上げるから」
「ヒー、そ、そんなこと……よ、よく分ったよ。い、いや、よく、よく分りました」
「分れば、いいのよ。では、寝ていいわ」
　鉄格子の外側から、鉄扉がガチャーンと閉められ、監禁室は一条の光もない漆黒の闇となった。
　永いこと鉄格子のすぐ内側で背を丸めたまま鳴咽していた彼は、やがて四ツ這いになって奥へ進み、薄い毛布にくるまって泣きじゃくりながら、それでも、そのうちに寝入ってしまった。

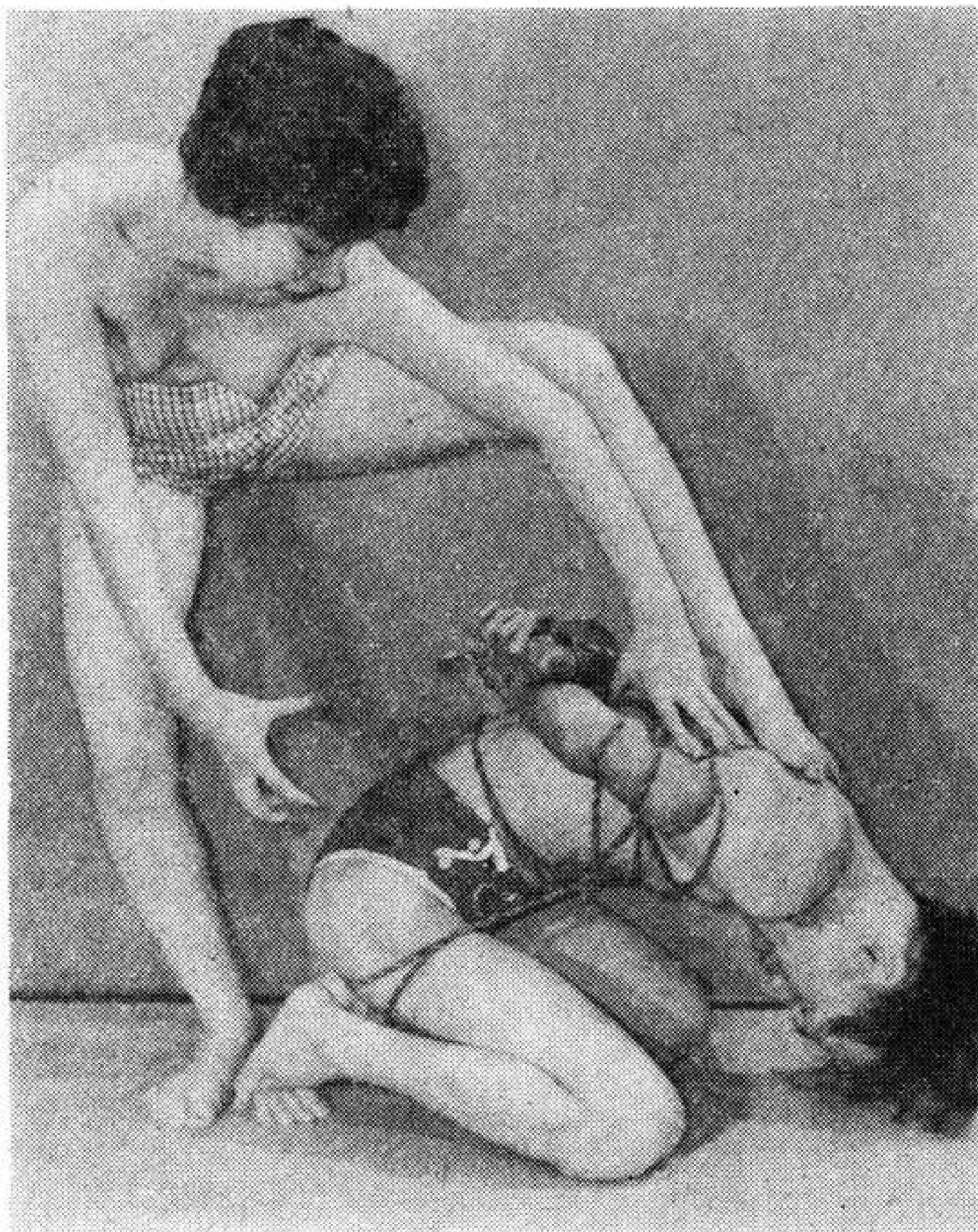
○　○

　良枝の叱り声に目を覚ました彼は、あわてて飛び起きた。手錠の鎖がガッと鳴って彼は手首の痛みに顔を、しかめた。鉄格子越しに仰ぐ空が青く晴れ渡って、まぶしい。足鎖の鳴る音、両腋下から背中を回る鎖に苛まれた背の鈍痛。そして両手首に重い手錠に、彼は忽ち自分の境遇を思い起した。
　良枝に真正面から睨みつけられて彼はガクリと肩を落とし、毛布をたたんだ。一晩中、喰い込み続けた革の褌が摺れて、昨日に倍する鋭い痛みに彼は呻き声を洩らし、ままならぬ両手で少しでもゆるめようと、はかない努力を試みた。腰骨も鈍く痛かった。これからの日々を、停学が解けるまで毎日こうして送るのかと思うと、大声で泣きたくなった。
「早くおしよ。お前は何をさせても愚図ねえ」
　彼の胸は、怒りと口惜しさに熱くなった。
「未だなの。ほんとにお前はノロマなのね。私だって朝の忙しい時を、お前のために手を取られてさ、ほんとに忌々しいわ。さあ、いい加減におしよ。そこの水道で顔、洗って。手錠を濡らさない様にするんだよ。これを早いこと、お喰べ」

身仕度した生徒達が、ちらほら庭に出て眺める視線を浴びて、しゃがみ、そして手錠をガチャガチャ云わせながら始末と洗顔を済ませ、良枝に小突かれ罵られつつ、手荒に革バンドを締め上げられて呻いた彼は、全身を恥かしさで真っ赤に染めて、与えられた食事を口にした。
「早く、お喰べよ。私はね、未だお前を鞭打つ仕事が残ってるんだから」
彼は箸を取り落さんばかりにおののいて、良枝を振り仰いだ。所詮、逃れる術のない鞭を思うと、もはや食事も咽喉につまりそうだった。
良枝は容赦なく彼を引き立てて寮庭の中央に立たせ、胸の札から背に回る鎖を解いた。
忽ち背中に痛烈な痛みが走る。
「ひとーつ」
いつの間にか現われた自治委員の男子生徒が、大きな帳面をひろげながら数える。
「ふたーつ」
「ヒーッ」
「ホラ、凄いみみずばれが出来て来るじゃないの。面白いわね」
「あら、可哀想なこと、いうもんじゃなくってよ。とても痛そうじゃない?」
髪を編みながら見物している女子生徒が眉をひそめた。
「三つ」
「ギャーッ!」
膝と両手を地面についた彼は、上半身を波打たせて苦痛に堪えた。
「お起き!」
良枝が首環を摑み、ずるずると立たせる。
「四つ……五つ……」
「ちえッ。また、膝をついたわ。弱虫ねえ。そら、最後よ」
ピシリ!
「ヒーッ、ヒーッ」
「済んだわよ。痛かった? 罰なんだから仕方ないわね。さ、鞭のお礼を云うのよ」
「お、お礼だなんて!」
彼は喘ぎ喘ぎ、弱々しく云った。
「そうよ。お礼を云うのよ。定められた朝夕の鞭の時には、お礼を云わなきゃ、いけないのよ。フフフ」
「く、くそッ!」
四ツ這いになったまま、彼は手錠の両手をもだえながら、口惜し涙を、こぼした。
「云わなきゃ、鞭がふえるだけよ」
「ち、ちくしょう。あんまりだ、あんまりだよ」
「また、そんな口を利くのね。お前は、未だ今の自分の分際が分ってないのねえ。私達と対等じゃないのよ。被懲罰者なのよ。頭が悪いのねえ。ホホホ」
良枝は、またも鞭を振り上げた。
「あッ、あ、云うよ、云うよ。云いますから勘忍して!」
「じゃ、早くお云い」
「あ、あり、ありがとう……ございました」
「フフフ。まあそれで、赦したげるわ。今度から、もっと大きな声でハッキリ云うのよ」
彼の頬を口惜し涙が、とめどなく流れた。
「ではね、お前は午前中はテニスコートの手入れをおし。丁度いい湿り工合だから、よくローラーを、かけとくんだよ。午后は空いた教室から掃除だよ」
「あら、丁度いいわね。試験期間中、掃除当番なしなのね。嬉しいっと……」
手を叩いて喜ぶ女子生徒を横目で見て、彼は歯がみした。
「云っとくけど、私の手があくまでは小使いの小母さんに、そう云ってあるからね、よくいいつけをきくのよ。あ、それからお前は、昼御飯は抜きよ。これから、ずーっと。分っ

た？ さ、手錠を外したげるわ」
外した手錠をポケットに納めた良枝は彼の足許に、しゃがんだ。
「その代り、足は結んどくからね」
両足首の鉄環に、それぞれついている二十センチ程の鉄鎖が脚鎖から解かれ、各々の先端の錠金具でカチリと結合された。これで、今まで別々だった両足首が一本の鎖で繋ぎ合わされたのだった。
「あ、あの、良枝さん……」
「何だって！ 水上生徒様と呼ぶんだよ。馬鹿ねえ」
「水上生徒……様。あの、足首が痛くて痛くて、とても歩けない位なんです。外して呉れいや、外して下さい……まし」
「ホホホ。駄目々々。鍵はね、ホラ、ここにあるけど、外してやる訳には行かないわねえさあ、さっさと小使室へ行ったらどう？ 私達は、いつまでも、お前なんかに構ってはおれないんだから」
彼は良枝の指先から、その鍵を、ふんだくりたい衝動に駆られ、両手を握りしめて、ぶるぶる震わせた。
「愚図々々してると手錠を嵌めて、そのまま働かせるわよ」
「そ、そんな……これじゃ、まるで囚人か奴隷じゃないか」
「そうよ。不服なら、さっさと退学おし。何度、云えば分るの？」
彼の胸に再び鎖を巻いて施錠した水上良枝は、嘲笑を残して立ち去り、彼は悲しみと怒りに腸（はらわた）も千切れる想いをこらえて、彼女の後ろ姿を睨みつけながら立ちつくした。
ようやく諦めた彼は、足の鎖に悩み悩み、力なくみじめな姿で小使室へ向うのだった。
「お前さんかい。馬鹿なことをするから、そんな目に遭うんだよ。辛いだろう？ 可哀想だけど、仕様ないねえ。おとなしく罰を、お受けするんだよ。え？」
小使の小母さんは、口ではポンポン云いながらも甘い飲物を、こしらえてくれた。
「おい、そんな物、飲ませちゃ駄目だよ」
奥から出て来た小使のおやじが、あくびしながら女房を叱った。
「だって、お前さん。甘いものが欲しかろうじゃないか。何も罪人じゃないしさ」
「馬鹿だな、おめえは。あの褌を見ろよ、錠が掛かってるだろ。夕方まで外しては貰えねえんだぜ。恩が仇にならあな。水気のものより、饅頭でもやりな」
「おやまあ、そういえばそうだねえ。じゃ、少し古くて固いかも知れないけど、これでもお喰べよ」
固い饅頭をかじりながら彼は、何度もしゃくり上げて、目をこすった。
「喰べたらテニスコートへ行こうか。早くしないと、ひるまでに済まないからね」
小使の小母さんと並んで歩きながら、彼はともすれば遅れた。両足の外側で重く揺れる足鎖の忌々しさも、さりながら、両足首を繋ぐ足鎖に、ともすれば、つまずき、よろけ、そして足首の痛さに呻いて時々立ち止って喘ぐ。
「ずい分、歩き難（にく）そうね。こう云っちゃ何だけど、むごいことをするもんだこと。出来ることなら外してやりたいけどさ、鍵がないからねえ。けど、それで働けるかえ？」
小母さんに憫んで貰った彼は、勃然と怒りが胸に湧いた。それは、やがて凝って、水上良枝に対する深い怒りとなって渦巻いた。
「ちきしょうめ、へこたれるもんか」
彼は歯を喰い縛って、鎖を鳴らし初めるのだった。
「あんた、頑張るのよ。そしたら、先生様達も、きっと早く赦して下さるからね」

……Mシリーズフォト……『お仕置』……絹川文代……



小母さんは、彼の頭を撫でて励ました。
「去年も二人ばかり重監禁されてねえ、同じように足に鎖、つけられてたけど、十日程すると慣れて来たようだったよ。鉄枷が足に、なじむのかねえ。あとで薬つけて上げるよ」
テニスコートは高い金網に囲まれて全部で十面、何れも立派なものだった。小母さんが開けて呉れた物置小屋から重いローラーを曳き出した彼は、遥か向うまで続くテニスコートの赤ちゃけた土を眺めて溜息を洩らした。
「じゃ、しっかりおやりよ。私は行くからね手を抜くんじゃないよ。私はいいけどさ、テニス部の大将は一目でローラーの掛け工合が分るんだから」
鉄のパイプを胸の札の所に当ててコンクリートの円柱を転がして曳き出した彼は、独り取残された。通常は二人で曳くローラーは、雨でゆるんだ土にめり込んで、とても重い。コートの隅から隅まで丹念に二回、曳いて回らねばならないのだ。庭球部の主将である三年生の男子生徒の角張った顔を想うと、少しの凹凸も気になった。
雨を吸った樹々は緑に光り、校庭は森閑としていた。三つ目の半ばで、彼は足首の余りの痛みに堪えかねて、地面にうずくまって呻いた。足首の鉄環をゆすぶり、指先で皮肉を撫でて彼は、歯ぎしりした。到底、外すことは出来ない。せめて鎖が、もう少し長ければと、彼は足鎖を握って引っ張った。この鍵をあの良枝の奴が持っているのだと思うと、彼は口惜しさの余り、身をもんで号泣するのだった。所詮、どうする術もなく、やがて諦めて立ち上った彼は、濡れた土がついた尻のあたりの気持悪さに、顔をしかめながら歯がみして、再び重い鉄パイプを持ち上げた。
陽は高く昇り、彼の全身は労役の汗で濡れて光った。金網の向うの樹立ちの中で人声が

聞え、彼はみじめな自分の姿を思って身を硬くした。校外の人々に見られるのは何としても情けなかった。ローラーを放り出して身を隠したい思いをこらえ、深くうなだれてローラーを曳き続ける彼の耳に、少年とその母らしい若い婦人の声が聞えて来た。

「さっき、泣いてたの、あの人だね」

少年が金網越しに彼を指差す。

「あらまあ」

若い母は、彼の姿に一瞬、驚いて息を呑んだ。彼は、もはや、やけ気味に足鎖の音も高く、足を踏ん張った。

「あの人、鎖つけられてる。奴隷だねママ」

「そうじゃないのよ。この学校の生徒さんなの。何か悪いことして罰を受けてるのよ、きっと」

「ふーん。泥棒したんだね？　きっと、そうだよ」

「そんなんじゃないわよ。先生のおいいつけを守らなかったんでしょ」

柔らかい土にすべって、彼は前のめりに倒れた。すぐ背後から重々しく迫るローラーから逃れようとして、彼は必死にもがいて起き直る。鎖が足にからみ、大きな音を立てた。

いつまでも眺めている母子の視線を肌に感じて、みじめさに胸も塞がる思いの彼は、今度は足鎖につまずいて膝をついて呻いた。もはや全身、濡れた土にまみれ、膝のあたりが強張って来た。

「ア、あの人はね、カンニングしたのよ」

胸の札を読んだ若い母が、少年に教えた。

「カンニングって、坊や知ってる？」

「知ってら。悪い奴だね、ママ」

「そうね。坊やも大きくなったら、この学校に入るのよ。しっかり、お勉強おし」

ローラーを曳いて真正面から母子に近付いて行かねばならなかった彼は、ようやくコートの端で向きを変えてホッと吐息をついた。

「まあ、鞭も当てられてるわ、可哀想に。さあ、坊や行きましょう」

独りごちた若い母は、白い腕を差し伸ばして少年の手を取って立ち去った。

ひるまでには到底、仕事は済まなかった。正午の鐘と共にやって来た良枝に、頭ごなしに叱られて彼は唇を噛んだ。

頬に平手打ちを与えて良枝が立ち去ると、小使の小母さんがパンを持って来て呉れた。

「見つからないように、お喰べよ。えらいだろうねえ」

ガツガツと咽喉をつまらせながら、むさぼり食べる彼を、小母さんは憫れみをこめた目で見やった。

午後もおそくなって、ようやくローラー曳きの労役を終えた彼は、良枝に頭からホースの水を浴びせられた後、息つく暇もなく教室の掃除に追い立てられた。

「東側の四室は私が、こっそり済ませといたからね」

小使の小母さんに耳打ちされて、彼は涙ぐんだ。

「オーイ、罪人の森。ローラー曳きは、えらかったろ」

「庭球部の連中が云ってたぜ。ローラー掛けなかった方が綺麗だったってな。ハハハ」

「あの人は何させてもトンマなのよ。掃除位は綺麗におしよ」

床を雑巾で磨く彼は、通りすがりの級友達に口々に、からかわれて、胸が熱くなる思いだった。黙って床を這い回りながら、涙がホロリと流れて落ちた。

夕方近く掃除を終えた彼の全身は、棒のように強張り、目も昏むように疲れ果てた。ひもじさも辛かったが、生理的要求も、切なかった。

「済んだようね」

良枝がやって来て見回って検査し、あちこちを更に掃除し直させた。彼は、もはや一刻も早く、横になりたかった。
「大分、疲れた様子ね。フフフ、労役が済んだら、これよ」
　彼女はポケットから、キラリと手錠を取り出した。
「も、もう、嵌めるんですか」
「そうよ。馬鹿！　前じゃないの。後手よ」
　脂汗の最后の一滴まで絞り出しての労役がやっとの思いで済むや否や、後手錠が待つみじめさに、彼は身もだえして啜り泣いた。
「泣いたって駄目よ。さあ」
　のろのろと、うしろを向いた彼の左手が、背后にねじ上げられて、ガチッと手錠が喰い込む。
「そっちも回して」
「ちょ、ちょっと待って。鼻がかゆいから」
「文句を云わずに早く回すのよ。馬鹿ねえ」
　良枝は罵りながら、容赦なく右手を摑んで背にねじた。
「さあ、鞭のお時間よ」
　彼女は、彼の背を邪慳に小突いて押した。足鎖につまずいた彼の腕を支えて
「あら、足の鎖は、とって上げるわね」
と良枝は鍵で足鎖の結合を解いてくれた。
　拘束されない歩幅で歩けるのが嬉しくて、彼は吐息を洩らした。
「また、鞭ですか」
　摑まれていた腕を突き放されて寮庭に立たされた彼は、声を震わせた。
「そうよ。きまってるじゃないの。最后までちゃんと立ってなきゃ駄目よ」
　見物の生徒達が集まる中で彼は胸の札を外された。今度は体の前側を鞭打たれるのだ。
　最初の一撃を胸に受けて、彼は悲鳴と共に体を「く」の字に折って、もがき喚いた。
「まっすぐ、お立ちよ」
　首環を摑んで引き起す良枝が、彼には鬼のようにも思えた。
　泣こうが喚こうが彼女は冷酷に規定の数の鞭を彼の胸から腹部にかけて与えて行った。
　身をよじり、ヒーヒー呻きながら生徒達の間を追い立てられた彼は、暗い監禁室に這いずり込んで床に崩折れた。
「こっち向いて正座して。何度、云ったら分るの？」
　大きな音を立てて鉄格子を閉めながら、良枝は嘲った。
「あ、あんまりだよ。ヒーッ」
　灼きつくように痛む胸から腹にかけての鞭痕を、彼は歯を喰い縛ってこらえながら、思わず恨み声を洩らした。
「何が、あんまりなの？　自業自得じゃなくって？　私が許すまで、そうして正座してるんだよ」
　寮庭に夕闇が濃くなり、寮の中では夕食の気配が賑やかだった。彼はポロポロ泣いていたが、やがて激しい労役の疲れに堪えかねて鉄格子に額を当てたまま、眠り込んでしまった。
　食事を持って来た良枝の声に彼は、いつしか横に倒れていた身を起き直ろうと、もがいた。
「眠っていいと誰に許して貰ったの？」
　引き出された彼の尻に、眠気ざましの鞭が与えられ、彼は悲鳴を挙げて飛び上った。
　用便を終えて再び締め上げる褌の痛さに、彼は悲痛な喚きを洩らした。今日一日の労役で摺れて痛めつけられた皮肉が、灼きつくようだった。
　右手だけ外された手錠を左手にぶら下げたまま、急き立てられて食事を終え、後始末を済ませるや否や、再び後手に嵌められた彼は更に数時間の正座を続けねばならない。

「お前のように克己心のない者は、こうしといてやるわ」
監禁室内に入って来た良枝は、正座した彼の両足首についた足鎖を、それぞれ腰バンドのうしろに引っ張って、締め上げたバンドの内側を無理に潜らせ、カチリと結合した。
「倒れると起き上るのが難かしいわよ。フ、フ、フ」
独り残された彼は、やがて僅かずつ、いざって両膝を鉄格子の外に出し、膝にはさんだ鉄棒に額を当てて足首を立てた。こうすると大分、楽だった。
眠りかけてはハッとして体を立て直すのを何度となく繰返し乍ら、ひたすらに良枝の許しを待ちわびる彼は、額を小突かれて目を覚ました。
「おい、しっかりしろよ」
低い声で鉄格子の外から彼を呼ぶのは、昨夜、罰を終えた中村だった。
「これでも、しゃぶれよ」
中村は、彼の口に飴玉を押し込んで慰めてくれるのだった。
「辛いか?」
「ウン。そりゃもう……　良枝の奴め、さんざん、鞭を当てやがって……」
「辛抱しろよ。彼女に楯突いたって、痛めれるだけだからな。俺も口惜しかったぜ」
「けど、お前とちがって俺は、牢の中でも縛られたままなんだぜ。ああ、この手錠、外せないかなあ。ちくしょう」
「いくら、もがいたって駄目さ。まあ、我慢しろよ。時々来てやらあ。あばよ」
やがて良枝がやって来て、足首を腰バンドから解いて呉れ、そして手錠を前に嵌め替えてくれた。鉄扉がギーと軋んで閉められる。
「あ、あッ、良枝さん。いや、あの水上様」
彼は鉄格子を握り締め、彼女を仰いで思わず叫んだ。
「いつ、いつまで、こうして、いなくちゃ、いけないのでしょうか?　教えて……」
殆ど閉め切られた鉄扉の間から、顔を覗かせて彼を見下ろした彼女は
「フフフ。罰は今日から初まったばかりよ。何云ってるのさ。うんと泣くがいいわ」
ガチャーンと鉄扉が閉じられ、外から施錠する音が漆黒の監禁室の中に響いた。

○　　○

広い校庭の掃除や草むしり、そして教室の窓拭き、柵のペンキ塗りや運動器具の手入れ等、彼は毎日々々労役に喘ぎ、朝夕与えられる鞭に呻いた。
嫌いだった勉強が無性にしたくなり、書物が恋しかった。教室の中で机に向って答案を書いている学友達を窓越しに見ると、本当に情けなかった。しかし放課前は建物内に入ることを許されない身の彼は、鎖の音を忍ばせて建物から遠ざかるのだった。
夕刻、受け終えた鞭の灼痛を、じっとこらえてコンクリートの床に正座していると、寮庭の隅の監禁室の鉄格子越しに、書物を手に寮の窓に倚る学友達の姿が眺められるのだ。胸にひしひしと迫るみじめさに彼は嗚咽して拭うすべのない涙で頬を濡らすのだった。
五日経って日曜日になった。
「今日は日曜だから、労役と鞭は許したげるわ。出ておいで」
良枝に引き立てられて連れて行かれたのは医務室だった。
「山田さん、この男よ。お願いします」
奥から出て来た若い看護婦の視線を感じて彼は全身を赤くして、うなだれた。
「まあ、可哀想に。最高の懲罰ね」
「あら、最高の罰は退学ですわ。さあ、傷の手当を受けるのよ。しゃんと、お立ち」
良枝は叱りつけながら彼の体から鎖錠をガ



チャガチャ外し床においた。褌も外された。
「ずい分、痛められてるわねー」
彼より少し背の高い看護婦は、彼の体をジロジロ眺め回して云った。
「ちよっと待ってね。今、患者が一人、いるの。浣腸しなくちゃ……」
「あら、誰ですの?」
「三年生の三舟さんよ。剣道部のキャプテン試験で運動不足なのに無茶喰いするんだものねえ」
看護婦は奥の室に消え、やがて硝子器具の触れ合う音と共に彼女の叱り声が低く聞えた
筋肉の盛り上った、あの剣道部のキャプテンが看護婦に浣腸されて、もじもじしている姿を想像して、彼がニヤニヤした途端、
「ボヤボヤしてないで、待ってる間に戒具の手入れをおしよ。監禁室の前の通路の端に物入れがあるだろう。油布と雑布を絞って持っといで」
褌すら締めていない姿は恥かしく情けなかったが、足鎖を除かれた身の軽さが、彼には嬉しかった。
「おそいじゃないの」
人目を避け、息せき切って命じられた物を持って来た彼に、ピンタを喰わせて良枝は叱りつけた。立ちはだかって見下ろす良枝の足許にうずくまって彼は手錠や足枷、首環や鎖を拭い磨いた。
「もういいわ。連れて来てよ」
「ハイ。さあ、おいで」
良枝は、いきなり彼の腕を摑んで引きずり立たせた。扉の奥の治療室ではベッドの上で剣道部のキャプテンが脂汗を額に浮べて唸っていた。
「あんた、もう五分、我慢しなさいな。えーと、今度は、この人ね。ずい分、体が汚れてるわねえ」

彼は隅のシャワーを浴びさせられた。微温湯が鞭痕や枷痕に快く泌みる。体中を撫でると指先にみみず脹れが、おぞましく触れた。
「もういいだろ」
そっと体を拭う彼の背中を良枝が乱暴にタオルでこすり、悲鳴を挙げ彼は飛び上った。
「ここへ来て、まっすぐ立ってごらん。ホホホ」
看護婦は笑いながら、そう命じて薬刷毛を瓶に突っ込んだ。立ちすくむ彼の首の回りに薬液が塗られ、背中から両尻へ看護婦の手が器用に動く。
「さあ、こっちを、お向き」
胸から脇腹へと薬液を塗られながら彼は身を硬くした。
「腰骨の所が少し、はれてるようね。腿の外側も皮膚が痛んで、はれてるわ。どうしたのかしら？　鞭痕でもないようだし……。ああ足鎖をつけられてるんだったわね。歩くたびに当ってすれるんだから無理もないわねえ」
「ウ、ウー。も、もういいだろ？　もう」
ベッドで枕にしがみついて唸っていた三舟が、堪え切れない声を洩らして呻いた。
「フフフ。もういいわ。よく我慢したわね。行っといでよ」
上半身に上衣だけ着た三舟は、ベッドを転がり降りて、あひるのような恰好で急ぎ去って行った。
「もう無茶苦茶に喰べるんじゃないよ。馬鹿だねえ」
三舟の後姿を、ちらと見やって、そう云った看護婦は、
「手を出して」
と彼の手首に薬液を丹念に塗り初めた。肘から、むき出しの腕が乳色に白く、うつむいた頭の白い優雅な帽子の下から黒髪がこぼれて匂う。
良枝は上級生に敬意を表して三舟の残した衣服を抱えて彼のあとを追って行った。
「手首が、ひどいじゃないの？　もがいたんだろ。いくら、もがいたって駄目なのよ。泌みる？」
「い、いいえ。ほんの少し」
「そう。さあ床の上に仰向いて寝てごらん」
悲しいことにベッドは使わせては貰えなかった。
「もっと足を開かなきゃ、駄目じゃないか」
戻って来た良枝が頭上に立って、冷やかに云った。柔らかな部分には薬液は、かなり泌みる。
「さあ、四つ這って」
恥かしさに全身を熱くした彼は体を震わせた。両足首に塗られ、尻に何かの注射をされて、漸く恥かしい恰好から赦され立ち上ったた彼は診察を受けた。脈を診る看護婦の手の柔らかさが身に泌みた。
「異常ないわ。けど窄衣を締めつけたら報告してね」
看護婦は医師でもない癖に、使用した聴診器を白い服のポケットに納めながら云った。
「どうもお手数かけました。さあ来るのよ」
入口の所で良枝は、床に置いた戒具を取り上げる。
革バンドが腰に締められ、錠が鳴り、ズックと革紐の褌が、きつく締め上げられた。じっと立ちすくんで、されるままになった彼は硬く重い鋼鉄の環が両足首に再び嵌められる感触と音に打ちひしがれて啜り上げた。ジャラジャラと足鎖が腰バンドの両側に吊るされる。
「あら、もう嵌めてしまうの。可哀想ねえ」
手を拭きながら現われた看護婦が眉をひそめたが、良枝は
「ええ、でも懲罰ですから」
と容赦もなく首環を嵌め、札を胸に鎖で固

定し、そして手錠をカチャッと鳴らして取り上げた。
「うしろ手よ」
　恨みと怒りをこめて、ちらと良枝を見やった彼は、のろのろと両腕を背后に回して、うなだれた。
「懲役囚並みなのね」
　看護婦はハススの香りのする煙草をくゆらせて眺めつつ、嘲けるように云った。
　その日は、晩まで後手錠正坐のまま反省させられて永い永い一日を過した。試験はあと二日で済むのだ。そして数日後には楽しい正月休暇なのだ。
　微かに監禁室内に聞えて来る学友達の声は明るく弾んで、彼の胸は掻きむしられるように切なかった。家に帰ることはおろか、おそらくは、こうして鎖をつけられたまま正月休暇を過さねばならないのだと思うと、彼は身もだえして号泣するのだった。

○　○

　学友達は明るい陽光を浴びて、野球に庭球に遊びたわむれていた。昨日、試験が終ったのだ。彼等の姿を羨ましく盗み見しながら、被懲罰生徒である謙二は、地面を這いずり回って労役していた。道の玉砂利を篩って土や砂を除き、再び綺麗に敷きつめる仕事は苦しく切なかった。
　時々やって来て、からかい慰める級友達は決して手伝おうとはしてくれない。口答えする元気も既に失った彼は、ただ黙々と苦役の鎖を鳴らし続けた。容赦ない良枝の鞭が、ひたすらに恐ろしかった。名を呼ぶ声に、額の汗を押し拭って振り仰ぐと、担任の原先生が立っていた。
「どう？　よく反省してるの？」
「ハ、ハイ。悪い事を致しました。申し訳ありません」
　先生のきびしい顔が綻びて、白い頬に、えくぼが浮んだ。しゃがんだ先生の手が伸びて彼の頭を撫でた。
「そう。それならいいわ。けど覚悟はしてるだろうけど、このお正月休みまでには赦されそうもないのよ。おうちへ手紙、出しといたらどう？」
「ハイ」
「水上さんにお願いしてごらん。私からも云っとくけど。しかし面会は禁止よ」
「ハイ」
「辛いだろうけど辛抱するのよ。いいこと」
　長い目のスカートが揺れて先生は立ち上って去って行き、彼は再び強張った指先に力をこめて、素手で玉砂利をすくって篩に投げ入れるのだった。
　哀訴する彼を、さんざんなぶった末、良枝は、ちびた鉛筆とノートの切れ端を二、三枚与えてくれた。
　監禁室内の電灯もつけてはくれず、夕暮れの暗い房内の机に向って、彼は両親への便りを書いた。固く嵌められたままの手錠に歯ぎしりしながら、彼は暖い我が家を想いつつ、綿々と訴えを綴っては涙を流した。
「お願いだから、さっきの手紙を必ず出しておくれよ。お願いだから」
　鉄扉を閉めようとする良枝に、合掌せんばかりに彼は哀願するのだった。
「フフフ。中々殊勝なこと書いてたじゃないの」
　手紙を読まれた怒りと口惜しさに鉄格子を握り締める彼の眼前で、鉄扉がガチャーンと閉じられた。
　正月休暇が明日からという日に両親からの返事が届いた。
「悪いことをして罰を受けるのは当然のことだ。辛くても立派に償いを済ませるように。自治委員の方々、特に水上さんを決して恨ん

ではいけない」
いたわりと励ましに満ちた父からの便りには、そう書いてあった。
帰省する生徒達は喜々として去り、鉄格子を握り締めて号泣する彼の泣声は森閑とした寮庭に空しく消えた。水上良枝も最後の鞭を与えて帰って行った。監禁室の鍵と褌の鍵は小使夫婦に預けたが、手錠と足鎖と首環の鍵は、渡さなかった。両足首を鎖で繋ぎ合わされ、両手に前手錠を嵌められたまま彼は、彼女が休暇を終えて戻って来るまでの日夜を送らねばならない。
小使の小母さんは、相変らず親切に、いたわってくれた。毎日一時間程、運動のために出してくれる以外は、監禁室に閉じこめられてはいたものの、正坐を強制される事もなく古い敷蒲団すら、与えてくれた。
「小母さん、この手錠、何とか外せないかなあ」
「鍵がなくちゃ、そればかりは駄目だね。あの水上さんも、ひどい事をするじゃないか。まあ、その手錠と足鎖は諦めるんだねえ。褌は、きつくはないかい？」
頼めば用便も自由にさせて貰えるし、朝夕の痛い鞭の責苦がないだけでも、全く楽だった。労役もなく、彼は退屈に苦しめられた。
「お願いだから、僕の室から本を持って来ておくれよ」
かなり渋っていた小母さんも、とうとう教科書を持って来てくれた。久し振りに読む教科書は新鮮な思いだった。手錠をガチャガチャ云わせながら読み耽ると、今までどうしても分らなかった事柄が不思議と理解できるのだった。
小母さんの慈悲の雑煮餅を不自由な両手で漸く喰べて、彼は正月を鎖錠のまま鉄格子の中で送った。我が家の正月を想うと、涙がとめどなく溢れたが、如何するすべもなく、体を動かすと忌々しい鎖が音を立て、両手両足の鋼鉄のいましめが今更のように骨に喰い入る思いだった。
「もうあと三日で新学期だね。あのねえ、私水上さんに云いつかってるのよ。毎日、あんたを鞭打つようにって。でも、そんなこと、可哀想で出来やしないものねえ。けど、もうあの人が、いつ戻って来るか分らないし、私が叱られるからね。気の毒だけど少し鞭痕をつけとかなくちゃいけないんだよ。可哀想だけど」
手加減しながらの鞭ではあったが、それでも結構、痛かった。
「私を恨まないでおくれよ。けど、あんなにみみず脹れが出来る位に打つのは、とても私にゃ出来ないよ」
「ヒ、ヒー。い、いいんだよ、小母さん。それよか、もう手錠が辛抱出来ないんだ。手首が千切れそうなんだよ」
「ストップ装置は利いてるんだろ？」
「いくら締まらないようにしてあるからって初めに固く嵌めやがったんだよ。二週間も嵌められたままなんだから」
「そうだねえ。それは、どうも警察で使ってるのと同じ物らしいねえ。外してやりたいけど」
「もう本の頁も繰れない程なんだよ。ああ、畜生！　良枝の奴！」
休暇が終って、恨めしくも恐ろじい良枝が戻って来た。そして再び鞭と苦役と、そして後手錠の正坐の苦しみが始まった。
全生徒の中で真っ先に帰校した良枝は、彼の褌を先ず、きつくきつく締め上げ、体の前後に一ダースの鞭を与えて脂汗を流させた末漸く手錠を外し足鎖を解いて、寮の掃除を命じたのだった。

○　　○



三学期の期末試験の直前、彼の停学は赦された。それに伴って重禁慎も赦された彼は、全生徒の面前で謝罪の誓いを大声で叫ばされた後、三カ月振りで鎖錠を解かれて寮に戻る事が出来た。

「辛かったでしょ。よく辛抱したわね。もう悪い事をしないでよ」

良枝に云われて彼は怒りが、こみ上げた。

「何云ってるんだ。もうお前とは同等なんだぞ。威張るな！」

彼は久し振りの衣服の感触に体を、もぞもぞさせて呶鳴った。

「フフフ。お前は未だ懲罰中なのよ。今年中は外出禁止！　分ってるの？」

再び思い知らされたみじめさに、彼は握ったこぶしを、ぶるぶる震わせて沈黙する他なかった。

試験は受けたものの、勿論、結果はみじめなものであった。原級に留められた四名の中には云うまでもなく彼がいた。

春の休暇を彼は唯独り、寮で過さねばならなかった。当直の先生の目を掠めて外出しようと思えば出来ない事ではなかったが、ばれた時の事を思うと足が、すくんだ。

彼の好物を持って訪ねて来てくれた両親の前で彼は、いつまでも泣きじゃくり続けるのだった。手足や首に残る戒具の痕を撫でて母も一緒に泣いて呉れた。

新しい学年が始まった。見知らぬ新入生徒に混じって彼は、もう一度、一年生をやらねばならなかった。体中に残る重禁慎の懲罰の痕は未だ消えやらず、隠すすべとてなく、伝え聞いた新入生達に、じろじろ見られて、彼は劣等感を、ひしひしと味わうのだった。

今は上級生となった元の級友達、特に水上良枝の前では顔を上げる事も出来なかった。良枝の視線を感じると全身が、わなないた。

そして彼は学校の教育方針とは反対に、卑屈で、ここそこした人間に成長して行った。懲罰を受けても、それを撥ね返して強い人間になるのが学校の望む所であったのだが。

彼は三年の所を五年かかって漸く曲りなりに卒業出来た。重禁慎は、あの時だけだったが、軽い懲罰は数回、受けた。

彼が二年生から三年生へ不思議と落第もせずに進級した時、良枝は優秀な成績で卒業して行った。貧しい彼女は大学への進学を悲しく諦めて社会に身を投じたのだった。それを聞いた彼は浅間しくも快哉を呼び、そして彼女がいなくなる事を心から嬉しく思わずにはおれなかったと同時に、一抹の淋しさを時々おぼえるのは不思議であった。

三年生を二度やった彼は、名門高校の生徒にとっては大学の中には入らないお粗末な大学に漸く入学出来た。

彼の鈍才には既に匙を投げて居た両親は、長男の俊一に会社を任せて自適していたが、彼が大学在学中に飛行機事故で二人共、亡くなった。そして彼の手には多額の生命保険金が入ったのだった。遊び回る彼を、寛大なお粗末大学は卒業させてくれた。彼には兄の経営する会社の総務部次長のポストが待っていた。

○　○

新調の背広を少し気障に着て、彼は颯爽と出社した。

総務部や秘書課の女の子達の視線が集まる中で、彼はデスクに腰を下ろして得意気に見回したが、冷たい笑みを頬に浮べて素知らぬ顔で執務する娘を見て、彼は煙草を取り落して驚愕した。

水上良枝！　彼女が、そこにいた。兄から渡された人名簿を、碌に見もしなかったのが悔まれた。

彼女が、ゆっくり顔を上げ、彼の目を、ひたと見詰めて冷たく笑った。思わず知らず彼は目を伏せて、つばを呑み込んだ。自分の地位を思い起した彼は、顔を上げた。彼女は既に素知らぬ顔で平然と書類を調べている。

途端、彼の心に復讐心が勃然と湧いた。そして過ぎし日の事を想って渦巻く怒りの念の中に、彼女に対する淡い、しかし根強い崇拝と思慕の情が潜んでいるのに彼は気付かなかった。

○　○

総務部長が部員を集めて、彼を引き合わせた。男の社員達は、ねたましさを秘めて或は殊更に磊落さを装い、或は、さげすみの色を浮べた。多かれ少なかれ媚態を示す女子社員の中で水上良枝だけは冷然たるものだった。

他の部課への挨拶が済むと、彼はデスクで暇をもて余した。官庁関係を担当する課のデスクで執務する良枝の横顔を盗み見するたびに、彼の胸は騒ぎ疼いた。

立ち上った彼女が書類を課長の机へ持って行った。薄いブルーの上張りの下で動く成熟した体の線に、彼はハッとする思いだった。課長のデスクを離れた彼女は、彼を無視して部長の机の上に書類をおいて行った。

「森君。きみは、ひるになったら帰っていいよ。まあ、ぼちぼち、やり給え」

判を押しながら部長は、振り向きもしないで彼に云った。

両親の残した広い邸に兄夫婦と一緒に住む彼は、頭のいい兄が煙たかったが、それ以上に嫂の貴子には頭が上らなかった。三つ年上の嫂は、美人の癖に頭も切れて、彼を軽蔑し切っていた。頭の回転のおそい彼は、浴せられる遠回しの皮肉に、あとになって気付いて口惜しく思う事が度々だった。

「どう、少しはお仕事できる様になって?」

数日後、帰りの遅い良人を待ち佗びた彼女

が、彼の部屋へ紅茶を運んで来て、からかうように訊ねた。夜の化粧が匂うばかりに美しく、子を産んでいない胸許が、襟元を抜いた和服の下で、ふくらんでいた。紫ダイヤの指環を嵌めた手は、二人の女中と夫婦者の奴隷を召使って水仕事一つしない女にふさわしくふくよかに、すべすべと白い。

「ウン、少しは分って来たよ。とても親切でやさしい女の子がいるんだ。岩下早苗って云うんだけど。他の女の子は遊んだりするのには、とても親切だけど、仕事の方は上っ面しか知らないんだなあ。岩下って云う女の子は仕事の要領を親身になって教えてくれるんだ全然、馬鹿にしないし……」

「そう。ホホホ、大分お気に入りのようね。俊一は自分で覚えさせるんだと云ってたわ」

「そうなんだよ。兄貴の奴、全然、教えてくれないんだ。冷たいよ」

「ホホホ。同じ学校の人もいるでしょ？」

嫂は紅茶を一口、啜って、髪を気にして、そっと撫でた。煽情的な香水の匂いが立ちこめ、白い腕を滑り落ちた袖口から、燃えるように赤い長襦袢が、こぼれる。

「総務部には僕と同じ大学の奴はいないさ」

彼は自嘲をこめて呟いた。

「けど、同じ高校の卒業生は二人、いるよ。一人は女の子だけど」

良枝を思い出して彼の胸が苛立ち騒いだ。

その時、遠くの地下室から呻き声と悲鳴が微かに洩れて聞えて来た。

「あら、扉が閉まってないのかしら？」

「嫂さん。また？　可哀想じゃないか」

嫂は眉一つ動かさないで、平然と云った。

「月に一回は、錠を外して一晩中、同じ檻で過ごさせてやってるのよ。それなのに今日、物置の陰で、いちゃついてるの。ほんとに犬より嫌らしい奴等だわ」

微かに舌打ちして呟いた彼女は、煙草を取出して優雅な手つきで吸いつけた。えも云われぬ、かぐわしい香りが漂う。

「ハスス入りのだね。一本、おくれよ」

嫂は婦人用のシガレットケースを面倒臭そうに放り出した。

糸を引くような呻き声が、扉の閉まる音と共に聞えなくなった。

「こんな煙草位、自分でお買いなさいな」

「だって俺も家を建てなくちゃいけないものね、倹約してるんだ」

「ホホホ、今まで遊び過ぎたからよ」

遠い門のあたりに車の停まる気配がした。

「あら、漸く帰って来たわ。うんと苛めてやらなくちゃ。おやすみ」

美しい嫂は立ち上って襟のあたりを直し、いそいそと出て行ったのだった。（つづく）


カット＝T・原

『とき子の自縛』に共鳴して
自縛の技術論

佐藤守

一、自縛の理想と現実

山口とき子さんの自縛『縛り方教室』を読んで「何とマア、世の中には似た性向を持っている人もいるものだ！」と僕は感銘もし、呆れもした。とき子さんの試みている自縛の方法、目標、考え方は僕が十数年間、営々として秘かに実行し、いくたびかの試行錯誤を重ねた上で、ついに「自縛は他人による縛りには、とても比較にならない」と諦めて、他人の手によっての被縛りに移った直前の時期の状態に、すべてがソックリだからである。

十数年前、全く現在のSMブームとは雲泥の差といえるような、SMが「秘めごと」であった時代己れの性向に嫌悪を感じながらも「奇譚クラブ」の教示で、その気持を僅かに自ら慰め昇華しながら何とかして自縛の最終目標は、他人に縛られるのと全く同じ状態にすることだと、アアでもない、コウでもないと毎夜、家人の留守を狙っては、実験を試していた私のそれと全く同じ人を、とき子さんの二回のレポートから感じとったのだ。

そこで、遅まきながら〝僕の自縛方法〟と〝とき子の自縛〟とを比較対照しながら、発表させて頂きたい。

△

第一に、〝他人に縛られたと同じ状態にする〟ことは、心理的にも技術的にも理想だけれども、実際には、とても不可能なことだということだ。

心の中では絶えず――解けないように――と祈っていながら、実際には、解けなくては困る、という気持。〝完全に自由を拘束される〟ように縛られることは、解けないことと同意義である筈なのに実はその両者を同一に望んでいる心理。こんな完全な矛盾がはっきり判っていながら、なお、それが技術的に可能のように故意にこじつけて、何とか実現してやろうと工夫する心理。Mというのは、こんなに欲深く理想主義者なのではないであろうか？

とき子さんの自縛は、できるだけ、それに近い状態、九十九％の満足を得る方法を開発した点に、とき子さんの創意工夫が見られて嬉しい。また、アベコベに一旦とりつかれた自縛の魅力を、技術的に克服したアイデアが素晴しく心憎いばかりである。

私に比べて、とき子さんは自由な時間と空間が多くて、いろいろの自縛方法を試みる余裕が、このレポートに盛られた豊富な内容になったと想像されるが、以下、順を追って、僕の経験した場合と比較しながら方法を一緒に考えていきたい。

△

僕が自縛する時、解くのに刃物を使うことは考えなかった。もし刃物を使わないと解けない程の緊縛とすれば、確かにそれは他人に縛られたと同じくらいの効果を得

られる。とき子さんは、最終的にはそこまでの覚悟をしているようだし、現実に行なっているようすなので、僕の方が縛り方が緩いのかもしれない。前手縛りもあるようだが、前手縛りは、刃物さえあれば簡単にすぐ解けるので、僕は始めから自縛の対象とはしなかった。自縛方法は後手オンリーであった。（この点も、とき子さんによく似ている）

後手自縛の一番、難しいのは、ゴロゴロと転がってみても、手首が絶対に緩まない縛り方にすることである。両手首が重なって、その間に全く隙間なく縄がかかって強い密着感があるとき、「ホントに縛られ自由を失った」感が強くなる。ところが、とき子さんの方法では、どうしてもゴロゴロと身体を動かしていると、自然に緩んでくることが多い。長い一本の縄で、順序を考えながら自縛した場合には、なおさら、緩みが早いのは事実である。むしろ、他人によって、僅か一メートル程の長さの縄でも、いかだの方法で手首だけ堅く縛られると、少々のもがきでは絶対に緩まない。

〝しびれてくる〟ことは、確かに〝解く〟ことにとっては厄介なことで、警戒しなければならない。しかし、いくら厳重に縛っても、自縛では、身体をむやみに動かさない限り、しびれる程、固く縛ることは難しい。僕の体験からいうと、かなり固く後手首を縛っても他人にやって貰っても、しびれを感ずるのは三回に一回ぐらいの経験で、SMプレイでは、しびれてくると、快感が苦痛になり、気持が、しびれの部分にだけ集中してしまって、不愉快になってしまうものだった。

縛る順番は、その時、〝どんな縛り方をしようか〟のテーマに従って自然に決まってくるものだ。自縛では、後手首の縛りが最終になることが大部分なので、それ以前に〝猿ぐつわ〟の必要の有無。足を縛るのか、二の腕はどうするのか、半吊りにするのか。男性だったら着衣か、褌か、全裸なのかの衣装。大きく分けて、海老縛りか逆海老か、立つのか座るのか、寝た姿勢なのか……を考えて、それらのスタイル・ポーズを第一に決めて、できる所から縛っていき最後に後手を縛って、その後手の縄の始末をして完成するのが、普通のやり方だ。

後手で、とき子さんが註文している「後ろ手首を背に高々と吊り上げる」ことが最も難しい。他人が縛るときは、後手に縄掛けしてから背中に高く上げようとするが逆手のチョットした加減で上がりにくくなる。自分で縛るときは、自分で逆手に手首と肘をかえして上げるから、むしろ他人が縛るよりも高く上がるものだ。しかし、自縛でも、とき子さんのレポートの「図1」(イ)のようにして、二の腕をかなり固くまいたつもりでも手首の縄を縦に縛ってある縄に引っ掛ける「図一」の(エ)のようにしてしまうと、手首の下がろうとする力のために、手首がどうしても下がりがちだ。これを解決するには、手首の縄を他の縄にかけずに柱などにとりつけたフックのようなものに後手の縛を引っ掛けて、身体全体を下に下げればよいのだが、どうしてもポーズが限定されてしまうし、身体を上げれば緩んでしまうということの繰返しで、僕はとうとう、うまい方法を見つけ出せなかった。

二、自縛の技術について

（一）自縛に使う縄は、その緊縛感と、縛り易さと、解き易さとの三つの要素によって決まる。勿論いわゆる、好みの点もあるが、自縛の場合は、おのずから条件があって、勝手な縄、紐類を自由には使えない。理想的には、八～十ミリぐらいの太さの袋打ちの木綿縄がよい。縄の端末が、とかくほどけてバラバラになり易いが、これは避けた方がよい。末端が三・四本に分れてしまうと、目に見えない後手の部分の縄の運びが思うようにいかないからだ。末端が乱れてきたら、思いきって切り捨ててビニールテープで固く巻いてしまうとよい。ザラザラした感じの麻縄は、解けにくいし、からまりやすい。ビニール製の登山ロープは一見、縄らしく見えるが、弾力がありすぎて思うように曲がってくれない。足首などは何の縄でもよ

さそうだが、やはり手首の縄と同じ種類のものが調和がとれてよいのではなかろうか。
　とき子さんに、縄の種類に触れていないし、写真で見る黒色のロープの正体が不明だが、全身の縄が同種類で統一されていて、自縛とは思えない緊縛感がある。布製の紐類は肌当りが軟らかでよいのだが、固く締まると、解きにくいのが欠点だ。手首の縄を、やや細目にし、身体の縄を太目にして使い分けるのが、妥当ではないだろうか。

（二）「図三」の(ア)(イ)図のような柱は、近項の家庭には実際にないのが普通だろう。縄を留めるのが目的だが、縄を固く締めるためには、ある程度の力を支えられないと、いけない。タンスの取っ手、机の足などを、僕は試してみたが何れも力が弱いのが欠点だ。どうしても力の点で物足りないときは部屋の柱の低い部分に、それとなくネジ込む輪の型の金具を取り付けておくしかない。僕はその金具を、部屋の隅の柱の、畳から三十センチぐらいの所に深く差しこんで利用したのだが、こうすれば、五十キロぐらいの力をかけてもビクともしない。

（三）自縛の服装は、男性なら、六尺褌が、いちばん良い。縄を締めていくのに、肌への当りが直接感じられるので縄の締める力の強弱が自由だからだ。もちろん、強く縄をまとえば、肌に縄の跡が付く。手首は割と早く消えるが、肩や二の腕のは時には容易に消えない。たとえ五分間ぐらいでも、全重量を掛けた〝吊り〟を試みたりすると、二の腕の縄の跡は、四、五日は消えずに残っている。これを防ぐのに、さらし布を縄の代りに用いてみたが、緊縛感と美感はかなり低下する。夏などは二の腕が露出する服装になるので、縄の跡が残るような縛り方は、どうしても敬遠してしまう。
　女性の服装は男性の僕には、よく判らないのだが、男性以上に肌が傷つきやすいように思うから、より以上に慎重にしなければならないのではないだろうか。
　自分自身の問題だから服装は自由に変えられるが、とき子さんは服装には少ししか触れていない。写真は、ノースリーブのワンピースのようだが、理想は、ブラジャーと、ビキニショーツではないかと思う。

（四）〝吊り〟については、とき子さんは前回に詳しく述べていられて、その苦心のほどが、よく判る。僕自身の場合は、自縛は〝吊り〟に終始した。自縛の吊りの方法については、とき子さん以外にも、かなりの告白がなされていて自縛ファンの最大の魅力のようである。
　それは、吊りは見た目には凄いが、その割に苦痛を軽く済ます方法があり、技術的にも、知らない人が想像するよりも容易だからであろう。ただ、吊りを試みる前に必ず、吊り以外の自縛のスタイルの工夫と経験があって、それらの経験が吊りを試した時に活用できるのであって、いきなり吊りをやってみるのは無茶である。ただ、吊りの告白では、いくら言葉と図解が詳細に説明してみても、かんじんの急所の所は、説明し難いものである。とき子さんにも、僕の実施した経験から、やはり判りにくいことがある。
　それは、たとえ女性で体重が軽くても、全身を吊った場合、縄にかかる荷重が大きくて苦痛が甚だしくなる点を、どう工夫して避けたかという点である。太目のロープで何重にも腕や胸を廻して、その縄に吊り縄をかけても、全体重がその縄にかかって、圧力が極めて大きくなり到底、苦痛に耐えられない筈なのである。一分間ぐらいなら我慢できても、それでは、吊りの醍醐味に浸っている時間としては不充分ではないだろうか？せめて、五、六分間ぐらいは、空中をクルリクルリと廻っていてみたい筈なのに……。
　僕は後手の縄は、吊り縄には、直接、力がかからないようにして吊り縄の力が胸の縄にかかると同時に、六尺褌の前袋の両わきから縄を股間に廻して後に出し、その縄を吊り縄に連結して、吊り縄の力が、胸の縄と股間の縄に分散するようにして、ようやく、五、六分間の完全な吊りに耐えられるように工夫した。吊る方法は、とき

子さんと同じく、踏み台を外す方法である。

この踏み台も、広い底面積を持っていて倒れない型のものを使わないと、ブラブラと空中で揺れる足が踏み台に触って倒れてしまうと、もとの姿勢に戻れなくなる。僕の後手の吊りの方法では、踏み台を外したら、絶対に後手が解けないから、踏み台は必ず足の届く場所になくてはならない。ふみ子さんの方法では、踏み台から足が外れても、空中で後手が解けるらしいから、まだよいが、その方法が判らない。このような点に、直接、見て聞かないと他人の方法をオイソレと真似できない極意みたいな部分が潜んでいる。

（五）猿ぐつわが好きな人にとっては、自縛では、それこそ自分の思いのままの猿ぐつわが、とれる点が圧巻である。僕も猿ぐつわが大好きで、一旦、自縛した縄を解いて、猿ぐつわをかけてから縛り直したことが何回もあった。その時のプレイに応じて、硬軟自在に好む方法、好むスタイルの猿ぐつわを自らの手でかけ、後手に縛ってしまえば、猿ぐつわは自由に外れない。それだけに、プレイの完了まで、その魅惑を味わっていられる。他人の手による強制的猿ぐつわとは違うので、まず途中で猿ぐつわを外したくなることは少ない。そこで、とき子さんに負けずに僕自身も、いろいろな方法で猿ぐつわを試してみた。

猿ぐつわの本来の目的は、助けを求められない、勝手な註文を並べられない、の他、縄を食いちぎったり解くことができないという点にある。二人以上が縛られている場合に、他の縛られている者に一人が近づくことさえできたら縄は口を使って解くことができる筈である。それが、猿ぐつわがあると、かなり制約される。しかし、発声を妨げるためには、猿ぐつわというのは、不充分な方法であって、よくSMの写真、図にある方法では、発声を完全に遮ることは困難である。単に、歯の間に手拭いを噛ませるぐらいでは、声は半分ぐらいしか殺せない。

とき子さんの猿ぐつわのフィーリングは、「息苦しさ、圧迫感が大好き」とあるが、僕は、完全な防声の猿ぐつわをして自縛することが多かった。手足は完全に拘束されても、猿ぐつわが好い加減だと、手足の縄さえ緩んだ感じになってしまう。自縛のときは、解くときに、かなりのエネルギーが必要なので、とき子さんのように、鼻口を覆う猿ぐつわは、厳重な自縛のときは採用できない。息苦しくなると、厳重な縄目を解くのに著しく困難だからだ。

僕の通常の猿ぐつわは、口中に大き目のハンカチを詰め、さらしの布で一たんハンカチを口中深く押し込めるように噛ませ、さらにさらしを拡げて、その上を覆う二重式のを用いた。従って、布の長さは手拭いの二倍ぐらい必要だ。

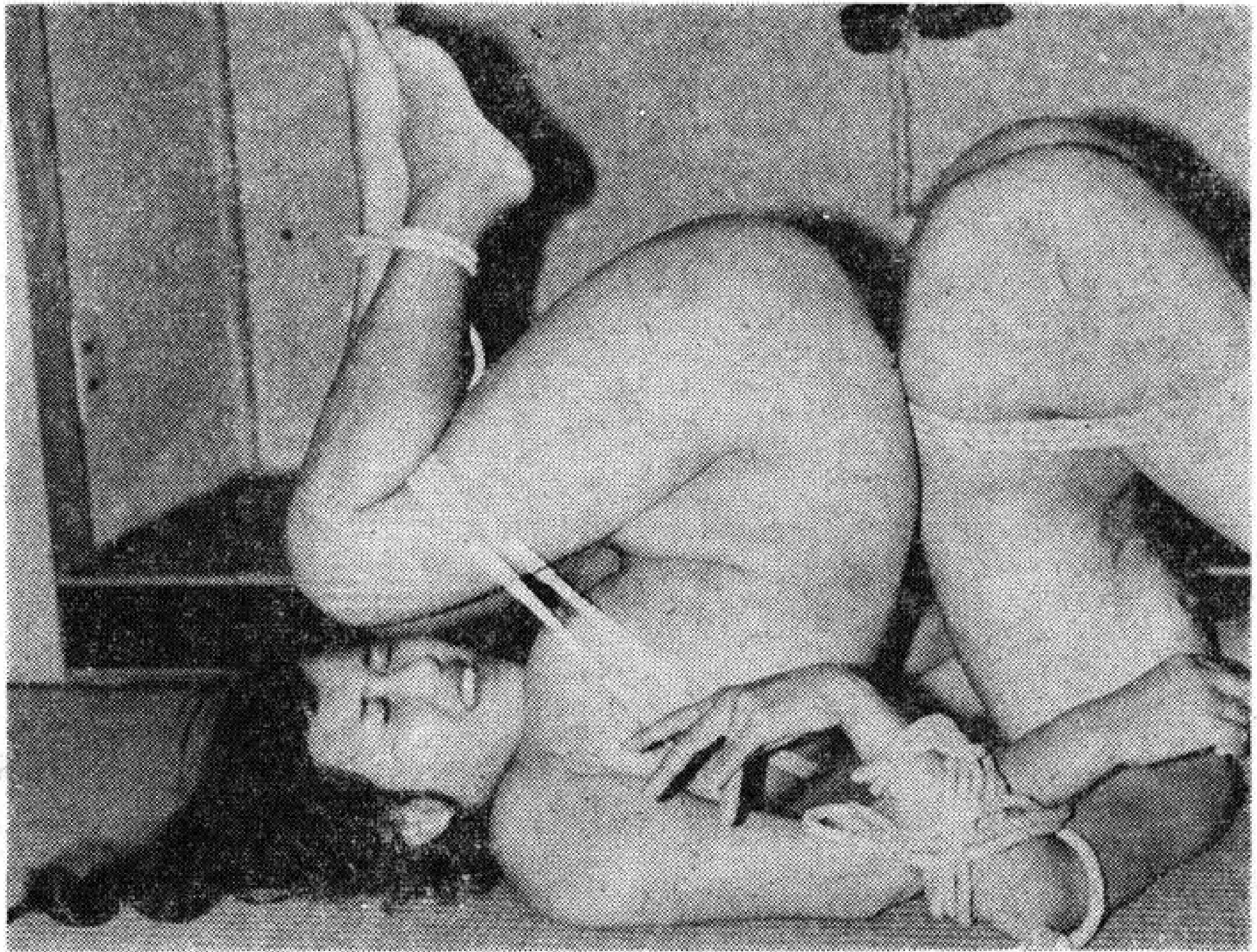
（六）とき子さんは何も触れていないが、自縛で、もうひとつ、目かくしができる。慣れてくると、自分の縄が、今、どう廻しているのか見えなくてもよく判るので、あらかじめ手拭いで目かくしをしておいてから、自縛を始める。複雑な自縛方法は管理だが、吊りのとき目かくしをし、空中に身を下げて、身体が吊り縄を中心としてグルグル回転すると、東西南北の方角が完全に判らなくなり、半失神状態になる。ぜひ、とき子さんに奨めたい。

三、それでも他人に縛られたい

これだけ自縛の体験・実験を繰り返してみてもやはり、他人の手による緊縛には、かなわない。それは、自縛では、縛りつつあるときに「最後には何とか解けるように」と心を配りつつ縛るからだ。他人から縛られることは、もちろん最後には解いて貰えるのだが、その途中では、絶対に自分では解けないからだ。自縛する人は、それが怖いから、人の手によらずに自縛して、その経過の被虐意識と縛り上げられた姿態に仮の酔いを味わうのだ。とき子さんの最後の章の絶唱こそ、縄を求めて彷徨するMの真の姿がある。

とき子さん。あなたも、早く心を開いて自縛を捨てて、他人の手による真の縛りを味いませんか！

——（完）——



淫夢五夜（いんむごや）

=マゾ女の描く夢のかずかず=

川路むら子（フォトも）

私はマゾの女です。

淋しい夜、眠れぬままに、思いめぐらす夜毎の夢は、またマゾのかずかずです。

私の投稿した読者通信に多くの同好の方々からのお便りを頂戴して、ほんとうに有難く思いました。そんなお便りを拝見する楽しいひととき、私はこんな夢を見るのでした。

第一夜

責められる話

「さあ、何もかも、白状してしまえ。あらいざらい白状するんだッ」

彼の声は、部屋の中に、ひびきわたった。

私は、丸裸で両の手を後ろ手にしばられたまま、部屋のまん中に立たされているのだ。

「浮気者のお前が、どんな顔して、あの男と乳くり合ったか、その時の顔をしてみろ。さあ、して見せるんだ」

黒いものが私の頬で〝ピシッ〟と鳴った。皮でできた、まるでヘビのような、しなやかなムチが両の頬にうなって、とんで来る。

「強情者！」

彼は私の豊かな腰を思いきり、蹴上げた。

私は、きりきり舞いして、畳の上に、ぶざまなかっこうで、ころがされてしまった。

うつぶせに倒れた私の下半身を、彼はぐいぐいと踏みにじっていく。私はあえぎ、耳のつけ根で鼓動し、汗ばんだ全身は、悦楽境をさまよいはじめるのだった。

「出来なきゃ、出来るようにするだけさ」

私は隣の部屋まで、丸太棒のように蹴ころがされた。部屋にはビニールの敷物が敷いてあった。ムチ打ちで、ほてった汗ばんだ、からだには、ビニールの冷やかな感触は、とても気持ちよい。

いくらかでも楽な姿勢をとろうと、身じろぎした時、上からパラ、パラと砂が落ちて来た。奇妙なことに、裸のからだがムズムズして来る。やがて、活発に動き始めた砂は、全身をはいずり回って、チクッチクッと刺しはじめる。顔も、豊かな乳房も、腹も、そして最もやわらかい、女の部分にも。

蟻だ！　私は、アリの塔の中に投げ込まれたアフリカの罪人なのだ。

私が身じろぎする度に、アリは恐怖を感じるのだろう。荒れに荒れて、狂暴なまでに裸身を、せめて来る。

その感覚は、私のまだ一度も経験したことのないもので、私を身もだえさせ、息苦しさで、かすれたのどが、ぜいぜい音をたてる。

「フフ、さぞ楽しかったろう。その美しい眉の根を、そんなふうに寄せて、ぜいぜい息をして、その白い豊かな腰をくねらせて、夢中になって楽しんだのかい。アハハハ」

彼は小気味よさそうに、私を見下ろして笑った。

「さ、もうそろそろ白状出来るだろう。よかったのかい？　僕の時と、どっちがよかったか言ってみろ」

「フウムウ、そ、そんな……」

「はっきり、言えよ。ええ、どっちだって？　さあ、言ってみろよ」

「そんな、そんなこと、言わなくっても、おわかりでしょ。あなたの方が――」

「生意気な口をきくな」

彼はまた、手にしたムチを、私の豊かな裸身に、とばした。

彼のムチとアリ責めに、ますますひどくなる痛痒に裸身をくねらせ、全身で呼吸し、呻きながら、私はダラダラとよだれをたらしてのたうちまわるのだ。その度に私の興奮は絶頂に達して喜悦の身ぶるいをするのだった。

第二夜　湯女になる話

江戸時代の湯女、現代では差し当りミス・トルコ、私は今日もミス・トルコになって、彼に奉仕するのだ。

「暑いなあ。全く、こう暑くちゃ、やりきれんな。からだじゅうが、汗でべとべとだ」

彼は、そういいながら、着ているものを全部ぬいで、生まれたままの姿になった。

彼は、暑い夏の間は、家の中では、わざとパンツもはかず、いつも、それを私の目の前に、あらわにするようにした。ねころがっているときでも、食事のときでも、わざと前をはだけて、いやでも、私がそれを見ないわけにはいかないようにするのだった。

結婚当初、私は目を苦しげに、そらしていたが、彼はムチで打たんばかりにして、目を向けさせた。

はじめは、仕方なしに、羞恥に頬をほてらしながら見ていたが、そのうちに、自分からじっと熱っぽい目で、たえず注視するようになり、食事の途中で、たえきれないように、箸を置いて、つっぷしてしまうようになってしまった。

こうして、私は、たえず刺激され馴らされていったのだった。そればかりではない。風呂から上ると彼は、からだをふかせ、そのあとで、全身をくまなく、もませるのだった。

はじめは恥かしがっていた私だったが、そんな事がつづくと、しまいには自分から、こらえ切れずに彼のお腹の上に、顔をふせてしまうようになった。

もっとも、結婚以来、正常な夫婦関係で彼は私を可愛がってくれなかったのだ。私にとっては、いわば、ごちそうを見ながら、食べることのできない、といった一種の飢餓状態に陥っていたのだった。

私が、自分から、女のつつしみも何も忘れて、接吻みたいに顔をつけたのをみた彼は、私の頭をおさえて無理に、ぎゅっと、それを強いるのだった。

「ほんとに暑いわね」

私も、うんざりするように彼に答えた。

「では、マッサージをしてもらおうか」

彼は例によって帯を持ち出し、丸裸にした私を、後ろ手にしばりあげてしまった。

「さあ、お前の、その美しい唇で、僕のからだを、きよめてくれ」

私は、夢遊病者のように、彼のそばに、にじり寄り、後ろ手にしばられたまま、豊かな尻を振り振り、彼のからだをなめまわした。

私は唇と舌の感触だけで、彼への最高の喜悦の奉仕を始めるのだ。

全身に接吻する。私の清い唇で、何人の女と接したかわからない、あぶらのしみ入っている三十男のからだを、足の指のまたから、足の裏へ。更に尻まで、なめまわるのだ。私は涙を出しながら、コウコツとして、それをつづけるのだった。

私の唇と舌で、全身を清め終わると、つぎは、彼のからだを、やわらかく、もみほぐさなければならない。後ろ手にしばられているため、両の手を使うことはできない。女性の象徴である、二つの乳房を使うのだ。マッサージには、クリームが使われるのが普通であるが、私たちの場合は、特殊なクリームを使用する。文字通り、自家特製のものを。

私は部屋のすみの柱に近づいた。その柱は何の変わりもないが、ただ下の方に突起があるのだ。私は、その柱に向い合って、ぴったり、からだをつける。勿論、突起の高さは手頃にしてある。私は、しばらく豊かな体を、くねらせる。

こうしてから彼のからだにまたがり、クリームを、じかに彼のからだじゅうに、ぬりつけた。

クリームを、ぬり終ると、二つの乳房によるマッサージが、はじまる。

私は前と同じように、尻を振り振り、女性の最もやわらかい、ふくらみを彼のからだにおしつけ、もみはじめた。勿論、彼は気持よさそうにしている。それは、彼のからだを見れば、わかる。私自身は、といえば、クリーム生産やら、乳房の刺激やらで、からだが、とろけそうになっている。ややもすると、腰がくだけそうになるのを、我慢しなければならない。最後に、彼の要求に従って接吻し、舌で清める。まるで赤ん坊がオシャブリを、くわえるように。

彼が、満足そうに私の背中をたたいてくれたとき、私のミス・トルコの役目は終るのであった。

第三夜　牝犬になる話

きょうも、緊縛プレーが始った。例の後ろ手しばりは、どうしたことか、やめて、彼は私を丸裸にして、両手を椅子のヒジ掛けにしばりつけて、四つんばいにさせられた。

ふと、彼の方をみると、牡の大きな柴犬がいるのだ。

「よしてよ。もう犬は、いやよ」

「ハハハハ。随分、気を回すな。よっぽど、こりてるんだな」

彼は、いつかの、この牡犬との状景を思い出したのだろう。犬はとみれば、また、いつぞやのごちそうにあずかれるものと思っているらしい。

私は、あのたえられなかった状景がチラッと頭の中に浮んだ。

「さ、きょうは、あんなことをしないから安心していいよ」

彼は、そう言いながら、四つんばいになっている私を、あおむけに、ひっくり返した。

私は頭の上で腕をX形に交叉したまま天井をみつめるより仕方なかった。

何やら、ひんやり、そしてヌルッとしたものが、私の豊かな乳房に落ちてきた。ミルクだ。乳房からお腹、更に両ももののつけねへ、タラタラと、たらされていった。甘い乳の匂いが、私のからだから、たちのぼった。



この大きな柴犬は、甘いミルクで飼い馴らされて来た犬なのだ。

「約束が違うじゃないの」

私は必死になって叫んだが、彼は、そんなことには頓着せず、犬を私のからだの近くにつれて来た。

ピチャピチャと音をたてて、犬が私のからだを、なめはじめた。

彼は、私の足の方へも濃いミルクをたらし、足の指の間にも、足の裏にもベットリとつけられた。

「あっ、ううっ、ううっ！」

こらえかねた呻き声が私の唇から漏れた。ザラザラしたやわらかい犬の舌で乳房から下半身を、なめられて、私はからだじゅうを、くすぐられるような気持がした。

「もう駄目、許して。ああっ！」

私は泣くように訴えた。

「あっ！あっ！ひいっ！」

泣くような、笑うような、奇妙な、うめき声が、部屋にひびきわたっていった。

「どうだ。お前は牝犬なんだから、お前のお相手は、この犬で十分だ」

「おやおや、この犬も、すっかり興奮しているぞ、よしよし。おい、お前。この犬を静かにさせてやれよ」

彼は、犬の希望にもえている部分に手をや

って愛撫しはじめた。犬は妙なからだの動かし方をして、全身で呼吸している。
「ね、お願い。それだけはやめて、お願い」
「うるさいな。さあ、可愛がってやれよ。折角、あてにしているんだから」
彼は、両手のいましめをほどいて、こんどは椅子の足に、しばりかえた。頭を低くした四つんばいの奇妙なかっこうにさせられた。
犬は、私の尻へ、爪を立てて来た。
やがて犬の爪は、中途半端な愛撫に結末をつけるように、私の高くあがった豊かな腰にかかった。そして、全く防ぐことのできない部分に……。
「そうそう、上手にやれよ。今度は犬も、すっかり御満足のていだな。ハハハハ」
犬の攻撃は、ますます激しくなってくる。ああ、女の性の悲しさ。あれほど、死ぬほどいやがって反対したのに、自分の意志に反して……。
「ウウーン」
私は思わず叫び声をあげ、それっきり、気を失ってしまった。

第四夜　徳利とドンブリの話

「いつまで、もたもたしているんだ。早く持ってこんか」
ゴロゴロと音をたてて、空になった徳利がころがされた。
私は手をのばそうにも、裸で後ろ手にしばられていた。野良犬のように口でくわえて持って来なければならない。
「よし、よし。お前は、なかなか、お利口な犬だな。ホレ、もう一度」
彼は酒を飲みながら、同じ動作を、くり返させるのであった。
「よし、こんどは一度に二本、持ってこい」
彼は空の徳利を二本、ころがした。
「でも、二本も口に、くわえられないわ。そんなこと、できません」
「馬鹿！　頭を働かせよ。女は、口を二つ、持っているだろ。さあ、やれよ」
私は、ひざをついて、たおれた徳利を一本口にくわえ、もう一本をくわえるべく、不器用な腰つきで、足をつかって起こした。
そろそろと腰をおろす。
ややもすると徳利が落ちそうになるため、腰に力を入れ、中腰で、ソロソロ運ばなければならなかった。
彼は、そのかっこうが、よほど気に入ったとみえて、幾度も幾度も、徳利をころがしては、奇妙な運搬を強いるのだった。
「ねえ、お願い。もう止めて。おトイレに行き度いの」
からだが冷えたのと、下腹に力を入れていたので尿意を催して来たのだ。
「ほう、トイレへ行きたい？　お前は犬のくせに、トイレでするとは生意気だ。犬はこれで結構だ」
彼は、酒のさかなの入っていたドンブリを前に出した。私は彼に姿を見せながら、自分の小用をドンブリで済まさせられようとしているのだった。
「そんな恥かしいこと、とてもできません。いやです」
私は女として、そんな行為を如何に夫とはいえ、男性の前では恥かしくて、できそうもない。でも、ジワジワと下腹におし寄せて来る尿意に、私は豊かな腰を、くねらせて必死になって我慢したのだった。
彼は、それを見ながら、ニヤニヤする。
「いつまで我慢できるかな、ハハハハ」
私は、とうとう女のたしなみも、恥かしさも、この潮のようにおし寄せてくる波には抗しきれなかった。
ドンブリの前に腰をかがめるより、しかた

なかった。

ほとばしり出るものをみて、彼は、如何にも愉快そうに高笑う声を、うつろな耳で聞きながら、くやし涙を出しながらも、排泄の快感を味わっていたのであった。

第五夜　女サディストになる話

「ねえ、あなた。きょうは、私にいじめさせて――」

「ほう、お前がか？　よし、やってみろ。ただし僕は、痛いことは、ごめんだよ」

「ええ、いいわ。たたいたりなんか、しないから」

私は、ムチで打って、肉体的に苦しめるよりも、精神的に苦しめてやろうと思った。つまり、彼の人間性を否定し、侮辱を与えることによって、彼を苦しめようと思った。

私は、さっそく、ブラウス、スカート、シュミーズからパンティまでとり、丸裸になると、ニヤッと笑って、彼を後ろ手にしばりあげた。

あおむけに転がった彼を、しばらく見下していた私は、やおら、彼の顔に、私の大きな尻を下した。

大きな私の尻は、彼の口から顎、のどを完全におしつぶしてしまう。その重圧が、一層彼を呻かせるのだが、呻きは、もう声にならない。鼻腔だけが、かろうじて窒息から彼を救いだしているが、目をつりあげて、もがいている。

彼の苦しまぎれに吐き出す荒い息が吹きかかる。

「どう？　ご気分は如何？」

私は、大きな尻を臼のように左右に、ゆり動かした。

彼は、渾身の力を振りしぼって顔を動かし豊かな尻から離れた。彼は、ハアハアと荒い息をついている。

「水、水をくれ。水を――」

「あら、お口がかわいたの。そう。では、あげましょうね。でも、お水よりビールのほうが、よくなくって。さあ、お風呂場にいらっしゃい」

私は、彼の一番の急所に細ひもを結びつけて、風呂場のほうへ、ぐいぐいと、ひっぱっていった。

「さあ、そこにおすわり。お口が、かわいたのでしょう。上をみて、口をあけて」

彼を風呂場の流しの上に正座させた。私が彼の前に立ちはだかる。

「ささ、大きな口をあけて。今、おいしいビールを差し上げますよ。生ビールをね。ホホホホ」

私は大きな口をあけて上をみている彼に向って、思いきり夕立ちを降らしてやった。激しい雨足が彼の顔に振りかかる。

「どう？　味は。おいしかったでしょう？　こんどは、おつまみをあげましょうね」

「それは、かんべんしてくれ。たのむ、かんべんしてくれ」

彼はオロオロと泣き声を出した。

「だめ。さあ、大きな口をあけて」

私は、彼をあおむけに寝させた。

「だめね、口をあけなきゃ。しかたない、こうするわね」

私はセロテープで彼の鼻腔を封じてしまった。当然、彼は呼吸するために口を開かざるを得なかった。

「そうそう、おりこうね。うんと大きな口をあけているのよ。今、おいしいオツマミをあげるからね」

私は彼の顔の上に、しゃがんだ。

まるでチューブ入りの煉歯みがきのようなおつまみに、彼は息をつまらせたようだ。

――（おわり）――

カット・竜多春久

—二部作・ある男女の哀歓—

遠い白い途

—第二部・猪野木恭太の章—

久留木栄

(一)

「仕事は、もう終ったのか」
「はい、係長。やっとメドがつきました。今月も、あまりよくありません」
「そうだな。皆が一生懸命、売ってくれている割合に伸びないな」
「需要が一巡したのでしょうか」
「多分な……ま。それはそれとして、しばらく、つきあえよ」
「は」
「ひとりで酒を飲むには堪えられない夜だ。君は、あまり、たしなまないそうだが——」
係長の野村等が珍しく酒に誘った。野村は三十一歳。気鋭の係長である。猪野木は、まじめさを買われ、一年前から野村のアシスタントをつとめていた。生活用品の販売を主にしているこの会社は、セールスマンが花形である。猪野木は一年ほど見習をやらせられたが外交は向かないというので、いまはセールスに渡す品物のチェック係をしていた。野村はその上司だった。
だから二人とも、月の締め切りになる二十日を過ぎると月の決算を出し、書類をつくるのに忙しかった。二十三日が月給で忙しさは二十六日ごろまで続いた。それもおさまるとまた平凡な生活にもどる。きょうは二十六日で、やっと書類の作成が終わった日だった。酒を飲みたくなるのも当然だ。
二人して暗い廊下を出、社外に出ると町の空気は、ひんやりしていた。もう八時は過ぎていたろうか。夜のとばりが、すっかり降り繁華街のネオンが目に、しむように鮮やかだった。

(二)

酔眼もうろうであった。
三軒目までは覚えていた。
それから先が、全くわからない。いつしか先輩とも分かれていた。しきりに電話をかけたが、いずれも話し中だった。そのうち、どこかのバーで寝たらしい。
「ダメよ、そんなとこで寝ちゃあ」
という女の声だけを覚えていた。
深夜、目が覚めて見ると、全く知らない所にいた。コップが枕元にあり、部屋の片隅に若い女が寝ていた。見も知らぬ女だった。女は、毛布にくるまって畳の上に。猪野木は女



臭い掛布団にくるまって、敷布団の上に、だらしない恰好で寝ていた。女はスリップ一枚だったが、寝顔は愛らしかった。部屋には洋服ダンスが一つと、炊事道具が、わずかにあるだけで、全く貧しい生活ということが分かった。

　その部屋を見回しながら、女が猪野木を、しきりに叱っていた事が記憶に戻ってきた。

「だらしのない。どうしたの。くよくよしなさんな！　私なんか、いつも一人よ。父も母も、とっくに死んだわ。兄も妹も、いない。両親が揃っている人が、好き勝手できないなんて、だらしのない！」

　確かに女は、わめくように、そういった。猪野木が酔ってしまってからは、女の方が、したたか飲んだ。あれは三本松の角を回ったところのスナックの女だった。ひろ子とかいった……それが、どうして、ここに一緒にいるのだろう？　と猪野木は思った。

　むっくり起き上がり、天井の暗い電灯の光に腕時計をみると、四時を指していた。先輩と飲み始めてから、もう八時間、経っていた。まさに御乱業だな、と思って辺りを注意深く見回すと、猪野木の服だけは、ちゃんとえもんかけにかけてあり、ズボンは敷布団の下に敷いてあった。この女の、せめてもの心遣いらしかった。

　おこすのも悪いなあ、と思いながら見ていると、女は苦しそうに寝返りを打った。その顔は意外なほど若かった。夜見たときは厚化粧のようだったが、それもはげて、何となく子供っぽかった。なおも猪野木が見ていると薄目をあけた。

「おや、気がついたのかい、この弱虫」

「弱虫？」

「いや、泣き虫かな。この唐変木！」

　女は、まだ昨夜のつづきのような口調で悪態をついた。

「オレ、どうしたんだ？」

「酔っ払ったのさ。女が欲しいというから家に連れてきたのさ。それが、どうだい。泣くばっかしで、男がきいて、あきれらぁ。泣きじょうごとは知らなかったわ。恋人にふられたのかい」

「ううん」

　と猪野木は首をふった。サラリーマンの生活が、むしょうにイヤになったのさ。そう言いたかったが、口には出さなかった。

「それで、どうもしなかった？」

「あんなに酔っぱらってたくせに、するも、しないもないよ。赤の他人のままさ」

「そうか！」

　と猪野木は、いまさらながらテレた。女はむっくり起き上がった。意外と均斉がとれていて、いいからだをしていた。枕元の水さしから、いまさっき、猪野木が飲んだコップに水をつぐと、ぐいと飲んだ。その飲みっぷりも、よかった。

「酒に飲まれたんだな」
「多分ネ。でも泣き虫は本音だろう。女は知っているの?」
「知らないこともないが、お世辞にも、よく知っているとはいえないな」
「オレのヒモにならないかい」
「ヒモ?」
「情夫だよ。それが、いやなら、恋人ってわけさ。いいじゃん」
と女は、最後の言葉だけ抑揚をつけ、はじめてニヤッと笑った。
「これも縁だろ」
そういうと、積極的に起き上がり、猪野木の横に入ってきた。
「後悔しない?」
「バカ。それは、あたいのいうことよ」
なるほどそうかと、猪野木は自分の思いきり悪さを、あざ笑うように、シニックな笑いを浮かべたが、そこに、ほのぼのと心の通うものを感じた。女を自分の方に向かせると、積極的に、いどみかかった。
女も、それにこたえた。

(三)

女は裸のまま、猪野木の腕を枕に天井を見ていた。その顔に、まだ興奮が、いきづいていた。
「君も、かわった女だな」
「そう思うでしょ。皆、そういうわよ。だから割りかし、男にもてなかったのよ。それが真相。夕べ、あんたが、ぐでんぐでんになってきたとき、あんたは、オレの心がわからん女の心がわからん、といって泣いていた。女は学生時代の女で、いま女優になったといっていたわ。そんなあなたが、かわいそうで、つい介抱しているうちに、わきがというのかな、靴下のニオイというのかな、むれた体臭がしてきたの。そしたら、たまんなくなってあなたを、だれにもやりたくなくなって、ここに連れ込んだのよ。でもさ、あなたは、ぐでんぐでんのナマコのようでしょ。そのうちぐうぐう寝るし、腹が立って、腹が立って、まんじりともしなかったわ……」
「じゃ、寝ていたのじゃなかったのか」
「そうよ。ずうっと薄目をあけて、観察していたの」
「そうか。で、こうなった今でも好きか」
「好きよ。まだニオイがするもの」
「ニオイ?」
「そうよ。私、好きな男のニオイに弱いの」
「そんなものかなあ」
猪野木は腕をまげ、女の顔を近づけてキスした。女は激しく応えた。
「まだ女優さんになった女に未練があるの」
「ないこともない。だが手が届かないんだ」
「そうかもね。でも電話はでなかったワ」
「そうだ、家にいなかったんだろう」
「偉くなったのネ」
「そうかもしれない」
「何という人」
「小野貞子とか、いったな」
「あら、聞いたような……ああ覚えている。SM路線の女よ」
「SM路線?」
「そう。あら、あんた知らないの? 男が女を縛って喜ぶでしょ。そんな遊びをSMプレイというのよ。そんな人のためにある、セックス女優よ」
「セックス女優? 信じられんなあ」
「ほんとよ。確か、この前に来た、ロマンスグレーの男がスチールを持っていたわよ。こ

の縛られたときの色気が、たまんないといってたワ。その写真を忘れて行ったので、あたいが保管していたワ。そこのタンスの小引出しに入ってない?」

「ここか?」

「そう、そこ」

いわれるままに猪野木がとり出してみると写真の主は、まぎれもない小代子だった。露木小代子! 変われば変わるものかな。と猪野木は感慨無量になった。仲よく学園を歩き回り、幸福とは何か、真実とは何か、美しさとは膚で感じるものか、見て味わうものかと論議したことが、まるで、うそのように思われた。絵のような世界のできごとのように思い出され、そして消えた。

「何、考え込んでいるの? 泣き虫さん」

いつしか、ひろ子も、のぞきこんでいた。

「昔の夢さ」

「あんたも、こんな夢をもっているの。ロマンスグレーが、おい、ひろ子。縛らせろだって。男は、みんなそんな夢があるんだって」

ひろ子は猪野木の感慨をとんでもない方に勘ちがいしたらしかった。そんな女を猪野木は、まじまじと見た。

「君は、そのとき、どう答えた?」

猪野木はテレかくしに聞いた。

「もちろん、ことわったワ。でも泣き虫ちゃんなら、ことわらなかったかもしれないワ」

「こいつ!」

猪野木は打つまねをした。女は首をすくめた。そこに新鮮な味が出ていた。

その時、猪野木は、ふとこの女を縛ったらどんな味がするだろうと思った。そして初めて、女に対し嗜虐的な欲望を感じた。

ぐるりと、あたりを見回すと、窓辺に洗濯ロープが下がっていた。猪野木はそれを見ると急に立ち上がり、それをとりにかかった。

「あら、本当にやる気だワ、この子。フフフ傑作ね」

そう言いながら、ひろ子は、はずすのを妨害するように猪野木のワキの下を、くすぐった。猪野木は

「バカア!」

と派手な声をたて、笑って抱きあい、そこに、ころげた。

女と争ううち、ふとみると布団の下からネクタイの片方が、のぞいていた。それをとると、いきなり女の腕を背中に回し、締め上げていった。

「あっ、降参、降参。おとなしくするから優しく縛って」

「ぜいたく言うな」

猪野木は縛る手を、やめなかった。えび茶のネクタイが白い手首に巻きつく図は刺激的だった。さらに窓辺から、はずした洗濯ロープを手首から胸にかけて縛ると、いっそう、せん情的に見えた。

女は、猪野木のそうした気持が、わかるのか、しきりにもだえ、誘発的だった。

猪野木はロープがなくなると、あたりを見回して、縛るものを捜した。女の洋服ダンスから布や皮のベルトを二、三本、捜し出すとそれで足を縛った。

「いやあ、いやあ」

と声をあげる女に、おそいかかってキスする楽しみは格別であった。女は、そのたびに激しく応え、縛られた体を、のけぞらせた。

こんな経験は猪野木は初めてだった。日ごろのマジメなサラリーマンと全くちがう、別の男性がいるのではないかと、猪野木は自分自身の変身に目をみはる思いだった。

興奮の一刻が過ぎると、さすがに猪野木はぐったりとなった。女も疲れたらしい。手足をほどいても、動こうともしなかった。

猪野木は、ぼんやりと、天井を見ていた。

いつしか夜があけ、白い朝の光が小さな窓辺から差し込んで来た。
猪野木は、こうして友野ひろ子と関係が出来たのだった。

（四）

この日から猪野木は一変した。会社での仕事も積極的になったが、動作が、いかにも男っぽくなった。いままで、どこか、ひ弱だった感じが失せ、シンのとおった感じになっていた。
変化に一番にきづいたのは、係長の野村等だった。
「いい女でも、できたのかな」
「ハハハ、そんな。似合いの助手でさあ」
と猪野木は笑った。その実、彼女の家に通うのは週に一度と決めていた。その点、猪野木は根っから律気なサラリーマンだった。父もサラリーマンだったから親子二代にわたる現代漂民ということになる。
どうせ、しがない会社員と、胆を決めてしまえば、サラリーマンはこの上ない気楽な稼業だった。そんな気持なので、ひろ子に溺れることもなくSMにのめることもなかった。
それでも、ひろ子を誘って、小代子の出ている映画〝城中腰元戦国時代〟を見た。小代子の縛られる姿も、たんのうした。しかし、昔のようには心を動かされなかった。
そんな一日、まったく偶然に、猪野木は小代子に会った。ひろ子のために、ブラウスでも買ってやろうかと、デパートに行く途中、繁華街の角を回ったところで、ひとりで、せかせか歩いて来る小代子にあった。小代子はこざっぱりしたイキな花柄のワンピースを派手に着こなし、さっそうと歩いていた。最初に見つけたのは猪野木だった。
「露木さん！」
そういって呼びかけると、小代子はピクリとして立ちどまった。そして見る見る、目を大きく見ひらいた。
「まあ、猪野木さん」
そういう、しぐさは、全く昔と変わっていなかった。
「どうしてたの？　こんなところを！」
二人は異口同言にいって、あわてて、てれかくしにニヤリと笑った。
「珍しいなあ。会社が暇だったので、ちょっとブラついていたのさ。君は？」
「テレビ局からテレビ局に行く途中よ。少し暇があるので歩いて行こうと思ったのよ」
「そうか。それにしても奇遇だ。立話もできない。喫茶店に行こうか」
「いいわ」
二人は近くの喫茶ル・シャ・ノワールに入って行った。入りがけに二、三人の若い女が〝あ、小野貞子よ！〟と、つぶやくのが猪野木の耳に入った。猪野木は委細かまわず、奥の窓辺の席へ案内した。
「映画、見たよ。えび責めとかに、されている奴だった」
「まあ、いやな人。恭太さんって、人が変わったみたい」
「会社でも、そういわれるよ。昔の面影はなくなったってさ。で君は、いまもSM路線かい。それとも何か……」
「何でもやっているのよ。Fテレビでは時代劇の悪役よ。Tテレビはヒロインの補助役でつまらない店員だけど……でも映画は、あれでこりたので、こんどは縛られないものに出してもらったの。ところが監督からクレームが出て、結局は、また前のようにされちゃった。仕方がなかったのよ」
「縛られて、うれしいのかい。それとも、痛いとか、何か感じる？」


……イメージギャラリー……『遠く強い思い出』……岡　たかし……

「そんなの仕事だから。好きな人が、いたら別だけど……」
「じゃ、まだ、いい人、いないの？　二枚目のなんとか、いっていた歌手と、できたの、できないのって、騒がれていたが……」
「週刊あれこれの記事でしょ。宣伝のための手段なのよ」
「そうかなあ……」
　そういう小代子は、ちっとも昔と変わっていないようであった。しかし、窓から外を眺める姿は、一種の貫録をつけていた。半面、寂しそうであり、半面、誇らしそうであり、猪野木には想像もつかない小代子の一面を見せつけていた。
「いま、ぼくが求めたら、来るかい？」
「さあ。多分、ダメでしょうね。当分いまの仕事をやめる気がないんですから」
「じゃ、僕が縛るといったら？」
「それもダメ。でも猪野木さん。変わったワね。この前、会った時はオドオドしていて何をしゃべっても意見が合わずケンカばかし。こちらはイライラして帰っちゃったけど。今日は、ずばずばいって何故か、恐いみたい」
「男は変化するんだよ」
「そりゃ女も化けますワ。だけど」
　そういって小代子は深い溜息をついた。
　自分がサラリーマンになり、その目で多くの人を見はじめたように、小代子は今、俳優の目で人を見ていると、その時、猪野木は始めて覚った。昔より、ずっと親しく、人なつっこく見える。だが、二人の間は、はるかに遠くなっている。お互いに歩く道は遠く果てない。そして、そのへだたりは、さらに拡がることはあっても、二度と逢うことはない。恭太は、その時ハッキリと、そう悟った。
「いっぺん、君を縛りたかった」
「私もその気になったら、電話しますワ」
　二人は、そういい、ル・シャ・ノワールから出ると、後も振り向かずに別れていった。
　そこには遠い白い道があり、目の前に長々と横たわっていた。
（了）

＜告　白＞

思い出のプレイ旅行

〃最後の楽しい一夜〃

根岸劒二（フォトも）

私は本年二十八才になる奇クの愛読者で、読みはじめてから数年になります。

二年程前、得意先の会社の受付にいた美奈子という五つ下の女性と知り合って、気が合うままになんとなくデートを重ねているうちいつしか、SMプレイを、お互いに楽しみ合うようになりました。

美奈子は、私に妻子があることを知っていて、「私も結婚するまでの間、楽しむんだから」と割り切っていましたので、お互いに、二人だけの秘密を守り合って、プレイをエンジョイしてきました。

知り合って二年目、美奈子に縁談があって彼女も乗気でトントン拍子に話が進み、いよいよ式の日取りも来年の節分の日に挙げるということに決まったのでした。

そんなわけで、二人のプレイも十一月いっぱい、美奈子が勤務先を退職するのを機会にやめようと約束したのです。そこで、二人だけの最後の思い出になるようなSMプレイをやりたいものだと、土曜から日曜にかけて、一泊旅行が出来るようにと、お互いに時間を作りあったのです。

その日、土曜日の午後、東京駅8番ホームで待ち合せ、東海道線の伊東行に乗り込みました。行先は熱海です。

二人の思い出の楽しいプレイ旅行を乗せて電車はすべるようにホームを離れると一路、熱海へと走り始めた。車内は色とりどりのセーターを身につけた若者たちで、こみ合っていた。笑い話を賑やかに乗せて走る車内は華やいでいた。

だが、楽しい筈の私には溶けこめ難い華やかさで、彼女が結婚するまでという約束の交際ではあったが、さて、いざ最後の別れともなると淋しかった。

私にも妻子があるのだから、心から美奈子のために、結婚おめでとうと言わなければいけないのだと自分に言いきかせ、そのためにも、今夜のプレイを楽しく終らせたいと考えていた。

その間にも、電車は走りつづけ、小田原に着いた。私達の乗っていた車内の若者達が、賑やかなざわめきと共に降りていった後は、急に静かになり、車内はガラガラになってしまった。

私は、そっと網棚の上のカバンを見上げながら、早く着かないかと思った。そのカバン

の中には、滑車、太目のロープ、細縄、鳥の羽、太筆、ローソク、猿轡用のガーゼ、目隠し用の布、ポラロイドカメラ等の責具が詰まっていた。

私の傍らで電車に揺られて気持よさそうに眠っている美奈子の鼻をつついて起し、小声で私は囁いた。

「美奈子、今夜は思い切って出来るな」

「そうね。いつもは、何か貴男は遠慮しているみたいですものね。今夜は泊りがけですもの、どんな事になるかしら？　私、とても、楽しみだわ」

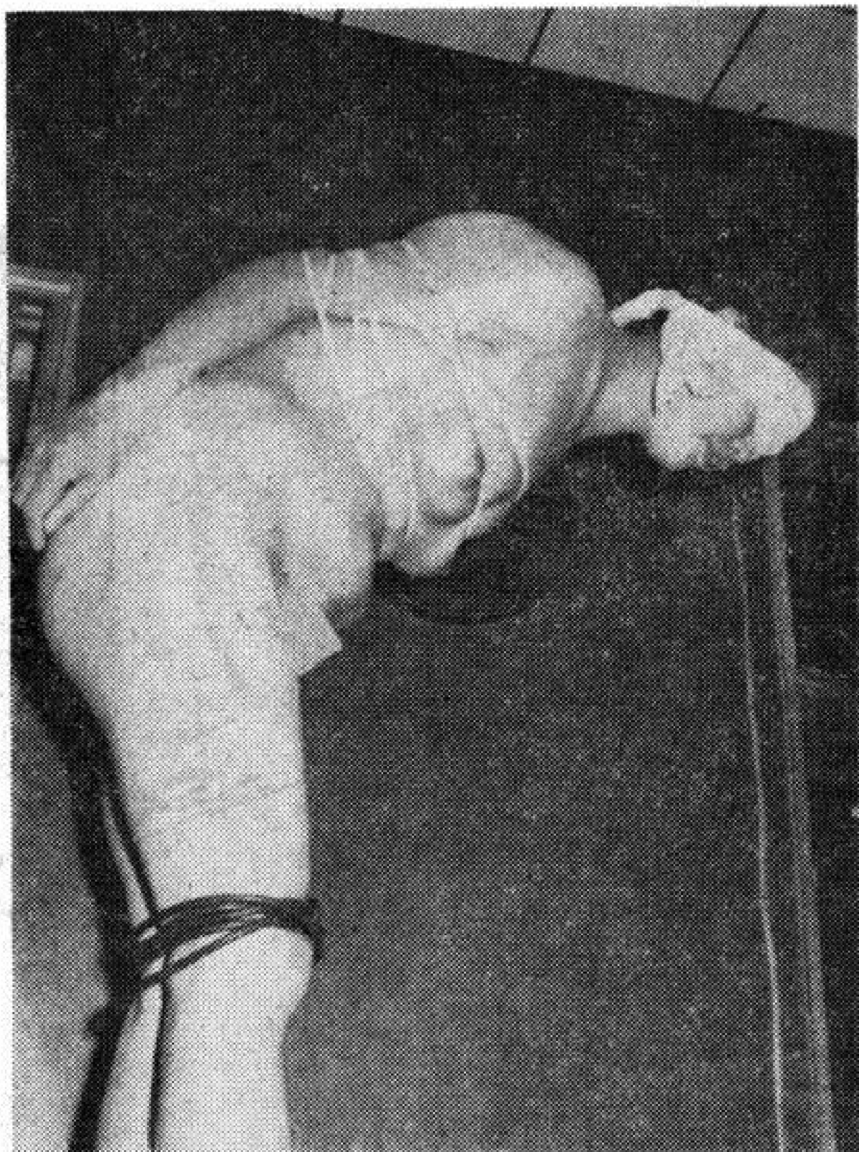
「そうだね。どんなプレイが出来るか、それは分らない方が楽しみも多いんじゃないのかな。そうじゃないか？」

「そうね。あら、あそこに見える島は何？」

「あーあ、あれは初島だよ。その向うに見えるのが大島さ」

「そうお、すごくきれいね」

「君の体みたいだよ」



「いやな人」

電車は右に箱根連山を、左に遠く初島、大島を望みながら、熱海駅にすべり込んだ。ホームに立った美奈子は、さも嬉しそうに、はしゃいで言った。

「とうとう、来てしまったわねえ」

「そうだな、来てしまったね」

後は何も言わなくても、二人の心は、はっきりと通じあっていた。

申し込んでおいた旅館は、車で十分位の所で、部屋は希望通りの海の見える離れであった。その一室に着いた時は、六時を少し過ぎていた。

早速、夕食にしてもらった。一本のビールが二人の顔を赤くしていた。美奈子が風呂へ入っている間に、私はカバンの中より滑車をとり出し柱に取りつけ、カメラにフラッシュをセットした。

「ああ、良いお湯だったわ。貴男も入っていらしたら」

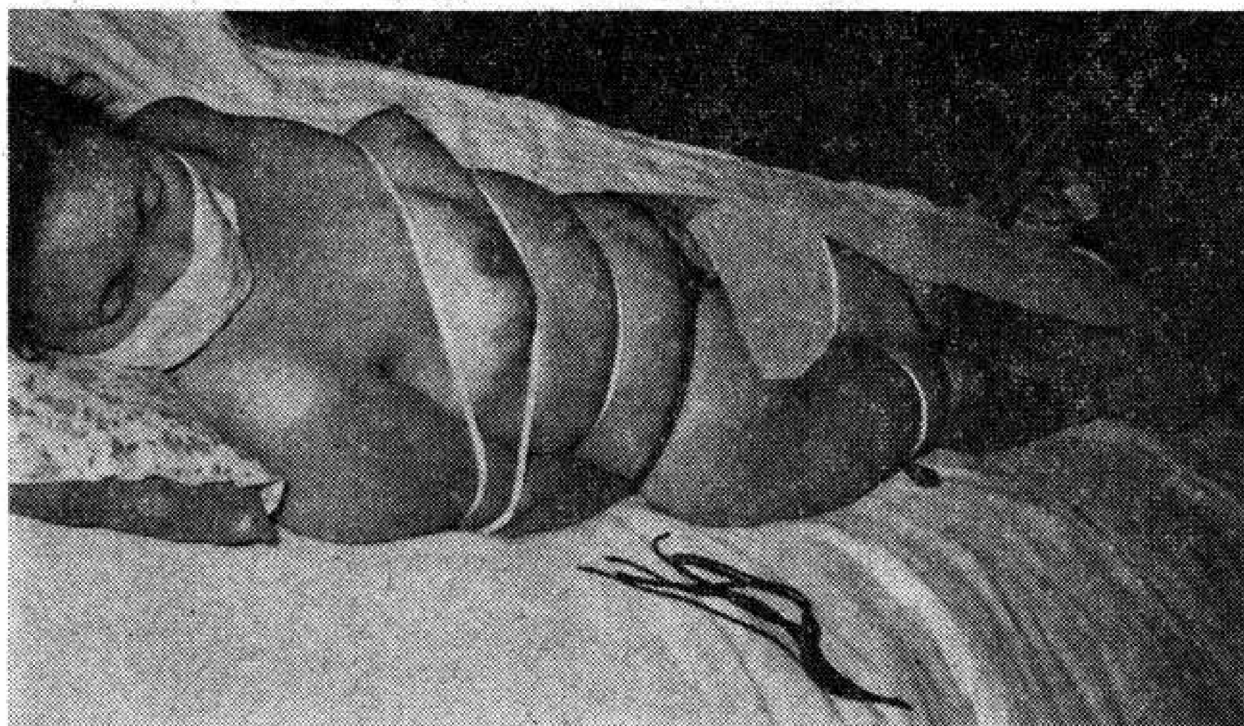
「そうだな一寸、入ってくるか」

私が風呂から出てくると、美奈子は夜具の上に、うつ伏せになりながら新刊の奇クを見ていた。私は彼女の浴衣の襟をつかんではぎとり、一糸まとわぬ裸にした上、両手を後手に強く縛りつける。そして、別のロープで柔らかな乳房をしめ腹部で止める。両足首もそろえて縛ると、頭の毛をつかんで上を向かせる。

「どうだ、痛いか」

「ああ、うう、平気よ」

それならばと、足で仰向けに転がして、太腿の上に馬乗りになり、そのはちきれるような乳首を強くつまんでみる。
「うう、痛い！」
「うるさい」
口の中にガーゼをぎゅうぎゅう押し込み、上から赤いビニールテープで、しっかりとはりつけ、鳥の羽根で下腹部をくすぐりながらそのピョコンとつき出ている乳房を平手で打ちつづけ、そのままの姿をカメラにおさめ、またつづける。
ウーン、フーンと鼻を鳴らしはじめ、腰をくねらせはじめた所で解き、今度は臀部だけ残し、あとはグルグル巻きにして、やっと立てる位まで吊り下げ、短いロープで、その出ている臀部を打ちつける。
ウーン、フーンと呻きながら両足を曲げるが、曲げると両手に重心がかかり、かなり苦しそうだ。
すでに、その臀部は赤くそまり、美奈子の体はMの炎に燃えている。責めている私には良くそれが分る。今度は口の中のガーゼを取って、次の責めにうつる。
両足首をそろえて縛り直し、その股間に太いゴムのロープを通して、しっかり引いて腹部で止め、両手を頭の上で組んで縛り、下半身を吊り上げる滑車に通したロープは、キイキイと美奈子の体重で鳴き、その美奈子も、快楽の泣き声をもらしている。臀部の浮いた所で止め、カメラにおさめる。



私が何もしなくても、美奈子のもっとも柔らかな所へゴムが生き物のようにしめつけているので、アーアーウーウーと、うめく。私はしばらく、そのままで、その縛られた彼女の美しさに見惚れていた。
次に片足を吊り上げて、一方の足首にロープを巻き、そのロープを、すみの柱に掛けて思い切り開いて縛りつける。
縄の跡もあざやかに残る双つの丘は、桃色に染まり、動けぬ体を、いらだたしそうによじり、その眼尻には涙をうかべている。
今度は大の字に手足を引っ張り、その腹部に馬乗りになり、すでに赤く息づいている、その乳房を軽く打ちつづける。
美奈子は両足をつっぱり、両手を強くにぎり、首を右左に動かし、「ウーウーアーア」と、それは声にならない快楽の泣き声をあげ乗っている私をふりおとすような強い力で、ネットリと濡れた腰をそらせ、Mの境地をさまよっているかのようである。
私もすでにSの世界に入り込み、そのグッ

タリとしている美奈子の体を縛らず、うつ伏せに転がすと、その汗に濡れた臀部をバンドで打ちつける。

美奈子はそりかえり、両手は空をつかみ、休みなく押しよせる恍惚の奔流の波にたえきれず最後の責めに呻吟している。

次の日、九時頃、目をさました私は美奈子の寝顔を見つめながら、私達のような関係の人達もいるものかな。亦、このような女性とめぐりあえたらと思いながら、美奈子の鼻をつまみおこしてしまった。

「美奈子、私達二人の最後の朝だな。今まで本当にありがとう」

「そうね。短い間のようだったけれど、本当に楽しかったわ。私こそ本当にありがとう」

「結婚おめでとう。君のご主人になる人も、Sだったら、君も幸福だろうけれどね。そうだと良いが——」

そう言いながら、なぜか私は、心にジーンとくるものがあった。だが、美奈子は、そんな私の心を知ってか知らずか、至って明るかった。

「いやな人。もしSじゃなくても、私がSに仕込んじゃうから、平気よ」

「そうだね、その意気込だね。あ、そうだ。写真、どうしようか？ 今日はカラーと白黒と両方で撮ったからね」

「今まで通り、二人で半分ずつにしましょうよ。これが本当に最後の記念写真ね。でも、本当に、私達の事、誰にも話さないでね」

「分っている。信用できないのか？」

「ううん、信用しているわ。でも、本当に今日は来てよかったわ。一人の時の一番、良い思い出になりそうだわ」

窓を開けると、強い太陽の光が部屋の中に流れ込んできた。窓辺に二人で並んで見た、その海の青さが今でも私の瞼に残っている。

あれから一年、美奈子とは全く音信不通である。どこかで、幸福に暮しているのだろうか。一年たった今、私には忘れがたい思い出として心に灼きついている。

あの頃、二人で愛読した奇ク。ひよっとしたら、彼女も、どこかで、奇クを見ているかもしれないと思ってペンをとった。

私の頭の中に、はっきりと、あの時の美奈子の声が聞えるような気持になった所で、心残りながらペンをおく。

（注）美奈子というのは本名ではない。

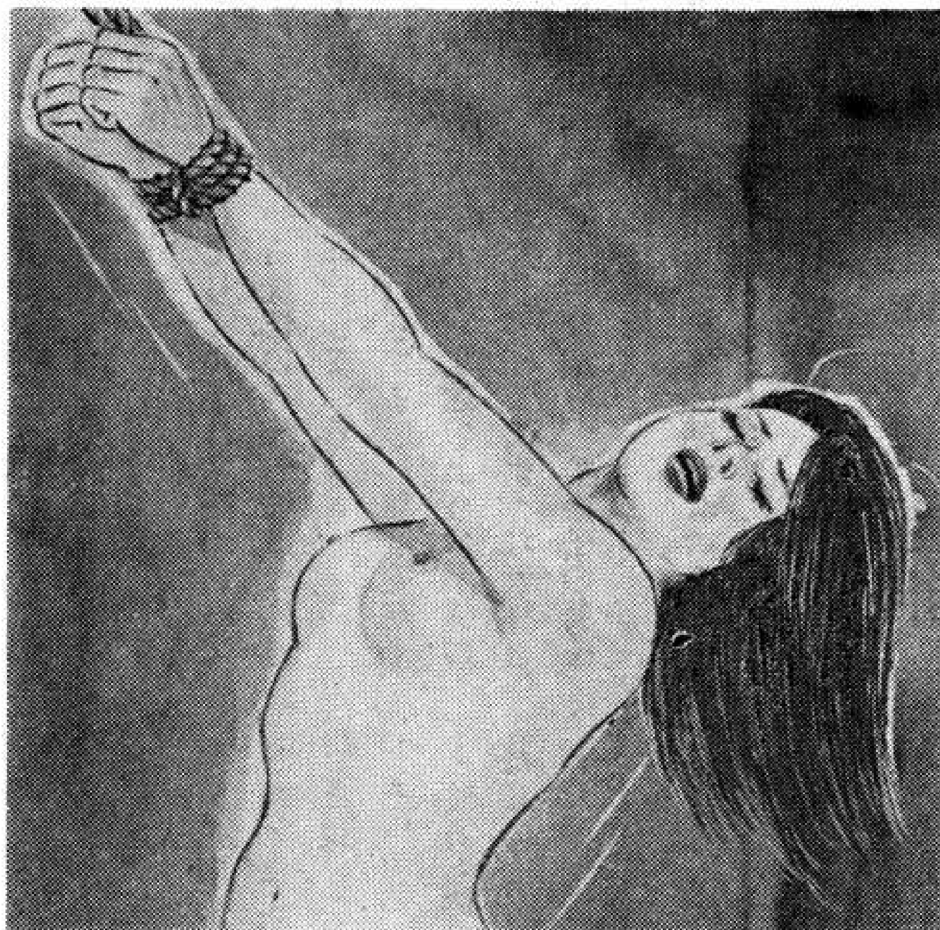
敗戦によって異国にとり残された哀れなうら若き日本女性の身にもたらされたものは、敗戦国の奴隷という惨めな烙印であった。戦勝国の荒くれ男たちの前で彼女ら日本女性が、どんな恥知らずな弄ばれ方をしたか、それは、今の若い人達にとっては、一篇の夢物語でしかないだろう。しかし、現在の日本の繁栄が、この日本女性の血と汗の礎の上に立っているのだということを忘れないでいて欲しいものだ。

敗戦秘話
北満哀歌

日本女性の奴隷

鈴鹿晶子（すずかあきこ）

カット・四馬 孝



引きずり出された部屋の中には、異様な熱気がムンムンたぎっておりました。

部屋の片隅には真っ白なお布団が敷かれ、私と先生は、その横に座らされたのでございます。横の壁ぎわには圭子ちゃんが、ちょうど万歳をしたような恰好で、開股両手吊り縛りで天井から下がっている鉄の輪に吊り立たされ、恥かしさに顔を真っ赤に染めながら、小さなあごを円い肩に埋めて、おびえているのでございます。両足首には青竹が結びつけられ、足は左右に思いっきり大きく拡げられるだけ拡げられております。

三人とも、何一つ体を隠すものがない、生

「まあ、そ、そんな事を……」

私は智恵子先生から話をきいた途端、狼狽し、絶句いたしました。

「先生ッ、許して！　晶子、そんな事、恥かしくって、とてもできませんわッ。嫌ッ、嫌ですッ！」

先生は私に、多勢のロシア軍将校や、お八重さん達が見守る真ん中で、自分で自分自身を激しく責めて見せるようにって、おっしゃるのでございます。

まれたままの浅ましい姿でございました。
そんな私たちを前にして、ロシヤ軍将校たちは強いお酒を酌み交わし、大声で喚きながら熱っぽい視線を、私たちの方に集中するのでございます。
その中には、お八重さん、マリーさんの顔も混じっておりました。
二人は年がいもなく派手な化粧をし、肌もあらわな服を着て、将校たちの間を泳ぎ回りながら、お酒を進め、媚を売っているのでございます。
「ねえ、晶子ちゃん。先生を困らせないで」
智恵子先生は、私の肩を叩き、哀願するように耳元で囁かれました。
「私も、さっき、あなた方より早く呼び出されたでしょう。そして、そして……ここで同じ事をさせられたのよ」
「まあ、先生もさせられたのですの?」
「ええ、とっても恥かしかったけれど、あきらめて、お八重様たちの言いつけ通りにしたの。だって私たちは、もう奴隷になっているんでしょう。仕方ありませんわ」
「ええ……でも……」
「だから、御主人様の言いつけ通りにするより外に道はないのよ。それに、もし言いつけを守らなかったりしたら……」
数々の恐ろしいお仕置の状況を思い起したのでございましょう、言葉をつまらせるのでございました。
「その後で、お八重様から、同じ事を晶子ちゃんに、圭子ちゃんの前でさせ、私と晶子ちゃんとで、圭子ちゃんを徹底的に仕込むようにって、命令されているのよ」
それで圭子ちゃんと私とが、この部屋に連れてこられたわけが判ったのでございます。
「だから……ね、判ってくれるわねえ、晶子ちゃん」
先生は念をおすように囁かれます。
「だって、だって……」
私は、まだようやく二十才になったばかりの乙女でございます。いくら恐ろしいお仕置があるからといったって、どうして、そんなに恥かしい仕草をすることができましょう。しかも大勢のロシア将校たちの見ている前でしなければならないのでございます。
私は泣きたい気持を押し隠し、必死に智恵子先生に哀願いたしました。
「先生。他の事だったら、どんな事でもいたしますけれど、それだけは……私、とても出来ませんわ」
「そりゃあ、晶子ちゃんが、恥かしがる気持は先生にも痛いほど、よく判るわ。でも、晶子ちゃん、我慢するのよ。判ってくれるわねえ。先生も無理な事、要求しているっていうことは、よく知っているのよ。でも……」
「ええ、私も先生の苦しいお気持は、よく判るんですけれど、どうしても……」
「ねえ、晶子ちゃん。いつまでも、そんな無理をいっていないで、私のお願いをきいて頂戴」
先生は困惑の表情を顔一面に表わし、拝むようにして頼むのでございます。
「オイッ、先生ッ。イツマデ、モタモタシテイルノダァーッ」
しびれをきらした李さんの怒号が突如、起りました。
「晶子ッ。オ前ハ、俺ノ鞭ノオ世話ニナリタイノカアッ。エエッ、ドッチナンダァ」
「は、はい、李さま」
「コノ鞭ヲ味ワイタイノダッタラ、イクラデモ、オ前ノオ望ミドオリ味アワシテヤルゾオッ。近頃ハ腕ヲ振ウチャンスガナイノデ、コノ腕ガ、夜泣キシテイルンダァ」
相当、お酒が廻っているのでございましょう、呂律が怪しくなっております。

「イッチョ、ヤッタルカァッ」
李さんは、フラフラとよろけながら鞭を握って立ち上りかけたのでございます。
「ま、待って下さい、李さま」
あわてて先生が制止いたします。
「今すぐ、私が説得いたしますから、しばらく、お待ち下さい」
「本当ニ言イフクメルノダナ」
「はい」
「先生、いくら待たせたら気が済むの。本当に、すぐ始めさせるんだよ」
男たちの間に割って入り、紅い気炎をあげていたマリーさんが、追い打ちをかけるように責めるのでございます。
「こんなにジリジリ待たされちゃあ、怒るのは李さんだけじゃないわよ。私たちだって、ロシアの殿方に集まって貰った手前、立つ瀬がないじゃないか。グズグズしていたら、二人とも蛇責めを喰わすわよ」
「はい、マリー様。申し訳ございません」
先生は私の肩を抱きしめられました。
「ね、晶子ちゃん。判ったでしょう。あなたあの恐ろしい蛇責めを受けてもいいの？」
「嫌ッ、嫌ッ」
私は激しく首を振って見せました。
「そうでしょう。だったら、辛いだろうけれど、私の言う通りにして頂戴ね。ね、いいでしょう」
「ええ、でも私、やっぱり恥かしいの」
「晶子ちゃん、いつまでも、そんな判らないことばかり言うものじゃないわ。あなたが済んだら、次は圭子ちゃんの番なのよ。晶子ちゃんがそんな無理を言っていたら、圭子ちゃんへのお手本にもならないでしょう」
「それは、そうですけれど……」
「あなたは圭子ちゃんに教えなければいけないのよ。先生の役目をする人が、そんな事じゃいけないわ。ね、判ってるでしょ」
「はい」
私は、これ以上、智恵子先生に迷惑を掛けてはいけないと考え、悲しい決心をいたしました。
「先生。晶子は先生のおっしゃる通りにいたしますわ」
「ありがとう晶子ちゃん。判ってくれたの」
「ええ。でも晶子には、自分を自分で責めるなんて、一体どのようにすればいいのか判らないんです」
「大丈夫よ。先生のいう通りにしていればいいの。私が上手にリードしてあげるから安心してらっしゃい」
「本当にリードしてくださいますのね」
「ええ、いろいろお薬を使ったりして、丁寧に教えてあげるから。そのかわり、先生の言う事は必ずきいてくれなくっちゃ駄目よ」
「はい」
「きっと、お約束して頂戴ね」
「ええ、先生のおっしゃる通りに私、いたしますわ」
先生は重い肩の荷をおろしたように、ホッとしていらっしゃいます。
「じゃあ、晶子ちゃん。お布団の上に、殿方の方を向いて、アグラをかいて座ってごらんなさい」
「はい」
私は、言われた通りにいたしました。
私がお布団の上にあがったのをみると、それまでガヤガヤと、やかましく騒いでいたロシヤ軍将校たちは、言い合わせたように話を止め、ジッと私の方を凝視しております。
「そして、このお酒を呑むのよ」
先生は大きなウィスキーグラスに、なみなみと真っ赤なお酒をついでくれたのでございます。口を近づけますと、プーンと香ぐわしい甘い香りが鼻をつきました。

「これは、なんのお酒ですの」
「このお酒はね、普通のものじゃないのよ。これを飲むと、とってもホンワカとした、いい気持になり、しまいには、いてもたってもおられないような堪まらない程、体中が燃え上ってくるの」
「まあ……」
「とても、おいしいから、グウーッと飲んでごらんなさい」
一口、口をつけてみますと、ちょっとネットリしていますが、普通のお酒のようにアルコールの味が、きついものではなく、とても甘くて、口あたりの大変、良いお酒でございました。
「本当ね。とても美味しいわ」
私は、残りのお酒も一気に飲みほしてしまいました。
「そうでしょう。もう一杯、飲む?」
「ええ、よろしいんでしたら戴くわ。これなら、お酒に弱い私でも、二杯でも三杯でも飲めるみたい」
「ホホホ、そんなこと言って大丈夫かしら。これは甘い味が強くて、ごまかされているけれど、本当はアルコール分は相当、きついものなのよ」
そう言いながらも先生は、もう一杯、ついでくれるのでございます。
今は夜中の十時ごろでございましょうか。今日は少し早目に夕御飯をいただいておりましたから、もうソロソロお腹がすいてくるころでございます。
それだけに、お酒が咽咽を通り、胃の中一杯に拡がって行く様子が、はっきりと感ぜられました。
「飲んでしまったら、足を殿方の方へ向けてあおむけに寝てごらんなさい」
先生は私の腰の下に、大きな羽布団のクッションをしいてくださいました。
私は、否応なしに女の一番、恥かしい所をこれ見よがしに殿方の方へ突き出す恰好になったのでございます。
「圭子。オ前ハ、コレカラ晶子ガシテミセルコトヲ、ヨウク見テオクンダゾッ」
李さんは、酔って焦点の定まらない瞳をあげて、壁ぎわに吊り縛りにされている圭子ちゃんに言いました。
「は、はい」
圭子ちゃんは、恥かしさと恐怖に震えながら、まだどことなく、あどけなさの残っている顔を、小さな肩に埋めるようにして、うなずきました。
「李さんの言う通りだよ。晶子が済んだら、次はお前なんだからね。その時になってモタモタしていたら、承知しないわよ。目をしっかりあけて、ようく見ておきなっ」
お八重さんも、おっかぶせるように命令します。
それまで、部屋中に煌々と輝いていた電灯は総て消され、一条のスポットライトが私の体に向けてあてられたのでございます。
薄暗い部屋の中に、白いお布団がクッキリと浮び上り、その上にいる一糸まとわぬ女二人を、あますところなく照らし出します。
「晶子ちゃん、このお薬を体の中に押し込みなさい」
先生は、ピンク色をした小さな錠剤を一粒私の手に握らせました。
「飲むのですか」
「いいえ、飲むお薬じゃないわ。その……つまり、自分の体の中におし込むのよ」
「そ、そんなこと……」
「駄目、駄目。晶子ちゃん、さっき約束したでしょ。先生の言うことは、どんなことでもよくきくって。それを、もう忘れたの」
先生は、軽く叱るように言われました。

::::イメージギャラリー::::『羽根のある肌』::::須坂　旭::::



「いいえ、でも……」
私が言葉を濁しますと、
「晶子ちゃん、それが、いけないのよ。さあ早く。何も難しいことはないわ。足を大きく拡げて、静かに指で押し込めば、小さいものだから、わけなく入るのよ。いいこと」
それでも私は、しばらく、ためらっておりました。

「さあ、晶子ちゃん。先生の言うことは、何でもきくって、お約束したんでしょ」
再び先生に促されて、私は意を決し、右手の人差し指と中指とで小さな錠剤をはさみ込み、宝石のように輝く小粒を、そっと、あてがったのでございます。
「そう、そして左手で、そこを拡げて、入りやすいようにするの。なるべく奥の方まで差し込むのよ」
先生は、ライトが私の体を照らし出すのを邪魔しないようにと、背中を丸めこむようにして私の足元の方へ回りました。
「晶子ちゃんが、お薬を入れやすいように足を持っていてあげましょうね」
と言いながら、大きく拡げている私の両足が動かないよう、足首をおさえてくださったのでございます。
「さあ、晶子ちゃん、もういいわよ。静かに入れてごらんなさい」
「はい」
私は目をつぶり、一呼吸してから、思いきって指先を動かしました。
そこを狙って、ステージ・ライトが赤から青、青から黄と、華やかに変ります。
「フウー」

満座に張りつめていた空気が一瞬、乱れました。
「先生、これ位でいいの？」
「まだまだよ。うんと奥へ入れなくっちゃあお薬の効き目が少ないわ。晶子ちゃんのお指が全部、隠れる位まで差し込みなさい」
私のまわりを取り囲んだ男たちは、グッと円陣をせばめ、重なり合うようにして、私の体を覗き込んできます。
「先生。もうこれ位でいいでしょう」
「そうねえ……」
先生は、しばらく間をおいてから、
「はい、もういいわ」
と、やっと許してくださいました。
「これから、どうすればいいんですの」
先生が私の足を押えていた手を離したので私は足をつぼめようとしますと、先生は
「いけません。足はつぼめないで、そのまま開いておきなさい」
と言われ、今度は私の枕元の方へ坐り、私の両手を束ねて上へ引き上げ、先生のお膝の上で、しっかり握りしめたのでございます。
私の体は、両手をグイと頭上に伸ばし、両足を大きく拡げた、一本の棒のように伸びきった恰好となりました。
「そのままで、しばらく、じっとしているのよ。私がいいって言うまでは、何もしてはいけませんよ。体も動かしては、いけないの。判ったわねえ」
私の体にさわろうと伸ばしてきた李さんの手を、お八重さんは邪険に払いのけ、
「李さん。晶子が自分で燃え上ろうとしているんだから、余計なことをしては駄目じゃないの。あんたは折角の見せ場を台なしにする気なの」
と、たしなめました。
ふと、壁へ目をやると、バッタリと圭子ちゃんと視線が逢いました。
「まあ、圭子ちゃん。お姉ちゃんのこと、そんな目で見ないで。恥かしいわ」
「お、お姉さま。圭子も……圭子も……」
圭子ちゃんは悲しそうに呻きながら、両手首を縛っている縄を握りしめ、二度、三度、はかなく、ゆすりました。
「圭子ちゃん。お姉ちゃんが自分から、こんな恰好をするのをみても、軽蔑しないでね」
「ええ……」
圭子ちゃんは円らな瞳（つぶ）に一杯、涙を溢れさせ、可愛らしい、ぐみのような唇をギューッと噛みしめて、嗚咽を懸命にこらえているのでございます。
その可憐さに、私は思わずとび起きて抱きしめたい衝動にかられました。
さきほど飲んだお酒の酔いが廻ってきたのでしょうか。私の体の内から、カッカッと火照ってくるのを覚え始めました。それと同時に、下腹部のあたりが変にむず痒く、いてもたってもいられないような感覚に襲われてきたのでございます。そこは、まるで火の玉を押し込んだように燃えさかっておりました。お薬が溶けだしたのでございましょう。
私は堪まらず、呻き声を漏らしたのでございます。
「ウ、ウーン」
「どうしたの？」
先生は私の顔を覗き込みます。
「先生。なんだか、体中に火がついたようでたまりませんの……」
「そう、それでいいのよ。お薬が効いてきたのだわ」
「晶子、どうしたらいいの？」
「もう少し我慢するのよ。そうしたら、もっと、もっと体中が燃え上ってくるから」
先生は、ギユッと私の両手を汗ばむほど強く握りしめておられました。

「ふむ……ふふ……」
　私はもう、いたたまれないような甘美な思いに身を焦しておりました。
　体中の血が一度に沸きかえったかと思うほどに燃え上り、下腹部の深奥部からは、かいてもかいても、かゆみに耐えられないような何ともいいようのない気持が、フッフッと湧き上ってくるのでございます。
「うう……うう……」
　私は、知らず知らずのうちに、体をよじり腰を浮かせて、グルグルと廻しはじめておりました。
「そんなに体を動かして、どうしたの」
　先生は、私のこんな、やるせない気持を充分ご存知の筈なのに、わざと意地の悪い質問をなさるのです。
「体中が、しびれるようなの。それに足の付け根の辺りが、燃えてるような……かゆいような……堪まらない気持なの」
「そう……」
「先生、早くどうにかしてえ。晶子、晶子、もう駄目になっちゃうみたい。ウウ……」
　私は両足を閉じて激しくこすり合わせ、お尻を浮かせて体中を、のたうたせました。そうでもしなければ、もういたたまれなくなっていたのでございます。
「駄目よ、晶子ちゃん、そんなに暴れては。先生が言ったでしょう。私がいいって言うまでは、じっと静かにしておりなさいって」
「でも、こうでもしなければ、気が狂いそうなの」
「そこを我慢するのよ。ホレ、さっき注意してるでしょう。足は拡げたままにしておきなさいって。晶子ちゃんは先生の言うことがきけない娘だったの」
「いいえ、そうじゃないんですけれど、もう駄目なんです。体中を何かでかき回されて責められているみたいで……」
「圭子ちゃんだって見ているのよ。あなたが立派なお手本を見せなくっちゃ駄目でしょ」
「ううう、先生ッ、許してえッ。先生、その手を離してえーッ」
　私は悲鳴をあげ、先生に握られている両手を振りほどこうと、もがきましたが、先生は逆に力を入れ、離してくれないのです。
「先生ッ。あッ晶子、もう気が狂っちゃうわあ。手を離して、この手を離して頂戴！」
「まだまだよ。もう少し我慢するのよ。晶子ちゃんは何度、言ったら判るの」
「うう……ひいーっ」
「体を動かしては駄目って言ってるでしょ。足を大きく開いて、ギューッと爪先に力を入れてみなさい」
「は、はい、うう……」
　私は言われたようにしようと努力はするのですけれど、全身がしびれ、神経組織がバラバラになったみたいで、身体は私の意志とは関係なく、知らず知らずのうちに、のたうつのでございました。
「ギュッと足先に力を入れて、ふんばってごらんなさい」
　そう言う先生の声も、もうどこか遠い所から聞えてくるようでございました。
「あんまり言うことをきかないようだったら一度、李様にお仕置をしてもらいますわよ。それでもいいの」
「いいえ、それは、かんにんしてください。我慢しますから。ヒイーッ、ウウ……」
　私は大きく、のけぞりました。
「先生ッ、お願い。私の体を、私の体を、どうにか、してえーッ」
「いけませんっ。我慢するって言ったでしょう」
「先生ッ。手を、手を離してえー。晶子の自由にさせてーッ。ヒイーッ」

「手を離してって言うけれど、それで晶子ちゃんは、どうするつもりなの?」
「か、からだをかきむしりたいのですうッ」
お酒とお薬の効き目が最高潮に達したようでございます。体中の血が凄まじく荒れ狂うのでございました。
もう恥かしさも、理性も消えうせていました。他人が何もしてくれないのであれば、自分自身が滅茶滅茶に体中をかきむしりたいような衝動に襲われたのでございます。
私が腰を狂ったように凄まじくゆすり、両足を激しくこすり合わせているさまを、じっと見ていた李さんが、
「先生。モウ、ソレグライデ、イイダロ。手ヲハナシテヤリナ」
と言い、
「圭子。今カラ晶子ノスルコトヲ、ヨウク見テオクノダゾッ」
と念を押しました。
「晶子ちゃん。李様があのように許してくださるのだから、手を離してあげるわ」
「あ、ありがとうございます。アウ……」
「そのかわり、自分で思いきり激しく責めなけりゃあいけないのよ。このことは判ってるわねえ」
「はい……」
「それではねえ、晶子ちゃんからも圭子ちゃんに、私のすることをようく見なさいって、言ってあげて」
「は、はい、ううう」
私は、もう一刻でも早く手を離していただきたい一心でございました。どんなに恥かしいことでも、どんなにみじめなことでも、反対なんかしようという気力は影のように消え失せておりました。
「け、圭子ちゃん。今からお姉ちゃんのすることを、よく見ているのよぉ。お姉ちゃんがこんな時は、どんな風にしたらいいのか、そのお手本を見せてあげますからねえ。とっても、とっても、上手にしますから。圭子ちゃんも、後から、お姉ちゃんがした通りにするのよお。いいこと……」
圭子ちゃんは、それに応えて何か返事をしたようでしたけれど、消え入りそうな、かぼそい声でしたので、もう昂奮のルツボに、のめり込んでいる私の耳に入る筈もございません。
「圭子ちゃん、いいわねえ。お姉ちゃんの指の動きや腰の動かし方を、よおく見ておくのよお——」
女とも思えないような絶叫が、思わず咽喉をついて、でました。
「先、先生っ。早くう、手を離してえーッ」
私は満身の力を振り絞って腰をはね上げ、両足を棒のように突っ張りました。
「はい、晶子ちゃん。許してあげるわ。自分で好きなように、するのよ」
ようやく智恵子先生は、握りしめていた私の手を離してくれたのでございます。
「あ、ありがとうございます——」
まるで猛り狂っていた野獣が、くさりを切って暴れだしたように、私は自由になった両の手で激しく全身を責め始めたのでございました。
もう、どこを、どのようにしているのか、自分でも判りません。ただただ、かん高い呻き声をあげ、全身を凄まじく、のたうたせながら無我夢中で、かゆい所をかき、うずくところを、がむしゃらに引っかきまわしていたのでございます。
部屋中が異様な熱気に沸きたち、男たちの息づかいも次第次第に荒々しくなってまいりました。私を照らし出しているステージ・ライトも赤、黄と目まぐるしく変ります。
「晶子ちゃんッ。それだけしかできないの。

もっともっと激しくするのよぉ。あなたは、圭子ちゃんに、お手本をみせているのでしょうッ。そんな生ぬるいことじゃ、お手本にならないわよお。そうそう、そうよ。もっと両足をふんばって、指をきつく動かしてごらんなさい。あなたは自分の身体のどこを責めれば一番いいのか、よく知っているでしょう。そこを徹底的に責めるのよ。それを殿方に見ていただくの。今度は、どんなに、お尻を振ってもいいのよぉ」

先生は私の枕元で、いろいろと教えてくださいます。

「は、はいっ、うう……う……」

私は先生の声を夢うつつにききながら、ある時は喚き、ある時は奥歯をかみしめ、お布団も狭しとばかりに転がり暴れて、懸命に我が身を責め続けたのでございます。

「晶子ちゃん、その手を休めては駄目よッ」

手の動き、指のうごめきが一寸でもにぶると、すぐに先生に叱られます。

「苛めたくないんだったら、その両手を縛ってしまいますわよ」

そんな意地悪さえ言うのでございました。

「嫌ッ、嫌ッ。そんなこと言っちゃ嫌ッ」

「じゃあ、もっともっと激しく燃えるのよ、いいこと」

「はい……」

「圭子ちゃんにも何か言ってあげなさいね」

「は、はい。圭子ちゃん、どお。お姉ちゃんのすること、よく見てくれたわねえ。お指でどこをどうするか、お指がどれ位まで隠れるかなど、よく判ったでしょ。今度は圭子ちゃんの番よ。お姉ちゃんに負けないように、もっともっと激しく、いたぶるのよ」

全身を白木の弓のように、のけぞらせ、海老のように丸めて暴れました。腰の下に敷いていた羽布団のクッションも、どこかに、けとばしてしまっておりましたし、体半分は、お布団から転げ出ておりました。

どれほど長く、自分自身を自分でいたぶり続けたのでしょう。全身から滝のように噴き出る汗は、ベットリとシーツを濡らし、間断なく野獣の咆哮にも似た呻きを挙げ続けたため咽喉はカラカラに乾いておりました。そして、もう意識も、もうろうとして参ったのでございます。

「どうしたの、晶子ちゃん。お指の動きが鈍くなったわよ」

「先生ッ。そんなこと、おっしゃったって、晶子、もう駄目なの」

「駄目、駄目っ。元気な晶子ちゃんだから、もっともっと頑張れる筈だわ。うんと自分で責めるのよ、いいこと。できるわねぇ」

「は、はいっ。わかりました。でも、先生っもう、私、これ以上、できないのっ。体がバラバラになってしまうわぁ。ヒイーッ、け、圭子ちゃん。お姉ちゃんの最後を、よく見てーっ。いいわねえッ」

その瞬間、突然、体中の血が、一気に噴き上げるような衝撃に襲われました。

私は咽喉の奥から、ふり絞るような絶叫を挙げ、四肢をけいれんさせながら全身を硬直させたのでございます。

○

「さあ、今度は圭子ちゃんの番ね」

智恵子先生は、たった今、私が身をよじって、しわにしたシーツをきれいに伸ばし、跳ねとばしていたピンクの羽クッションを元通りにしたりして、かいがいしく圭子ちゃんを迎える準備をなさいます。

私は、今みせた恥かしい演技に全精力を使いきり、疲労困ぱいしておりました。先生がせっせと準備なさるのを見て、邪魔にならないようにしようと、立ち上ろうと努力するのですけれど、全身の力が抜けてしまっていて

どうしても立てないのでございます。
「いいのよ、晶子ちゃん。あなたは疲れているでしょう。何もしないでいいわ。そこに座っていなさい」
見かねた先生は、優しく、そう言ってくださいました。
「済みません。腰がふらついてしまって、どうしても立てないのです」



イメージギャラリー『スター養成中』マエダ・ヒオミ

私は、やっとの思いで上半身を起し、お布団の端まで、這って行き、不作法な仕草ですけれど、ベッタリとお尻を落して座ったのでございます。
「でも、お上手だったわよ。とっても迫力があったわ。さすがは晶子ちゃんだけあるわ」
「先生にそうほめて頂いて、晶子とっても、うれしいわ」
「激しい歓びの声をあげてのたうっている晶子ちゃんをみて、先生は、うらやましくなっちゃったわ。私には、とても、あなたのような、まねはできそうにないのですもの」
「まあ、先生ッたら」
「でも、相当、疲れたでしょう」
「ええ、まるで体中を嵐が吹き荒れたみたいで、腰のあたりなんか全然、力が入らず、海綿のような感じですの。それに体の節々が少し痛みますわ」
「そうでしょうねえ。それはそれは、とても凄かったのよ。ほれ、このシーツを見てごらんなさい。こんなにシミになっているわ」
シーツのあちこちに、ベットリと、まだ乾ききらないシミが残っておりました。
私は、まだ甘い陶酔に浸っていました。身体の中が、ほのぼのと燃え、めくるめく歓び

の余韻が、静かな波のように、ひたひたとおしよせてくるのでございます。
そんな感触を楽しむように、私はもう一度我が胸のふくらみを、ソッと抱きしめるのでございました。
縛しめをとかれた圭子ちゃんが、足をよろめかせながら、お八重さんに連れられてまいりました。
「先生ッ、しっかり教育してやってくださいよ」
「はい、じゃあ、圭子ちゃん。そこへお座りなさい」
先生は、お布団の真中を指さされました。
「はい」
圭子ちゃんは顔を伏せ、消え入るような細い声で返事をして、アグラをかきました。
「今、晶子ちゃんがしたことを、よく見ていたでしょう。あの通りすればいいのよ。できるわねえ」
覗き込む先生の顔を避けるように、圭子ちゃんは一層、深々と顔を伏せるのでした。
十八才になったばかりの、まだあどけなさが残る圭子ちゃんにとっては、ショッキングな、お手本であったのに違いありません。
「圭子ちゃん。お姉ちゃんがしてみせたのをよく見てたんでしょう」
「ええ」
圭子ちゃんはコックリうなずきます。
「あのように、見た通りにすればいいのよ。何も難しいことはないわねえ」
私は圭子ちゃんの小さな肩に手をおいて、ささやきました。
「だから、出来るわねぇ」
「でも、私、あんなこと今まで一度もしたことがないんですもの」
「大丈夫よ。先生とお姉ちゃんが上手に教えてあげるから、何も心配しないでいいのよ」
私は圭子ちゃんの肩に手を回しました。小柄な圭子ちゃんは私の腕の中に、すっぽり入ってしまいます。グッと抱き締めてみますと恐怖におののく小鳩のように、かすかに全身を震わせていました。
「それに、圭子は晶子お姉様のように、上手にできそうにないわ」
「そんなこと、ないわよ。圭子ちゃんだったら、お姉ちゃん以上に、うまくできてよ」
先生が「早く」と目で促されました。
「だから圭子ちゃん。すぐ始めましょうね。先生と二人で充分リードしてあげるから、私たちの言う通りにしていればいいの。圭子ちゃんは、いい子だから、すぐにして見せてくれるわねぇ」
私は、肩まで豊かに伸びている、しなやかな髪を、ソッとなでました。
「だから、いいわねえ。すぐ始めるのよ」
返事を待たず私は、先生に早くお酒とお薬を持ってくるよう合図しました。
「はい、このお酒を飲むのよ」
一寸、体を固くして抵抗しようとした圭子ちゃんでしたが、私がしっかりと抱き締め、先生が強引に口を割って飲ませてしまいました。
「もう一杯、飲みましょうね。そうしたら、晶子ちゃんに負けない位の元気がでてよ」
二杯目は素直に自分で飲み干します。
「このお薬の使い方は判ってるわねえ」
「はい……」
小さく、うなずきます。それにつれて長い髪が扇を開くようにハラリと拡がりました。
「圭子ちゃんには特別サービスで二粒、あげましょうねえ。だから、うんと頑張るのよ」
「まあ、うらやましいわア。お姉ちゃんだって一粒しか頂けなかったのよ。それを二粒も頂くなんて、圭子ちゃん、良かったわねえ」
先生と二人して、圭子ちゃんをソッと、お

布団の上に、あお向けに寝かせました。
「晶子ちゃん。あなた、すまないけれど、そのクッションを腰の下に入れてあげて。それから、足の方を受け持ってくださいね。私は枕元の方へ回りますから」
私は、さっき先生にしていただいたように圭子ちゃんの足をグウーッと大きく左右に拡げ、おさえつけました。
圭子ちゃんが自分でお薬を入れ始めますと今まで動かなかったスポット・ライトの色が華やかに変ります。そして、まだ充分に成熟していない、どこかに固さの残った青い果実のような体を、あますところなく照らし出すのでございます。
崩れていた男の円陣が、再びグッと、せばまってきます。
「圭子ちゃん、しばらく、そのまま、じっとしているのよ。晶子ちゃんは、私がいいと言うまでは、圭子ちゃんがどんなに暴れても、その足を離してはいけませんよ」
先生は、てきぱきと指示なさいます。
「圭子ちゃん、目を閉じていては、いけないわ。さっきお姉ちゃんは、ちゃんと目を開いていたでしょう。目を開けて、周囲の殿方のお顔を一ぺん、ずっと見てごらんなさい」
「はい……」
円らな瞳に羞恥の色を溢れるように浮べ、ゆっくりと周囲を見回します。
「ふうっ」
取り団んだロシア軍将校の間から、堪えかねたような喚声が洩れました。
だんだんと、お酒やお薬の効き目が回ってきたのでございましょう。雪をあざむくばかりに白い裸身に、ほんのりとピンク色がさしお尻のあたりをムズムズし始めたのでございます。
「圭子ちゃん、お薬が効いてきたようねえ」
「ええ……」
「どんなになってきたの」
「何だか胸のあたりが、かあーっと熱くなってるような、痒いような、うっ……あうっ」
小さな悲鳴を挙げ、腰をガクンと、ゆすりました。
「それを我慢するのよ。もっともっと、我慢するのよ。そしたら……のよ。だから……」
私は圭子ちゃんの足をおさえつけていた手に一段と力を入れました。
「フウフウフウ、アウアウアウ」
鼻息は次第に荒くなってまいります。
圭子ちゃんは私たちに両手両足をおさえつけられているものですから、もがきたくてももがかれず、全身をつっぱり、お尻をガクンガクンとゆすって暴れ回るのでした。
「圭子ちゃん、しばらくは、じっとしていなさいって、先刻言ってあるでしょう。そんなに暴れては駄目よ」
「そんなこと言ったって、先生。圭子、もう堪まんないの。体中が焼けつくようなのよ」
「それを我慢するんですよ。お姉ちゃんだって、とっても長いこと頑張ったのよ。圭子ちゃん、お姉ちゃんのこと、ようく見てたんでしょう」
「うそよ、うそよ。晶子お姉様だって猛烈に暴れていたわよぉ。それに圭子は、お姉様とちがって、お薬を二粒も頂いたのよォ。ヒイーッ、お、お姉様。ど、どうかしてえーッ」
はや、水を浴びたように全身から脂汗を噴き出させ、かん高い絶叫をあげながら、海老のように跳ね回るのでございます。
「せ、先生。もう、許してえーッ。圭子、体中に火がついたようで、もう気が狂いそうなのよーっ。ウー、早く、早く自分の好きなようにさせてえーッ。ヒイーッ」
玉のような汗と、しとど滲み出る……にスポット・ライトが反射して、まるでダイヤモ

ンドのようにキラリと美しく輝きます。
「仕方がない子ねえ」
先生はチラリとお八重さんの顔色をうかがいお八重さんがうなずくのを見ると、
「圭子ちゃん、もう少し我慢できるでしょ」
「ヒイーッ。で、出来ませんわァーッ。もう何が何だか判らないのよォーッ。キイーッ」
小さな真珠のような歯をくいしばり、口から泡を噴き出して呻きます。
「圭子ちゃんの駄々ッ子ぶりには困ったものねえ。これ位しか我慢できないだなんて、信じられないわよ」
「だって、だって……ウウッ、本当にもう耐え切れないのよォーッ」
「だったら今日は始めてだから許してあげるけれど、その代り、今度お見せする時には、もっともっと我慢するのよ」
「はーいッ、ウウウッ」
「そのこと、お約束できるわねえ」
「は、はい。必ず必ず、お約束します。だから……は、早くウーッ。ヒイーッ」
小柄なあの体のどこに、これだけの力があるのかと驚くほどの、もの凄い力で暴れようとするのでございます。足をおさえつけている私も、ありったけの力を出さなければ振り切られてしまいそうです。私も汗が噴き出ておりました。
「じゃあ、離してあげるけれど、しっかり責めるのよ。責め方が足りなくて殿方を満足させられないようだったら、もう一度、二人でその手足をおさえつけますわよ」
「は、はい、ウウッ」
「それに、お薬を、また入れるかも知れなくってよ。いいわねえ」
「わ、判ってますわーッ。先生ッ、早く、離してえーッ」
パッと手を離した瞬間、圭子ちゃんの体ははじかれたように、とび跳ねました。
「ウウッ、ウウッ、ヒイーッ」
異様な絶叫をあげながら、お布団の上を、右に左にと激しく転げ回って責め始めたのでございます。
「圭子ちゃん、両方のお指でいたぶるのよ」
「こう、こうでしょう。ヒイーッ」
圭子ちゃんは身をよじり、腰を浮せて浅ましい恥態の限りをつくして、被虐の海へ没入していきます。全身に燃えたぎる女の業をむき出しにした凄まじいものでございました。
「……だけではいけないのよ。ずっと……まで、か……してごらんなさい。お姉ちゃんもそうやって見せてあげたでしょ」
「は、はい」
「もっと、もっと、……ゆするのよ。圭子ちゃんにしては一寸、元気がないようだわ。もう、いくらお尻を振ってもかまわないの。だから、もっともっと振りなさい。そうすれば……だけでするより、一層よくなってよ」
「ううう、ほ、本当だわァ。晶子お姉様のおっしゃる通りよ」
「そうでしょう。まだまだ圭子ちゃんにしたら、動きが足りない位よ」
「こ、こうなのねッ。ヒイーッ」
圭子ちゃんは歯をくいしばり、懸命に、いたぶり続けます。
青、赤、黄の華やかなステージ・ライトに照らされて、妖しいリズムでのたうつさまはまるで深海でニンフが踊っているような幻想的な光景でございました。
「圭子ちゃん、とってもお上手よ。殿方たちも素晴しいって、ほめてくださってるわ」
「そう、圭子、嬉しいわァ。晶子、お姉様に負けていないのねぇ」
「ええ、だから、もっともっと頑張って皆様に、とっくりと見て頂きましょうね」
「はい……」

まだ熟し切っていないピチピチとした若い果実だけに、その暴れようも凄まじく、すぐにお布団から転げ落ちてしまいます。私たちは何回となくお布団の上へ、抱きかかえあげなければなりませんでした。

「あれあれ、どうしたの。……の動きが鈍ってきたわよ。もう、元気がなくなっちゃったの?」

「いいえ、爪先から、体中がしびれてくるようなのよぉ」

圭子ちゃんは目を閉じ、海老のように体をまげ、手の動きをゆるくして、じっとこみあげてくる感触を楽しんでいるようでございました。

「駄目よ、そんなことをしては。体を隠すようにしてはいけないのよ」

先生は叱りつけるように言われました。

「晶子ちゃん、暴れてもかまわないから、あお向けにさせて、両足を拡げておさえつけて頂戴。私は肩をおさえておくから……」

いも虫をひっくり返すように、圭子ちゃんを転がらせ、暴れないように両肩をグイと、お布団の上におさえつけてしまいました。

「はい」

私も言われたように、圭子ちゃんの足を左右に大きく割って押えつけました。

「さあ、圭子ちゃん。元気を出してッ。そんなことじゃ許してあげないわよッ」

「そうよ、先生のおっしゃる通りだわ。お姉ちゃんは、圭子ちゃんは、もっと元気があって、もっとお上手なのかと思っていたけど、あてがはずれたようね。お姉ちゃんがして見せた通りしないんだったら、これから一切、圭子ちゃんのことは知らないから。それでもいいの」

「嫌よッ。お姉様ッ、圭子を見限っては嫌よッ」

「だったら、もっともっと、激しいのを見せてくれるわねぇ」

「は、はいッ。お姉様ッ。これでいいんでしよッ」

圭子ちゃんは被虐の旅の最後が近づいていたようでございます。

体をおさえつけられて自由にならないものですから、お腹やお尻をピクンピクンと、よじりながら、必死にもがいておりました。

「お、お姉様ッ。圭子をみてーッ。もう、圭子は自分で何をしているか判らないのよ。体中が溶けてしまいそうなの」

「圭子ちゃん、もう少しよ。もう少し頑張るのよッ、いい子だから。ありったけの力を出して頑張るのよ」

「は、はい、先生ッ。圭子、気が狂いそうなの。見ていて。先生っ」

突然、この世のものとは思われないようなかん高い悲鳴をあげ、それまで目茶苦茶に全身をかき回していた手の動きをパッタリと止めました。

「ど、どうしたの、圭子ちゃん」

しかし、それには答えず、ギユッと噛みしめた白い糸切り歯の奥から長く尾を引く呻きをもらしながら、全身を棒のように硬直させたのでございます。

妖しいばかりに美しい顔をガックリと横へ伏せ、動きを失った両手は力なく体をすべり落ちたのでございました。

（おわり）

〔伝言板〕〇本誌へ寄稿された方、投稿された方、モデルに志願された方、読者通信を寄せられた方々の住所氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故御安心の上、通信をお寄せ下さい。尚、手紙の転送や斡旋などは双方が納得されない限り原則として取扱いは致しておりませんので御諒承おき願います。〇如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。電話連絡が必要な際は、当方からその旨を記してお返事申し上げます。

<告白>

わが思春期の周辺

〔トイレをめぐるアブドラマ〕

サカキバラタカシ
榊原孝



カット・須坂　旭

放課後のトイレは、生徒にとって絶妙の喫煙所であり、棚引く紫煙を眺めながら、一日の授業を終えた解放感を味わう場所でもあります。

当時、私が在学していた高校は、中・高の六年間の一貫教育を行い、県下でも抜群の大学進学率を誇る男子校でしたが私達生徒の大半は苛酷な受験体制（二学校の予備校化）に反発して、秘かに喫煙等ではかない反抗を示していました。

その日、高校トレイは危いというので、わざわざ中学一年のトイレまで遠征した私は、廊下から聞えてくるハイヒールの靴音と騒々しい女性の話し声に慌てて煙草をもみ消し、煙を手でパタパタと払っていると、婦人達がトイレに入ってきました。男子校なので婦人用のトイレは一階にしかなく、父兄会の時、母親達は、その階にある生徒用のトイレを使用していました。

四つある大便所の二つ目に入っていた私は、前後から聞えてくる女性独得の激しい放尿音に、すっかり興奮してしまい壁を隔ててしゃがんでいる女性の姿を想像して熱い息を吐いていました。「見たい、見たい」と心の中で叫びながら、私自身、摩擦していました。

ふと目が下へ行った時、隣のボックスとの間が5センチ位、開いているのを発見した時の喜び。制服のズボンが汚れるのも構わずに跪いた私の眼に飛び込んできたのは、黒いハイヒールをはいた二本の足と、白くて大きいヒップでした。白い二つの小山の様な放物線の原点とも言うべき場所には、黒々としたものが茂りそれをなぎ倒しながら、一条の銀線が走っていました。

その瞬間、私は頭がクラクラとし、熱いものが下腹をよぎりました。銀線は次第に力を弱め、紙を持った手が降りてきて、ゆっくり前から後へと拭い、紙が手から離れると同時に大きなヒップは私の視界から消えました。

私は今度は向きを変え、後のボックス

を覗き込みました。中の婦人は、今入った所らしく、和服の裾をまくり上げている所でした。

滑らかな白い脛（はぎ）と白足袋が目に痛く映りました。やがて彼女はしゃがみこみました。滑らかな肌の何処にあったのかと思う程、脛（はぎ）の筋肉が盛り上がり、ぐっとはちきれんばかりに開いた太腿部に青いパンティが幕のようにひろがっていました。

女性が裸になるのは、浴場とトイレしかありません。とりわけ、トイレでの姿勢は必然的に女性の恥かしい部分の露出を防ぐことはできません。そしてまた、排泄という行為を覗き見ることは、男性の深奥心理の中にある加虐願望を満足させるに十分でした。しかも、異性への憧れと〈性〉への好奇心を抱いている思春期の少年にとって、これ程、確かな実務教育はありません。

その日、私は前後のボックスを交互に覗き全部で三十名以上の婦人の放尿を観賞させてもらいました。幸いなことに、各クラスの父兄会が同時に終ったのではなく、バラバラに終了したため、長時間一つのボックスに入っていても、決して怪しまれることはありませんでした。

人間一人一人の顔が違う様に、一人一人の婦人の放尿姿勢が違うのには驚きました。便器にヒップがつく程、腰を落して放尿する女性もいれば、すき間からヒップの頂しか見えない程、中腰になって放尿する人がいたり、また、まだポタポタ滴が落ちているのに、ペーパーも使わずにパンティを上げる女がいたりしました。

一人、無毛症の婦人がいました。茂みのない女性の成熟した秘所は〝可愛いらしい〟という形容が、ぴったりだと思います。

丁度、最後のクラスの婦人でしたが、一人だけ排便した婦人がいました。私は調髪セット用の鏡を利用し、中の婦人がスカートや着物を巻き上げる動作から眺めさせてもらいました。鏡の角度を調節しますと、かなり奥まで覗くことができます。

その婦人は入ってロックすると、すぐには便器を跨がずに、暫くハンドバッグの中をかき回していましたが、やがて、パチンと音を立てて閉めると、やっと便器を跨ぎましたので、すぐ鏡を使用しました。

紫色のスカートの中には白いパンティが、申し訳け程度にヒップを覆っており、ストッキングがガーター吊りによって吊られておりそれが非常になまめかしく感じました。

スカートがまくられ、パンティが下げられますと、白桃のようなヒップが顔を出しました。プリンとした感じで本当に美しく、そこに顔をうずめたいと考える程でした。

やがて彼女はしゃがみこみましたが、その姿勢が少々変っており、いわゆる爪先立ちになってハイヒールの踵を上げ、極端な前屈みの姿勢をとったため、中腰気味となり、すべてが私の目の前に完全に露出されました。

今までの婦人と違い、放尿も勢いがなくすぐに終ってしまい、少々、不満を感じていますと、プッと可愛らしい音がし菊花がピクピクと息づき、やがてそれを押し拡げるようにして茶褐色のモノが顔を出しました。

ムッという息遣いと共に、ソレは尻尾の様に垂れさがり、独特の臭気が漂ってきましたが、その臭気も私にとってはまるで香水の香りの様に感じられました。ソレは驚く程太く、なかなか切れずに垂れていましたが、やがてヒップが揺れると、ポチャッという水音を立てて落ちました。

それからは、次から次へと出てくる茶褐色の尻尾は、彼女の健康さを知るに十分すぎる程の色と形を具えていました。

〔告白＝読物〕

華麗な美食

浅羽やすし

＜マゾヒスチック・ストーリー＞



カット・マエダヒオミ

再会

私は、仕事の用件で、都心にあるデラックスマンションQに、ある雑誌社の社長を尋ねて、近くスタートする予定の、経営指導雑誌の編集プランについて詳細な企画の説明をはじめた。

『いらっしゃいませ』

社長の夫人が、朝っぱらからビールと、つまみものを盆に一と山、運んできた。

このひとは、社長、御自慢の二号夫人で、かってミス・ナゴヤに選ばれたとかいう、とても肉感的な美女であった。

夫人は、あでやかに、ほほえみながら、私のグラスにビールを、そそいでくれた。

昨年の今頃は、神楽坂のキャバレー〝C〟のナンバーワンホステスだったという、この夫人の美しさは、私のつたないペンでは表現できない。

しかし、その美しい夫人さえも、戸村とみ子の美ぼうの足もとにも及ばないと、私は思う。

そう——。私は、この社長との会談を早目に切り上げ、八時には、戸村とみ子と会わねばならないのだ。

新雑誌は、私をチーフに、十人ほどのスタッフで編集されることに内定していた。

かなり大規模な雑誌になりそうであった。

今月じゅうに、大口スポンサーに正式に話をもってゆき、O・Kになりしだい、来月から私は、月のうち十日間を、このしごとに没頭しなければならない。

生活のかかる仕事だし、私のライフワークになりそうだった。取締役、編集長——こんな身に余る肩書まで内定している。

そんな、たいせつな現在なのに、まして社長は、明日、羽田を立って五週間もアメリカへ行く。その前の寸暇をぬすんでの、二人きりの会談なのに、もう私の心は半分、戸村と

み子を呼んである、山の手のホテルKに飛んでいるのは、なぜなのだろうか。

羞恥と苦痛と

当分、会えないのだから、昼めしは柳橋の料亭まで、つきあえ、と社長は言った。

ひるめしは、美しいおくさんも同伴の予定だそうだし、柳橋では、社長ひいきの姉妹芸妓、Nきょうだいにも、おざしきがつけてあるという。

『きょう一日ぐらいは、ボクの送別会としてつきあってくれてもいいだろう』

社長は、しつこく私を、さそった。

プライベートな編集準備費として、かなりの金額の小切手ももらった。

すべては、きょう一日を、社長のお供をしなくては、いけない状態だった。

それなのに私は、その命令も返上した。

あきらかに、社長は不きげんになった。

用件がすむのを待ちかねて、私は少々ゆううつな心をおさえながら、マンションのくだりエレベーターのボタンを押した。

なぜ、こうまで、あわてなければならないのだろうか。お察しのとおり、私は戸村とみ子の待つアパートへ重大な用件で、急がねばならないのだ。

健康な戸村とみ子は、毎日、規則正しくトイレにいく。

時間は、だいたい十一時ごろ。その十一時は、あと三十分ののちに迫っているのだ!

念のため、先ほどタクシーをひろう前に、赤電話で戸村とみ子を呼んで、状態を確かめた。

『はい、ガマンしてます。……じつは、おなかをこわして……恥ずかしいわ。早くトイレへゆきたいんですけど、先生が、いってはいけないとおっしゃるので、待っているのですわ』

電話のむこうで、戸村とみ子の声は、ふるえていた。それは苦痛のためともとれ、羞恥のせいとも受けとれた。

だから私は、いそがねばならない。

小さいほうのは、すでに過去三回ほど、もらっている。もうひとつのほうは、まったく偶然のことから受けた。

だが、その受け方が問題なのだ。

水中に浮いたのを、ひろい上げただけで、まちがいなく戸村とみ子のものと断定するのは早計だった。

この目で確かめてこそ、それは完全拝受行為なので、残念ながら九十九パーセントそうだと思えても、あとの一パーセントが、心にのこる。その一パーセントの、うたがいを晴らすために、義理のある社長のひるめしまで返上したのではないか。

いまこそ私は、この目で、この口で、あの強烈な、ただれるような風味のなかに、なんのうたがいもなく溺れこめるのだ。

しかも、戸村とみ子という供給者は、用意ととのい、私にきてほしいと、つよく求めているのだ!

でないと、彼女の腸は自制を失い、私の行く前に、果てているかもしれないのだ。

奸計

私は、ここでヒキョーな手を打ったことを告白しておかねばならない。

今月にはいって早々に、私は意識して、戸村とみ子には、まったく仕事をまわしてやらず、スポンサーからモデルのオーダーが出ても、なんとかかんとか理由をつけて、なるべく、ほかのモデルをつかうように工作した。

〽モデルころすにゃ刃物は、いらぬ。スポンを、ほかへやればよい……

というザレうたがある。スポンとは、スポ

ンサーの略語。生意気なモデルを困らしたりもっといやらしいことを仕掛けようというときは、ようしゃなく仕事をストップして締めあげるのだから、彼女たちは、企画屋をおそれ、できるだけ、ごきげんをとり入ろうとする。

泣く泣く一夜、つきあって、ようやくポスターのモデルのくちにありついた、というのはデマではない。

私も、ひそかに、おくの手をだした。

母一人、娘一人の戸村とみ子に、十日以上もギャラが一文も入らないのは、おそろしいことなのだ。

貯えがあれば別だけれども、その日の稼ぎで食ってゆく浮草稼業の、戸村とみ子には、十日間の無収入は、こたえたらしい。

だからこそ、電話で私が、私のひそかなたのみを申し込んだとき、わりに素直に、

『いいですわ、恥ずかしいけど』

と、応じてくれたのだ。

絶句したほどのショックではあったらしいが、

『恥ずかしがるのは、おかしいぜ。ボクは、きみが面接に化粧品会社に始めてやってきてトイレに入ったとき、いれ代りにボクは入っだ。そこに、きみの流し残した忘れ物を見つけたんだぜ』

電話は、べんりなもの。

顔をみないから思いきったことが云える。

いくら私だって、直接、顔を合わせて、『きみのが、ほしい』とは切りだせないし、それでは相手も、あまりの羞恥に、『絶対、いやです』と、くるにきまってる。その点、声だけでのプロポーズは、双方ともに、気楽なのだ。

おもえば、戸村とみ子にとって私は、おっかなく気づまりな、そのくせ、たよりになるおじさんなのであったろう。

スポンサーに顔がきき、どんどん仕事をくれる私という存在は、そまつにできない筈なのだ。

大判のポスターに、チョコレートを持ってニッコリほほえむ、じぶんの顔が、全国の菓子店や、盛り場に掲げられる。

そして、莫大なギャラ。当然、テレビや映画、雑誌など、マスコミの注目を惹き、やがてタレントとしての、輝けるハイウェイが開く可能性は、じゅうぶんなのだ。

その道を、しかと手に握るためには、こんな醜悪な、羞恥をともなう第三者の目にさらさず、ヤミの下水に流すべきものを、その目の前に、さらけ出さねばならないとは！

小さいほうも恥ずかしかろうが、いきなり大きいほうをと、いくら電話で求められては言語に絶する恥ずかしさに、身も世もあらぬ思いだったろう。

しかし、しごとのない苦しさは、そんな羞恥より、さらに大きなものだったにちがいない。だから捨て身になって、私に授けることをO・Kしたのだ。

『下痢してますけど』

というのは、完全に私の求めに応じようという心構えになっている証拠といえた。

いささか、面くらったのは事実である。

健康な固まりを、少量というのが私のねらいだったから、それにしても、身を灼くような羞恥のうちに、O・Kした戸村とみ子を、私は、ひどくいじめているわけなのだ。

醜行

いきおいよく、戸村とみ子のルーム・ドアのチャイムを叩いたのは、十一時五分前であった。

気を利かせて、母親はデパートに買物にゆかせてあると、電話口で戸村とみ子は、いっ

た。

『はやく、はやく』

ドアをあけた。戸村とみ子の目が、事態の切迫を告げている。

いっそ、アイサツなどはヌキで、目的のために、わき目もふらず突進するほうが、お互いのためであった。

(ねえ、場所は、どこにします？)

目が、ささやく。

私は上衣をぬぎ、ネクタイを、かなぐりすてた。

残念ながら、そのあとのスケッチは差しひかえよう。

ただ、戸村とみ子は、完全に私のかわきをみたしてくれた、ということは、ハッキリさせてもよいであろう。

床にゴロリ横になって、口をあける、あさましい私の姿体も、上気した戸村とみ子の視野には、さいわいに入ってなかったようだ。

赤児が、母親の乳を慕うように私は、必死にうけた。

きたないとか、恥ずかしいとかの感情は、まったく、なかった。

奇妙にも、私の味覚は完全にマヒしたようであった。強いていうなら、わずかに嗅覚だけが生きていたようだ。

私は、おのれの顔面が、完全に器物と化したことを、さとった。

視界は暗く、私の目には何もうつらない。耳もとで、戸村とみ子のクツの皮が、キューと鳴ったようだ。

くり返し、くり返し、クツが鳴った。

私の飢えをみたすための、戸村とみ子の精一杯の努力であった。

人肌の、なつかしさ。

ああ、今おれは、とんでもないことをやっている。狂える倫理感。

目の前に、レモンイエローの滝が落下し、私のたべ物は、あとからあとから流れ、息がつまりそうだった。

私は、完全に満腹した。

○

万が一、この文章が、戸村とみ子の目に触れたときを、私は恐れる。

公刊誌の性格も考えなければならぬ。

そして私は、自らの、いむべき性癖を、白日のもとにさらすことには、若干の躊躇もある。

ここのとこは、あくまで戸村とみ子と私の二人きりの問題にしておくほうが気が楽だ。

それに、こんな醜行に理解のない方々は、気色を悪くして、ここまで読んで放りだしてしまわれるかもしれぬ。

あれこれ考えて、私は思いに沈んだ。

ただ戸村とみ子が、私の意をむかえようとして、約束を果たすために、一生懸命に羞恥とたたかった事実だけは、報告の要がありそうだ。

二人は精魂つきはてて、私は床に伸び、戸村とみ子はイスに座りこんでしまった。

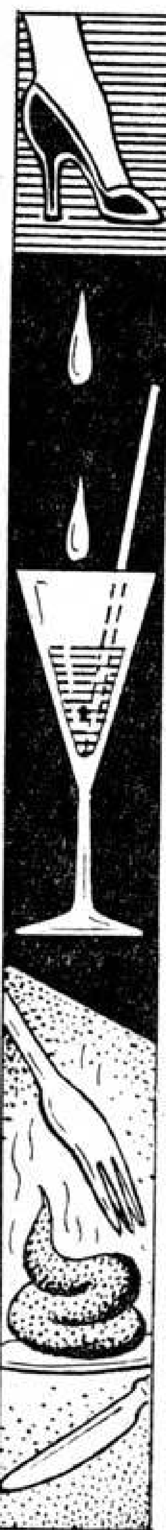
『先生は尊敬しています。けれど……』

戸村とみ子は、ポツリと云う。

『社会人としての先生は、りっぱですわ。でも、あたしのあとから、用もないのにトイレをのぞいたり、まして、あんなグロテスクなハレンチなことする先生は、きらい』

言われれば、返すことばがなかった。

いま私は、そのおろかな行動を悔い、嫌悪をすら、感じているのだ。

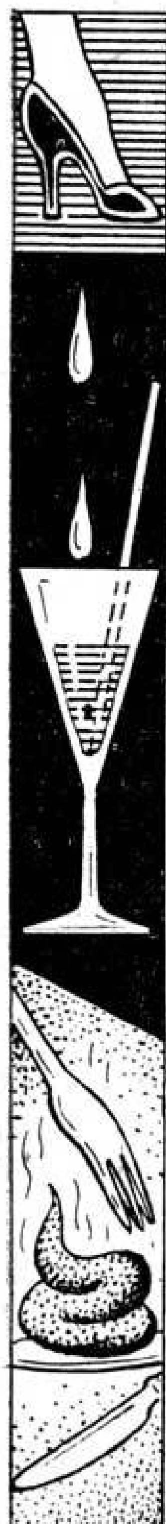


何回も洗面所に立ち、大きな水音をたてて
しつこく、うがいするのも、そのためだ。
うがいを繰り返すのは、戸村とみ子への贖罪でもあった。
もう、きょうかぎり、戸村とみ子を悲しませることをやめよう。
『先生。よけいなことですけれど、恥ずかしいとお思いになりません？』
戸村とみ子の非難は、急であった。
『あたし、先生に電話で告白されたとき、心から先生を軽べつしました。軽べつより、哀れになりましたわ』
戸村とみ子は、思いつめた表情で、ことばをつづけた。
かえすことばがなかった。
私は、娘みたいな年ごろの、この女性に叱りつけられている。
『あんなこと、プロの女性だって、いやというにきまってるわ』
私の〝命令〟に、よほど腹を立てたようすだった。
なんとかスキをみて、きりかえさなければこんな小娘に、あたまがあがらなくなる。
『それがどうしたい』
私は、胸を張った。虚勢であった。
『いちがいに、おろかな行為と、きめつけるのは、どうかと思うな。ボクは、好きだからやったまでさ。きみは、ボクをヘンタイよばわりするけど、ボクが、しごとを忘れて、こんなことばかりに熱中してたら、おこったらいい。はばかりながら、仕事は仕事、趣味は趣味だ。ボクは猛烈に働いているよ。愚行と呼ぶなら呼びたまえ。ボクのこの趣味は、ちょうどゴルファーが、クラブを振り、ボーラーがボーリングでタマをころがす、あれと同じことなんだ。かりに、きみが、いま伝染病の菌をもっていたとしよう。それは当然、ボクの口から胃腸にはいり、ボクは、きみと同じ伝染病にやられるだろう。かまわないんだ趣味でやることに一々、他人の苦情をきく必要はない。あまり干渉しないことだ』
『サン・プロの岩崎社長に訊きました。先生は公の席で、私を乾すと、宣言なさったそうですね。岩崎さんは、先生が、なぜ私を乾すのか、理由はわからないが、浅羽くんには逆らわぬほうがいい、と忠告してくれました』
戸村とみ子の顔色は蒼白であった。
戸村とみ子は正面切って、私の醜行に立ち向かおうとするのであろうか。
おりをみて告白するつもりだが、実は私はここに至るまでに、戸村とみ子の、美酒を三回も楽しんでいる。美酒は本人の承諾なしには、賞味は不可能だ。
私は、しごとのエサを振りまわしては、それを提供することを強要した。
三回とも、間接の行為。つまり、容れ物にとったのを、もらった。
そのときは、それほど私を非難しなかったのは、いかなるわけか。
いうなれば、まだ、ここまでは、抵抗が少なかったのかもしれない。
羞恥も不潔感も、食べものにくらべたら軽かったのであろう。
しかし戸村とみ子は、こらえにこらえた怒りを一気に爆発させたようだ。
大きいものを授けることの、あまりの屈辱感に、燃えたのであろう。
受ける側より、落とす側のほうが、より辛く恥ずかしいのだろうと、私は解釈した。

私は許す

戸村とみ子のアパートを、あとにする私の胸は、ふくざつに騒いでいた。
——ああ、きょうは、ついに戸村とみ子そのものを、その眼前、足の下で、私は自分のも

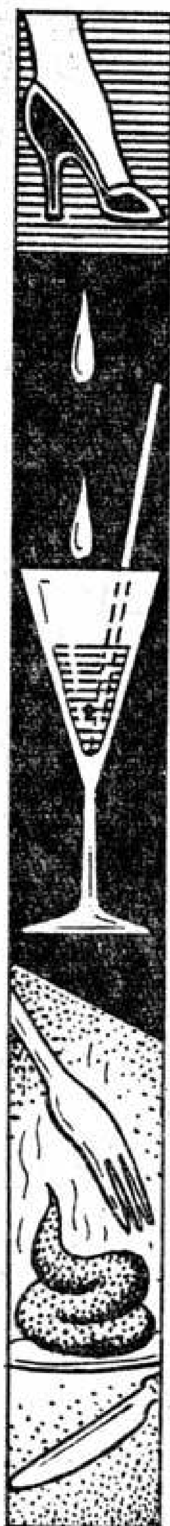
のにしたのだ。
前のときは、水に浮かんだのを、とりだしたにすぎない。だから、それが、ほんとうに本人のものであるか、ないかのクエッションマークに一〇〇パーセントの保証がない。だから、迫力のない、あと味のわるさに、悩まされたのだった。
けれど、きょうは、ちがう。
正真正銘の、ほんものだった。
しかも、のぞみ通りの状態で、のぞむだけ与えられた。
本人も、追いつめられた状況の下で、必死になって、与えてくれた。
尊敬する、先生とも呼ぶ人の前に、それをさらけだしたときの恥ずかしさ、くやしさ、つらさは、他人である私の想像以上のものがあったにちがいない。
いくら、うがいしても、その味は私ののどのおくに、消えないのだった。
いくら望んだものであったとはいえ、不快な、まずい、気色のわるい、それを私は、かなりの量、この腹のおくに、しまってしまったのだ。
いまになって、ウシの反すうのように、のどの下から、にがく、こみあげてくるのは、苦痛といえた。
やはり、そこまで戸村とみ子を追いつめるべきではなかったようだ。
空想の世界にとどめておくのが正しいことだったのだろう。
私の足は、事務所に向かっていた。
途中に、ラ・ムーアという喫茶店がある。私は、その店で熱いレモン・ティを飲むのが日課だった。戸村とみ子とは、ここへ二、三回、立ちよったこともある。いつものボックスで、レモンティの香りをたのしむうちに、ようやく私の心は平静になり、レモンのたかい香りが、さきほどのアパートでの、あの強烈な固有臭を中和させたのだろうか。かすかな、嘔吐感は消えていた。
カウンターのピンク電話から、私は戸村とみ子を呼んだ。
戸村とみ子は、幸いアパートにいた。かわいそうに、私にあたえられた屈辱に、打ちひしがれ、仕事も、金もなく、ただなすことなく、座っていたにちがいない。
でも、電話口での戸村とみ子の声は、意外に明かるかった。
『ちっとも、おこってなんか、いませんわ。それより先生、だいじょうぶですか』
怒りもせずに、あんなものを口にして、異常はないか、と心配してくれる。
健康を害した、あたしのために先生も、おなかをこわしはしないかしらと、心配してくれているのだ。
――さっきは、いろいろゴメン。もうこれからは心を入れかえる。おこってたら許して欲しいと、いっただけで、電話の前でレジのおんなの子が耳をすましはじめたらしいのを横目に、私は電話を切ろうとした。
『あした、オフィスへ伺ってよろしいでしょうか』
戸村とみ子は、ためらいながら言う。
よほど、仕事が欲しいのだろう。あしたじゅうに、何かよい条件のしごとを、とってやろう。それが、せめてもの罪ほろぼしだと、私は考えながら電話器を置いた。



暗示

『いろいろ、ありがとうございました』
　私には福島名産の鮎味噌の箱。事務所の若い人々には、それぞれ薄皮まんじゅうや津軽飴と、一とかかえのみやげを持って、戸村とみ子がオフィスに姿をあらわした。
　あの思い出の日から、十日ほど、のちのことであった。
　京都の呉服問屋の東北方面キャンペーンに和服モデルがほしいというので、私は一も二もなく戸村とみ子を推せんしたのだった。
　東北各地の一流ホテルで、土地の呉服店主を招待し、ステージで新作きものを着てみせるファッションショーのモデルとして、和服ははじめてのこととて、心配はあったが、エキゾチックな戸村とみ子のマスクが、却ってクラシックな衣装によく合い、旅先では、どこへいっても大変な人気を集めたらしい。
　約束のギャラのほか、スポンサーから、ボーナスの意味の金一封と、和服を一揃い贈られたのだった。
　ギャラだけでも、彼女と母親の、二カ月分の生活費を支えて、まだいくらか余るほどの収入に、かてて加えて、金一封のなかみも、かなり部厚く、その上、呉服問屋の専属モデルとして契約が、まとまった、というのだから、手ばなしの喜びようは、むりもない。
　私のデスクの上は、まるで、みやげ物店のショーウインドみたいだった。
『先生。お食事、つき合ってくださいません？　あたし、ごちそうします』
　ハイヤーを、おもてに待たしての、いやおうなしの、さそいだった。
　霞ケ関ビル二十五階。東京会館のクリスタルラウンジに私は、さそい込まれた。大東京のまちを一と目に見おろして、二人は向かい合った。
『先生。おなか、こわしませんでした？』
『いや、なんともなかったよ』
　二人だけに通じる、会話であった。
　あのとき、おなかの状態が健康でなく、かなりひどい下痢だった。そのために先生も、あとで、おなかをこわしはしなかったか、と訊くのであった。
『旅先で、トイレのたびに、あのときのことを思いだして……』
　デラックスなラウンジの、東京会館のコックが腕をふるってつくった食べ物を前にしたおよそ、その場にふさわしくない、あのときの印象を、たんたんと戸村とみ子は語るのであった。
『せっかくのときに、おなかなんかこわしてすみませんでした。でも、もう、すっかり治って……あたくし、いま調子すごくいいんです』
　暗示に富んだ、言いかただった。
　コンジションがよいから、いつでも、おのぞみを、きいてあげられますわ……そんなことを彼女の目が、かたっていた。
　下痢は、すっかり全快したし、旅先で、いろいろ考えた。
　先生が、おのぞみなら、もういちどでも、二度でも、きいてあげます。
　そう言いたげな、目の色であった。
　小エビのカクテル、甘鯛の洋酒むし、カニのコロッケット。そんな料理を彼女は、つぎつぎと平げ、ワインをあけた。
『おいしいもの、うんとたべて、先生に、おすそわけしますわ』
　ワインに酔ったのであろうか、いつもの無口に似ず、よくしゃべった。
　積極的に食べさせてあげる、と大胆に言う戸村とみ子は、そんなもの、ことのほか、私が好物とし、また、いつかのように食べたが

っているのだと判断した様子だった。
『よろしかったら、うちへいらっしゃいませんか? あたし、きょうは、まだ、すませてないんです』
よそのトイレでは、なにか落ちつけず、なるべく自宅で、すませてしまうようにしている、ということは、ずっと前、私に語った、排泄の習慣なのだ。
正直のところ、私は当惑していた。
まだ、食ってみたい気持は、失せているわけでもない。
かといって、正直のところ、その、あまりにも強烈な不快臭と、のどを通りかねる悪食感に、攻めたてられるのも、つらい。
さて、どうしたものか。
私は、しばし、とまどうのだった。
彼女は、旅先の心境の変化といおうか。あるいは打算的にいえば、本来なら下水のヤミに流し去るべき老廃物を、いささかの羞恥を忍べば、相手が喜々として、それを受け、結果として母と二人、二カ月の生活を支えられるようなよい条件の仕事を、立ちどころにくれている。それも、このさい、魅力なのだろう。
さらに、立ち入っていえば、本来なら嫌悪して顔をそむけたい物体を、かりにも先生と呼ぶ人間に、無造作に落してやることに、なにか痛快さをおぼえ、そして、もう一つ、仕事欲しさに、羞恥を必死にこらえる辛さが、女性にありがちな、マゾヒスティックな心に結びつき、それらが合体し、昇華して、みずからのくちから、
『きょうは、まだ、すましていない』
という、ふつうなら他人には、かくしておきたい筈の生理的コンジションを、口にして恥じないところまで成長したのであろうか。



小箱

しかし、戸村とみ子の積極的な、さそいについに私は屈伏した。
食事を終わり、地下のショッピングセンターの薬局へ、買物による戸村とみ子のお供をした私は、午后、二、三のスポンサーまわりをするスケジュールを、あすにのばして、ひる日なかをアパートにまでノコノコくっついていったのであった。
片方は、つぎの仕事を、とりたい一心でのさそいであり、片方は大して欲してもいないのに、やはり、あの強烈な魔物的な香りと味の魅力には抗しがたく、それを受けいれるために。
『疲れたわ』
戸村とみ子は、ソファに身を投げ、めんどくさそうに、先ほど買った薬局の品物をテーブルに、投げだした。
『あけてちょうだい』
いつもの、おとなしそうな、控え目の口調とは、ガラリちがった、命令調の言いかたであった。
『なにを買ったのかな』
『先生のお好きなものへの用意』
かぜぐすり、声のくすり、栄養の錠剤と、つぎつぎと、ころがりでるのは、変哲もない家庭用の日常薬品だった。
『そんなもんじゃないの。まだ、底のほうに残ってるでしょ』
おこったような口調で、包みのなかみをテーブルに、ぶちまけた。
日常薬品のなかにまじって、ピンクの小箱

があった。

『もしも、うまくいかないと、先生がガッカリなさると思って。でも買うときは、恥ずかしかったな』

それは、かん腸用の、排便促進剤だった。

私は、戸村とみ子の心の周到さを思って、かたずを呑んだ。

『でも、この必要は、なさそうだわ。先生、かくごしてくださいね』

何をかくごしろ、というのか、私にはピンと、くるのだった。

彼女は本気になって、いまふたたび、私の飢えを、みたそうと、してくれているのだ。

私は再び、あの、のどに逆らう強烈臭の洗礼を受けなければならないのだ—。

美食

いやおうなしの、洗礼であった。

東京会館ラウンジの、料理など、足もとにも及ばない、放恣な美食であった。

『どんなかしら』

と、排便促進剤の小箱を手にして、戸村とみ子は、凄艶に、ほほ笑んだ。

思いつめた、目つきだった。

なかば、私は失神状態であった。

このうえない屈辱の十数分であった。

そして、顔色もかえず、平然と姿勢をくずさない戸村とみ子の表情は美しく、冴えて仰ぎ見られた。

ひろがり、高まる、固有の香りに包まれて私は、絶息の寸前にあった。

正直のところ、いまは、そのものに対する食欲は、まったくない、といってよい。

であるにもかかわらず、完全に咀嚼し、消化しつくさなければいけないのだ。

そのときの心は、完全なる奴隷のそれであったといえる。

求めているときならば、スルリと抵抗なくのどを通ったであろうに、いまは見るのもいやな醜悪そのものを落としこまれて、私はただ目を白黒させ、一刻も早く、この地獄の責め苦から逃げだそうと、焦った。

『おわったようよ』

頭の上に、女神の、いや、戸村とみ子の声がした。

『くちを、すすいでらっしゃい。ハイ、うがいのくすり』

いつのまに用意したのか、うがいぐすりが盆におかれ、そしてコップと並んで白い紙がもみくちゃに丸められて、おかれてあった。

『なにをボンヤリしてるの。その紙は、トイレにすててちょうだい。なんなら食べちゃってもいいけど』

使いずみのペーパーを、ヒツジにでも食わすように私に、与えてくれるのだ。

私は無言で、それをハンカチに包み、ポケットに、おさめた。

戸村とみ子は、笑いをくずさずに、そんな私の様子を、ひとみをこらしてみつめた。

さきほどの、緊張しきった表情が溶けたのは、ひとつには快便を、完全にだしきった人間の本能的な、安堵からくる、やすらぎだったのであろう!

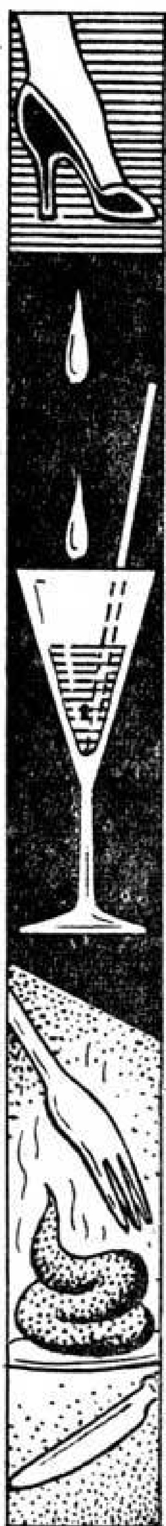
これで、つごう三回、私は、戸村とみ子の味覚の下に屈伏したのだ。

はじめは、こっそりと、本人の目をぬすみつぎは無理にせまって味わい、そして三回目のいまは、皮肉にも、攻守ところを変え、半ば強制的に、くちにさせられたのだ。

路上にて

なにか、くちのなかを暴れまわる不潔感をこらえながら、私は、あてもなく町をあるいた。

行き通い、すれちがう人は多い。だが、こ



のなかに、おそらく私のように、たいへんな食べ物を食った経験の持主は、まず、いないであろう。

なにか痛快な、優越感を抱きながら私は、目についたポスター、江戸の浮世絵画家『広重展』を見ようと、ふと思いついた。

会場は、かなり混雑をみせていた。

外人のすがたが目立つのも、この会の性格上、当然のことであろう。

ひたいの汗をぬぐおうと、無意識にポケットをさぐる手にガサガサと紙の玉がふれた。

忘れていた、戸村とみ子のプレゼント。

トイレにすてるなり、あるいは勇気があったら食べてごらんなさい、と、からかわれたその紙玉だった。

会場の片すみの、喫煙所のチェアに腰をおろし、私は、そっと、その紙玉を開いた。

かすかに香気があった。

健康そのものの、うつくしい色をした、小指のツメくらいの、ちよっぴりのなかみは、魅力そのものだった。

こうして見ると、それは美しい彫刻の一部みたいだった。

そして、私は見た、なにか野菜の切れはしそのセンイ様の、こなれきれない残渣さえ、なつかしかった。

新鮮なときにくらべ、やや、変色しはじめ紙になすられたために、水分は殆ど、なかった。

こうして眺めていると、またまた私の偏倚な趣好は、昂まりはじめるのだった。

さて、これをどう処置したものだろうか。

ムザムザと、くず箱にすてる気にはなれなかったといって、持ち歩いた末に、わが家へ持ち帰るのは、はばかれる。

私の、めったに他人には告白できない趣好を、家まで持ち帰ることは、絶対に避けている。

妻は、かならず帰宅した私のポケットをさぐり、汚れたハンカチをとり出して、洗う習慣だった。

マッチは、のこらず取り上げてしまう。

まるで追いハギだね、と妻の所業を、からかうと、

『別に、悪意でやるのじゃないわ』

いつも、気持よく、きれいなハンカチを持たせたいからだと、ムキになっていう。

それなら、この戸村とみ子のプレゼントはオフィスへ持ち帰って保存するしかないが、ことても安全な隠し場所とは云えない。

いっしょに、はたらいてくれてる四人の社員は、いいやつばかりだけど、他人のものとじぶんのものの区別がなく、いくら注意しても無断で私のキャビネットをあけて、書類など持ち出すくせがあるので、こんな異様なものを、万が一にも発見されたら、一騒動は、まぬがれまい。

思案の末、私は、最良の保存場所として私のからだのなかに隠すことにした。

つまり、戸村とみ子に命ぜられたところに従って、食べてしまうことだ。

あたりを見まわし、誰ひとりとして私の奇怪な行為に気づかないことを見きわめ、手早く私は、かすかに香う、それを口に丸めこんだのだった。

○

『あら、浅羽さまじゃございません?』

背後に、きれいなソプラノを訊いて、私はおどろき、ふりむいた。

そこには新雑誌創刊の出版社社長の二号、笠村公子夫人が、清楚な和服すがたで、ほほえんでいた。

夫人は、近く帰国する社長のためのショッピングに来て、やはり広重展のポスターを見て急に、のぞく気になったという。

『ちょっと、つきあって』

と、さそわれ、展覧会は、ろくに見もしないで外に出、タクシーをひろって帝国ホテルのレストラン・プルニエに連れてゆかれる。

『お食事、まだでしょ』

勝手にきめて、さっさと、この店の名物のブイヤベース・マルセイユや、舌びらめ、さかなの鉄板焼をオーダーし、ついでにギネスと、イギリスビールを注文した。

『いちどゆっくりお目にかかりたかったの』

笠村夫人は上きげんだった。

浅羽さんて、編集長というから、どんなに固い、近づきにくいかたかと思ってたら、案外、お話が合いそうなので安心したわ、とタバコに火をつける。

『浅羽さんは、ずいぶん、戸村とみ子のために、骨を折ってくださるのね』

夫人は、だしぬけに核心に触れる話題をもちだした。

経営雑誌のポスターや、スポンサー向けのPR誌をつくるのに、型をやぶるねらいからきれいなモデルを起用しよう。表紙を飾るカバーガールにも使いたいと、積極的に提言し社長のオーケーがとれたところで、戸村とみ子を推せんした。

社長も、いちど戸村とみ子と夕食を共にし、このモデルが、すっかりお気に召して、

『この子で押そう』

と、大乗り気であった。

モデルの寿命は短いので、稼げるうちに稼ぎまくり、引退にそなえる必要がある。

だから、無理は承知で、すいせんしたのだったが、さいわい私のネライは的中し、ここでも彼女のマーケットは、また広がったわけだった。

『あの子、わたしのいとこなのよ』

夫人は、ギネスをのみ干しながらいう。

奇遇だった。

モデルとして、表紙用に撮影した何枚かの引伸し写真を、つい先日、社長宅に届けさせた。

夫人は、なにげなく、その大型封筒を開いて、戸村とみ子のフォトを発見。電話で、その間のいきさつを訊ね、私の骨折りがわかったのだという。

『あの子は、あたしの母の妹の子。不幸な子でねえ』

その不幸を救ってやろうと、私が躍起になっていることを戸村とみ子から聞いて、じぶんからも、お礼を言いたかった、と夫人は、いった。

正直のところ、私はハッと胸に、とどろきを感じた。

まさか、戸村とみ子は、私の、れいの好みまでは、告げてはいまいけれど、万一、そんなことが、夫人の耳につたわり、社長の耳へでも入ったら、信用はガタ落ちではないか。

私は、うろたえたのだった。

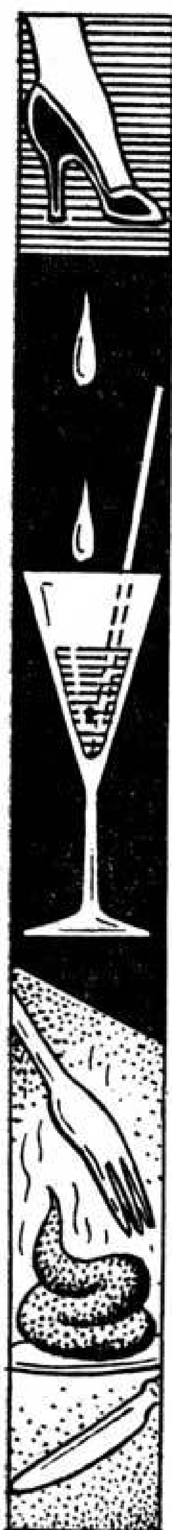
『偶然ねえ。さっき、とみ子ちゃんに昼ごはんを、さそおうかと電話したら、編集長が打ち合わせに見えて、いましがた帰られた、というじゃない』

あぶないところだった。

この身軽な夫人が、ふと気がむいて、戸村とみ子のアパートを訪れ、そこで私の、あのすがたを一目、見でもしたら、たいへんなことになったであろう。

まったく、あの恰好だけは、戸村とみ子以外の何びとにも、終生、絶対見せられない、

極端な、屈辱の場面であるのだ。
ええとか、はあとか、適当にあいづちを打ちながら食べる、せっかくの料理が、さっぱり、うまくない。
わきの下を、冷汗がタラタラと流れる思いだった。
私は、しどろもどろに、ナイフとフォークをつかった。
ふだんの私なら、余裕しゃくしゃく、この目前の美女のを、呑んだり、食ったりしたらさぞ素晴しかろう、などと、とくいの空想をひとくさり楽しむであろうに、きょうばかりは、まったく勝手がちがってしまった。ペースをみだし、うろうろと、うろたえるのみであった。
心ばかりのお礼に、真珠のタイピンを贈りたいからと、御木本パールへ、さそわれ、かなり高価らしい品を押しつけられ、ほうほうのていで、ようやく夫人の手をのがれた私は陽がおちて涼風が立ちはじめた銀座のまちをぬけ、地下鉄で、オフィスに、たどりついたのだった。



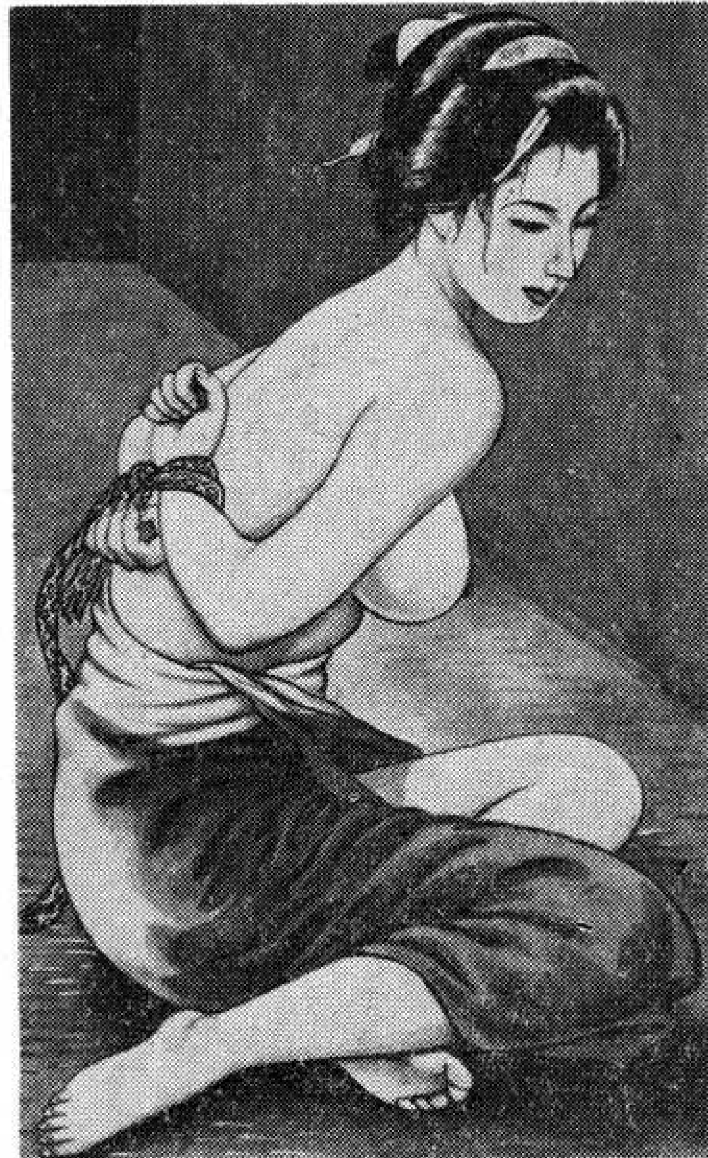
念のために、口止めだけはしておかねばいけないと、ダイヤルをまわして、戸村とみ子を呼んだ。
母親と代って、電話口にでた戸村とみ子の若々しく、はずんだ声が、受話器と耳の間でおどった。
『どお、ペーパー、おいしかった？』
戸村とみ子は、この世のなかで、二人だけに通じる話題で、おもしろそうに私をからかうのだった。
私が食べてしまったと、はじめからきめこんだ、くったくのない調子だった。
『先生。おねえさま、美人でしょ。食べてみたくありません？　あたし、話してあげようかしら。先生の、おこのみ』
受話器の底から、私の心を見ぬいたかのような、戸村とみ子の声が、ひびいた。
そこには、かつて羞恥と苦痛と、そして怒りにふるえた、弱者としての、おもかげはなかった。
あるものは、攻守ところを変えた、戸村とみ子の命令であり、そしてユメから醒めたように、あの醜行から逃げだしかける私の、だらしない、すがたであった。
しかも戸村とみ子は、私に挑戦するかのように、社長夫人にも乞うて、食を求めよと迫るのだ。
私は、とまどった。
このぶんでは、私が口どめしても、夫人の耳にいれずにはおくまい。
戸村とみ子は、それが、私にたいする最大のプレゼントと信じこみ、私が口どめすればそれすら無用のえんりょと解して、ますますのりだしてくるだろう。
そんな手を打っておけば、完全に私の首をしばりつけ、これからも、よい条件のモデルのくちは、のぞみのまま、と計算しているようだ。
私とても、夫人のそれときけば、体面とはべつに、食欲がつのるのを止めようもない。
私の心は、とまどった。
『あら、あたし、いまからおトイレなの。わすれてた。ええ、もちろん両方。あした、おいでになりません？　取っとくわ』
戸村とみ子は、大声あげて笑い、私の返事もきかずに、電話をプッツリ切った。

——（この項おわり）——

――江戸伝馬町女牢異聞――

女牢物語

富永草太



天保九年の頃。
江戸幕府の勘定奉行に属する金座の役人に秋山六郎太という実直な三十過ぎの侍があった。
録高二百石の、れっきとした直参である。

家族には、お百合という二十九になる豊満な感じの美しい妻と、当才五つと三つの男女があり、何一つ不自由のない羨ましいばかりの武家の家庭であった。

その平穏な家庭が、悲劇のどん底につき落されるきっかけとなったのは、六郎太が役向きの上での取引先の商人に誘われて、当時、全盛をきわめた吉原の廓に足を踏み入れた事だった。

時は春――。

うらうらとした日暮れ時、初めて足を踏み入れた廓の賑わいに目を奪われながら、大通りを歩む六郎太の目に、ふととまったのは、大阪屋という店の格子戸の奥から流し目を送る若い女であった。

磁石に吸い寄せられる様に登楼した彼は、初会というのに深い情をかける遊女花鳥の手練手管に、魂も抜かれた様になり、三日にあげず足繁く大阪屋への日参が始まった。

直参とはいえ、二百石の格式を維持するためには、それ相当の支出もいり、吉原一流の店に通いつめるだけの余裕はない。

幸か不幸か、六郎太は公金がある程度は自由になる地位にある。

理性を失った六郎太は出来上ったばかりの小判を、密かに持出しては吉原へ通いつめる事になった。

所が、この花鳥という女が、したたかな、あばずれ女で、情夫の梅津長門、小普請組の侍である彼のために、何とか百両のまとまった金を作ろうと必死なのである。

六郎太のそのような悪事が、いつまでも、ばれないで過ぎる筈はない。出来上り小判の不足に不審を抱いた金座支配の密かな探索によって、目付の手に捕えられた六郎太は、翌日には切腹を申し渡された。

当然の事乍ら、秋山家は取りつぶし、お家断絶となり、邸を召し上げられた妻女のお百合は、二人の子と共に追い出され、身寄りのないまま、彼女は四谷のあたり、貧民の集う長屋に移り住む事になった。

美しくて貞淑な妻女であるお百合は、深く歎き悲しんだが、夫の破滅の原因が、もとをただせば吉原の廓の遊女花鳥のせいだと知ると、花鳥に対する恨みと憎しみとで、夜も眠られぬ程であった。

栄華な昨日迄の暮しに引きかえ、今日の米にも事欠く暮しを歯がみして口惜しがった。

日が経つにつれて、怒りがこみ上げたお百合は、夫の仇を討とうと決心した。花鳥を殺して、自分も、その場を去らずに死のう。それがお百合の悲願となった。

丁度、その頃――。

天保九年の夏、七月の夜も更けた刻。

吉原は大阪屋の遊女花鳥の部屋では、梅津長門が、落着かない様子で酒を飲んでいた。

小普請の若侍梅津長門は、つい先程、金に困って、この吉原に通ずる柳ガ原の土手の上で、商家の若旦那か、手代と覚ぼしき男を斬り捨てて、三十両の小判を奪い、その足で馴染みの花魁花鳥の許に登楼したのだ。

花鳥は、男の惚れ惚れする様な横顔を眺めながら寄り添って言った。

「お前さん、どうやら手が回ったらしいよ。主人が、そっと私を呼んで知らせてくれたのさ。あいつは大罪人だから、気づかれぬ様に寝かせておけ、だってさ。冗談じゃないよ。誰が可愛いいお前さんを、お上(かみ)の手になんか渡すもんか。さあ、早くお逃げよ」

「うーん、どうも、あたりの様子が、うさん臭いと思ったが、案の定か。ここが年貢の納め時か。斬って斬って、斬りまくって、一暴れするか」

まだ、二十代になるやならずの若さながら生れついての毒婦の性か、恐ろしく胆のすわった花鳥は、悠々と長門逃亡の手筈をととのえる。そこへ、どっと大阪屋の階下へ、なだれ込む目明し連中。

長門は巧みに捕手の目を逃れて何処へともなく消え去ったが、大胆な様でも、そこは女の身。花鳥は着換えに手間どっている間に捕えられて、番所へ引かれていった。そして重罪人をかくまった科で奉行所送りとなり、伝馬町の女牢につながれる身となった。

剛胆な彼女は、数々の牢問いにも、耐え抜いて白状せず、呆れた時の牢名主『子殺しのお亀』に約束通り名主の座を譲り受けた。

他の女囚達は、口々に花鳥様が牢名主になれば牢内はフッキ（富貴）になると言い合った。つまり、新入りを徹底的に折檻して、ツルをしぼり取るという意味であろう。

さて、お百合は花鳥を刺そうと隙をうかがう内に、花鳥が捕われの身となったのを知ったが、どうやら遠島になるらしいという噂をきいた。遠島になれば、自分の手の届かない所へ行ってしまうと苦慮したお百合は、自ら罪を犯して女牢入りをして、花鳥を短刀で刺し殺そうと決心した。

若し彼女が下々の育ちなら、女牢の地獄の様子も、ある程度、見聞きしているだろうから、そんな無茶な事は、決して考えもしなかっただろうが、なにしろ世間知らずの武家の妻女である彼女、盲蛇におじずで、浅墓な計画をたてたのである。

決心したお百合は、日本橋の小間物屋に客の振りをして訪れ、店先にあったベッコウの櫛をかっぱらって逃げたが、忽ちにして、追いかけてきた店の手代や小僧につかまり、番所へ引かれていった。翌日、奉行所送りとなり、奉行所から入牢証文が出されて、いよいよ、伝馬町送りとなった。

お百合は豊満な身体に縄を掛けられ、役人に縄尻をとられて、奉行所から伝馬町の牢屋敷へと引かれていった。

決心した覚悟の上の事とはいえ、武家の妻の、昨日に変る今日のこの姿の哀れさに、彼女は口惜しさ半泣きになりながら歩んだ。

やがての事に伝馬町に到着する。

牢役人は入牢証文を改めた上、西口揚屋、通称女部屋、或は女牢といわれる場所へ、お百合は引き立てられた。

張番が大きな声で叫ぶ。

「新入りっ」

叫ぶ声に応じて、牢内に起居する非人の乞食の女が戸前口に進み出る。

鎰番(イツバン)といわれる鍵役が戸前口の鍵をはずし、入口の戸を開けると、中から進みでた乞食の女が、お百合の身体改めをする事になる。ここで初めて縛しめを解かれたお百合は、ほっとする間もなく、乞食の女に怒鳴られる。

「頭を下げい、このあま」

罵り様(ざま)、下げさせた頭に手を延して髪を解き、洗い髪にして髪の中をかきまわす。

「さ、お改めだよ。さっさと着物を脱いで、腰巻一つになりな」

今は、あまりの恐ろしさに顔面蒼白となったお百合は、歯をがちがちさせながら、帯を解き、着物と襦袢を脱ぎ、恥かしさにふるえつつ両手で胸をかくす。その手を非人女は邪慳に払って、前を向かせたり、後を向かせたりして体を改める。

「ところで、お前さん、もう何も隠していないだろうね」

そう言いながら腰巻を捲くり上げる。

「あれっ」

お百合は叫んで、その場に、うずくまる。太股の内側に、晒布で結びつけた白鞘の短刀を見つけられれば万事休すである。

非人女のお紋は、泣き伏すお百合の髪をつかんで引起し、強引に腰巻を捲くると、何と太股の内側に、白鞘の短刀を結びつけているではないか。

「このあま、図太いにも程がある。よくも、こんな大それた事をしやがる」

大声で叫んで、忽ち、短刀をとり上げる。

お百合は、頭を土間にすりつけて、必死になって歎願する。

「これには、深い訳がございます。夫の仇討ちの為です。どうか、

お許し下さい」
　そんなお百合の顔を情容赦なく土足で蹴とばす。
「このスベタ。よくも御禁制の品を隠しておきやがったな。御定法通り、後でうんとお仕置をしてやるからな。ドスを呑んだやつは、尻捲くりで牢入りだよ」
　怒鳴りつけて、お百合の腰巻を捲くりにかかる。「許して」と、お百合は必死になって抵抗するため、お紋一人の手に合わないので立会いの張番も手伝って、お百合の腰巻をまくって尻捲くりの姿にさせる。
「入牢っ」
　張番の声と共に、戸前口から這う様に、女牢内へ潜り込まなければならないのだ。
　短刀を取上げられて術(すべ)を失い、今は泣きの涙のお百合に、お紋は訊ねる。
「仇って、一体、誰だい？」
「花鳥という遊女です」
「ははは、こいつはお笑い草だよ。お頭、お前さんを仇と狙うあまが入りますぜ。せいぜい、可愛がってやるんだね」
　お紋は大声で牢名主に告げる。
　いつまでも、ぐずぐずするお百合に、無理矢理、衣類を抱えさせ戸前口に押込む様にして屈んだ尻を、お紋は力一杯、蹴とばした。
　お百合は蛙の様に牢内に、つんのめる。
　牢名主が狙う仇と知ったお百合は腰巻一つの、しかも尻捲くりさせられているという、あられもない姿も忘れて、立ち上るなり花鳥に襲いかかろうとする。しかし、それより早く、かけ寄った二番役以下数名の女囚によってたかって押えつけられ、獣の様に悲鳴を上げるお百合は、牢名主花鳥の前に、後手にねじ上げられて正座させられた。
「く、口惜しい、口惜しい」
　歯ぎしりして地団駄をふむお百合を、花鳥は心地よげに見下している。
「お前さん、一つに刃物を持込もうとした。二つに、牢入りの作法を破った。三つに牢名主の私に手向いしようとした。こいつは仕置が重いのを承知の上かい。五日や十日は、寝ずにお仕置を受けて可愛がってもらう事になるんだよ。所でツルは、どうしたい？」
　憎い仇を目の前にして、腰巻一つのあさましい姿にされて引きすえられている口惜しさと恥かしさに、お百合は無念の涙を流しながら、物も言えない。
「侍の奥方にしたら、牢に入っている女になんかは口も聞けないらしいよ。お駒、そいつに物が云えるように、キメ板の御馳走を、たっぷりとしておやり」
　花鳥の下知に、宿場女郎上りの人殺し女囚二番役助番のお駒は、長さ三尺のキメ板を持って囚衣の腕をまくり上げ、お百合の背後に立つ。両腕をねじ上げられて前屈みになっているお百合の尻捲くりさせられてムキ出しの尻を、どんと蹴上げた。
「おさむらいの奥方、でっけえおケツだね。さ、そのおケツを上へ持ち上げな」
　お百合がしぶるのを両腕をねじ上げている二人のあばずれ女囚がぐーっと力を入れて骨も折れる位にするためにお百合は「ヒーッ」と悲鳴を上げて、しぶしぶ、豊満な尻を持ち上げる。

後に寄ったお駒は、お百合の腰巻を更に完全に捲くり上げて、白い丸々とした双球を、むき出しにする。後に並ぶ平の囚人達の、どっと上げる笑い声に、お百合は恥かしさに、いたたまれずに、再びどすんと尻を降す。
「誰がケツを降せといった。このどすべた」
お駒は罵りざま、お百合の尻を力一ぱいに蹴上げる。仕方なしに再び持ち上げた大きなお尻に、お駒はキメ板を力一ぱい振り上げてなぐりつける。
ピシャーン
ピシャーン
「ひぇーっ」
「ぎぇーっ」
キメ板をうち降す音と、お百合の悲鳴が、牢内に交錯する。居並ぶ女囚達は、うっとりとした様な顔つきで、面白そうに、その光景を眺めており、誰一人、可哀そうだと思うような様子はない。
「名主様にお答えするか。しないなら、まだまだ、キメ板を喰わせるよ」
「もう許して。何でもお答えします。ああ、痛い、口惜しいっ」
花鳥は身を乗り出してきく。
「ああ、じれったいね。ツルは、どうなんだい」
「ツルって、何ですか」
「おふざけではないよ。このあま、ツルを知らないで、地獄入りかい。ツルというのは、お金だよ。それも五両以上だよ」
恐怖に震えながら、お百合は答える。
「そ、そんなものは何も持っていません」
「呆れたね。お侍の奥方が、ツルなしで地獄入りだとよ。ツルなしの定法通り、スッテン踊りを踊ってもらうよ。お駒、こやつに、スッテン踊りを踊らせな」
「名主様。お手本を踊らせてから、踊らせましょうか」
「ああ、そうおやり」
お駒は羽目通りの下座に正座する女囚達を眺めまわした。
「おい、お加代。ここへ来て、スッテン踊りのお手本を見せてやりな。性根を入れてやるんだよ」
指名されたお加代という女囚は、でっぷり太った三十過ぎの大年増である。彼女は亭主が矢場の女にのぼせて通いつめることに、かっとなり、売り言葉に買い言葉で、相手の女と大喧嘩の末、包丁で傷つけて捕えられたのだが、これもツルなしのため、未だに下座でひいひい言わされている口である。
お加代は、もじもじして真赤になりながらも、言いつけに背けばどんな事になるかは、既に入牢一カ月になる身で、痛い程、知っているので、素直に立ち上ると、進み出て牢名主花鳥の前に正座して一礼すると、顔を真赤にしながら挨拶した。
「××××お加代、これから、スッテン踊りを踊ります」
まわりの女囚達は、どっと笑いころげるが、これは下座のつまりツルなしの新入りは、入牢時に滑稽で卑猥な仇名をつけられ、牢内で詰に行ったり、其他の動作をする時には、必ず自分で、その仇名を名乗ってから行動する、しきたりになっていたのである。
お加代は、恥かしさに消え入りそうになりながら、立ち上って囚衣と腰巻を脱ぐと、その見事で豊かな裸身に、まわりから盛んに野卑な弥次が、とばされる。

今は無心に覚悟をきめたお加代は、既に何遍も歌わされた淫靡な歌をうたいながら、身ぶりおかしく踊りだす。初めは死ぬ程辛かったこの歌は、やはり今でも恥かしさに耐えられないお加代だった。

〽よーか○○よか○○○
　みればみる程よか○○
こんなに○○○この○○○
　でっかい○○○して○○たい
○○○ああ、○○○したい
あたしゃ、みそじの大年増
　あたしゃ、あばずれ牢屋入り
スッテン、スッテン、スッテンテン
　スッテン、スッテン、スッテンテン

手を大きく振り、足を交互に肩よりも高く上げるという、淫らな激しい踊りである。

そのあられもない裸踊りの光景に、両脇から両手をねじ上げられた侭のお百合は、仰天して眼を閉じて、うつむく。

「こやつ、誰が下を向けと言った。両目を大きく開いて、よっく見て、踊りを覚えるんだよ。なんて図太い、あまだ」

お駒は大声でお百合を罵り、烈しく頬にビンタを喰わせる。

お百合は恐怖のあまり、顔面蒼白となり、身体を、がたがた震わせながら、指図通りに、お加代のあさましい踊りに見入る。

やがての事に、取りまく女囚達を十分に堪能させたお加代は、花鳥に許されて衣類をつけ、元の窮屈な羽目通りの下座に戻る。

いよいよ、お百合の番である。

「ああ、そうだよ。仇名をつけてやらないと挨拶が出来ないね。さあ、みんな、こいつに何とつけてやりゃいいかね」

花鳥が声をかけると、隅にひかえたあばずれ女。片肌脱ぎになって、くりからもんもんの刺青をのぞかせた三番役が、にやにや笑いながら答える。

「さっき、とっくりと後から拝ませてもらったが、こいつのあれは馬鹿デッカイから、××××お百合は、いかがです」

一同は一斉に、くすくすと笑い合う。

「それがいい、それがいい」という事で、牢名主の花鳥の許しが出た。

「よし、こいつの仇名は、××××お百合と決まった。おい、お百合。これからは必ずこの仇名を名乗ってから身体を動かすんだよ」

あまりのあさましい仇名に、お百合は身も世もなく、泣きくずれる。しかし、此所は、そんな泣き落しの通用する世界ではない。

お百合は殺されても、そんな恥かしい事を口にして、あさましい踊りを踊るまいと決心して歯をかんで、その場にうずくまる。

「おや、こいつ、名主様のお言いつけに背く気だよ。なんて図々しいあまだ。いくら泣いても喚いても、するだけの事は、させるからね」

憎々しげに、お百合の傍に立ったお駒は、四人の手下の女囚を呼び集めて、お仕置の準備にとりかかる。

「やい、新入り。つるつるにしてほしいか。お尻にヤイトをすえてやろうか。お前の尻はデッカイから、ヤイトの方がいいだろう」

お駒は牢名主の座のうしろに隠してある蝋燭を一本、花鳥から貰い受けると、お仕置役の四人の女囚に命じて、お百合に定めの姿勢をとらせる。

お仕置にかける女囚を素裸にして、股を開いて前屈みに坐らせ、両腕を後にねじ上げ、二人はいけにえの両足をしっかりと押える。そして、後から蝋燭の火で、両方のお尻を焼くという酷さである。
牢に入れられる迄は、まともな女だった四人の仕置役の女囚も、今は牢内の悪の空気に染まっているので、喜々として鼻唄まじりでお仕置の準備に、とりかかる。
床にうずくまっているお百合を引き起し、「ひいー」と悲鳴を上げるのも構わず、腰巻を剝ぎとり、四人がかりで汗だくになって、必死の抵抗をするお百合を押えつけ、定めの姿勢をとらせる。
「手数をかけやがるな、どすべた」
後ろへ回ったお駒は、宙につきだしたお百合の、でっかい真白なお尻を蹴とばし、罵りながら火のついた蝋燭を、お百合のお尻に近づける。
「これが最後だよ、お前さん。おとなしくスッテン踊りを、踊るかい。やい、どうだ」
お百合は無言である。
「強情な、あまだなあ。さ、いくよ」
白く突き出した、まん丸い双球に蝋燭の炎を当てる。
「ギャーッ」
断末魔のような悲鳴が牢内に響き渡る。お駒は、蝋燭の炎を近づけたり、離したりする。
その度に、「ギャーッ、ギャーッ」とお百合は悲鳴を上げ、四人の仕置掛かりは暴れるのを必死に押えつける。
「お願い、もうやめて。何でもします。もう、やめて！」
あまりの苦痛に耐えかねて、がっくり、くずおれる、お百合。
「どうせ踊るなら、手間をとらせるない」
罵りざま、お駒は今焼いた所を平手でピシャピシャと叩く。ひりひりする尻を叩かれて、再びお百合は獣の様に吠える。
今は此れ迄と観念したお百合は、ガタガタ震えながら、牢の真中に座り、仇と狙う女に深く頭を下げる。
その口惜しさ、恥かしさは如何ばかりか。しかも、あさましくも全裸で、これから、あられもない事を口走って裸踊りを踊らされるのだ。
「×××お百合、これからスッテン踊りを踊ります」
涙にくれて小声で挨拶するのを、再び声が小さいと、お駒にキメ板を喰わされた。
取り巻く女囚一同は大喜びで、やんやと、はやし立てる。お百合は立ったものの、恥かしさに耐えかねて、前を押えたままだ。
「手を放して、早く踊らないか」
ヤイトで痛いお尻に、痛烈なキメ板を喰って、悲鳴を上げたお百合は、覚悟をきめて、見様見真似で、手を振り、足を挙げて、スッテン踊りを踊りだす。
「唄は、どうしたい。もう一つ、キメ板を喰いたいのかい」
いくら責められても、素人の彼女には、そんなあさましい言葉を口にして、こんな歌は、よう唄えない。
じれったがったお駒は、更に二、三発、力一ぱい、お百合の水ぶくれしたお尻の上を、キメ板でしばいたものだから、牢内に響き渡る様な悲鳴を上げて哀れな女囚は床の上に、ぶっ倒れる。立ち上ったお百合は、素裸のあられもない格好で、続くキメ板の責めを逃れ様と、狭い牢内を逃げまわるが、所詮、無駄な抵抗である。

「唄います。もうやめて、唄います」
結局、痛さにたえかねて、涙にぬれた顔で哀願する。やがて観念して再び牢内の真中に立ち上り、手足を振って踊り出した。
〽よーか〇〇、よか〇〇〇
みればみる程、よか〇〇〇
こんなに〇〇〇、この〇〇〇
遂に、あばずれ女でも、容易に口にしない様な恥かしい猥らな歌を唄いだす。
取りまく女囚達の、喜ぶまい事か。一同はゲラゲラ、ワッハッハ……と笑いこけて、哀れなお百合を指さして囃子たてる。
もっと足を挙げて、と声が掛かる。
はっきり唄え、とヤジられる。
疲れてよろけると、忽ち四方八方から手が伸びてきて、所かまわず突っつかれたり、抓り上げられたりするのだ。
お百合は、次から次へと新しい野卑な歌を教え込まれては、皆の前に披露させられ、全身、汗だくとなり、ぶっ倒れる迄、続けさせられるのだった。
ようやくの事で許されて、定めの座にすわらせられたお百合の様な完全なツルなしは、牢内では着衣を全部剝がれ、腰巻も腰へつける事を許されず、自分の腰巻一枚を、肩から背中へタスキがけにさせられる。
これは完全な素裸だとリンチの時に、つかみ所がなくて困るからで、少しも、いたわっての事ではない。
お百合は定めの通り、そんな情ない格好で向う通りの板間の平の女囚が大勢詰め込まれた一番前へ座らされた。一畳敷き位の所へ、十人坐らされているのへ、更に詰め込まれるのだから、一番前の女囚が立て膝で股を開いた間へ、お尻をおろして立て膝で坐るという窮屈さである。
今、この向こう通りの板の間には、丁度二十人のツルなし女囚が二畳分位の所に押し込まれて、ひいひい言わされている。よく見渡すと、お百合の様な腰巻をタスキがけさせられているのが、五人も居る。
お百合は、万引でつかまったお久の開いた股の間に、やっとの事で、お尻をおろし、ほっと一息つくが、残忍で冷酷な花鳥は、お百合に両手を挙げて、万才をする様な格好を命ずるのだった。
向う通りの真前は、中座の科人（とがにん）といって、入牢の時に十分なツル其他の手当をした女囚の座で、丁度その頃、行われた〝隠し𦾔り込み〟という淫売狩りで挙げられた、あばずれ連中が大勢たむろしていた。
その眼の前へ、侍の内儀が股を開かされて、坐らされているのである。
退屈をもて余していた淫売達は、そんな哀れなお百合の姿に、面白がって、口々に口ぎたなく、からかうのだった。
「やめて、やめてえ」
泣きじゃくりながら両手で前を隠すが、忽ち花鳥の怒声がとぶ。
「誰が手をおろせと言った。このあま」
又、泣く泣く両手を挙げる。自分を仇と狙う女を逆に、さんざんいたぶって溜飲をさげた花鳥は、やがて床につき、すやすやと眠りはじめるのだった。